大宰府史跡

昭和63年度発掘調査概報



平成元年3月

九州歴史資料館

大宰府史跡

昭和63年度発掘調査概報

平成元年３月

九州歴史資料館

序

昭和43年度の調査概報を刊行して以来、昭和63年度の概報を20冊目として世に送ることになった。

昭和43年、福岡県教育委員会が大宰府史跡の発掘調査を開始してから今年でまる20年が経過した。人間の一生に例えれば成人式を迎えたことになる。この間、紆余曲折を経ながらも大宰府政庁跡をはじめ、各関連遺跡における発掘調査によって予想以上の成果をあげてきた。昭和53年には発掘調査10周年を迎えたのを機会に、これらの成果を一般に公開し、好評を得た。それからさらに10年、今回、20周年を迎えたのを機会に昭和63年９月から12月にかけての約４ケ月間、東京と福岡において特別展示「大宰府展」を開催した。これにより福岡県はもとより各地の方々の大宰府に対する理解が一層深まったものと自負している。今後、この20年間の成果を糧として、大宰府の調査に対して一層の精進を重ねる所存である。

思えば調査を取り巻く諸々の条件は、調査開始当初とは大きく変化してきている。もっとも欣ぶべきことは地元の積極的な理解と協力が得られるようになったことである。まさに調査の成否は、この地元の協力にかかっているともいえる。今後とも一層の協力をお願い申し上げる。またこれまでご指導を賜っている大宰府史跡調査研究指導委員会の委員各位に深甚なる識意を表するとともに、今後ともよろしく一層のご指導をお願いする次第である。

平成元年３月31日

九州歴史資料館長　田　村　圓　澄

例　言

1．本概報は昭和63年度に福岡県が国庫補助を受けて九州歴史資料館が実施した大宰府史跡発掘調査の概報である。ただし第109次、110次、111次、112次調査は昭和62年度に実施した調査であるが、未報告であるので併せて報告する。また第113次、116次、118次調査については顕著な遺構は検出されなかったので報告は割愛した。さらに第115次、117次調査については現在出土遺物整理中であるので、報告については次年度にゆずる。

2．遺構実測図は国土調査法第II座標系をもとに基準点を設けて作製した（昭和51年度発掘調査概報参照）。

3．検出遺構については大宰府史跡調査研究指導委員の指導と教示を得た。

4．鋳造関係の出土品については、鋳金家の遠藤喜代志氏（宗像市在住）の教示を得た。

5．第109次、111次調査で出土した鋳型については学芸一課の西村強三、八尋和泉に、また卒塔婆と柿経については倉住靖彦に執筆をお願いした。

6．遺構、遺物の写真はすべて学芸一課の石丸洋の撮影による。

7．本概報の執筆、編集は調査課の石松好雄、横田賢次郎、森田勉、赤司善彦、吉村靖徳が行った。また遺物の整理については田崎道子、大田千賀子、小西恵子の協力を得た。

目　　次

序

I　調査計画…… 1

II　調査経過…… 2

1．概要…… 2

2．第109・111次調査…… 4

検出遺構…… 4

出土遺物……15

小結……95

3．第110次調査 …… 98

検出遺構……98

出土遺物 ……99

小結 …… 101

4．第112次調査……103

検出遺構 …… 103

出土遺物 …… 104

小結 …… 107

5．第114次調査……108

検出遺構 …… 109

出土遺物 …… 109

小結 …… 110

挿　図　目　次

第１図　大宰府史跡発掘調査地域図……折込み
第２図　第109・111次調査遺構配置図……折込み
第３図　SD3200土層断面図 …… 6
第４図　井戸実測図(1)…… 8
第５図　井戸実測図(2)…… 9
第６図　井戸実測図(3)……10
第７図　井戸実測図(4)……11
第８図　SD3200出土土器・陶磁器実測図(1) …… 16
第９図　SD3200出土土器・陶磁器実測図(2) …… 17
第10図　SD3200出土土器・陶磁器実測図(3) …… 18
第11図　SD3200出土土器・陶磁器実測図(4) …… 19
第12図　SD3147・3153・3190・3214・3239出土土器・陶磁器実測図 …… 21
第13図　SD3217・3241出土土器・陶磁器実測図 …… 23
第14図　SD3285・3290・3300出土土器・陶磁器実測図(1) …… 25
第15図　SD3300出土土器・陶磁器実測図(2) …… 26
第16図　SE3160・3170・3180・3185・3235・3240・3265・3270・3275・3280出土土器・陶磁器実測図……28
第17図　SK3161・3162・3164・3246出土土器・陶磁器実測図 …… 30
第18図　SK3247・3248・3259・3261出土土器・陶磁器実測図 …… 32
第19図　SK3266・3268・3271出土土器・陶磁器実測図 …… 34
第20図　SK3295出土土器・陶磁器実測図(1) …… 36
第21図　SK3295出土土器・陶磁器実測図(2) …… 37
第22図　SX3210・3310出土土器・陶磁器実測図 …… 38
第23図　SX3313出土土器・陶磁器実測図 …… 40
第24図　SD3152、SX3277・3279・3281・3289・3292・3306・3308出土土器・瓦製硯実測図……41
第25図　その他の遺構出土陶磁器実測図(1)……43
第26図　その他の遺構出土陶磁器実測図(2)……44
第27図　その他の遺構出土陶磁器実測図(3)……46
第28図　黒色砂質土層出土土器・陶磁器実測図(1)……48

第29図　黒色砂質土層出土土器・陶磁器実測図(2)……49
第30図　黒色砂質土層出土土器・陶磁器実測図(3)……50
第31図　黒色砂質土層出土土器・陶磁器実測図(4)……51
第32図　暗褐色土層出土土器・陶磁器実測図(1)……54
第33図　暗褐色土層出土土器・陶磁器実測図(2)……55
第34図　鉢実測図……57
第35図　軒先瓦拓影・実測図(1)……58
第36図　軒先瓦拓影・実測図(2)……59
第37図　軒先瓦拓影・実測図(3)……60
第38図　卒塔婆実測図……61
第39図　SD3200出土木製品実測図(1)……65
第40図　SD3200出土木製品実測図(2)……66
第41図　SD3200出土木製品実測図(3)……68
第42図　SD3200出土木製品実測図(4)……69
第43図　その他の遺構・層位出土木製品実測図(1)……70
第44図　その他の遺構・層位出土木製品実測図(2)……折込み
第45図　鉄製品実測図……72
第46図　金銅・銅製品実測図……73
第47図　銅銭拓影……75
第48図　石鍋実測図……77
第49図　石製硯実測図……78
第50図　石製品・土製品実測図……79
第51図　鋳型からおこした銅製蓋復原図……81
第52図　鋳型実測図(1)……82
第53図　鋳型実測図(2)……83
第54図　鋳型実測図(3)……85
第55図　錫杖……86
第56図　磬……86
第57図　鋳型実測図(4)……88
第58図　鋳型実測図(5)……91
第59図　鋳型実測図(6)……92
第60図　鋳造関係遺物実測図……93
第61図　第109・111次調査遺構配置模式図……96

第62図　第110次調査遺構配置図 …… 98
第63図　SD2350A、SX3224・3226、暗灰色粘質土層、灰褐色土層出土土器実測図 …… 100
第64図　第112次調査遺構配置図 …… 103
第65図　SB3325実測図 …… 104
第66図　SB3325出土土器実測図 …… 105
第67図　SD3322、赤褐色土層出土土器実測図 …… 106
第68図　SD3322出土文様塼拓影 …… 107
第69図　第75・114次調査遺構配置図 …… 108
第70図　SB1990柱掘形断面図 …… 109
第71図　SX3332出土土器実測図 …… 109

図　版　目　次

図版 1　第109・111次調査区全景（空中写真）
図版 2（上）（下）第109次調査区東半部（空中写真）
図版 3（上）第109次調査区全景（西から）
（下）第109次調査区西半部（空中写真）
図版 4（上）溝SD3214・3147、井戸SE3155など（東から）
（下）溝SD3214、井戸SE3145など（空中写真）
図版 5（上）第111次調査区東半部（空中写真）
（下）第111次調査区西半部（空中写真）
図版 6（上）溝SD3290、土壙SK3242・3243など（北から）
（下）溝SD3190・3285、柵SA 3195など（北から）
図版 7（上）掘立柱建物SB3230、溝SD3190・3285、柵SA3190、井戸SE3245など（空中写真）
（下）SB 3230全景（空中写真）
図版 8（上）井戸SE3150（南から）
（下）井戸SE3250（北から）
図版 9（上）井戸SE3255（西から）
（下）井戸SE3215（南から）
図版10（上）井戸SE3180（東から）
（下）井戸SE3185（東から）
図版11（上）井戸SE3270・3275・3280、土壙SK3264（北から）

（下）井戸SE3270（東から）
図版12（上）井戸SE3245（東から）
（下）井戸SE3145（東から）
図版13（上）井戸SE3155（西から）
（下）井戸SE3165（東から）
図版14（上）井戸SE3235（北から）
（下）井戸SE3275（北から）
図版15（上）井戸SE3160（東から）
（下）井戸SE3260（西から）
図版16（上）井戸SE3265（北から）
（下）井戸SE3265近景（西から）
図版17（上）井戸SE3240（西から）
（下）井戸SE3240近景（西から）
図版18（上）井戸SE3280（北から）
（下）土壙SK3246（西から）
図版19（上）土壙SK3247（東から）
（下）土壙SK3259（西から）
図版20（上）土壙SK3266（南から）
（下）土壙SK3268（北東から）
図版21（上）土壙SK3295（北から）
（下）土壙SK3295近景（北から）
図版22（上）第110次調査区全景（東から）
（下）第110次調査区全景（西から）
図版23（上）溝SD2350A・B（西から）
（下）溝SD320（北から）
図版24（上）第112次調査区全景（西から）
（下）第112次調査区全景（東から）
図版25（上）第112次調査区全景（北から）
（下）竪穴式建物SB3325（北から）
図版26（上）第114次調査区全景（東から）
（下）掘立柱建物SB1990柱掘形（南から）
図版27（上）掘立柱建物SB1990柱掘形（南から）
（下）掘立柱建物SB1990柱掘形（南から）
図版28　第109・111次調査　溝SD3200出土土器
図版29　第109・111次調査　溝SD3200出土土器

図版30　第109・111次調査　SD3200出土陶磁器
図版31　第109・111次調査　SD3200出土陶磁器
図版32　第109・111次調査　SD3200出土陶磁器
図版33　第109・111次調査　SD3190・3217・3239・3241出土土器・陶磁器
図版34　第109・111次調査　SD3290・3300出土土器・陶磁器
図版35　第109・111次調査　SE3240・3265・3275出土土器・陶磁器
図版36　第109・111次調査　SK3161・3164・3246出土土器・陶磁器
図版37　第109・111次調査　SK3247・3259・3261・3268出土土器・陶磁器
図版38　第109・111次調査　SK3295出土土器・陶磁器
図版39　第109・111次調査　SX3210・3310出土土器・陶磁器
図版40　第109・111次調査　SX3313出土土器・陶磁器
図版41　第109・111次調査　SX3277・3292、SD3152、出土土器・硯
図版42　第109・111次調査　遺構出土陶磁器
図版43　第109・111次調査　遺構出土陶磁器
図版44　第109・111次調査　遺構出土陶磁器
図版45　第109・111次調査　遺構出土陶磁器
図版46　第109・111次調査　黒色砂質土層出土土器・陶磁器
図版47　第109・111次調査　黒色砂質土層出土土器・陶磁器
図版48　第109・111次調査　黒色砂質土層出土土器・陶磁器
図版49　第109・111次調査　黒色砂質土層出土土器・陶磁器
図版50　第109・111次調査　暗褐色土層出土土器・陶磁器
図版51　第109・111次調査　暗褐色土層出土土器・陶磁器
図版52　第109・111次調査　暗褐色土層出土土器・陶磁器
図版53　第109・111次調査　暗褐色土層出土土器・陶磁器
図版54　第109・111次調査　SX3279・3313、黒色砂質土層、暗褐色土層出土鉢
図版55　第109・111次調査　出土軒丸瓦・軒平瓦
図版56　第109・111次調査　出土軒丸瓦・軒平瓦
図版57　第109・111次調査　卒塔婆
図版58　第109・111次調査　柿経
図版59　第109・111次調査　SD3200出土木製品
図版60　第109・111次調査　SD3200出土木製品
図版61　第109・111次調査　SD3200出土木製品
図版62　第109・111次調査　SD3200出土木製品

図版63　第109・111次調査　SD3200出土木製品
図版64　第109・111次調査　SD3200出土木製品
図版65　第109・111次調査　その他の遺構・層位出土木製品
図版66　第109・111次調査　その他の遺構・層位出土木製品
図版67　第109・111次調査　その他の遺構・層位出土木製品
図版68　第109・111次調査　その他の遺構・層位出土木製品
図版69　第109・111次調査　出土鉄製品
図版70　第109・111次調査　出土金銅・銅製品
図版71　第109・111次調査　出土滑石製石鍋・石製品
図版72　第109・111次調査　出土石製硯・錘・石斧
図版73　第109・111次調査　出土土製品
図版74　第109・111次調査　出土鋳造関係遺物
図版75　第109・111次調査　出土鋳造関係遺物
図版76　第109・111次調査　出土鋳造関係遺物
図版77　第109・111次調査　出土鋳造関係遺物
図版78　第109・111次調査　出土鋳造関係遺物
図版79　第109・111次調査　出土鋳造関係遺物
図版80　第109・111次調査　出土鋳造関係遺物
図版81　第109・111次調査　出土鋳造関係遺物
図版82　第110次調査　SD2350A、SX3224・3226、暗灰色粘質土層、灰褐色土層出土土器
図版83　第112次調査　SD3322、赤褐色土層出土土器



第1図　大宰府史跡発掘調査地域図

Ⅰ　調査計画

大宰府史跡の発掘調査は昭和57年度を初年度とする第３次５ヵ年計画の終了にともない昭和62年度からは新に第４次５ヵ年計画を立案し調査を進めることとした。第１次から第３次までの５ヵ年計画が政庁跡をはじめとする大宰府官衙の遺構の解明に主眼を置いたのに対して、第４次５ヵ年計画は調査の主眼を観世音寺と同子院跡に置くことにした。

まず観世音寺については、創建当時の建物は一切残っていないが、幸い講堂と塔心礎が原位置に残っており、これから塔を東に、東面する金堂を西に配した、いわゆる観世音寺式の伽藍配置が復原できる。この観世音寺についての発掘調査は昭和27・32年に講堂、回廊、中門について、その位置関係を究明するための試掘が唯一行われていたのみであり、また昭和43年に開始された大宰府史跡の発掘調査でも僧房と東面築地等について一部調査を行ったのみであり、ほとんど調査の手は及んでいないといっても過言ではなく、主要伽藍の具体的なことについては未解明の点が多い。

一方『筑前国続風土記』によると観世音寺には49の子院があったとされている。これらの子院は観世音寺の背後にある四王寺山の山麓に所在したと考えられるが、その実態は、ほとんど知られていない。ただ昭和53年以来、４次にわたって発掘調査を行った金光寺跡と推定される遺跡では建物跡をはじめ火葬場跡や石塔群が、きわめて良好な状況で検出されており、今後の子院跡調査に有力な資料となり得るものである。

以上のような点から今回の５ヵ年計画では観世音寺および同子院跡の遺構の解明に主眼を置くことにしたものである。調査にあたっては土地の公有化との関係から計画の前半は比較的公有化が進んでいる観世音寺境内に重点を置き、後半は子院跡に重点を置くこととした。

今年度はこの５ヵ年計画の第２年次にあたるが、初年度の調査に大幅な遅れが生じたため、初年度分の未調査地区を今年度に繰り越して調査を行うよう計画を変更し、下記の地域について行うこととした。

調査次数	調査地区	調査面積(m²)	調査期間	備　　考
１１３	６ＫＫＺ	1,000	４月～５月	戒壇院前面
１１４	６ＫＫＺ	1,100	６月～８月	観世音寺東南部
１１５	６ＫＫＺ	2,000	９月～12月	観世音寺東辺中央部
１１６	６ＫＫＺ	1,500	１月～３月	観世音寺東北部

II　調査経過

1．概　要

昭和63年度の発掘調査は62年度事業である第111次調査を継続して行うことから開始した。調査地は観世音寺参道の西側で第109次調査地の南隣接地である。遺構検出はすでに62年度中にほぼ終了していたため清掃をかねて最終的な遺構検出を行ったのち写真撮影を行った。この調査で検出した主な遺構は12世紀後半から15世紀にかけての建物、溝、井戸などであるが、これらの遺構が多数密集しているとともに複雑に錯綜していたこともあって、実測図の作成および補足調査に多くの時間を費した。この第111次調査の遺構検出終了にともない４月25日から現状変更申請にともなう調査を第113次調査として開始した。調査対象地は観世音寺北方の四王寺山から延びる丘陵とそれによってはさまれた谷あい約23haで、生活環境保全林の整備事業によるものである。この四王寺山およびその南方に所在する政庁跡、観世音寺一帯については江戸時代末期の文化三年（1806）に描かれた「大宰府旧跡全図」が残されている。この図は約5000分の１の大きさで、図中には地名や寺院、中世山城などの名称が記入されている。これによると今回現状変更対象地の一郭に該当すると思われる部分に「メウケンジ」、「シヤクドウジ」、「ビルアンノウラ」などの寺院名が注記されている。このうち「メウケンジ」と「ビルアン」については『筑前国続風土記』に「妙見寺」、「比留奄」の子院名がみえており、これに該当するものと考えられる。また対象地西側の谷は地形的に金光寺推定地と極めて類似していることなどから遺構の存在が予想された。このため事業着手前に遺構確認調査を行うこととした。調査にあたっては対象地が広範囲に及ぶため随時トレンチを設定して行うこととした。調査の結果、対象地東側の谷では遺構らしきものは勿論、遺物もほとんど検出されなかった。これに対して西側の袋状になった谷からは原位置は保っていないが、直径が約50cm前後の礎石と考えられる石や中世の土師器が多数検出され、遺構が存在していることが確実となった。またこの地域に設定した各トレンチからは凸面に斜格子の叩き目を持つ平安時代の丸、平瓦の破片が多数検出され、付近に瓦窯が存在しているのではないかと推測された。このため谷の両側の丘陵斜面を伐開し、探索を行ったが、瓦窯を確認するまでにはいたらなかった。以上の結果をもとに、この調査は６月22日で打ち切った。この第113次調査と平行して６月４日から14日までの期間、住宅建設にともなう事前調査を第114次調査として行った。調査地は大宰府条坊復原案のうえでは左郭五条二坊にあたり、昭和56年度に行った第75次調査地の南隣接地である。調査の結果、第75次調査で検出した掘立柱建物（ＳＢ1990）の未掘部分であった南側柱列の柱穴４間分を確認することができた。

以上の調査終了とともに７月８日から第115次調査として戒壇院参道西側の調査に着手した。この調査は昭和62年度に調査すべく計画したものであるが、調査計画の項で述べたように今年度に繰り越したものである。調査の結果、柱穴、溝、井戸などを検出したが、参道東側で行った第109次、111次調査の結果とは異なり、遺構の分布はかなり希薄である。この調査をもって第４次５ヵ年計画の初年度分は全て終了した。

11月にいたり、５ヵ年計画の第２年次分に着手することができた。調査地は観世音寺東南部で、これを第117次調査として着手した。調査の結果、第109次、111次調査の結果と同様に10世紀から15世紀代にかけての柱穴、溝、井戸などを多数検出した。このほか、戒壇院境内および観世音寺西辺部において現状変更申請にともなう事前の発掘調査を行ったが顕著な遺構は検出されなかった。

以上が昭和63年度に行った発掘調査の概要である。これを地区別に記すと下記のとおりである。

調査次数	調査地区	調査面積(m²)	調査期間	備考
１１３	７ＫＭＫ	４４０	880425～880622	妙見寺推定地
１１４	６ＡＹＩ－Ｃ	１６０	880604～880614	左郭五条二坊
１１５	６ＫＫＺ－Ａ	８６０	880708～881117	戒壇院前面
１１６	６ＫＫＺ－Ａ	１１	880916～880926	戒壇院
１１７	６ＫＫＺ－Ｂ	６３０	881110～890214	観世音寺東南部
１１８	６ＫＫＺ－Ａ	３５	881205～881214	観世音寺西辺部

2．第109次・111次調査

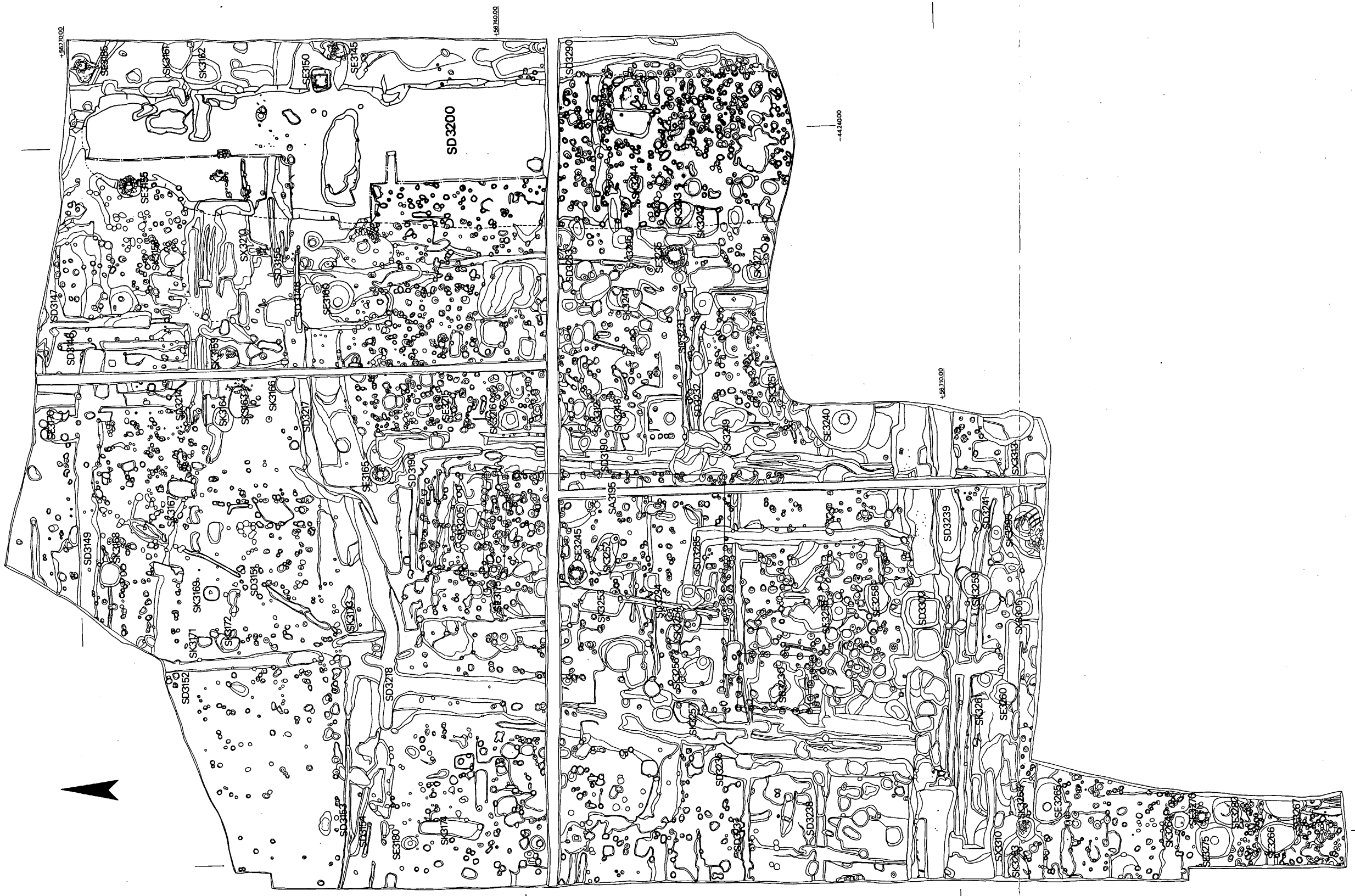
第109次・111次調査地は観世音寺南門の前面地域にあたり、現参道に接する西側の部分である。調査の都合上から北半部地域を第109次調査、南半部地域を第111次調査とし、2回に分けて実施した。観世音寺についての発掘調査は昭和27年の九州文化綜合研究所、昭和32年の福山敏男・鏡山猛氏等による発掘調査が実施されているが、その後、九州歴史資料館によって合計4個所（昭和51年度の僧房推定地・昭和52年度の東辺部地域・昭和56年度の小子房推定地・昭和57年度の北面築地推定地）の発掘調査を行っている。しかしながら観世音寺南門前面地域については今回の調査が最初であり（観世音寺前面の駐車場整備に伴って、昭和53年度に第61次調査として少範囲のトレンチ調査を実施している）本次調査の主たる目的も、これまで全く不明であった観世音寺南門前面地域の遺構の把握にあった。

第109次調査は1790㎡を対象とし、昭和62年7月4日に開始し、同年11月24日に遺構写真撮影を行ない、同年11月29日より実測開始、12月24日に補足調査を含め終了した。

第111次調査は1480㎡対象とし、昭和63年1月4日から開始し、重機にて第109次調査地の埋め戻しを行った。同月22日から遺構検出に入り、遺構検出の全作業が終了したのは翌年の昭和63年4月14日で、写真・実測を含めて全作業を終了したのは昭和63年6月17日であった。地番は太宰府市大字観世音寺字堂廻178－1、177－1、173－1、176－1、175－1、173－3番地である。

検出遺構

今回検出した主要な遺構は掘立柱建物2棟、柵1条、井戸19基それに多数の溝、土壙、ピット等である。調査区全域にわたって無数の溝、土壙、ピットが重複しており遺構の解明を困難にしている。遺構面は北から南へ傾斜しており、南下するに従って、暗褐色土層および黒色砂質土層が徐々に厚くなる。暗褐色土層は床土の下層になる層で、調査区全域に堆積している。とくに発掘区の北西部地域では暗褐色土層は薄く、直下には地山が露出し遺構面となる。黒色砂質土層は遺構面を覆う層で、北西部地域を除いてほぼ全域にみられる。この層は発掘区の南端および東側地域に向って、徐々に厚い層になる。この黒色砂質土層を除去すると上層の遺構面が検出される。発掘区の西半部では黒色砂質土層を除去すると地山面が露出し、そこが遺構面となるが、東半部とくに南北溝ＳＤ3200周辺では、溝の上層に厚さ0.3m前後の整地層があり、そこに上層遺構が構築されている。この上層遺構と西半部地域の地山に切り込んだ遺構とがどのように対応し、さらに下層のＳＤ3200期の遺構が、どのように伴うのか、層位の関係のみからは判断し難い点が多い（調査の都合上、北半部ではＳＤ3200を完掘するためＳＤ3200埋没後の上層遺構を削平したが、南半部では上層遺構を残し、ＳＤ3200を始めとする下層遺構につい


+56770.00
+56740.00
+56710.00
-44240.00
-44290.00
SD3200
SD3290
SD3147
SD3148
SD3149
SD3152
SD3154
SD3156
SD3157
SD3158
SD3159
SD3160
SD3161
SD3162
SD3163
SD3164
SD3165
SD3166
SD3167
SD3168
SD3169
SD3170
SD3171
SD3172
SD3173
SD3174
SD3175
SD3176
SD3177
SD3178
SD3179
SD3180
SD3181
SD3182
SD3183
SD3184
SD3185
SD3186
SD3187
SD3188
SD3189
SD3190
SD3191
SD3192
SD3193
SD3194
SD3195

ては一部を確認するに止めた）。

掘立柱建物

SB3205　ＳＡ3195内の東北隅部にある４間×２間で南に廂を持つ東西棟の建物である。柱間総距離は桁行で13.4ｍ、梁行で6.3ｍある。桁行は中央間の２間が2.9ｍ、両端間が3.8ｍである。梁行は2.7ｍ、3.6ｍで等間とはなっていない。南側の廂の出は2.8ｍである。因に、建物の方位はＮ－３°30′－Ｗである。

SB3230　発掘区南西部で検出した５間×４間の南北棟建物である。桁行は5.0ｍ、梁行は3.8ｍである。梁行は0.95ｍ等間であるが、桁行については中央間が1.20ｍと広く、その他は各0.95ｍである。柱穴は全て円形で径0.35ｍ～0.50ｍである。柱穴の全ての底には礎板の石を置く。礎板の高さは必ずしも一定ではない。建物の方位はＮ－４°58′10″－Ｗである。

柵

SA3195　発掘区のほぼ中央部で検出した「コ」字形に巡る柵である。この柵はＳＤ3195に沿って設けられており、溝と密接に関連するものと考えられる。柱間は一定でなく、0.6ｍ～2.7ｍとかなり広狭の差が著しい。東北隅部は掘立柱建物ＳＢ3205によって途切れ、北辺と連続しない。また東南隅部は2.7ｍと柱間が特に広くなっており、柵内への出入口とも考えられる。北辺の総距離は5.5ｍ、東辺16.1ｍ、南辺15.8ｍである。また、柱穴の重複する所が多く、幾度かの補修が行われているとみられる。この内側に掘立柱建物１棟、井戸２基それに多数のピット、土壙がある。因に、柵の方位はＮ－２°８′13″－Ｗである。

溝

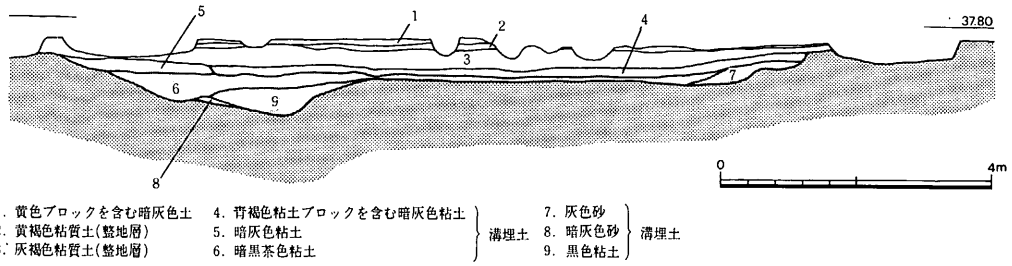
土壙と同じく、多数の溝を検出したが、複雑に重複しており、性格等を的確に把握できないものが多く、今回は比較的その範囲等が明確で、さらに出土遺物が多かったものについて報告する。

SD3147　発掘区のほぼ中央部の北端にある「逆Ｌ字形」の溝である。東西方向の溝は幅0.7ｍ～1.4ｍ、深さ0.1ｍ～0.3ｍで、南北方向については直角に折れ曲がった部分から約6.0ｍのところで終る。

SD3153　発掘区の西北部で検出した東西方向の小溝である。幅0.2ｍ～0.5ｍ、深さ0.1ｍ～0.14ｍで、11.0ｍ分を検出した。西側については発掘区外へ延びている。

SD3190　発掘区のほぼ中央部を「コ字形」に巡る溝である。幅0.7ｍ～2.2ｍ、深さ0.1ｍ～0.3ｍで南へ向って低くなっている。東辺の南北方向は幅が広く、プランも明瞭でない。東辺の溝はほぼ直線的に南方に延びＳＤ3300と直交する。「コ字」形の溝に沿って柵ＳＡ3195が巡る。因に、北辺の長さ8.0ｍ、東辺34.0ｍ（但しコ字として巡る溝は23.0ｍ）南辺18.0ｍ。

SD3200　発掘区の東端の南北溝である。北半部（第109次調査）ではほぼ完掘したが、南半部（第111次調査）では上層遺構との関係で、東西方向に幅1.0ｍのトレンチを設定し、その一



第3図 SD3200土層断面図

部の確認に止めた。この溝の下層埋土中から「嘉元二年十一月卅日」の紀年を有する卒塔婆と「南無阿弥陀仏」の称名を墨書した卒塔婆の2点が出土した。溝幅は南に向って広くなっており、北端部近くで、幅0.8m、南側（トレンチ設定部分）で11.0mである。この溝は発掘区北端でプランとして終息しており、おそらく、この付近から溝は始まり、南方の発掘区外へ延びると考えられる。溝底のレベル差は北端部と南端部では0.7mあり、南に向って低くなっている。溝の埋土は大きく上層（暗灰色粘土層・暗黒茶色粘土層）と下層（黒色粘土層・灰色砂層）に分けられ、紀年銘を有する卒塔婆はこの下層埋土の黒色粘土層から出土した。出土した地点は北半部（第109次調査）地域の南端近くである。

SD3214　発掘区中央部の北端から南へ「L字」状に延びる溝である。北側の発掘区外から延びてきており、10.0mのところで直角に東折する。南北方向の溝幅1.0m、深さ0.1m～0.2m東西方向溝幅0.6m～1.0m、深さ0.3mである。

SD3217　発掘区北半部のほぼ中央にあり、東西に蛇行する形の溝である。長さ12.0mで、東・西の溝端は終息している。溝の東端（土層観察用の南北畦）では幅1.0mで西に向って細くなる。深いところで0.8mである。

SD3239　発掘区南辺部を東西に走る溝である。SD3300と接し、ほぼ並行する形で流れるが、西側では幅が狭くなりプランも不明瞭となる。西端でSD3300と重複するが、先後関係は明らかでない。幅0.6m～1.7m、深さ0.1m～0.4mで、東へ向って幅は広くなり、また深くなる。さらに発掘区外の東へ延びる。

SD3241　発掘区の南辺のSD3239にほぼ並行する形の東西溝である。溝の東側はわずかに南へカーブしながら、発掘区の南東隅部付近で終息する。溝幅はほぼ同じで0.8m、深さ0.1m～0.2m。溝の西端は土壙状の落ち込みで攪乱されており、さらに発掘区外の西方へ延びるのかは不明である。

SD3285　発掘区南半部のやや西側よりにあり、掘立柱建物SB3230の東側に位置する「コ」

形プランの溝である。溝幅は1.2ｍで、深さ0.3ｍ～0.4ｍ。北辺の溝は長さ3.0ｍで南折し南端で東西溝ＳＤ3300と直交する。ＳＢ3230と方向をほぼ合わせており、これと伴うものと考えられる。ＳＤ3190より後出の溝である。

SD3290　発掘区東端部を南北に走る溝である。ＳＤ3200埋没後に掘削されており、ＳＤ3200埋没後に整地された面から切り込まれている。溝の東肩は発掘区外にあるため、溝幅については不明である。また、溝の北半分は削平によるためか、確認できない。溝底面のレベルは南に向って低くなる。

SD3300　発掘区の南端近くを東西に走る溝である。幅2.5ｍ～3.0ｍ、深さ0.4ｍであり、長さ33.0ｍ分を検出したが、東・西両側はさらに発掘区外へ延びている。溝の底面には隅丸方形状のプランの掘り込みがみられる。部分的であるが、北岸付近に木杭が残存している。

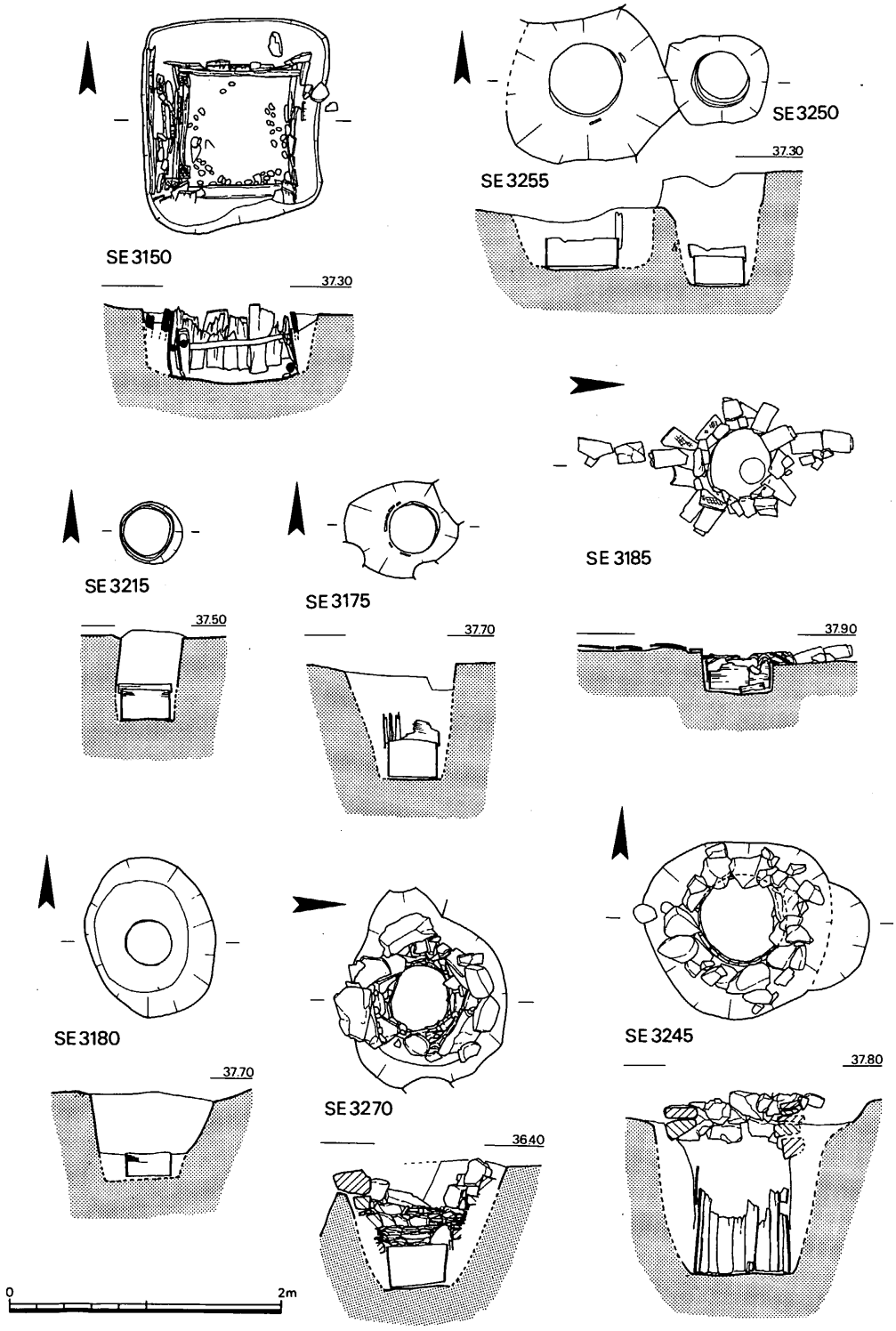
井戸

SE3145　発掘区東端で検出した井戸で、掘形のプランは1.0ｍ～1.1ｍ前後の方形に近く、深さが約0.7ｍの浅い井戸である。掘形の周縁には、瓦や人頭大の花崗岩の自然石が配されている。残存状況が良くなく、石組２段が部分的に残っていたのみである。また掘形内には、縁にそって棒杭が遺存している。こうしたことから、この井戸の構造は、上部が石組、下部が方形縦板枠であった可能性がたかい。縦板材はすでに抜き取られていたが、後の補修に使用されたと思われる平瓦一枚が杭に接して出土した。

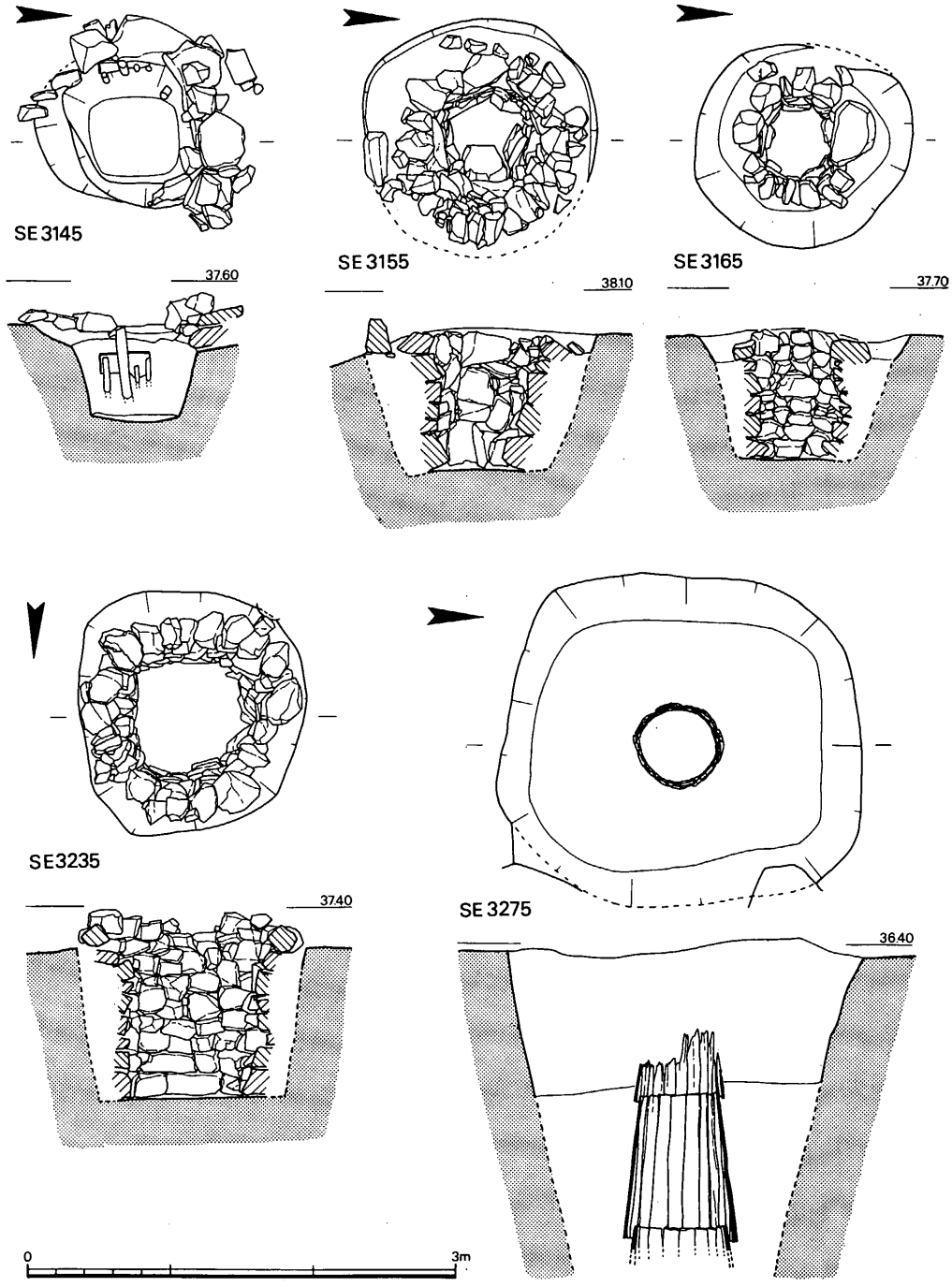
SE3150　発掘区東端、ＳＥ3145の近くで検出した方形縦板枠の井戸である。掘形は1.3ｍ～1.5ｍの方形プランを呈し、深さ0.6ｍの浅いものである。井戸側は、底面から約0.5ｍ遺存するのみであるが、その構築方法は、約0.6ｍの間隔をおいて角材の隅柱を打ち込んで支柱とする。そしてさらに枘穴を設けて横桟を差し込んでいる。この横桟には自然木をそのまま使用している。縦板材は横桟に保持されて組まれているが、同時に隙間をうめるためにさらに板材を重ねて補塡しているところもある。縦板方形枠の内法は、辺長約0.8ｍ、残存高0.5ｍをはかる。側板には幅15cm～20cm、厚さ２cmの板材を用いる。

SE3155　発掘区東北隅近くで溝ＳＤ3200に切り込んで構築した石組の井戸である。掘形は円形に近い形状を呈し、南北径1.6ｍをはかる。石組の石材には、人頭大の大きさの花崗岩自然石を用いて、摺鉢状に積み上げている。石組は６段が残存する。上面での内径0.8ｍ、底面の内径0.4ｍ、深さ1.0ｍをはかる。

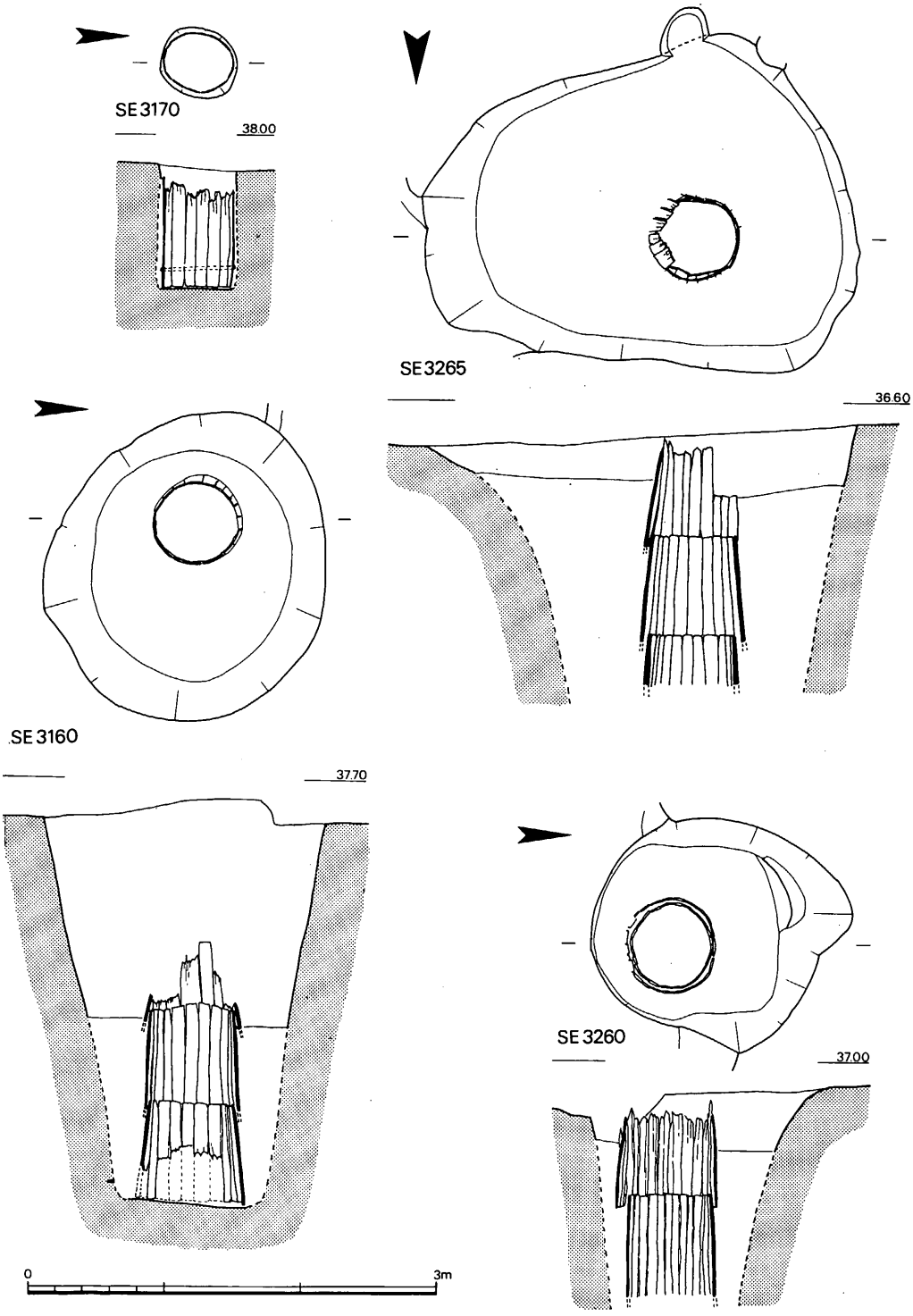
SE3160　発掘区東北寄りで検出した桶側構造の井戸である。掘形はほぼ円形に近く、上端径2.05ｍ～2.35ｍをはかる。井戸枠は掘形の北寄りに据えている。裾開きに組まれた桶側３段分を検出した。桶側は上段と下段で腐植が進んでいるが、中段では幅7.5cm前後、厚さ３cm前後の薄い板材を使用している。上端径0.6ｍ、下端径0.75ｍ、残存高1.90ｍである。大宰府検出井戸分類のⅣ－Ａ類にあたる。（横田賢次郎「大宰府検出の井戸」（九州歴史資料館研究論集３　1977））


SE 3150
37.30
SE 3250
SE 3255
37.30
SE 3185
37.90
SE 3215
37.50
SE 3175
37.70
SE 3180
37.70
SE 3270
36.40
SE 3245
37.80
0
2m

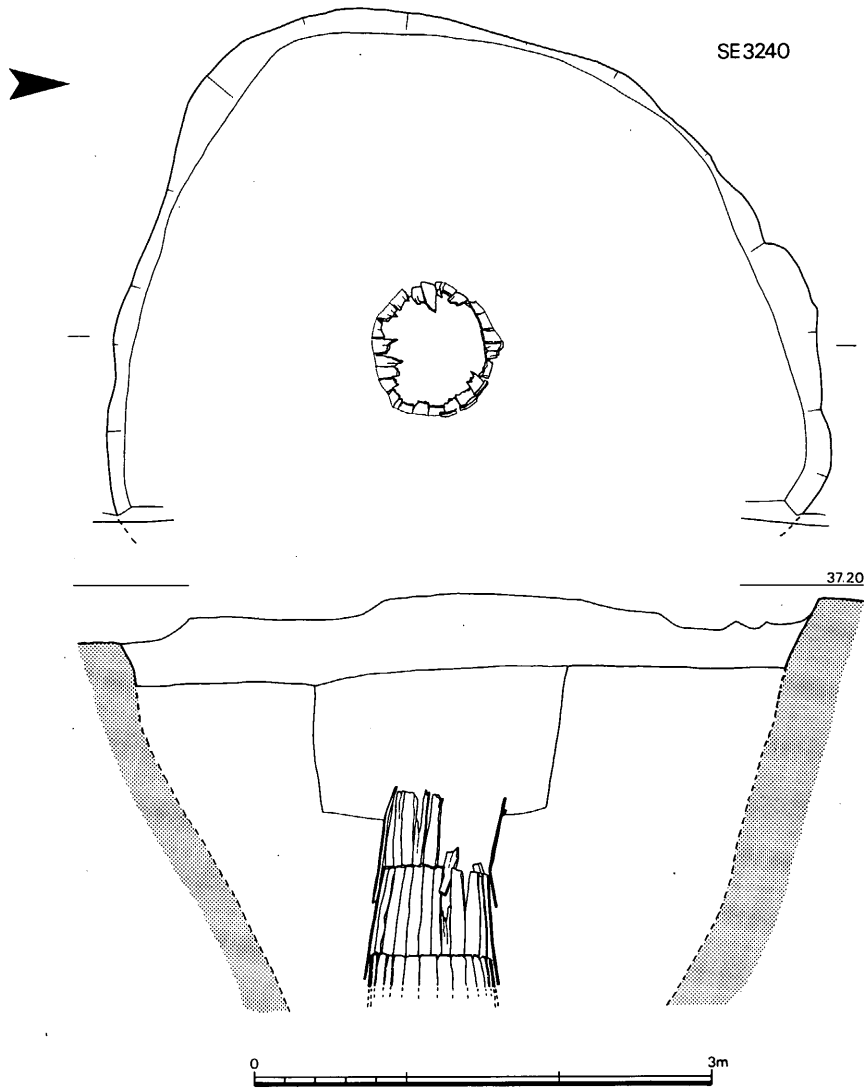
第4図　井戸実測図（1）


SE3145
37.60
SE3155
38.10
SE3165
37.70
SE3235
37.40
SE3275
36.40
0
3m

第5図　井戸実測図 (2)



第6図　井戸実測図 (3)



第7図　井戸実測図 (4)

SE3165　発掘区中央の北寄りで検出した石組の井戸である。掘形は径1.45m～1.55mの円形を呈す。石組には人頭大の花崗岩自然石を多く用い、ほぼ垂直に積まれた6～9段が残存している。上端径0.5m、下端径0.4mで、深さ0.9mである。大宰府検出井戸分類のV類に属す。

SE3170　発掘区中央の北端で検出した桶側構造の井戸である。掘形は径1.1m、深さ0.95mの円筒状を呈している。掘形内側には一段分の桶側が残っている。桶側は上端径0.5mの円筒状のもので、外側の下端近くを竹タガで締めつけている。通常の桶側構造の井戸とはちがって、掘形が浅く、裏込めの土も置かれていないこと等からすると、溜枡としてつかわれていた可能

性が強い。

SE3180　発掘区北西寄りで検出した井戸である。掘形は0.95ｍ～1.20ｍの長円形に近く、底面までの深さは0.65ｍである。掘形は下方に行くにつれて徐々にすぼまっている。最下底に曲物（径34cm、高21cm）が一つ据えられていた。この曲物以外に掘形中からは、石材や板材は出土しておらず、また掘形の規模も小さいことから、この井戸は曲物を井戸枠とした構造のものと考えられる。

SE3185　発掘区東北隅で検出した井戸様の施設である。掘形は径0.5ｍ、深さ0.34ｍ。小さく浅い円筒形をなしている。掘形は周囲の地山を削った後に掘り込まれている。この掘形中には曲物（径45cm、残存高18cm）が一つ据えられている。さらに底面からは、使用中もしくは後に落ち込んだと思われる小さな曲物（径18cm、残存高６cm）が出土した。掘形の周囲には丸瓦と平瓦が配されているが、その並べ方をみると、数枚の完形の丸瓦を掘形のまわりに放射状に置き、隙間に平瓦の破片等を敷いている。さらに丸瓦が縦列の南へ0.95ｍ、北へは0.6ｍ、ほぼ直線的にのびている。この丸瓦列は、当初、取・排水の暗渠施設と考えていたが、下面には溝等は掘られていなかった。掘込み面や、深さ、丸瓦列のあり方からみて結果的にこの施設が瓦積みの井戸とは考えることは出来ない。おそらく溜枡的な役割を果していたと考えられる。これまでのところ大宰府ではこうした丸瓦列を伴った例は初見である。

SE3215　発掘区の中央付近で検出した井戸である。掘形は径0.48ｍ、深さ0.70ｍの小さく浅い円筒形をなしている。底面に曲物が２段据えられているが、上段は腐植が著しい。曲物は上段が径46cm、残存高８cm、下段が径42cm、高24cmである。この井戸は曲物を重ねて井戸枠としたものと考えられる。

SE3235　発掘区東南隅近くで検出した石組の井戸である。掘形は円形に近い形状をなし、上端径は1.6ｍ～1.7ｍである。石組には20cm～30cmの大きさの花崗岩自然石を用いている。そして下部にはさらに大きめの石を用いて積み上げている。石組上端の径は1.05ｍ、下端の径は0.75ｍで、石組の方は方形に近いプランになっている。深さ1.45ｍが残存していた。

SE3240　発掘区中央の南寄りで検出した井戸である。掘形の規模は南北径4.75ｍ、東側は発掘区外に及んでいるため、その全容を知り得ないが、今回の調査で検出した井戸の中で最も大きいものである。井戸枠は、掘形のほぼ中央に掘えられた桶側構造のもので、３段を検出した。なお土砂崩壊の危険があったため、完掘していない。井戸側板は腐植が進んでいる。比較的遺存状態の良い中段での内径は、上端68cm、下端81cmであり、裾びらきになっている。下段上端からの高さは58cmであった。また上段側板の外側に、竹タガが一条遺存していた。井戸分類Ⅳ－Ａに属す。

SE3245　発掘区中央部付近で検出した井戸である。掘形は円形に近い形状を呈し、南北径1.33ｍ、深さは1.30ｍである。底面は砂礫層に至っている。井戸枠は上下異構造の累積井戸枠で

ある。上部の構造は石組、東側で5段が残存していた。石材にはやや小ぶりの花崗岩自然石を利用している。下部の構造は桶側1段によって構築されている。この桶側は腐植が進み、すでに上部を欠失している。下端での内径は68cmである。使用した側板材の一枚には、長方形の欠き込みを入れたものがある。井戸分類Ⅳ－Aに属す。

SE3250　発掘区南寄りで検出した井戸である。掘形は南北幅0.65mの隅丸方形状の平面プランであり、深さは0.85mである。掘形底面に上下2段の曲物が据えられている。上段は腐植が著しく、その下半を残すのみである。上段は径43cm、残存高10cm。下段は径38cm、高さ20cmをはかり、下段は上段のものより一回り小さい。この井戸は、掘形の規模や検出状況からみて曲物を井戸枠としたものと考えられる。井戸分類のⅢ類か。

SE3255　前述のSE3250の西側に接した位置で検出した井戸である。遺存状態が悪く掘形の上部が流出している。残存部分で東西幅1.2mの長さの隅丸方形に近い形状をなしている。深さは0.45mを残すのみであった。底面には曲物（径53cm、高22cm）一段が据えられている。そのレベルは隣接したSE3250よりやや高い位置である。曲物の外側で長さ25cm程の縦長の板材が二枚出土した。このことから、井戸側として桶側が構築されていた可能性が強い。

SE3260　発掘区南寄りで検出した桶側構造の井戸である。掘形は円形に近い形状で、南北径1.67mをはかる。掘形の深さは井戸側崩壊の危険性があったため、完掘には至っておらず不明である。桶側は上下2段分を検出した。このうち上段上半は腐植が著しい。下段の内径は上端で58cmである。井戸分類のⅣ－A類に属す。

SE3265　発掘区南寄りで検出した桶側構造の井戸である。掘形は東西3.20m、南北2.40mと、多少の出入りはあるが長円形に近い形状をなしている。深さについては完掘していないので不明である。井戸枠は掘形西側寄りに据えられた桶側で、3段分を検出した。上段は腐植が著しい。遺存状態の良い中段で、上端径62cm、下端径72cm、下段の端からの高さは75cmである。

SE3270　発掘区西南隅部で検出した石組の井戸である。掘形は1.2m～1.3mの円形プランで、深さは0.9mである。この底面には曲物（径45cm、高30cm）を一つ据えている。さらに曲物を固定するようにして、人頭大の花崗岩自然石、小石、瓦片を周囲に積み上げている。現状でみるかぎり、この井戸は上部に石組、下部に曲物とする累積井戸と考えられないこともないが、検出状況から本体は石組の井戸で、その内側に曲物を据えたものと考えられる。したがって曲物は井戸枠としてではなく、別の用途が考えられる。

SE3275　発掘区西南隅部にあって、SE3270の西側に接した位置で検出した桶側構造の井戸である。掘形は東西1.75m、南北2.03mの隅丸方形に近い形状をなしている。崩壊の恐れがあったため、完掘していないので深さは不明である。掘形のほぼ中央で桶側3段を検出した。上段はすでに腐植著しいが、比較的残りの良い中段で、その上端径は65cm、下端径は73cmとやや裾が広い。縦板材は幅10cm前後、長さ108cm程のものを18枚使用している。この下端部10cmは、さ

らに下段の側板を巻いている。

SE3280　発掘区西南隅部にあって、ＳＥ3275と重複した井戸である。図示していないが、掘形は東西2.1ｍ、南北2.1ｍの円形を呈している。掘形内には竹タガ２条が残っていただけで、側板材はすでに抜き取られていたようである。竹タガは、掘形検出面から1.2ｍ下った位置で検出し、２条の間隔は25cm程離れていた。本来の位置を保つとは考えられないが、復原すると内径0.75ｍの輪状になる。このことからこの井戸は桶側構造のものと考えられる。

土壙

多数の土壙があるが、今回はその主なるものについて記述する。

SK3161　発掘区の西北部で検出したほぼ正円形の浅い土壙で、SK 3162と重複する。径1.0ｍ、深さ0.1ｍ。

SK3162　発掘区東北隅部のＳＤ3200の東岸近くで検出した長径2.8ｍ、短径2.1ｍ、深さ0.6ｍの不整円形の土壙。

SK3164　発掘区北辺部中央で検出した長径1.8ｍ、短径1.4ｍ、深さ0.3ｍの土壙。

SK3246　発掘区の東南部で検出した径1.5ｍのほぼ正円形の土壙で、摺鉢状を呈し、底部は一辺0.5ｍの隅丸方形のプランを有する。

SX3247　ＳＫ3246の西側に位置する隅丸の長方形土壙である。長径2.5ｍ、短径1.7ｍで２段の掘り込みをもつ。ここからは土器片が出土した。

SK3248　発掘区のほぼ中央部で検出した不整形の土壙。長径2.5ｍ、短径1.5ｍ、深さ0.3ｍである。

SK3259　発掘区の東南隅部付近にあり、ＳＤ3300の南側で検出した長径2.1ｍ、短径1.8ｍのほぼ正円形の土壙で、深さ0.9ｍ、東西溝ＳＤ3241と切り合っており、先後関係はＳＤ3241が新期である。卒塔婆１点が出土している。

SK3261　ＳＤ3260の北側にある隅丸方形に近い形状の土壙である。１辺が1.4ｍ、深さ0.7ｍ。ＳＤ3241との先後関係は不明。

SK3266　発掘区の南西隅部で検出した長円形の土壙である。長径2.7ｍ、短径2.3ｍ、深さ0.6ｍを測る。底面はほぼ平らである。

SK3268　ＳＥ3265の北西に接する形で掘られている長径1.7ｍ、短径1.3ｍ、深さ0.5ｍの長円形の土壙。底面には小石の集石がある。

SK3295　発掘区のほぼ中央部の南端に接して掘られた土壙で、一部発掘区外へ延びる。不整形で、検出した範囲での規模は長径4.0ｍ、短径2.7ｍを測る。二段の掘り込みを有し、下段の掘り込みは、径2.3ｍのほぼ正円形のプランで、摺鉢状になっている。深さは、1.2ｍである。下段の掘り込みの上端南縁部に沿って木杭６本が打ち込まれているが、現状では土壙内に倒れ込んだ状況であった。木杭は径7.0cm～10.0cm、長さ100.0cmの自然木の先端を尖らしたものである。土壙

内からは鋳型片が多数出土しており、付近に鋳造工房の存在が想定される。また、木製品も出土しており、その中には「南无□□…」の墨書がある卒塔婆１点が出土している。

その他の遺構

SX3210　発掘区の東北隅部付近、ＳＤ3200の西岸に接する深さ0.2ｍ前後の浅い落ち込みである。この落ち込みは東西幅0.5ｍで北方に向って落ち、北側および東側は溝で切られ、プランとしては明瞭でない。埋土はピット中のものと同じく黒色土である。落ち込みの西南隅部付近から金銅仏１体が出土している。

SX3310　発掘区の西南隅部近くの地域で検出した不整形の土壙状の落ち込みである。発掘区外の西へ延びており、東端はＳＫ3268と重複する。深さ0.1ｍ～0.2ｍである。

SX3313　発掘区の東南隅部の浅い落ち込みで、東西幅7.0ｍ、南北幅2.0ｍで発掘区南端へ向って落ち込む。プランとしては必ずしも明瞭ではない。底面では部分的に最長2.4ｍ、短径1.4ｍ、深さ0.2ｍ～0.3ｍの長円形の土壙状の落ち込みとなる。出土遺物の中には一部ＳＫ3295の上層埋土の出土遺物と混じっているものがある。

出土遺物

SD3200出土土器・陶磁器（第8～11図、図版28～32）

土師器

皿ａ（16～40）　口径7.1～8.7cm、器高1.0～1.7cm。27には油煙付着。24・34以外は板状圧痕を伴う。

皿ｂ（１～15）　口径5.6～8.0cm、器高1.7～2.1cm。９・11・13は灯火器。２～14の外底には板状圧痕を伴う。

皿ｃ（41・42）　口径7.9・8.2cm、器高2.0・1.9cm。42は油煙付着。

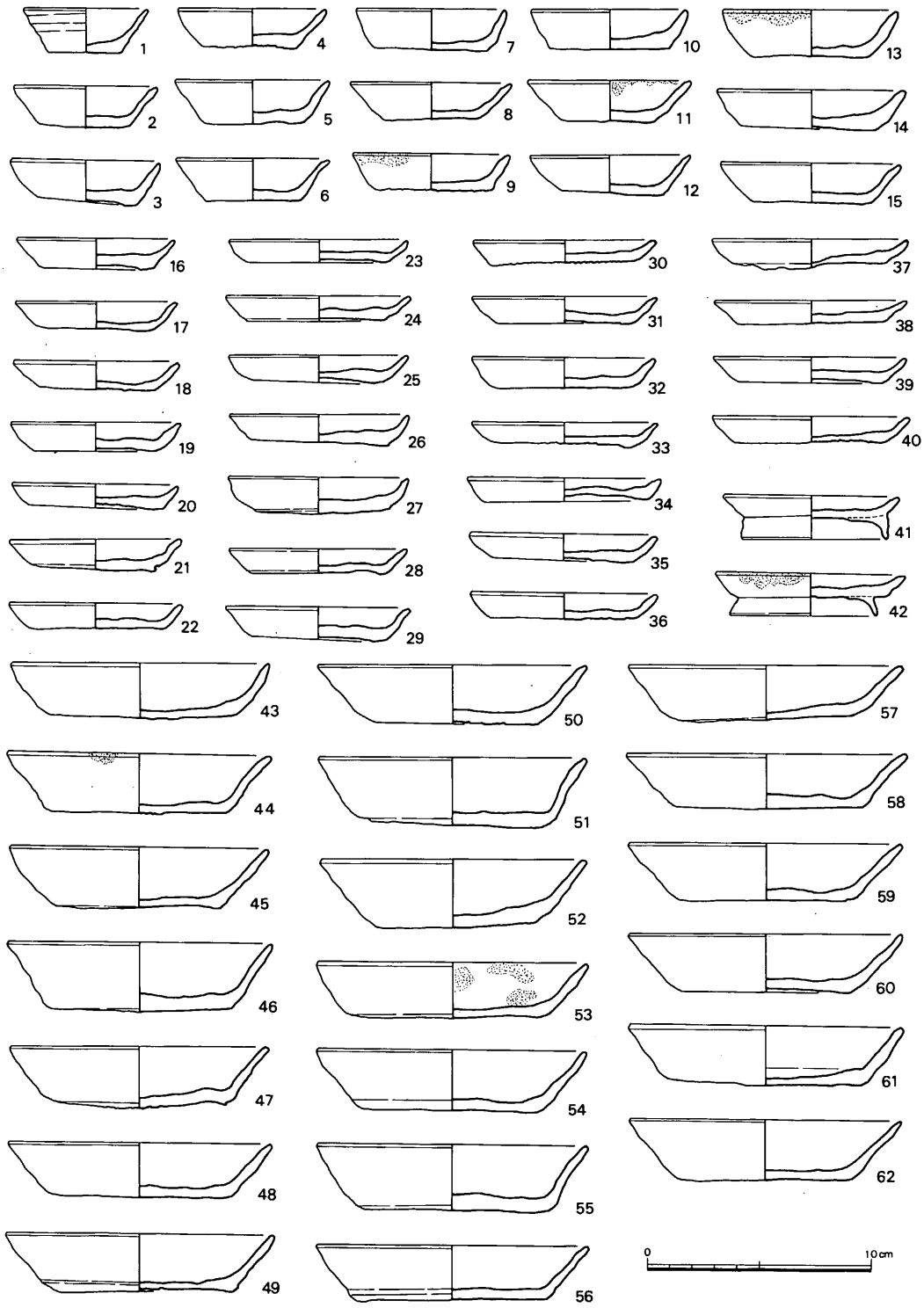
杯ａ（43～92・94・95・97・98・ａ）　口径11.7～13.4cm、器高2.5～3.2cm。52・54・55・59・62・65・69・95以外は板状圧痕を有する。52・57・71・73・79・87は灯火器として使用。97は口径12cm前後の器の口縁部を打ち欠いている。98の内・外面に墨書があるが呪符的なものであろか。意味不明。94・95は口径15cmを越す大型品。ａは呪符的な墨書絵がみられるが意味不明。

杯ｂ（93）　口径14.0cm、器高3.4cm。体部が大きく外傾するタイプで、本溝からの出土点数は稀少である。

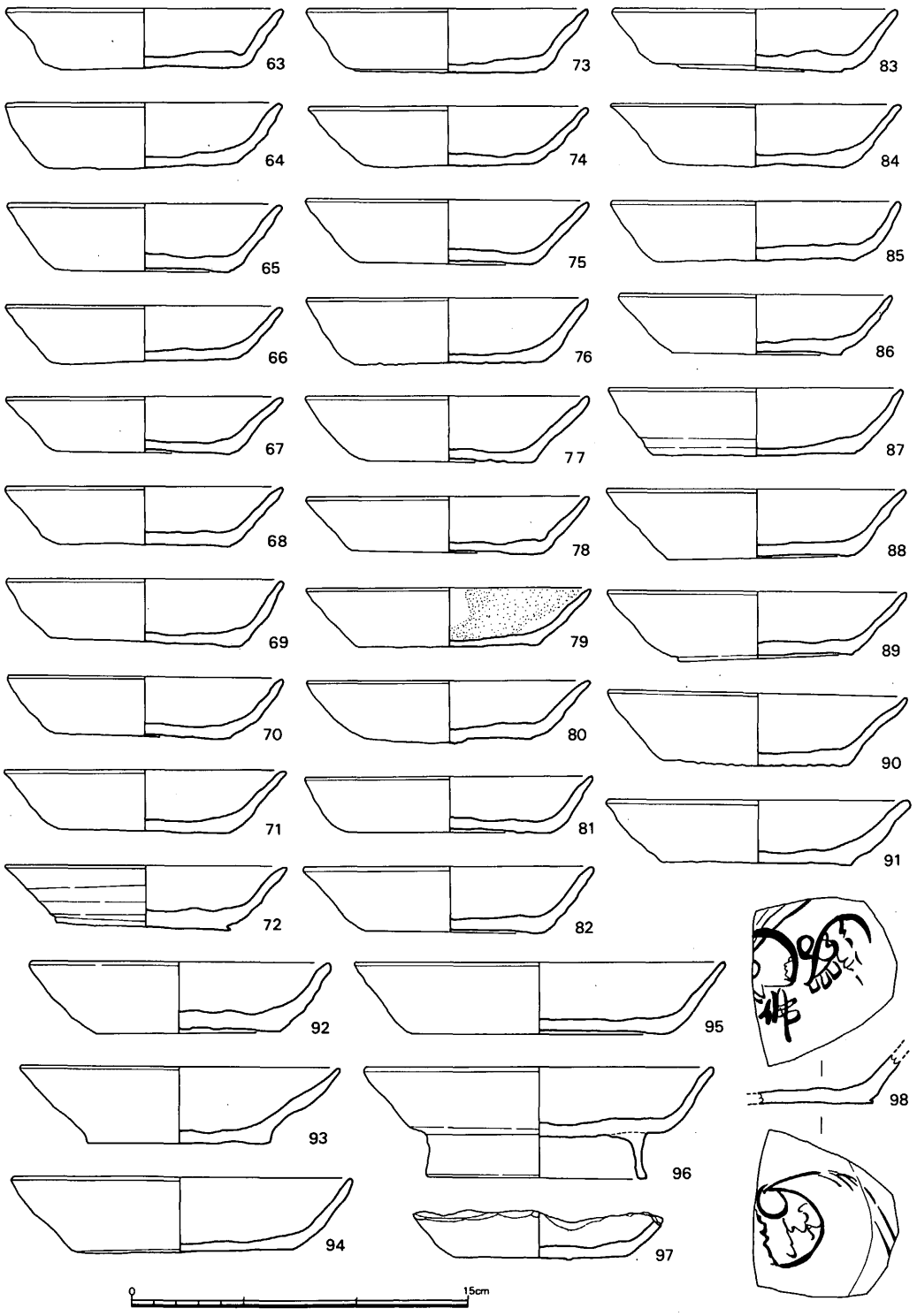
杯ｃ（96）　口径15.4cm、器高9.8cm。杯ａの大形品に高台を貼付している。

陶器

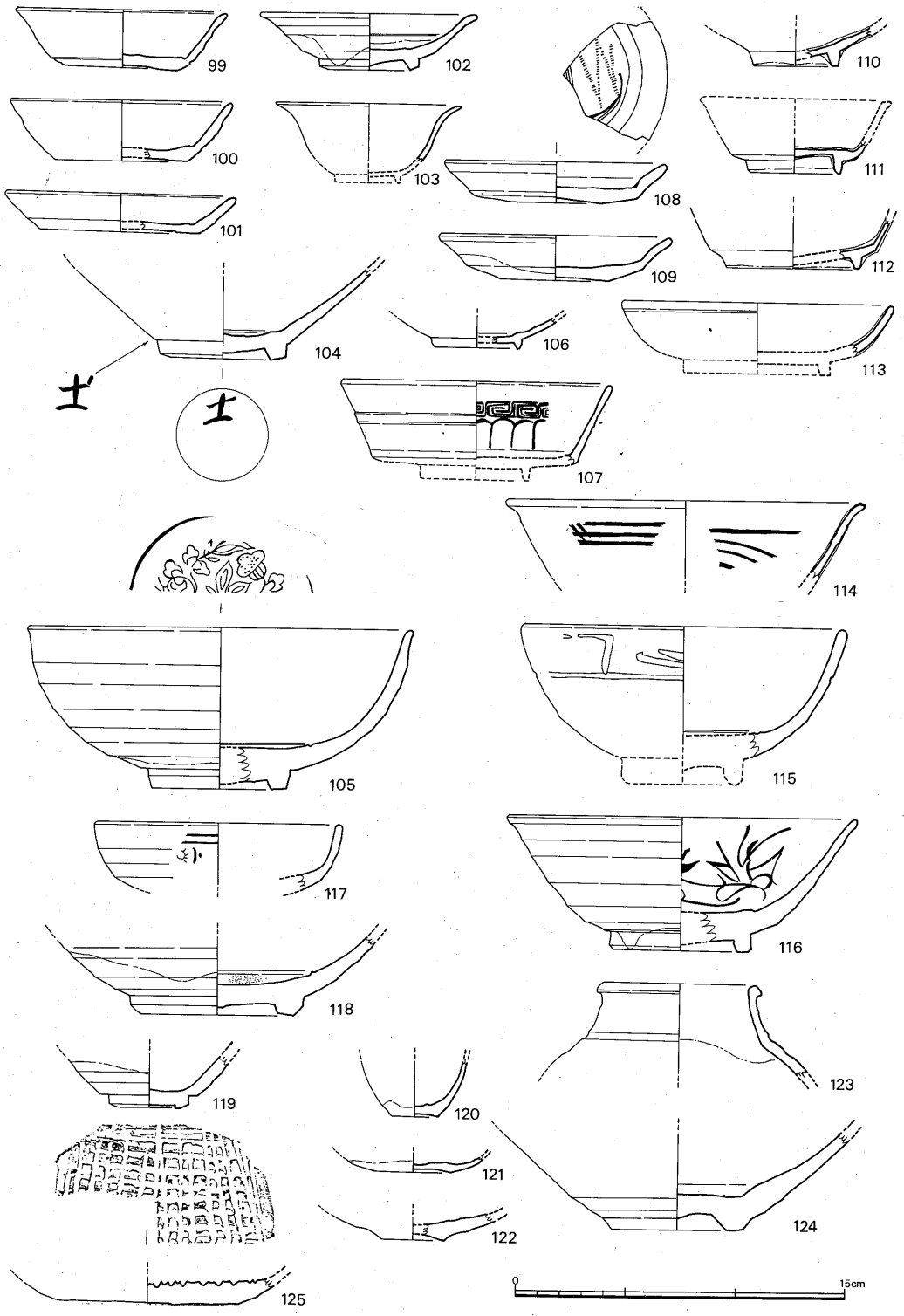
茶入れ（120）　微砂粒を多く含む胎土でアメ色を呈し光沢を有する茶入れである。底部は糸切り離しのままである。瀬戸産か。



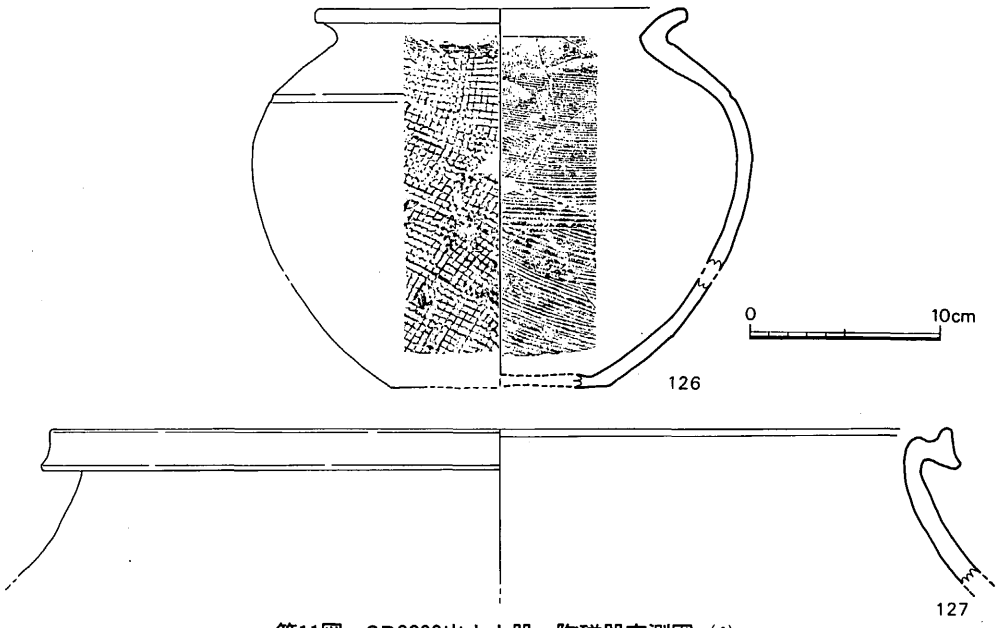
第8図　SD3200出土土器・陶磁器実測図（1）



第9図　SD3200出土土器・陶磁器実測図　(2)



第10図　SD3200出土土器・陶磁器実測図 (3)



第11図　SD3200出土土器・陶磁器実測図（4）

下し皿（125）　わずかに茶色味をおびた白色の胎に、外底部を除き灰釉がかかる。内面の下し目は幅広く深い。瀬戸産。

甕（126・127）　126は口径19.6cm。外面は細格子目、内面の当具痕は刷毛目により消去されている。胎土は精良で、暗灰色に焼成されている。亀山産か。127は口径47.0cm。胎土に砂粒を多く含み、赤褐色に焼成されている。肩部に黄緑色の自然釉がふき出している。常滑産。

中国陶磁器

白磁

杯（99・100）　口径9.5・10.0cm、器高2.6・2.7cm。口縁部の釉をカキ取り、伏せ焼きする。外底部は回転ヘラ削り調整である。灰白色の胎に灰色の釉がかかる。

皿（101・102）　101は口径10.4cm、器高1.6cm。体部下位から外底部は回転ヘラ削り調整。灰白色の胎に白灰色の釉がかけられている。露胎である口縁端部に油煙が付着している。102は口径9.8cm、器高2.5cm。見込み部分の釉を環状にカキ取っている。灰白色の胎に淡黄白色の釉がかかる。

椀（103～105・ａ～ｄ）　103は口径8.4cmに復原可能な小椀である。白色緻密な胎に若干灰色味をおびた白色の釉がかかる。104は見込み部分の釉を環状にカキ取る。灰白色の胎に灰色味のある灰色の釉がやや厚めにかかる。外底部と体部下位露胎部分に「土」と判読可能な墨書がある。105は口径17.4cm、器高7.3cm。内底にスタンプによる花文が描かれている。白灰色の胎に透明な釉がかかる。Ⅳ類（ａ・ｄ）、Ⅴ類（ｂ）Ⅷ類（ｃ）も出土している。

青白磁

椀(106)　白色緻密な薄い胎に、高台畳付から外底部を除いて青白色の薄い釉が均一にかかる。体部と内底部との境いは浅い段をなす。

杯(107)　体部内面に型押しによる雷文帯および蓮弁文を浮文として描き、外面に一条の突帯を巡らす。白色緻密な胎に若干空色をおびた釉をかけている。口径12.2cmに復原できる。

瓶(e)　梅瓶型の瓶の胴部片である。

青磁

皿(108・109・113)　108・109は腰部を屈曲させる通例の同安窯系皿で、108の内底に櫛描文を有する。外面は口縁部下から回転ヘラ削り調整である。口径10.0・10.5cm、器高1.8・2.0cm。113は口径12.2cmに復原可能なもので、白色を呈し、比較的緻密な胎に淡黄緑色の厚い釉がかかる。

杯(111・112)　111・112は高台先端部を露胎とし、灰色・白色の緻密な胎に緑青色・淡黄緑色の厚い釉がかかる。龍泉窯系。

椀(110・114～116)　110の高台畳付部は通例に比べて広く平坦である。灰色緻密な胎に緑青色の釉が厚くかかる。114は口縁部を端反りにし、器壁が薄いタイプで、内外に丸刃彫りによる文様を描く。暗灰色の粗い胎に、淡黄緑色の比較的厚い釉がかかる。口径16.3cm。115は直口のもので、外面に雷文帯を配する。白灰色の胎に、灰色をおびた淡黄緑色の釉が比較的厚くかかっているが、発色は悪い。口径14.7cm。龍泉窯系。116は内面に線彫りにより文様を配している。体部外面は回転ヘラ削り調整。灰色を呈するやや粗い胎に淡黄灰色の釉がかかる。器形は龍泉窯系そのものであるが、釉調は白磁的であり、あるいは白磁にこのような器形があるのかも知れない。

陶器

椀(119)　淡黄色の胎に茶色の斑点を多数伴う黒釉がかかる。

茶入れ(121・122)　121・122の胎土はアズキ色、淡赤茶色を呈する。121は体部下位にまで茶褐色の釉がかかる。

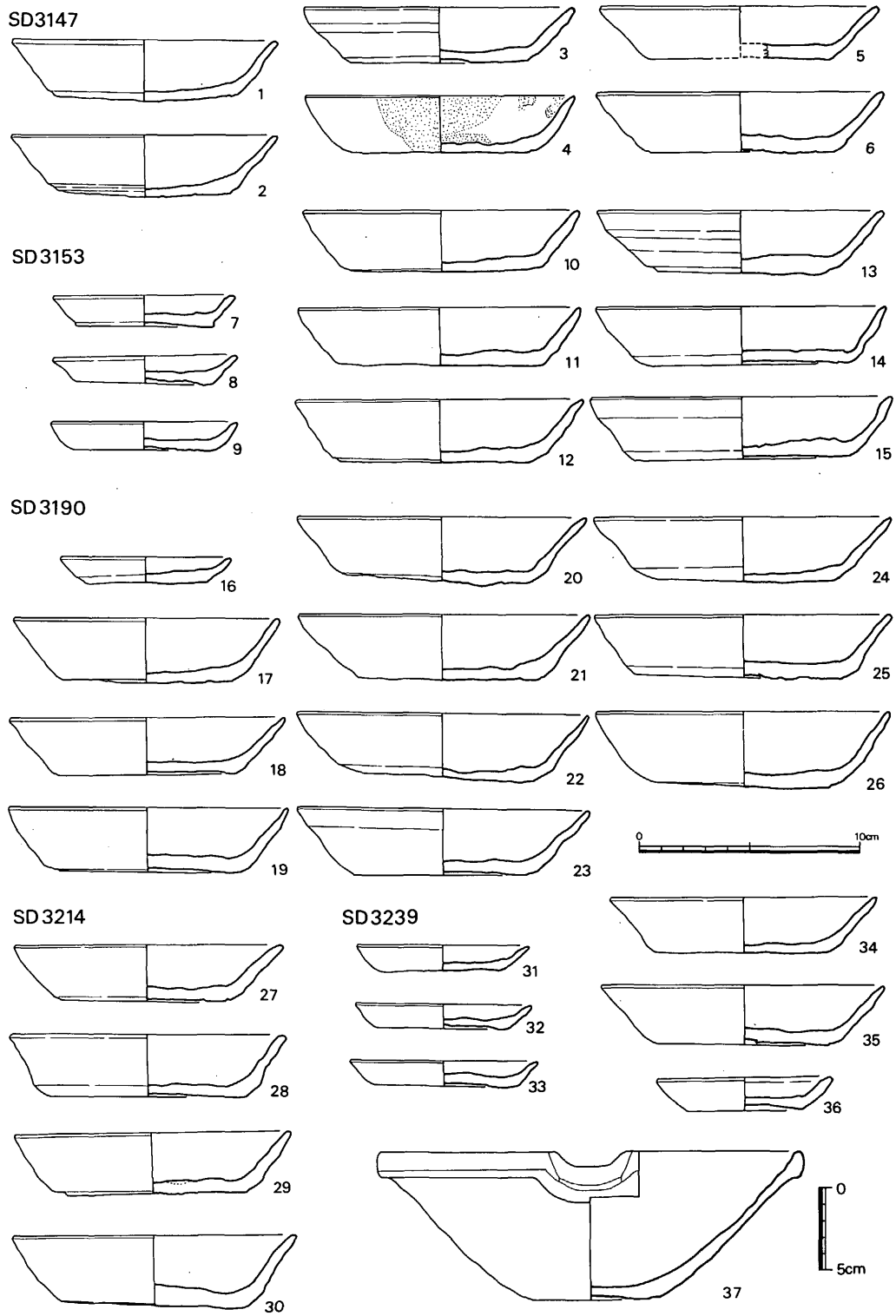
壺(123・124)　123は砂粒をほとんど含まない黒色の胎土を有する。124は暗灰色の粗い胎土に白濁化した黄釉が高台畳付を除いて全てにかけられる。体部下位は回転ヘラ削り調整である。鉢の可能性も考えられる。

朝鮮陶磁器

象嵌青磁

皿(117)　外面に白・黒象嵌で圏線、花文を描いている。花文の数は4個に復原できる。暗灰色の胎に青灰色の薄い釉がかかる。体部外面は回転ヘラ削り調整。

鉢(118)　灰色の胎土に黄緑色の釉がかかる。胎土中の砂粒が器面に白斑として表出している。内面の目跡は6個である。暗褐色土層出土例からベトナム産の可能性も考えられる。



第12図　SD3147・3153・3190・3214・3239出土土器・陶磁器実測図

SD3147出土土器（第12図）

土師器

杯a（1～6） 口径12.0～13.0cm、器高2.4～2.8cm。油煙が濃密に付着している。全て板状圧痕を伴う。全て糸切り。

SD3153出土土器（第12図）

土師器

皿a（7～9） 口径8.2～8.4cm、器高1.3～1.4cm。全て板状圧痕を伴う。糸切り。

杯a（10～15） 口径12.5～13.6cm。器高2.6～2.9cm。全て板状圧痕を伴う。糸切り。

SD3190出土土器（第12図、図版33）

土師器

皿a（16） 口径7.7cm、器高1.2cm。板状圧痕を伴う。糸切り。

杯a（17～26） 口径12.0～13.4cm。器高2.6～3.4cm。17・19・20・21・24・25の外底部に板状圧痕を伴う。糸切り。

SD3214出土土器（第12図）

土師器

杯a（27～30） 口径12.1～12.8cm。器高2.6～3.4cm。27～29は板状圧痕を伴う。糸切り。

SD3239出土土器・陶磁器（第12図、図版33）

土師器

皿a（31～33） 口径7.9～8.5cm。器高1.1～1.2cm。全て板状圧痕を伴う。糸切り。

杯a（34・35） 口径12.0・12.7cm、器高2.5・2.7cm、35は板状圧痕を伴う。糸切り。

須恵系土器

片口鉢（37） 底部は板起しの後、一部ヘラナデ仕上げしている。砂礫を多く含み、暗灰色に焼成されている。内面中位下は摺ったため、平滑である。東播系。

白磁

皿（36） 口縁部を露胎とする。白灰色の胎に灰色の釉がかかる。口径8.0cm、器高1.5cm。

SD3217出土土器・陶磁器（第13図、図版33）

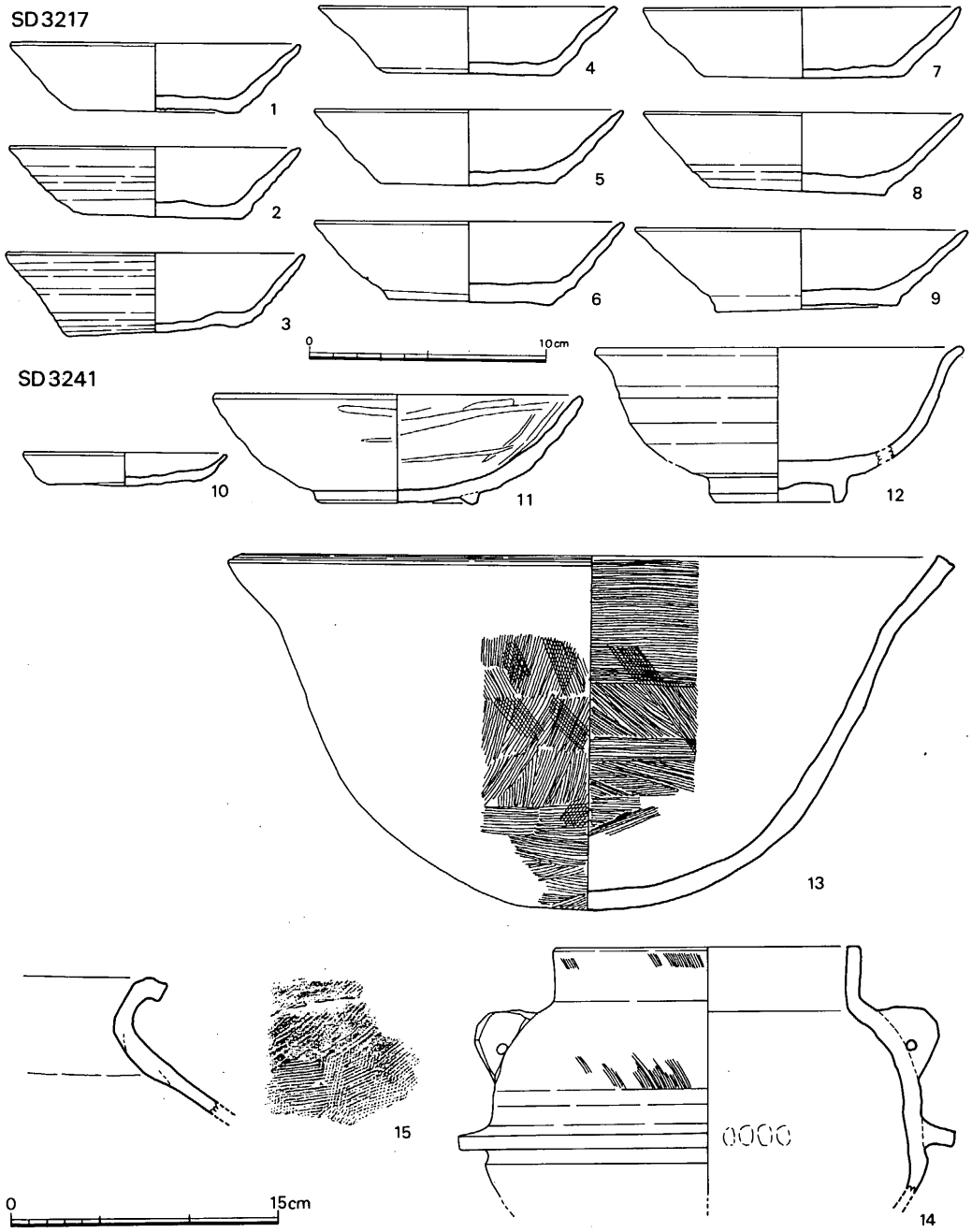
土師器

杯b（1～9） 口径12.1～14.0cm、器高2.9～3.4cm。1・3・4～9の外底に板状圧痕を伴う。糸切り。

鍋（13） 口縁部と端部はヨコナデ、他は刷毛目調整である。胎土中の砂礫は少く、精良で、淡灰茶色を呈する。外面に煤が多く付着している。口径40.8cm、器高19.7cm。

青磁

椀（12） 灰色の胎に淡黄緑色の薄い釉がかかる。内底には花文のスタンプ文様があるが不明瞭である。



第13図　SD3217・3241出土土器・陶磁器実測図

SD3241出土土器（第13図、図版33）

土師器

皿a（10）　口径8.6cm、器高1.4cm。外底部に板状圧痕がある。内外面に油煙が付着している。

釜（14）　外面の刷毛目調整をヨコナデで大部分を消去し、部分的に残っているだけである。鍔貼付時の指頭圧痕が内面に残る。胎土は精選され、砂粒はほとんど含まない。茶褐色を呈する。

瓦器

椀（11）　口径15.5cm、器高4.6cm。内外面にミガキがみられるが不明瞭。胎土中の砂粒は少く、暗灰色に焼成されている。

須恵系陶器

甕（15）　外面の平行叩き目は頸部まで残り内面の当具痕はナデ消されている。口縁端上部を若干上へ引き出すようにヨコナデしている。胎土中の砂礫は少く、暗灰色を呈する。器面は燻され、若干光沢を放つ。東播磨地方に所在する魚住窯産であろう。

SD3285出土土器・陶磁器（第14図）

土師器

皿a（1～3）　口径7.8～8.5cm、器高1.1～1.2cm。全て板状圧痕を伴う。糸切り。

杯a（4）　口径12.0cm、器高2.7cm。板状圧痕を伴う。糸切り。

白磁

杯（5）　灰白色の胎に黄色味をおびた灰色の釉が体部下位にまでかかる。口縁部は露胎。口径9.4cm、器高2.4cm。

SD3290出土土器・陶器（第14図、図版34）

土師器

皿a（7・8）　口径8.1・9.1cm、器高1.3・1.4cm。板状圧痕を伴う。糸切り。

皿b（6）　口径6.9cm、器高1.7cm。板状圧痕を伴う。

杯a（9～13）　口径12.5～13.6cm、器高2.6～2.8cm。全て板状圧痕を伴う。糸切り。

陶器

壺（14）　口縁端を上方へ引き出す。暗灰色の胎に茶褐釉がかかる。中国産。

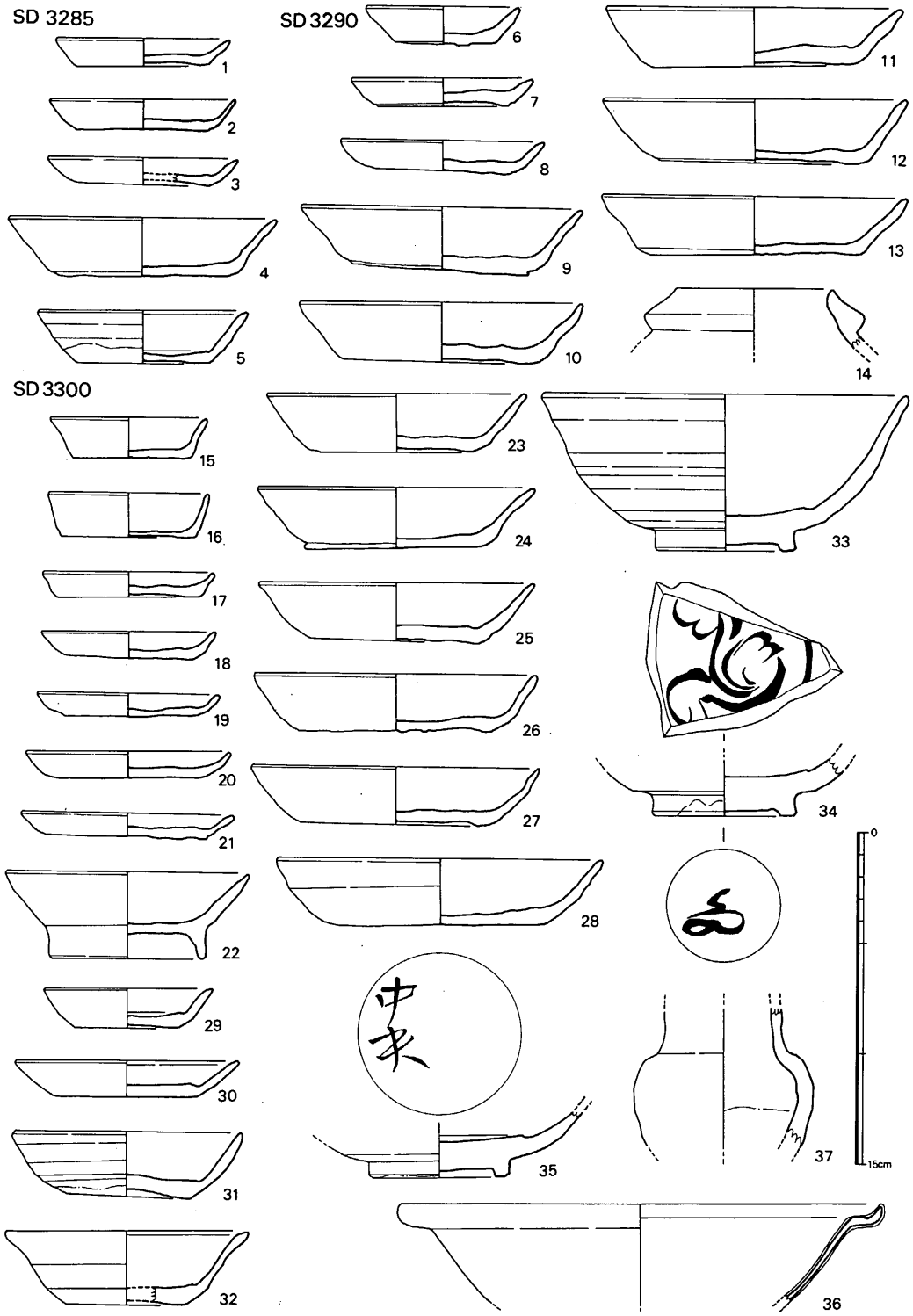
SD3300出土土器・陶磁器（第14・15図、図版34）

土師器

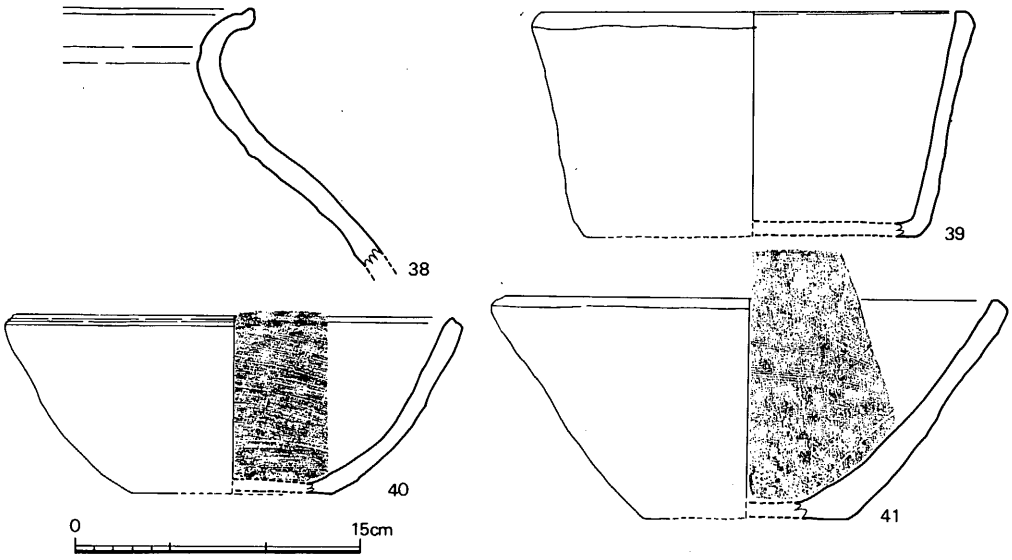
皿a（17～21）　口径7.7～9.5cm、器高1.1～1.3cm。18以外は板状圧痕を有する。糸切り。

皿b（15・16）　口径7.0・7.2cm、器高1.8・2.0cm。板状圧痕を伴う。糸切り。16は灯火器として使用されている。

杯a（23～28）　23～27は口径11.6～12.8cm、器高2.6～2.8cm。全て板状圧痕を伴う。28は口



第14図　SD3285・3290・3300出土土器・陶磁器実測図 (1)



第15図　SD3300出土土器・陶磁器実測図 (2)

径14.5cm、器高3.0cm。

杯c（22）　口径10.9cm、器高3.9cm。

鉢（39）　口径22.4cm、器高11.8cm。外面は成形時の凹凸をそのまま残すが、内面はヨコ方向にナデ仕上げしている。内面は焦げ付きが残り、外面は煤が付着している。胎土中に少量の砂礫を含む。濁茶色を呈する。

瓦質土器

鉢（40・41）　内面を刷毛目調整するが、外面は成形時の凹凸が残る。41の体部上位にわずかであるが刷毛目がみられる。黒灰色ないし灰色に焼成される。

陶器

甕（38）　復原すると口径は50cm程になる。胎土中に砂礫を含み、やや赤味のある茶色に焼成されている。常滑産。

白磁

皿（29・30）　口径7.6・10.1cm、器高1.8・1.6cm。口縁部を露胎とする。灰白色の胎に灰白色の釉。29の口縁部露胎部分に油煙が付着。

杯（31・32）　口禿である。口径10.3・10.8cm、器高2.9・3.3cm。31は灰色の胎に灰色の釉が体部下位付近までかかる。32は灰白色の胎に淡黄灰色の釉が全面にかかる。

青磁

椀（34・35）　34は内面に花文を片切彫りしている。外底部に墨書があるが判読が困難である。35は内底に「中央」のヘラ描き文字がある。

盤（36）　白灰色の胎に淡黄緑色の釉が厚くかかる。口径21.7cm。

陶器

燭台（37）　淡赤茶色の胎に黒褐色を呈する釉が薄くかかる。金属製品に酷似した器形に復原できよう。中国産。

SE3160出土土器（第16図）

土師器

杯a（1）　口径11.9cm、器高2.6cm。板状圧痕を伴う。

SE3170出土土器（第16図）

土師器

皿a（2）　口径7.9cm、器高1.1cm。板状圧痕を伴う。

SE3180出土土器（第16図）

土師器

杯a（3・4）　口径12.2・12.3cm、器高2.6cm。3・4ともに板状圧痕を伴う。

SE3185出土土器（第16図）

土師器

杯a（5・6）　口径14.3・14.5cm、器高2.7・3.0cm。5・6ともに板状圧痕あり。

SE3235出土陶磁器（第16図）

青磁

椀（7）　暗灰色のやや粗い土。釉は高台畳付付近までやや厚くかかっている。

SE3240出土土器・陶磁器（第16図、図版35）

土師器

皿a（10・11）　口径8.1・8.4cm、器高1.3・1.4cm。

皿b（8・9）　口径7.1・7.5cm、器高1.6cm。10は板状圧痕を伴う。

杯a（13～17）　口径12.9～13.6cm、器高2.6～3.1cm。全て板状圧痕を伴う。

杯c（12）　口径12.5cm、器高3.1cm。板状圧痕を伴う。井戸上層からの出土のため、井戸に伴うかどうか明らかでない。

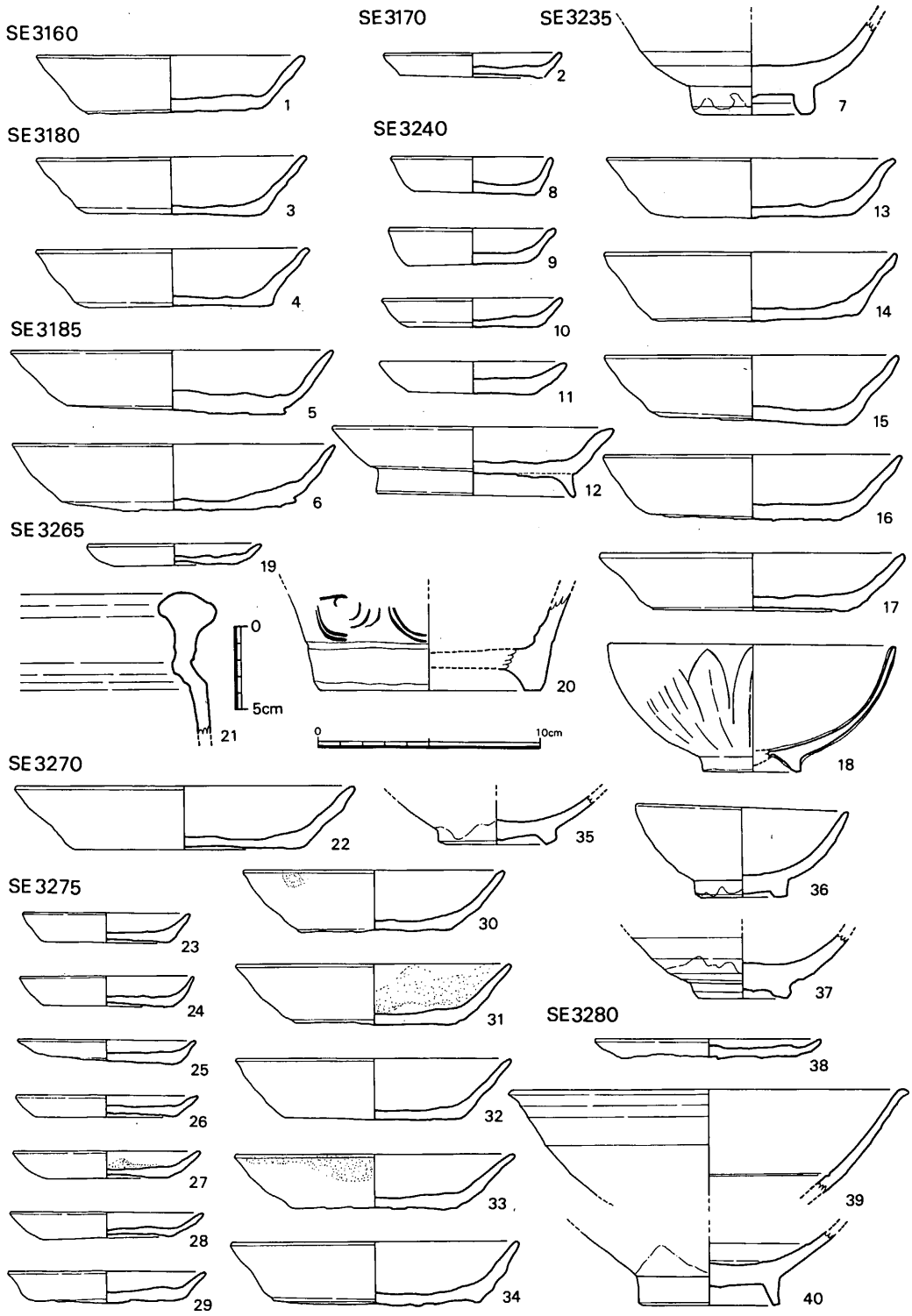
青磁

椀（18）　口径12.8cm、器高5.7cm。線彫りされた蓮弁文の中心はやや盛り上がり、不明瞭な鎬となる。灰色の胎に淡黄緑色の釉が厚くかかる。高台畳付部分は露胎となり、その部分は茶褐色を呈する。

SE3265出土土器・陶磁器（第16図）

土師器

皿a（19）　口径7.8cm、器高0.9cm。板状圧痕がある。



第16図　SE3160・3170・3180・3185・3235・3240・3265・3270・3275・3280出土土器・陶磁器実測図

青白磁

瓶（20）　梅瓶形の底部片である。灰白色良質な胎に外面は青白色、内面は薄い釉がかかる。底部外面の釉を削り取っている。露胎部分は赤褐色を呈する。

黄褐釉陶器

甕（21）　口径約65cm程に復原可能な大形品である。体部は叩きによる成形と考えられるが仕上げの削りにより明らかでない。赤褐色を呈する胎に黄緑色の釉がかかっている。硬質な焼成である。

SE3270出土土器（第16図）

土師器

杯a（22）　口径15.2cm、器高2.9cm。板状圧痕を伴う。

SE3275出土土器・陶磁器（第16図、図版35）

土師器

皿a（25～29）　口径8.0～8.8cm、器高1.0～1.5cm。27の内底・口縁部に油煙が付着している。24～27・29は板状圧痕を伴う。

皿b（23・24）　口径7.5・7.8cm、器高1.3・1.4cmである。両者とも板状圧痕を伴う。

杯a（30～33）　口径12.0～12.9cm、器高2.4～2.8cm。全て板状圧痕がある。30・31・33には油煙が付着していることから灯火器として使用されたことがわかる。

白磁

椀（35）　口禿げの椀の底部である。白色の胎に青味をおびた白色の釉がかかる。

青磁

椀（36・37）　36は小形椀の完形品である。口径9.5cm・器高4.1cm。体部外面は回転ヘラ削り調整。淡灰色の胎に細貫入を伴う淡緑黄色の釉がかかる。37は白砂粒を多く含む灰黒色の胎に黄緑色の釉がかかる。高台畳付に暗赤色の焼台跡が4個みられる。

SE3280出土土器・陶磁器（第16図、図版35）

土師器

皿a（38）　口径10.0cm、器高0.8cm。板状圧痕を伴う。

白磁

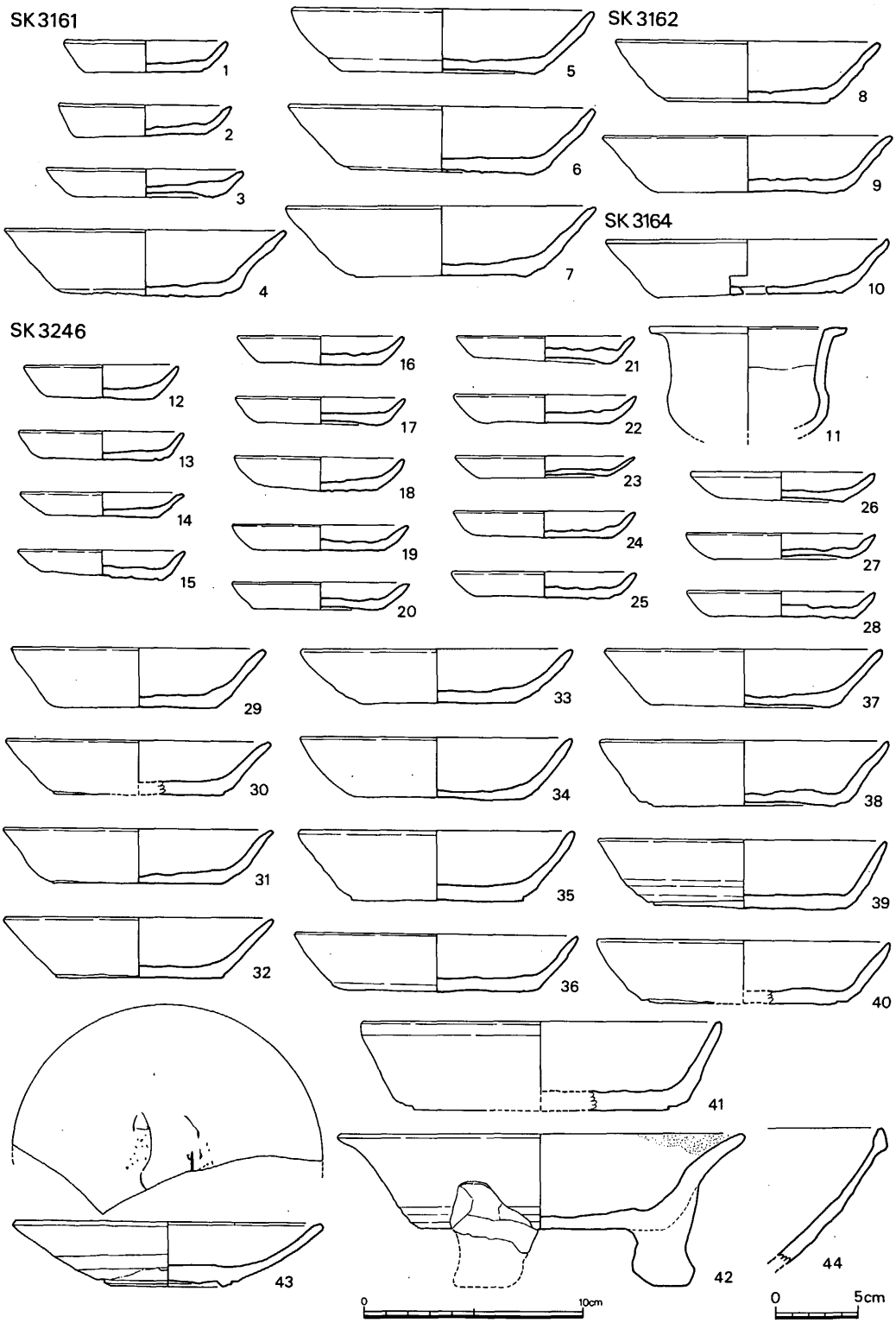
椀（39・40）　井戸掘形中から出土。40の外底部に墨書があるが判読困難である。

SK3161出土土器（第17図、図版36）

土師器

皿a（1～3）　口径7.5～8.8cm、器高1.3～1.5cm。全て板状圧痕を伴う。糸切り。1には油煙が付着している。

杯a（4～7）　口径12.8～14.0cm、器高2.9～3.2cm。全て板状圧痕を伴う。6は油煙が付着。



第17図　SK3161・3162・3164・3246出土土器・陶磁器実測図

SK3162出土土器（第17図）

土師器

杯a（8・9）　口径12.0・13.1cm、器高2.8・2.6cm。9は板状圧痕を伴う。糸切り。

SK3164出土陶器（第17図、図版36）

陶器

壺（11）　淡灰色、良質な胎に淡緑色の釉がかかる。体部内面は露胎である。

SK3246出土土器・陶磁器（第17図、図版36）

土師器

皿a（12～28）　口径7.0～8.5cm、器高1.0～1.5cm。12～16・18～21・23～27の外底部には板状圧痕を伴う。全て糸切り。

杯a（29～41）　29～35は口径11.6～12.6cm。器高2.5～3.2cm。36～40は口径12.8～13.2cm。器高2.6～3.1cm。41は口径16.4cm、器高4.1cm。31・33・35～41は板状圧痕を伴う。全て糸切り。

脚付杯（42）　口径18.5cm、器高7.0cm。胎土中に砂礫を多く含み、淡橙色に焼成されている。3脚である。糸切り。口縁部に油煙付着。

陶器

鉢（44）　東播系の片口鉢である。口縁部は黒色、他は暗灰色を呈し、胎土中に少量砂礫を含む。内体部中位以下は摺れて、滑らかである。

白磁

皿（43）　断面四角形に近い高台を削り出し、灰白色の胎に青白色の釉を体部下部にまでかける。口縁部は釉をカキ取り露胎としている。内底面に型押しによる双魚の浮文がある。体部外面は回転ヘラ削りである。

SK3248出土土器（第18図、図版37）

土師器

皿a（5～10）　口径7.8～8.8cm、器高1.2～1.4cm。全て板状圧痕を伴う。糸切り。

杯a（11～15）口径12.7～13.6cm、器高2.4～3.0cm。全て板状圧痕を伴う。糸切り。

杯b（16）　口径13.9cm、器高3.0cm。板状圧痕を伴い、糸切り。

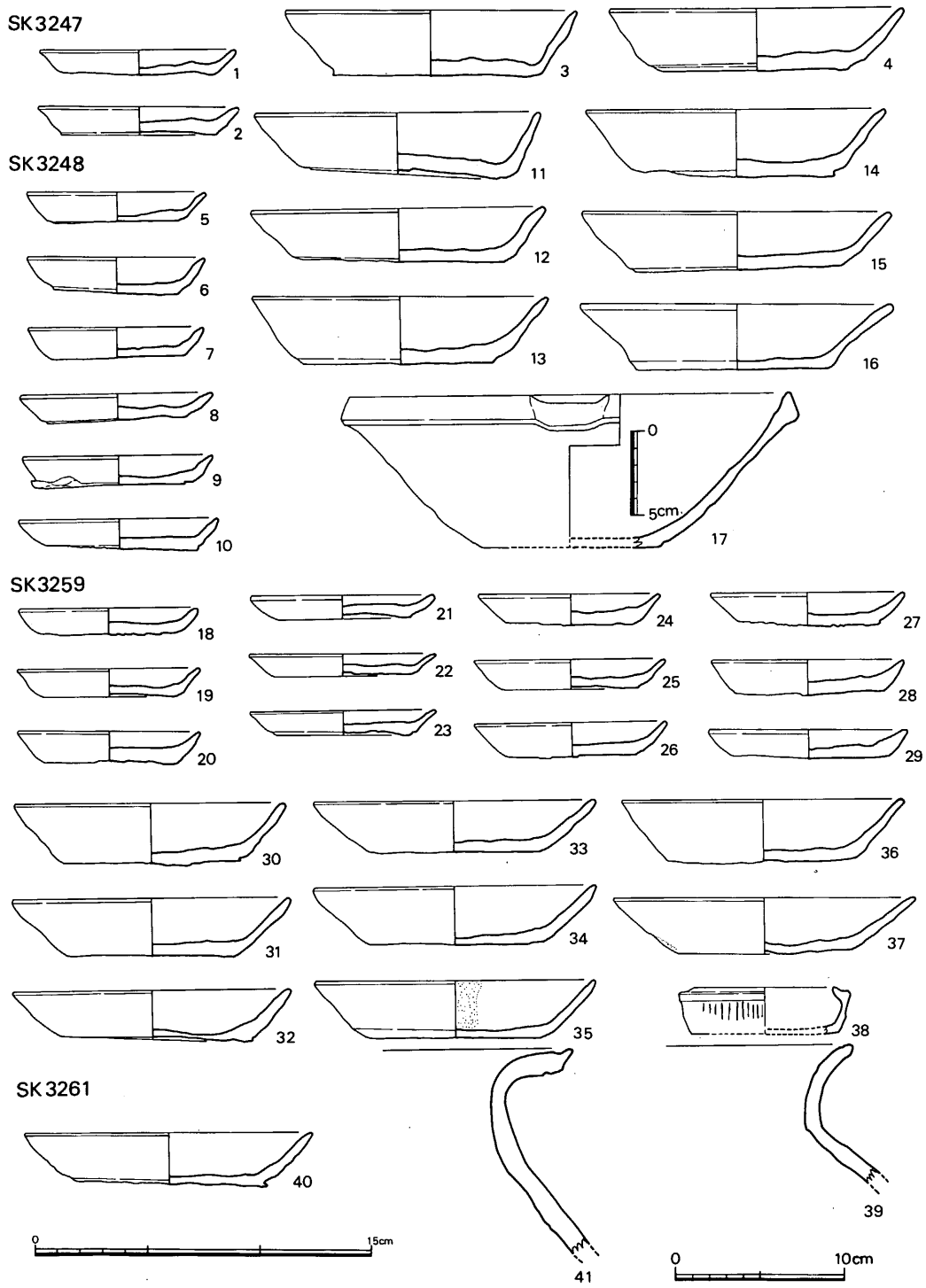
陶器

鉢（17）　口径26.1cm、器高9.0cm。体部はヨコナデ、底部は板起し。断面三角形を呈する口縁部は黒色、他は暗灰色を呈する。胎土中に砂礫を少量含む。器内面中位下はよく摺れ、平滑である。東播系。

SK3259出土土器・陶磁器（第18図、図版37）

土師器

皿a（18～29）　口径7.9～8.8cm、器高1.0～1.6cm。外底部には全て板状圧痕、糸切りを伴う。



第18図　SK3247・3248・3259・3261出土土器・陶磁器実測図

杯ａ（30～36）　30～36は口径11.9～12.6cm、器高2.2～2.8cm。33を除き全て板状圧痕を伴う。糸切り。

杯ｂ（37）　口径13.3cm、器高2.5cm。外底部に板状圧痕を伴う。杯ａのバリエーションかも知れない。灯火器として使用。

陶器

甕（39）　口縁部が丸味を有する古式の常滑産である。外体部に緑色の自然釉を伴う。

中国陶器

合子（38）　白色の胎に、淡黄茶色の褐釉がかかる。型造りで、焼成は軟質である。

SK3261出土土器・陶磁器（第18図、図版37）

土師器

杯ａ（40）　口径12.7cm、器高2.3cm。外底部に板状圧痕を伴う。

陶器

甕（41）　暗灰色、硬質に焼成され、胎土中に砂粒を含む。常滑産の甕で古式を示す。

SK3266出土土器（第19図）

土師器

皿ａ（１～６）　口径8.2～9.3cm、器高0.9～1.2cm。全て板状圧痕を伴う。糸切り。

杯ａ（７～９）　口径13.9～14.4cm、器高2.3～2.8cm。全て板状圧痕を伴う。糸切り。

SK3268出土土器・陶磁器（第19図、図版37）

土師器

皿ａ（10～13）　口径8.7～9.8、器高0.8～1.4cm。全て板状圧痕を伴う。糸切り。

杯ａ（14～17）　口径15.1～16.3cm、器高2.6～3.2cm。全て板状圧痕を伴う。糸切り。

瓦器

椀（18）　口径16.4cm、器高6.1cm。内外面にヨコ方向のヘラミガキがあるが、内面は不明瞭である。内面は銀灰色、外面は灰黒色に燻されている。

白磁

皿（20）　内底面に線彫りによる花文を描く。灰白色の胎に灰色の釉がかかる。口径10.2cm、器高2.4cm。

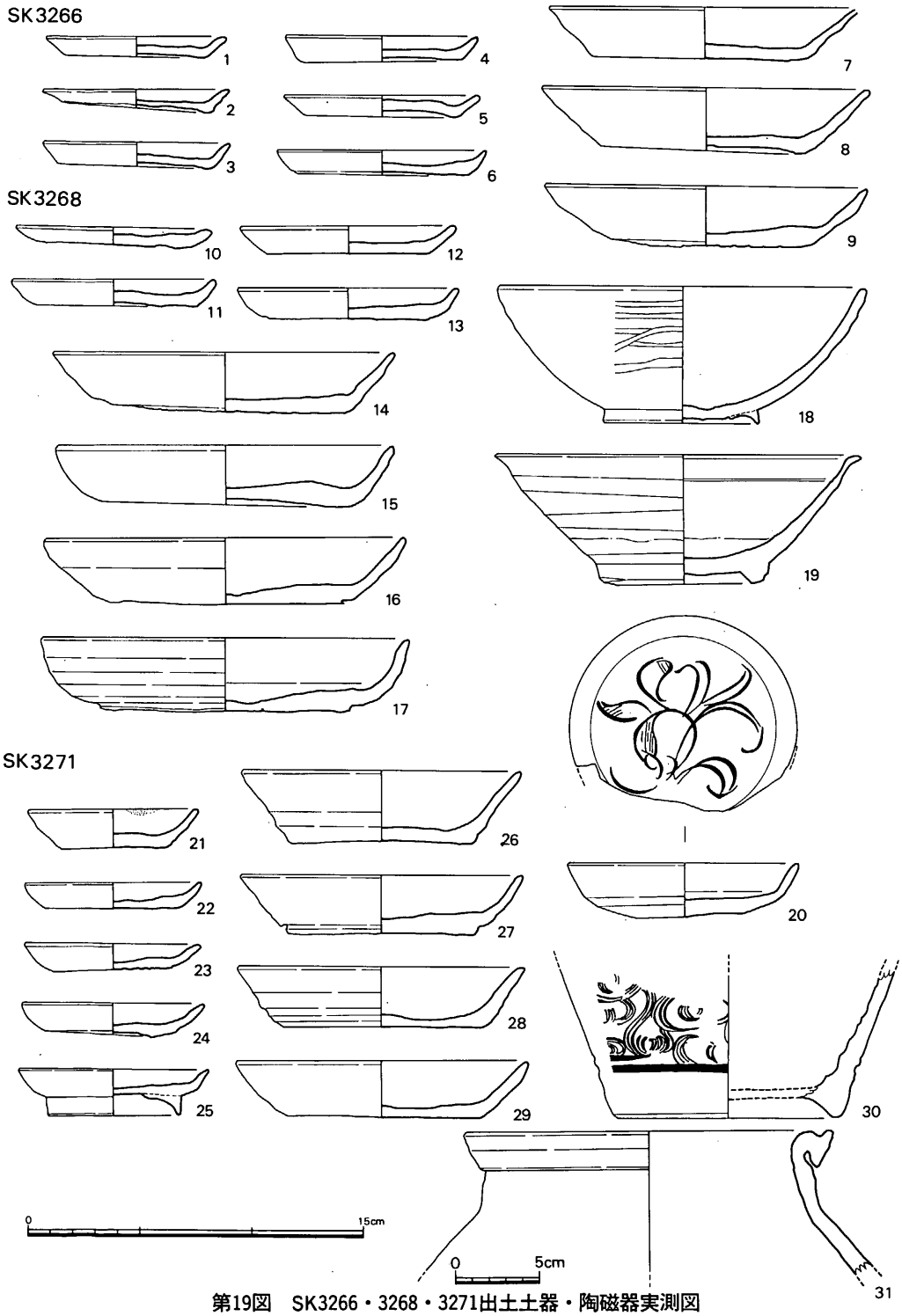
椀（19）　見込み部分を環状に釉をカキ取っている。淡黄灰色の胎に、淡黄色の釉を体部下位にまでかける。口径16.3cm、器高5.8cm。

SK3271出土土器・陶磁器（第19図）

土師器

皿ａ（22～24）　口径7.8～8.2cm、器高1.2～1.5cm。全て板状圧痕を伴う。糸切り。

皿ｂ（21）　口径7.6cm、器高1.7cm。板状圧痕を伴う。糸切り。口縁部に油煙が付着。



第19図　SK3266・3268・3271出土土器・陶磁器実測図

皿ｃ（25）　口径8.4cm、器高2.1cm。板状圧痕を伴う。糸切り。

杯ａ（26～29）　口径12.3～13.0cm、器高2.6～3.2cm。全て板状圧痕を伴う。糸切り。

陶器

甕（31）　「N」字状口縁を有する。胎土中に多くの砂粒を含み、暗灰色硬質に焼成。小片からの復原のため、口径は不確実である。常滑産。

青白磁

瓶（30）　渦文を櫛描きする梅瓶である。灰白色の胎に青白色の釉がかかる。

SK3295出土土器・陶磁器（第20・21図、図版38）

土師器

皿ａ（１～13）　１～12は口径8.5～10.1cm、器高1.0～2.0cmで、糸切り。２・４・６・８・９・11・12に板状圧痕を伴う。４・12に油煙が付着。13は口径9.4cm、器高1.5cm。ヘラ切り。

杯ａ（14～17）　口径14.3～15.0cm、器高2.7～3.1cm。全て板状圧痕を伴う。糸切り。17は油煙が付着。

丸底の杯（18・19）　口径15.3・15.7cm、器高3.0・3.4cm。内面はミガキにより平滑である。19の内部にはコテ当痕、外底部には板状圧痕を伴う。ヘラ切り。

瓦器

皿（20）　口径10.9cm、器高1.8cm。ヘラ切り後板状圧痕を伴う。精良な胎土を里色に燻し焼成している。内外面ともにヘラミガキは丁寧である。

椀（21）　口径17.7cm、器高6.4cm。若干砂粒を多く含む。黒色ないし黒灰色に燻されている。高台は小さく、わずかな高さしかない。内外面はヘラミガキで、特に内面は丁寧である。

須恵系土器

鉢（31）　口径28.0cm。三角形を呈する口縁部は黒色、他は暗灰色を呈する。胎土中に砂礫を少量含む。内面中位以下は摺れて滑らかになっている。東播系。

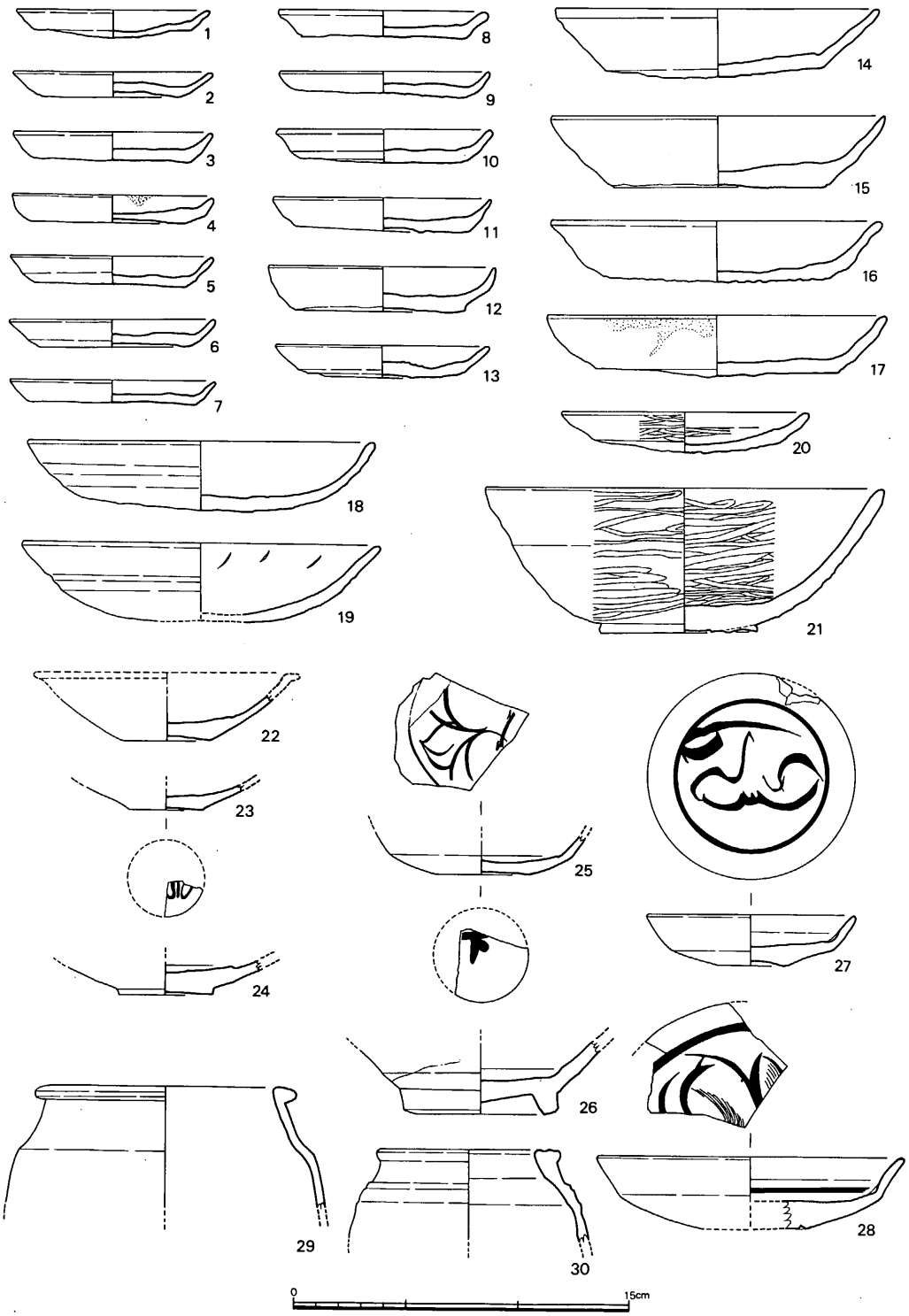
白磁

皿（22～25）　22は黒い粒子を含み、やや粗い胎に灰色味のある白色の釉がかかる。23・24は淡灰色の粗い胎に淡黄色の釉がかかる。23の外底に墨書があるが意味不明。25は淡茶白色の胎に淡灰緑色の釉がかかる。内面にヘラ描きによる花文、外底部に「下」の墨書がある。

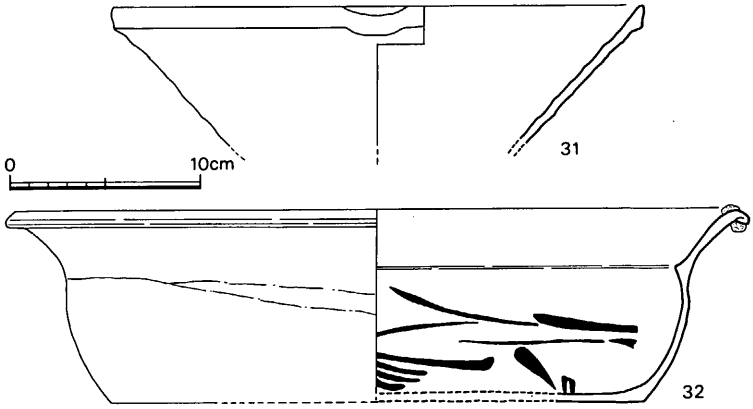
椀（26）　内面の釉を環状にカキ取っている。黒い粒子を伴う濁白色の胎に、灰色味をおびた白色の釉が、下部付近にまでかかる。

青磁

皿（27・28）　いずれも暗灰色の胎に淡緑青色の釉がかかる。27は片切り彫り、28は片切り彫りと櫛状工具による文様が描かれている。27は口径9.7cm、器高2.2cm、28は口径13.5cm、器高3.3cm。龍泉窯系。



第20図　SK3295出土土器・陶磁器実測図 (1)



第21図　SK3295出土土器・陶磁器実測図 (2)

陶器

壺（29・30）　茶褐色の胎に褐釉がかかる。29・30の口縁部上面に重ね焼きの痕がある。

盤（32）　口径39.cm、器高10.0cm。胎土は灰色をおび砂粒が器面に浮き出ている。化粧土の上に黄釉をかけ、釉下に鉄絵による文様が描かれる。口縁部内外に重ね焼きのための白色の目跡が大きく残る。

SX3210出土土器・陶磁器（第22図、図版39）

土師器

皿ａ（１）　口径8.6cm、器高1.6cm。糸切り。

杯ａ（２～４）　口径12.1～12.4cm、器高2.7～3.1cm。全て板状圧痕を伴う。糸切り。４の器面に油煙が付着し、灯火器として使用されたことがわかる。

陶器

椀（５）　茶色の斑点を多数伴う黒釉がかかる。天目茶碗。

ベトナム陶磁器

鉄絵

椀（ａ）　淡黄白色を呈する胎土に貫入を伴う淡黄色の釉がかかる。釉下に鉄絵がみられる。内底部に鉄分を含むため赤色を呈する目跡がある。

SX3310出土土器・陶磁器（第22図、図版39）

土師器

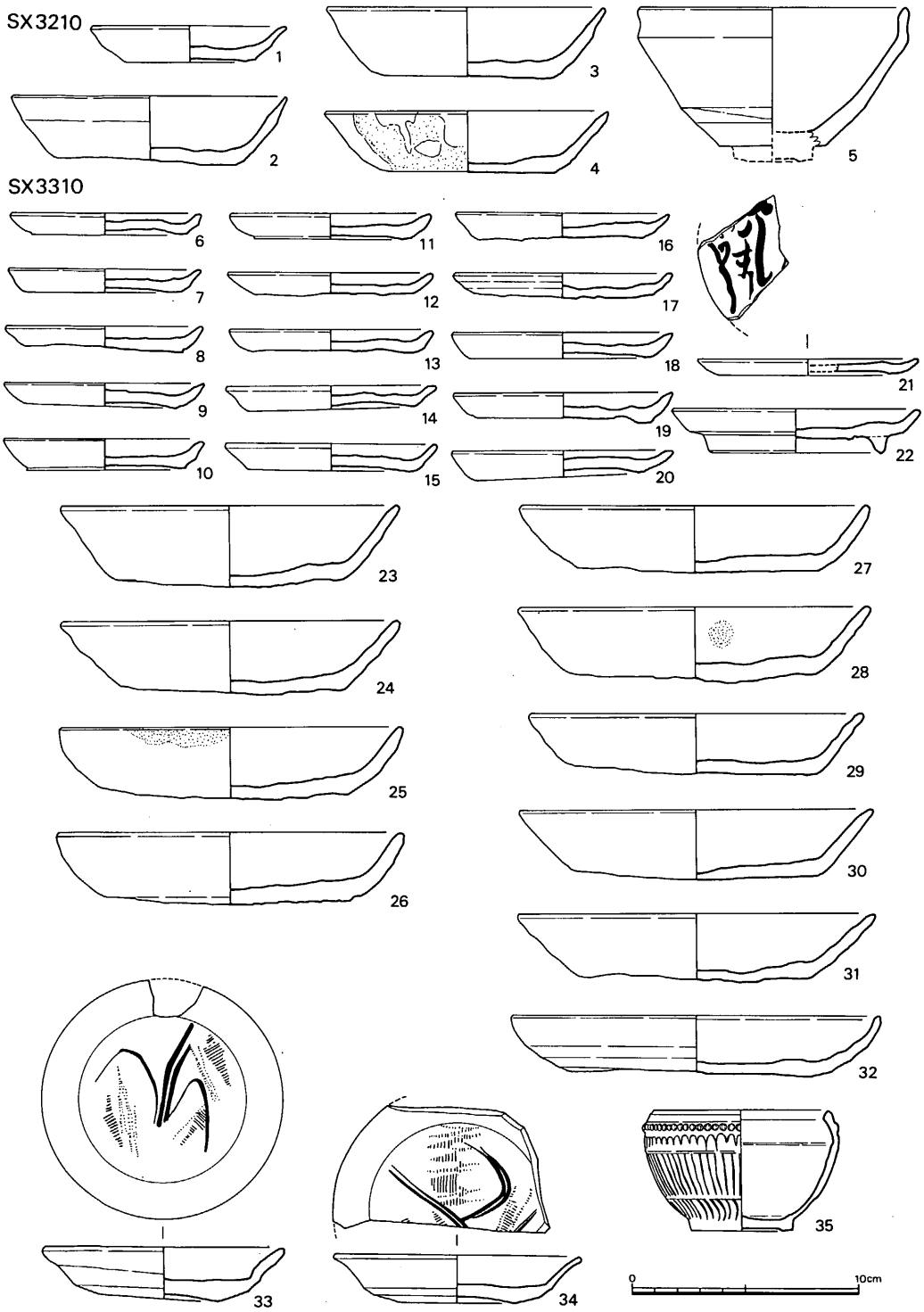
皿ａ（６～21）　口径8.4～9.7cm、器高0.7～1.2cm。７・８・11・12・14～21の外底部に板状圧痕を伴う。糸切り。21のと内部に呪文風の墨書がある。

皿ｃ（22）　皿ａに高台を貼付するタイプ。口径10.9cm、器高2.0cm。板状圧痕を伴う。糸切り。

杯ａ（23～32）　口径14.9～16.2cm、器高2.5～3.6cm。全て板状圧痕を伴う。糸切り。25・28には油煙が付着する。

青白磁

壺（35）　口縁部、体部下位以下を露胎とする他は淡緑青色の透明釉がかかる。口縁部直下は型造りによる円珠の浮文、体部は２段にわたりヘラ先による沈線を描く。胎土は灰白色緻密



第22図　SX3210・3310出土土器・陶磁器実測図

である。口径7.7cm、器高5.3cm。

青磁

皿（33・34）　口径10.6・10.8cm、器高2.3・2.1cm。灰色の胎に黄緑色の釉がかかる。内面に櫛描文が描かれる。34の外底に墨書があるが判読困難である。同安窯系。

SX3313出土土器・陶磁器（第23図、図版40）

土師器

皿a（1～12）　1～7は糸切り、8～12はヘラ切り離しである。1～7は口径9.00～9.6cm器高1.0～1.4cm。8～12は口径8.8～10.0cm、器高1.2～1.5cm。1～6・8～12は板状圧痕を伴う。

杯a（13～17）　13～16は糸切り、17はヘラ切りである。13～16は口径14.2～15.9cm、器高2.7～3.1cm。17は口径14.3cm、器高3.0cm。全て板状圧痕を伴う。

丸底の杯（18）　内面にコテ当痕およびミガキがある。体部中位以下はヘラ切り離しの後の板状圧痕がみられる。

白磁

皿（19・20）　19は淡灰色の胎に細貫入を無数に伴う淡黄色の釉である。口径9.8cm、器高2.5cm。20は内底に灰を覆り、釉と相俟って白濁化している。このタイプの皿は通例見込みカキ取りであるが本例にはなく、例外的な品である。しかし、重ね焼きしたことが高台畳付周辺に白化粧土があることから知れる。最上段に置かれたのであろう。灰色の胎に淡灰黄色の釉がかかる。口径10.0cm 器高2.4cm。

椀（21）　内底を環状に釉をカキ取る。高台畳付近に重ね焼きのための白化粧土がある。胎土は白濁色、釉は灰色をおびた白色である。外底に墨書があるが判読困難。

青磁

皿（22）　内底に文様を有する。灰色の胎に淡緑青色の釉がかかる。口径11.3cm、器高2.2cm。同安窯系。

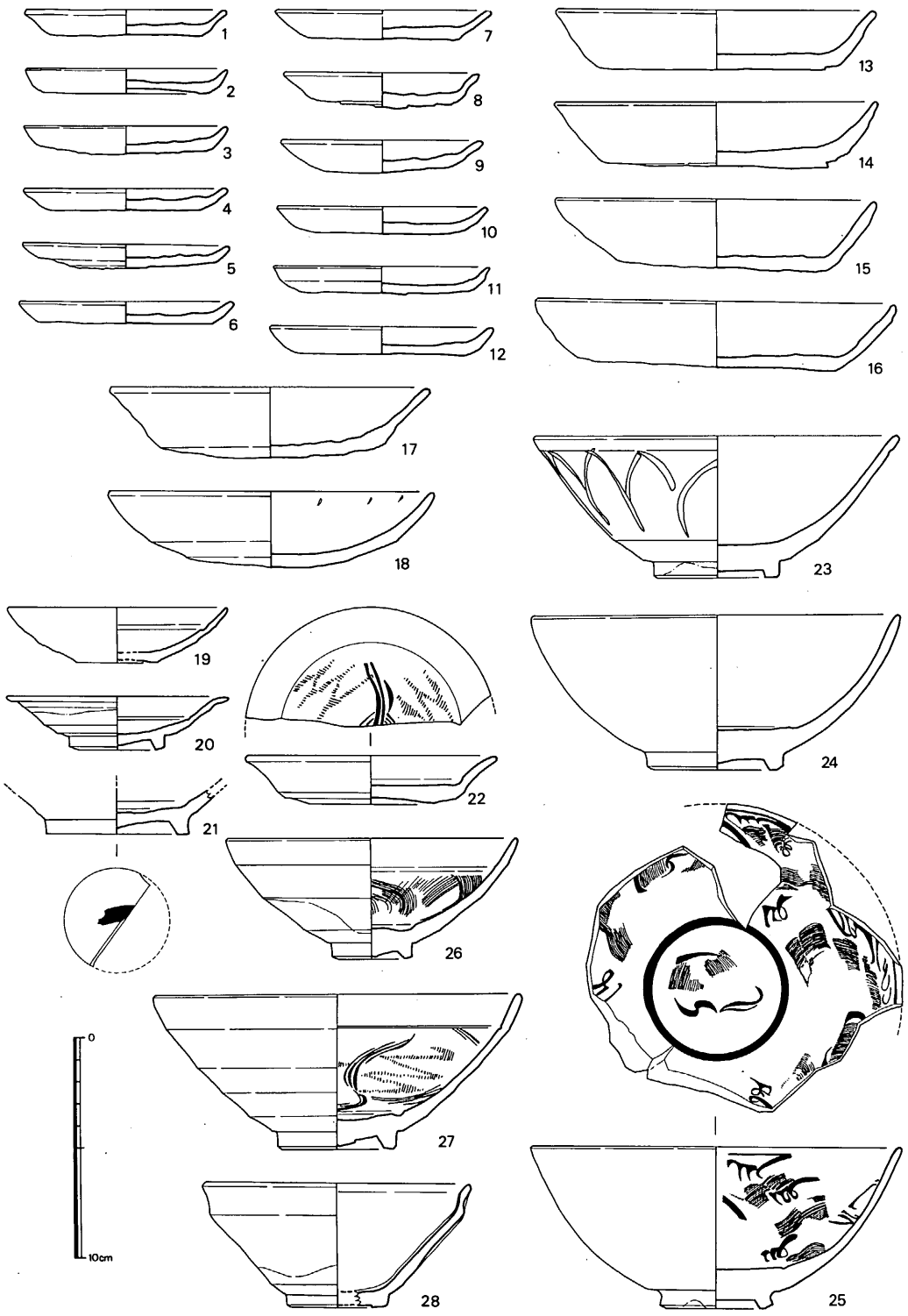
椀（23～27）　23は外面に蓮弁文を線彫りしている。淡灰色の胎に灰青色の釉がかかる。口径16.4cm、器高6.4cm。24は淡灰色の胎に淡黄色の釉がかかる。高台見込部に径2.8cmの焼台痕がある。口径16.5cm、器高7.0cm。24は内面一面に文様を描く。黒灰色の胎に、淡黄緑色のガラス質の釉がかかる。口径16.6cm、器高7.3cm。22～24は龍泉窯系。26・27は内面に櫛状工具で文様を描く。灰色の胎にガラス質の淡黄色の釉がかかる。口径13.1・16.5cm、器高5.4・6.9cm。

陶器

椀（28）　暗灰色の胎に光沢ある黒釉がかかる。口径12.0cm、器高5.6cm。

SD3152出土硯（第24図、図版41）

猿面硯（17）　壺片を再利用したためか、叩き目はない。硯面は平滑である。胎土中に砂礫を多く含む。



第23図　SX3313出土土器・陶磁器実測図

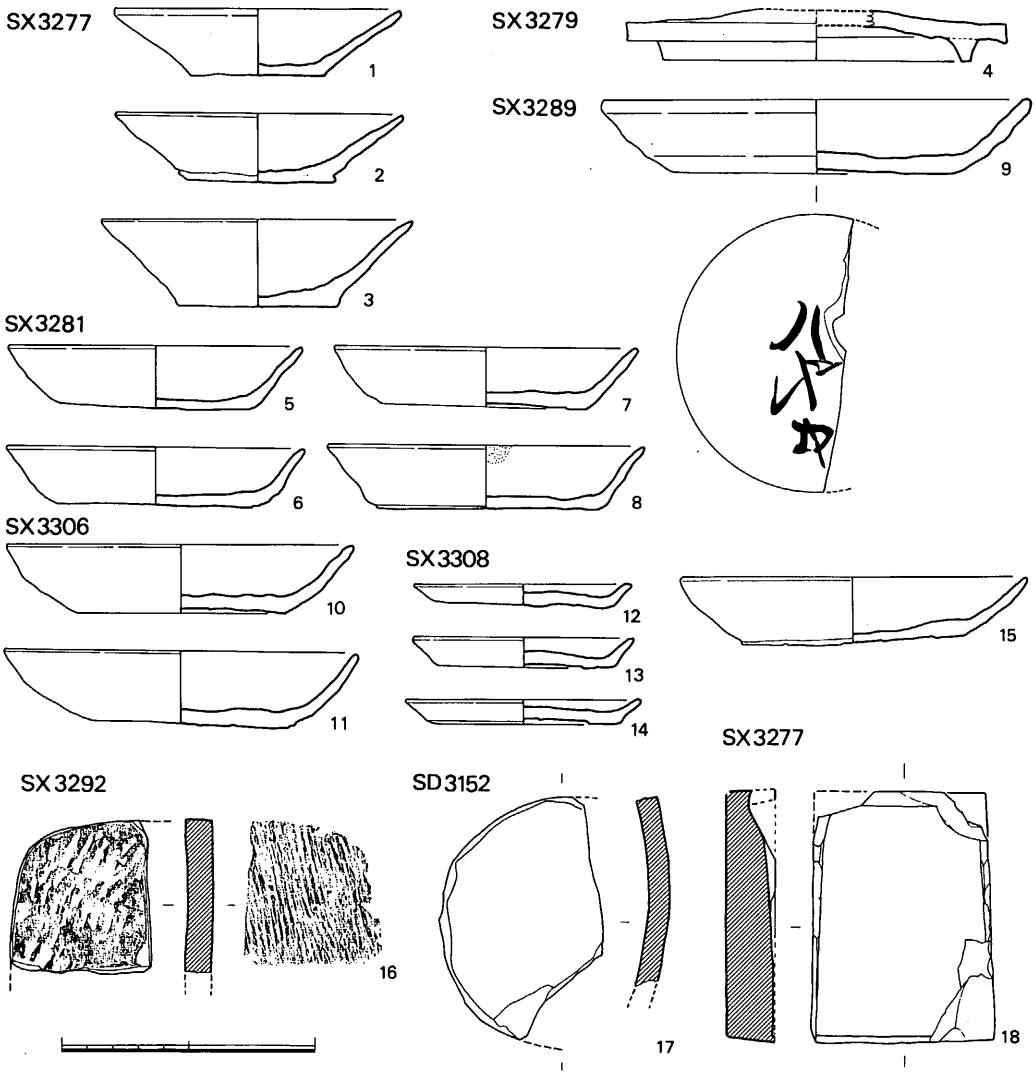
SX3277出土土器・硯（第24図、図版41）

土師器

杯ｂ（１～３）・口径11.2～12.2cm、器高2.6～3.4cm。糸切り離しのみで、板状圧痕は伴わない。

瓦製品

方形硯（18）　瓦質に焼成された出土例の少ない硯である。縁部は硯尻部を除いて、ほとんど欠失しており、とくに硯頭部については形を止めない。硯頭部の幅がわずかに狭くなり、裏面は平坦、側面が若干上方に向って開く形態である。胎土中にはほとんど砂粒を含まない精良なもので、調整もきわめて丁寧である。硯面は滑らかで、所々に墨痕がみられ、使用の痕跡を



第24図　SD3152、SX3277・3279・3281・3289・3292・3306・3308出土土器・瓦製硯実測図

示している。黒味のある灰白色を呈する。

SX3279出土土器（第24図）

土師器

蓋（４）　口径14.8cm。内天井部は刷毛目調整。暗褐色土層出土例からみると、撮がつく可能性がある。

SX3281出土土器（第24図）

土師器

杯ａ（５～８）　口径11.5～12.4cm、器高2.3～2.5cm。全て板状圧痕を伴う。８は灯火器として使用されている。全て糸切り。

SX3289出土土器（第24図）

土師器

杯ａ（９）　口径16.8cm、器高2.9cm。板状圧痕がある。糸切り。外底部に墨書があるが、判読困難である。

SX3292出土硯（第24図、図版41）

猿面硯（16）　甕の体部片を再利用。裏面は平行叩き目、硯面は青海波文である。硯面はよくすれ、平滑である。

SX3306出土土器（第24図）

土師器

杯ａ（10・11）　口径13.6・13.9cm、器高2.7・3.0cm外底部に板状圧痕を伴う。

SX3308出土土器（第24図）

土師器

皿ａ（12～14）　口径8.5～9.1cm、器高0.9～1.2cm。全て板状圧痕を伴う。

杯ａ（15）　口径13.6cm、器高2.6cm。板状圧痕を伴う。

その他の遺構出土陶磁器（第25～27図、図版42～45）

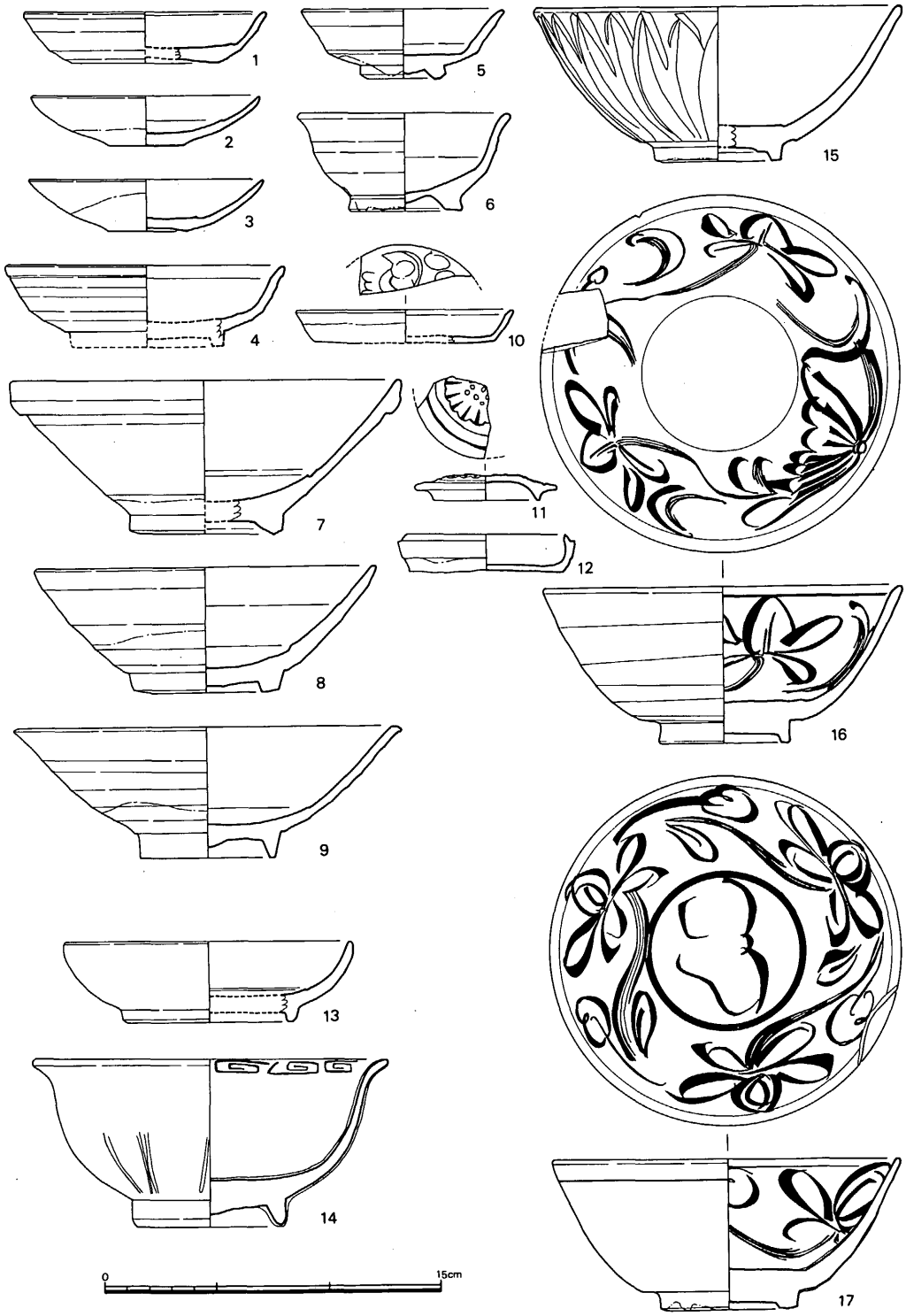
ピットや不明瞭な遺構から出土したものをあわせて報告する。

中国陶磁器

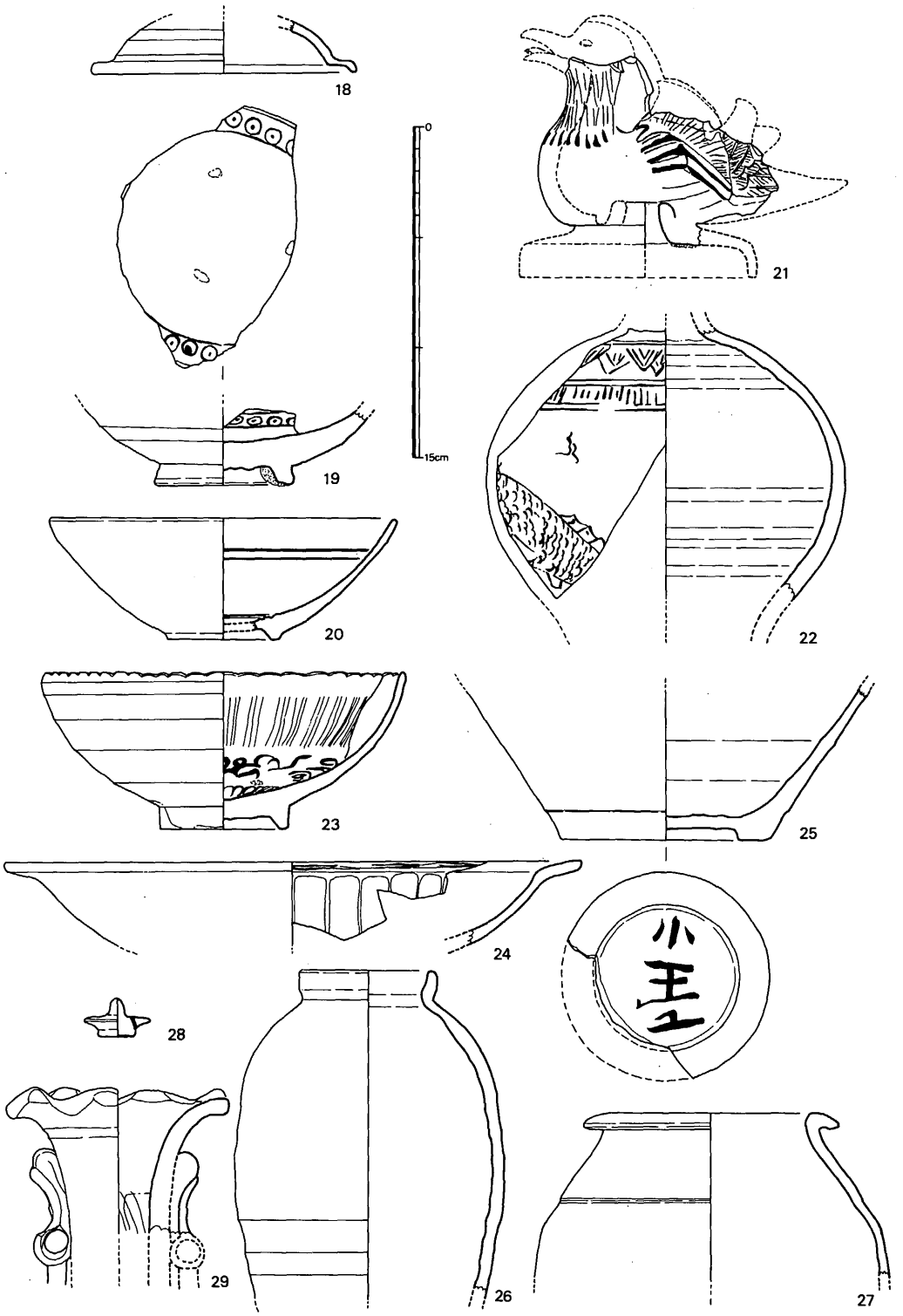
白磁

皿（１～４）　１は口縁部の釉をカキ取り、露胎とするタイプの皿で、この露胎部分に油煙が付着している。口径10.8cm。２・３は貫入を伴う淡黄色の釉がかけられ、２は体部中位に、３は体部と底部との境に段を有する。２は口径10.2cm、３は10.4cm。４は体部と口縁部との境に内外ともに段を有する。灰色の胎に淡緑灰色の釉がかかる。体部外面は回転ヘラ削り調整である。口径12.5cmに復原できる。

杯（５・ｄ）　腰折れの杯で、口径9.0cm、器高3.1cmに復原できる。体部上位以下は回転ヘラ



第25図　その他の遺構出土陶磁器実測図 (1)



第26図　その他の遺構出土陶磁器実測図 (2)

削り調整。白色緻密な胎に淡緑色の釉がかかる。dはいわゆる腰折れの椀といわれている杯の底部片である。白色の胎土に淡黄色の透明釉がかかる。外底部に「念」かとも読める墨書がみられる。

小椀（６）　部厚い高台と屈曲する体部を有する。体部下位から高台部まで貫入を伴う灰色の釉がかかり、露胎部分の高台畳付部は淡赤色を呈する。胎土はやや粗く灰色を呈する。口径9.5cm、器高4.4cm、高台径5.1cmに復原できた。

椀（７～９）　７は断面三角形に近い口縁部を有する。灰色の胎に淡黄灰色の釉が、体部下部までかかる。体部外面は回転ヘラ削り。口径17.3cm、器高6.8cm。８は内底部の釉を環状にカキ取り、その露胎部分は淡赤褐色を呈している。灰色の胎に灰色の釉がかかる。体部中位以下の露胎部分は淡赤褐色を呈し、高台畳付および畳付付近に重ね焼き時の白化粧土がみられる。口径15.1cm、器高5.6cm。９は灰白色の胎に淡緑灰色の釉がかかる。体部外面は回転ヘラ削り。口径17.2cm、器高5.8cm。

青白磁

皿（10）　口縁部の釉を幅広くカキ取り露胎とする。白色緻密な胎に淡緑白色の釉が全面にかかる。内底部に線彫りの文様を描いている。口径9.7cm、器高1.5cm。

合子（11・12）　11・12ともに型造り。11は外天井部に花の浮文を、壺形を呈する身と接する部分は露胎となっている。外天井部は青白色、内面は白色透明な釉がかかる。胎土は白色緻密である。身受部径4.7cm、縁部径6.4cm、器高1.2cm。12は白色の胎に若干緑味をおびた釉がかかる。約半分残存しており、この破損面にウルシが付着し、修理されたことが知れる。口径7.1cm、器高1.6cm。

青磁

皿（13）　高台部まで全面淡黄緑色の透明な釉がかかるが、底部の大部分を欠失しているため、外底部全部が露胎かどうか明らかでない。胎土は白灰色を呈する。口径12.8cm、器高3.6cmに復原できる。

椀（14～17）　14は口縁部を外反し、口縁部内面に雷文を、外面は線彫りによる蓮弁文を描くが、白濁化した淡黄緑色の釉のため不明瞭である。全面に施釉した後に、外底部の釉を環状にカキ取っている。胎土は灰白色を呈し、若干粗である。口径15.8cm、器高7.5cm。15は外面に間弁がある鎬蓮弁文を有し、灰色の胎に青緑色の釉がかかる。口径16.4cm、器高6.9cm。16・17は内面に片切り彫りによる草花文が描かれる。体部外面の回転ヘラ削り調整は明瞭である。灰色の胎に淡青緑色の釉がかかる。口径16.0cm・15.4cm、器高7.0・6.7cm。龍泉窯系。

陶器

壺（25～27・ａ）　25は赤茶色の胎に黄褐色の釉がかかる。外底部に「小王ユ」の墨書銘がある。26は砂粒をほとんど含まない茶褐色の胎に外面は茶褐色の釉がかかるが、大部分は剝落している。内面には灰黄色の釉を薄く施釉。体部中位以下は回転ヘラ削り調整。27は口縁部上部を重ね焼きのため釉を取り露胎としている。内外面ともに黒色の釉がかかり器面全体に白砂粒

の斑点が表出している。aは暗茶褐色の胎土に淡黄緑色の釉がかかり、その上に褐釉がかかる。

水注（ｃ～ｅ）　3点は同一個体と考えられる。口径は7.1cmで、把手を有する。胎土は灰色を呈し、微砂粒を多く含む。濃く白化粧土を掛けた上に鮮やかな緑色の釉がかけられている。口縁端部に重ね焼の目痕が残る。明代と考えられる。

香炉（ｆ）　破片である。胴部にスタンプによる文様が描かれている。灰白色の胎に釉がかかる。香炉かどうか明らかではない。

朝鮮陶磁器

青磁

蓋（18）　初期高麗椀の蓋と考えられ、白砂粒を多く含む暗灰色の胎に淡黄緑色の薄い釉がかかる。外天井部は回転ヘラ削り調整である。口径12.0cm。

椀（19・20）　19は内底面・高台部に重ね焼きの胎土目が残り、残存部内面には2条の圏線と円文に白象嵌されている。外底部には高麗終末期頃に特徴的なヘラ先で削ったような凹凸がみられる。灰色の胎に灰色が強い灰青色の釉がかかる。20は体部内面上位・見込み部に2条の圏線が巡り、上位2条は白象嵌されている。高台畳付部は露胎。暗灰青色の釉がかかっているが火熱の為、器面があれ本来の色は明らかでない。暗灰色の胎。口径15.8cm、器高5.5 cm。

杯（ｇ）　見込み部分に蓮花文の印花、外面に象嵌された八角杯である。灰色の胎に淡黄緑色の釉が全面にかかっている。底部には雑物や砂粒が多く付着している。高台径5.3cm。

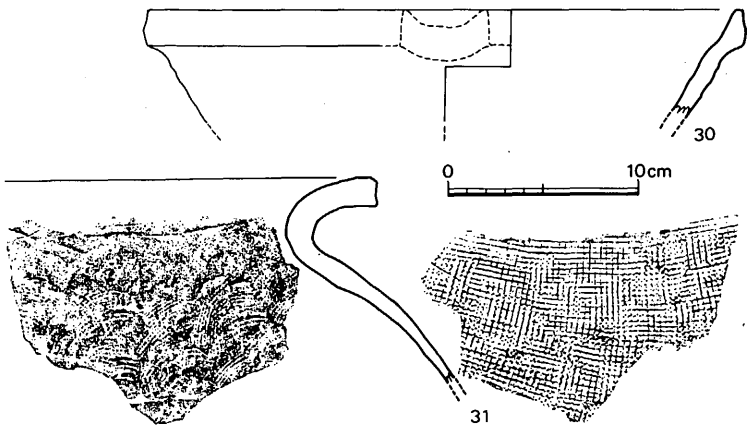
香炉蓋（21）　鴛鴦形の香炉蓋である。図示した面には羽毛の表現が不鮮明であるが、裏面には明瞭にみられる。灰色の胎に鮮やかな灰青色の釉がかかる。

瓶（22）　梅瓶形に復原可能な破片である。外面に白象嵌による文様を飾るが、一部に黒象嵌もみられる。暗灰色の胎に、細貫入を伴う灰青色の釉がかかる。胴部最大径16.2cm。14世紀中頃か。

ベトナム陶磁器

青磁

椀（23）　26弁の菊花文を始めとし、内面には型押しによる浮文がある。灰白透明性のある淡黄緑色の薄い釉がかかるが、高台畳付以内は露胎である。見込み部分は4個の目跡があり、淡赤白色を呈する。



第27図　その他の遺構出土陶磁器実測図（3）

鉄絵

盤（24・h） 24は口縁部内面の上部に退化した唐草文の鉄絵を描いている。また、凹み蓮弁文を体部内面に飾っている。口径26.0cmの大きさにしては器肉は薄い。淡黄灰色を呈する胎土に黄色の釉をかけている。hは低い高台（径9.2cm)を有する。胎は軟質に焼成され、淡黄灰色を呈する。淡黄灰色を呈する釉下に、鉄釉による花文を描いている。内底部に小さな目跡が残っている。

鉄釉白釉

椀（i・j） 両点とも印花文椀である。iの鉄釉には小さな黄白色の斑点を伴う。胎土はiが白灰色・jが灰白色を呈する。

日本陶磁器

壺蓋（28） 天井部・撮部に暗灰褐色の灰釉がかかる。紐を通すためであろうか、笠部に小さな穴が穿たれている。胎土は灰白色を呈し、硬質に焼成されている。最大径3.0cm。瀬戸産であろう。

瓶（29） 双環瓶の残片である。灰白色緻密な胎に黒色ないし暗緑色の釉がかかる。瀬戸産であろう。

鉢（30） 口縁部内は灰黒色、他は暗灰色を呈する。胎土中に砂粒を多く含む。内面上位に左上方へのヘラ削りがみられるが、中位以下は使用のため、器面が滑らかになり、調整については明らかでない。東播系。

甕（31） 外面に細かい格子目の叩き、内面に細かい青海波文の当具痕がみられる。焼成は軟質のため器肉は灰白色を呈する。器肉中に若干砂粒を含む。器表は燻されたため黒色を呈する。亀山産か。

黒色砂質土層出土土器・陶磁器（第28～31図、図版46～49）

土師器

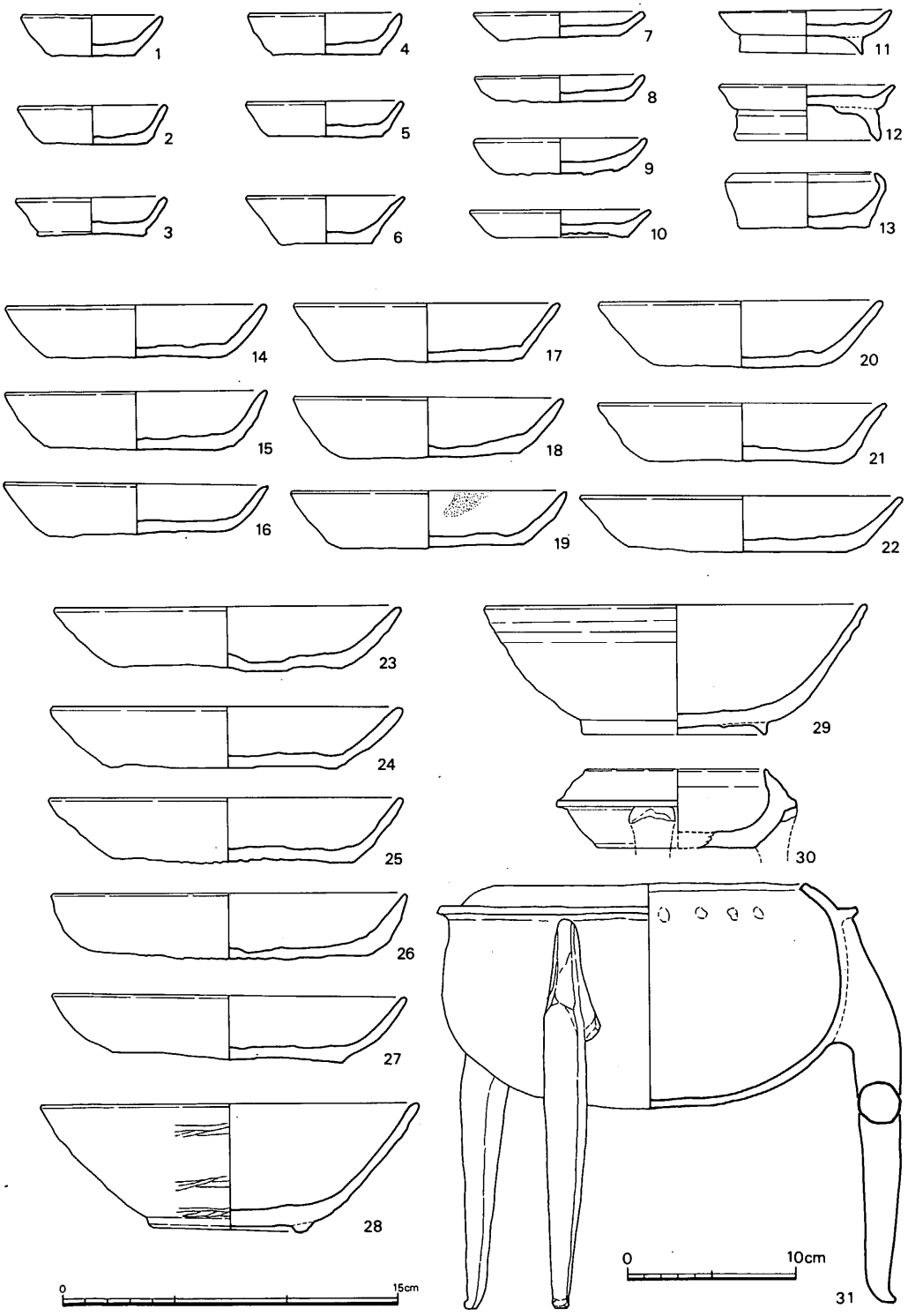
皿a（7～10） 口径7.6～8.0cm、器高1.2～1.5cm。全て板状圧痕を伴う。

皿b（1～6） 口径6.6～7.1cm、器高1.6～2.1cm。3・5以外は板状圧痕を伴う。

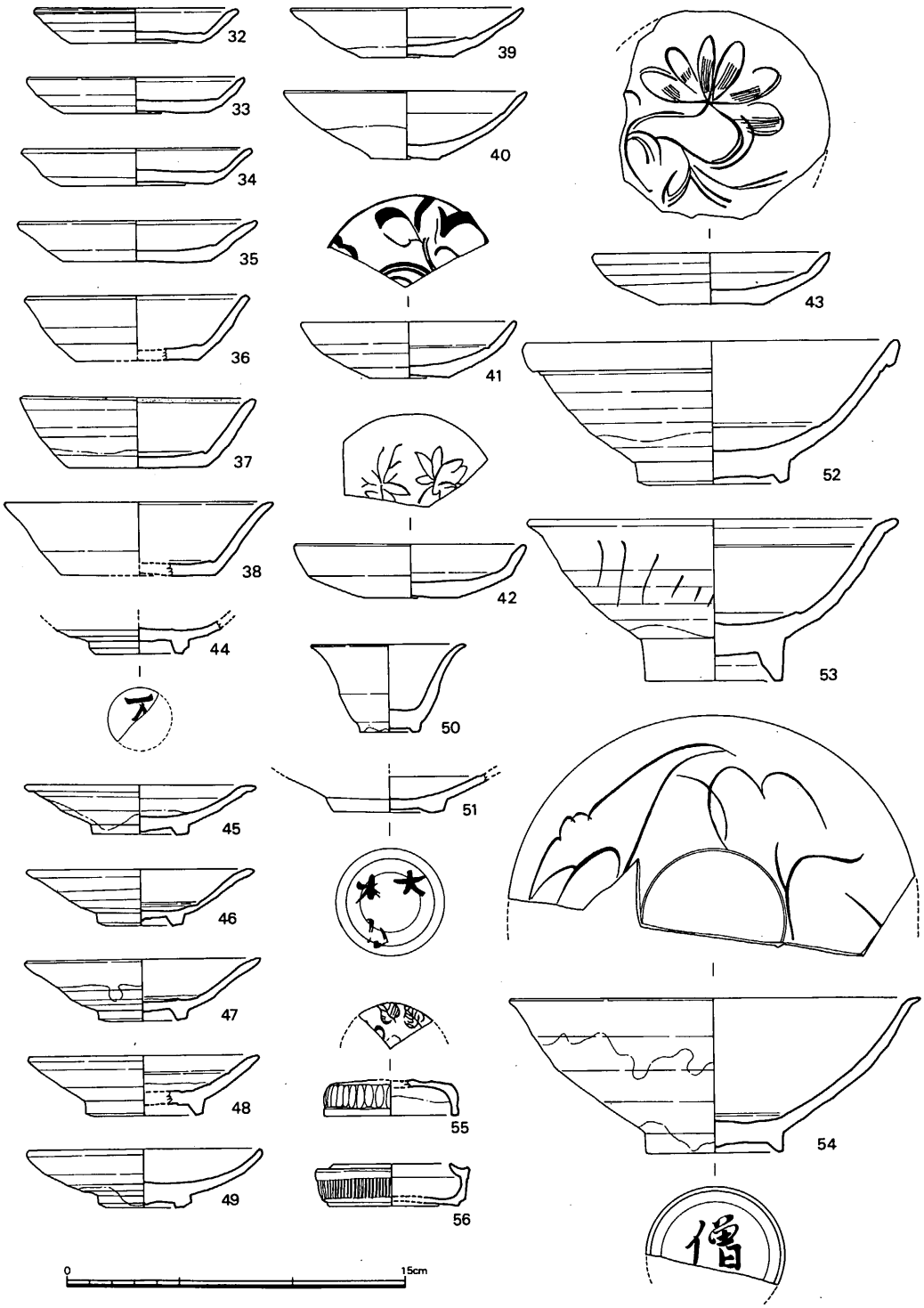
皿c（11・12） 口径7.7・7.9cm、器高1.9・2.5cm。皿aに高台を付したものである高台貼付時のナデによるため板状圧痕の有無については明らかでない。

皿（13） 口縁部を内彎させた稀少な器形である。口径7.2cm。器高2.5cm。外底部に板状圧痕がある。

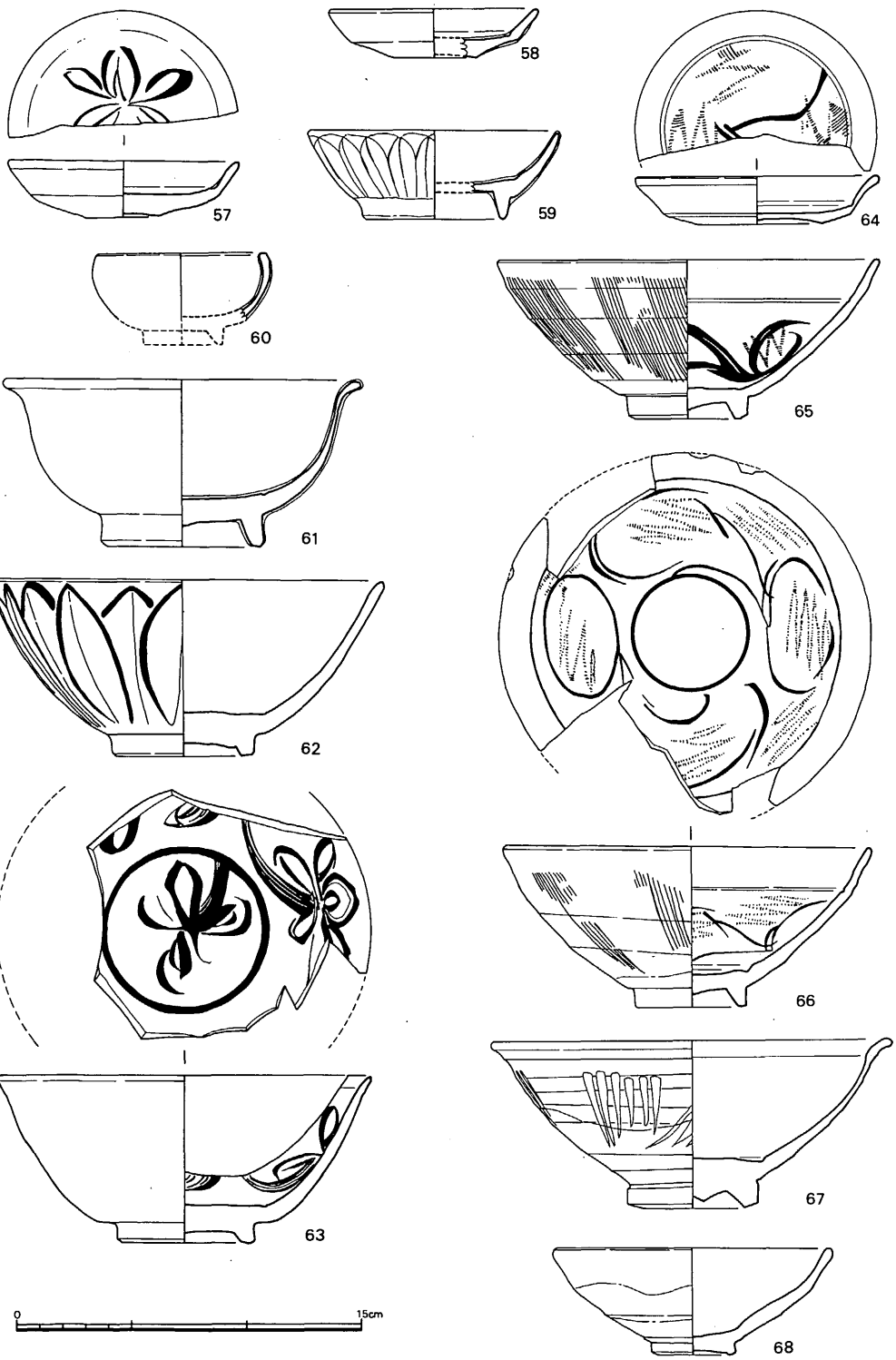
杯a（14～27・a） 法量によりI 14～19、II20・21、III22、IV23～27に分かれる。Iは口径11.6～12.3cm、器高2.3～2.7cm、IIは口径12.6・12.8cm、器高2.9・2.6cm、IIIは口径14.2cm、器高2.5cm、IVは口径15.2～15.8cm、器高2.7～2.9cm。19以外は全て板状圧痕を有する。19には油煙が付着し、灯火器として使用されていたことがわかる。Iは14世紀前後、IIは13世紀中頃、



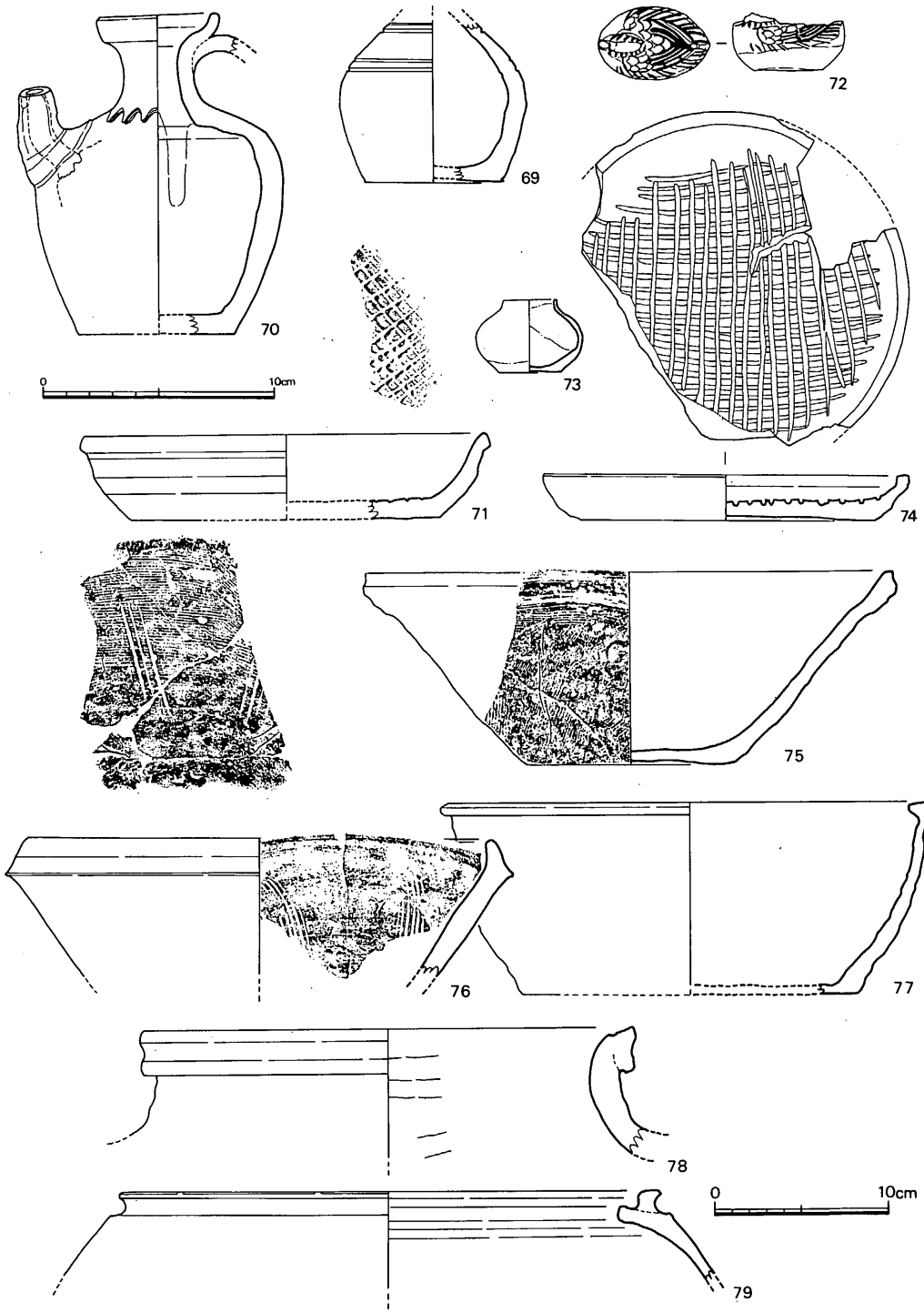
第28図　黒色砂質土層出土土器・陶磁器実測図（1）



第29図　黒色砂質土層出土土器・陶磁器実測図 (2)



第30図　黒色砂質土層出土土器・陶磁器実測図 (3)



第31図　黒色砂質土層出土土器・陶磁器実測図 (4)

Ⅲは13世紀前後、Ⅳは12世紀中頃である。aの内底には平仮名と考えられる墨書がある。

鼎（30）　径8.0cmの小形品である。三足はいずれも欠失する。胎土中に砂礫を少量含む。

下し皿（74）　口径15.8cm、器高2.0cm。赤褐色を呈し、粗い下し目を入れている。

瓦器

椀（28・29）　両者ともに口縁部に燻しを残すだけで、他は灰白色を呈する。内面のミガキは丁寧であるが、外面は粗である。口径は16.8・17.0cm、器高5.6・5.8cm。

瓦質土器

鼎（31）　口径18.6cm、器高25.0cm、鍔部径25.0cm、釜部高13.2cm。釜部下位は手持ちヘラ削り、内面はヨコナデである。体部上位には頸部を内傾させるために生じた強い指頭痕を残している。胎土は精良で、灰白色を呈し、器は黒く燻されている。在地の土器ではなく搬入品であろう。

摺鉢（75）　口径32.0cm、器高11.1cm。体部内外ともに刷毛目調整し、内面に筋目を入れる。内面は使用のため摩滅している。胎土中に砂粒を含み、灰白色に焼成されている。

陶器

瓶（69）　須恵質で、灰色ないし暗灰色に焼成。胎土は灰色を呈し、ほとんど砂粒を含まない。肩部に灰釉が剝離した痕があり、この灰釉は意識的かどうか明かでない。

水注（70）　輪積みによる成形。注口部は指による成形。胴部は回転ヘラ削り調整。少量砂礫を含むが、灰色を呈した比較的精良な胎土である。肩部に櫛状工具により波状文が入れられる。淡緑色の灰釉がかかる。瀬戸産。

下し皿（71）　口径17.7cm、器高3.7cm。内底に格子状の下し目を入れる。体部外面は回転ヘラ削り調整。灰色の粗い胎土に薄い灰釉がかかる。露胎部分は茶褐色を呈する。瀬戸産。

水滴（72）　水鳥形の水滴で、尾から水を入れ、口から流す。文様の大部分は型押しにより浮文とするが、ヘラにより線刻した部分もある。灰色の胎に淡黄緑色の灰釉がかかる。

小壺（73）　口径2.3cm、器高3.2cm。暗灰色の胎に濁茶色の釉がかかる。瀬戸産の茶入れかと思われる。

摺鉢（76）　口縁部は赤茶色、内面は暗灰色、外面は茶黒色を呈する。胎土中に砂礫を多く含む。内面に筋目を入れる。備前産。

甕（78）　「N」字状口縁を有する。径28.4cm。焼成は不良で、明灰色を呈する。常滑産。

中国陶磁器

白磁

皿（32～35・39～49）　32～35は口径9.0～10.6cm、器高1.6～1.8cm。口縁部の釉をカキ取り露胎とする。33は灯火器として使用。39・40は口径10.2・10.7cm、器高2.1・3.1cm。淡灰色の胎に、細貫入を伴う淡黄色の釉がかかる。41～43は口径9.4～10.4cm、器高2.3～2.5cm。白灰

色の胎に淡灰色の透明釉がかかる。内面に花文を描くが、42は印花である。外底面は回転ヘラ削り調整で、露胎である。44～48は口径10.2～10.4cm、器高2.2～2.9cm。見込みの釉を環状にカキ取る。灰色の胎に淡黄灰色の釉をかける。44の外底部には「万」の墨書がある。48の高台畳付の周辺には重ね焼きのために白化粧土がかけられている。49は口径10.4cm、器高2.6cm。淡黄白色の胎に淡黄色の釉がかかる。焼成は軟質である。

杯（36～38・50）　36～38は口径10.0・11.8・10.2cm、器高2.9・3.3・3.5cm。口縁部を露胎とし、灰白色の胎に灰色の釉がかかる。50は口径6.8cm、器高3.9cm。高台畳付を除き、比較的厚いムラのある比較的厚い灰色の釉が全面にかかる。胎土は白色を呈する。

椀（51～54）　51・52は口縁を三角形に折り曲げるタイプ。51の外面に墨書があるが、判読困難である。52は口径16.5cm、器高6.3cm。53は口径16.4cm、器高7.2cm。焼成はやや不良で、淡黄灰白色の胎に、淡黄灰色の釉がかかる。外面に線彫りによる文様がある。54は口径18.1cm、器高6.8cm。胎土は黒い粒子が混じり、やや粗い。釉はやや黄色味のある透明釉で、内外に貫入を伴う。外底部に「僧」の墨書銘がある。

青磁

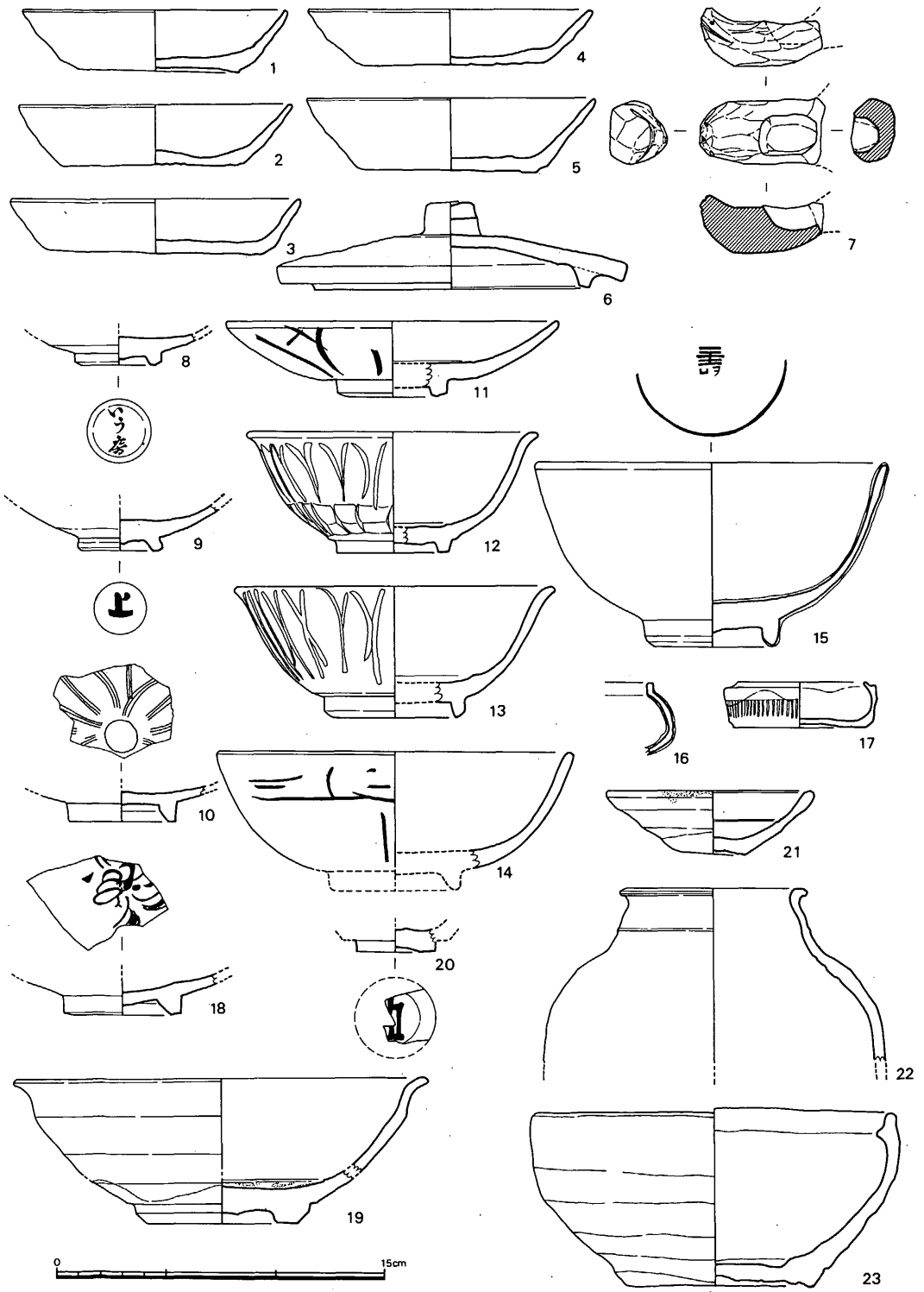
皿（57～59・64）　57の内底に片切彫りによる花文を描く。暗灰白色の緻密な胎に淡緑青色のきれいな釉がかかる。外底に径2.2cmの焼台痕がある。口径10.0cm、器高2.4cm。58は灰色ないし、淡茶色を呈する胎に淡黄緑色の釉がかかる。59は高台畳付付近の釉をカキ取る他は貫入を伴う淡黄緑色の釉が厚くかかる。胎土は白灰色を呈する。口径10.9cm、器高3.9cm。57～59は龍泉窯系。64は見込み部分に櫛描文を入れた同安窯系の皿である。白灰色の胎に淡黄緑色の釉がかかる。口径10.5cm、器高2.1cm。

椀（60～67）　60は径7.5cmの小椀である。灰白色の胎に淡黄緑色の厚い釉がかかる。61は灰白色を呈する胎に若干黄色味をおびた濃緑色の釉を全体にかける。高台見込み部分は環状に釉をカキ取る。この部分に径3.5cmの焼台痕がある。口径15.4cm、器高7.3cm。62は鎬蓮弁文椀である。灰色の緻密な胎に淡緑色を呈するきれいな釉がかかる。高台見込み部分に径3.2cmの焼台痕がある。63は内面に片切彫りによる草花文を描いている。淡灰色の胎に淡緑色の釉がかかる。ＳＥ3280出土品と接合した。口径16.0cm、器高7.3cm。60～63は龍泉窯系。65・66は櫛状工具により、内外に文様を描く。灰色の胎に淡黄緑色の釉がかかる。65の外底部に円形の焼台痕がある。口径16.4・15.9cm、器高6.9・5.9cm。67は外面に丸刃彫りによる幅広の線を入れる。焼成不良で、胎土は淡黄色、釉は淡黄色を呈する。口径17.2cm、器高7.3cm。

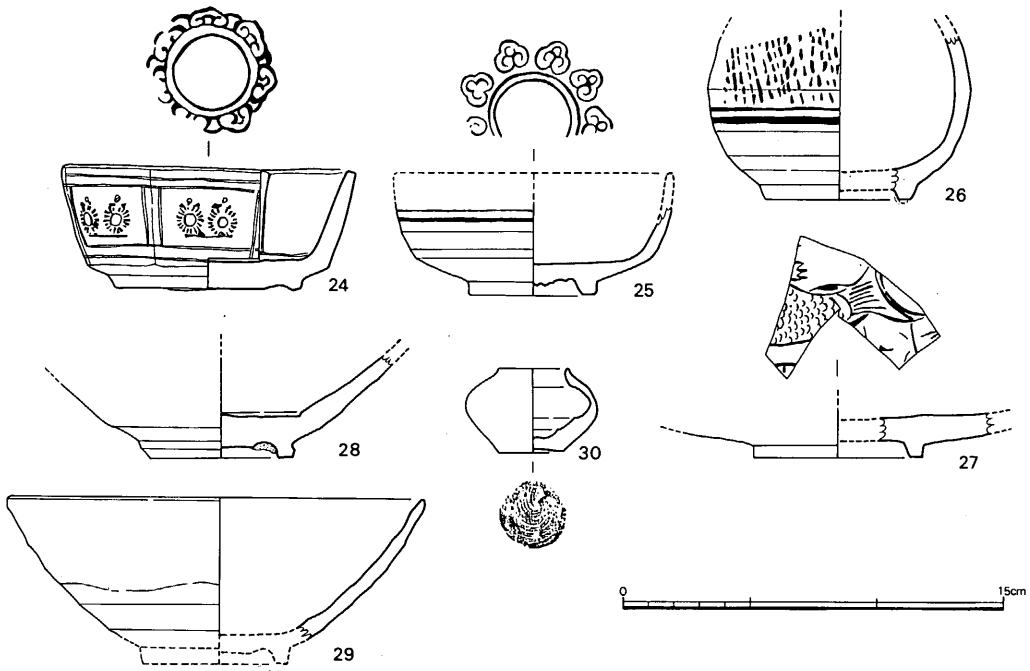
陶器

椀（68）　いわゆる天目茶椀である。淡黄色を呈する胎土に、あずき色に発色する化粧土をかけ、その上に黒釉がかかっている。口径12.0cm、器高4.7cm。

盤（77）　口縁部および内部に淡緑黄色の釉がかかる。外面は淡赤灰色を呈する。胎土は砂礫



第32図　暗褐色土層出土土器・陶磁器実測図 (1)



第33図　暗褐色土層出土土器・陶磁器実測図 (2)

を多く含み、暗灰色である。底部は板起しのままで未調整。口径28.7cm、器高11.1cm。

甕（79）　胎土に白細砂粒を多く含み、あずき色を呈し、硬く焼成されている。内外ともに薄い黄釉がかかる。

暗褐色土層出土土器・陶磁器（第32・33図、図版50～53）

土師器

杯a（1～5）　口径12.0～13.2cm、器高2.5～3.3cm。2～5に板状圧痕を伴う。

蓋（6）　口径15.5cm、器高3.9cm。内天井部は刷毛目調整。砂粒が目立ち、暗茶色に焼成されている。撮部に径0.8cm程の穿孔がある。

須恵器

把手付硯（7）　把手部分（亀形頭部）だけ残存している。指で成形した後にヘラ削りにより器面を整え、目・鼻・口はヘラで表現している。湯を注入する口はナデ仕上げである。胎土中の砂粒は少く、暗灰色に焼成されている。

陶器

いずれも瀬戸産かと考えられる。

椀（28・29・a・b）　灰色の胎土に淡黄緑色の釉が全面にかけられる。高台脇から高台部にかけて強い回転ヘラ削り。内・外面に3個所の胎土目がみられる。29は口径16.4cmを測り、淡灰白色を呈し、良質な胎土に淡黄緑色の釉がかかる。aは付高台を有する、灰釉陶器である。内底に4本の沈圏線、外底部に臼状の筋目の沈線が入る。

合子（30）　壺形の合子で、白灰色を呈し、きめの細かい胎土を有する。淡黄色の釉がかかる。口径2.8cm、器高3.4cm。13世紀後半から14世紀前半頃。

壺（ｂ）　菊花文および花文が描かれた胴部片である。灰色の胎土に黄褐色の釉がかかる。

中国陶磁器

白磁

皿（８・９）　淡黄色の胎に淡黄色の釉がかけられ軟質に焼成された器で、８には「いう□」、９には「上」の墨書名がある。14世紀末から出土し始めるタイプである。

椀（10）　体部内面に線彫りによる花文を描き、見込み中央部は円形に盛り上がる。淡灰白色の胎に若干緑味をおびた透明釉がかかる。11世紀後半代。

蓋（ｃ）　型造りの笠部に円筒形の身受け部を貼付している。花形を呈する笠部上部に円筒形の紐かけ部を貼付する。

青磁

皿（11）　片切彫りの蓮弁文を有し、白灰色の胎に淡黄緑色の釉がかかる。口径15.2cm、器高3.5cm。

椀（12～15）　12は体部中位以上に沈線による蓮弁文、下方は縦方向に２段に削り、鎬状の文様を浮き出している。灰色の胎に淡黄緑色の薄い釉いがかかる。畳付部から底部にかけて露胎となり赤褐色を呈する。口径13.2cm、器高5.5cm。13は線彫りによる蓮弁文を有する。赤褐色の胎土を有し、貫入を伴う暗黄色の釉が高台畳付部までかかる。口径14.6cm、器高6.0cm。14は体部外面上位にくずれた雷文帯を配し、中位以下に沈線による文様を描くが、いかなる文様か明らかでない。灰色の胎に緑青色の釉が厚くかかる。口径16.2cm。15は見込み中央部に「壽」かと思われる陽刻印がある。灰白色の胎に淡黄濃緑色の釉が全面にかけられ、その後に、高台見込み部分の釉を環状に削取っている。この部分に若干赤味をおびた径3.5cm、幅0.8cmの焼台痕がみられる。口径16.1cm、器高8.4cm。

壺（16）　胴部に縦方向の隆線がみられるが、小片のため分割数は明らかでない。白色緻密な胎土に暗黄緑色の釉がかかる。

陶器

合子（17）　型造りによる成形。淡い肌色の密な胎土に暗黄褐色の釉がかかる。蓋受け立ち上がり径5.9cm、蓋受け部外径7.0cm、器高2.1cmである。

椀（20）　高台部のみの小片で、外底部に墨書がある。淡茶色を呈し、黒色の釉がかかる。

皿（21）　灯火器の皿として使用された無釉のもので、口縁部に油煙の付着がみられる。胎土は黒色の斑点を多く含み暗灰色を呈する。体部下位に重ね焼きにより生じた径5.8cmの痕跡がある。口径9.4cm、器高2.9cmである。

壺（22）　頸部にヨコナデ時に生じた突線が一条走る。器肉は灰黒色を呈し、淡緑黄色の釉が

薄くかけられている。釉が薄いため露胎部分が生じ、この部分は暗褐色を呈する。

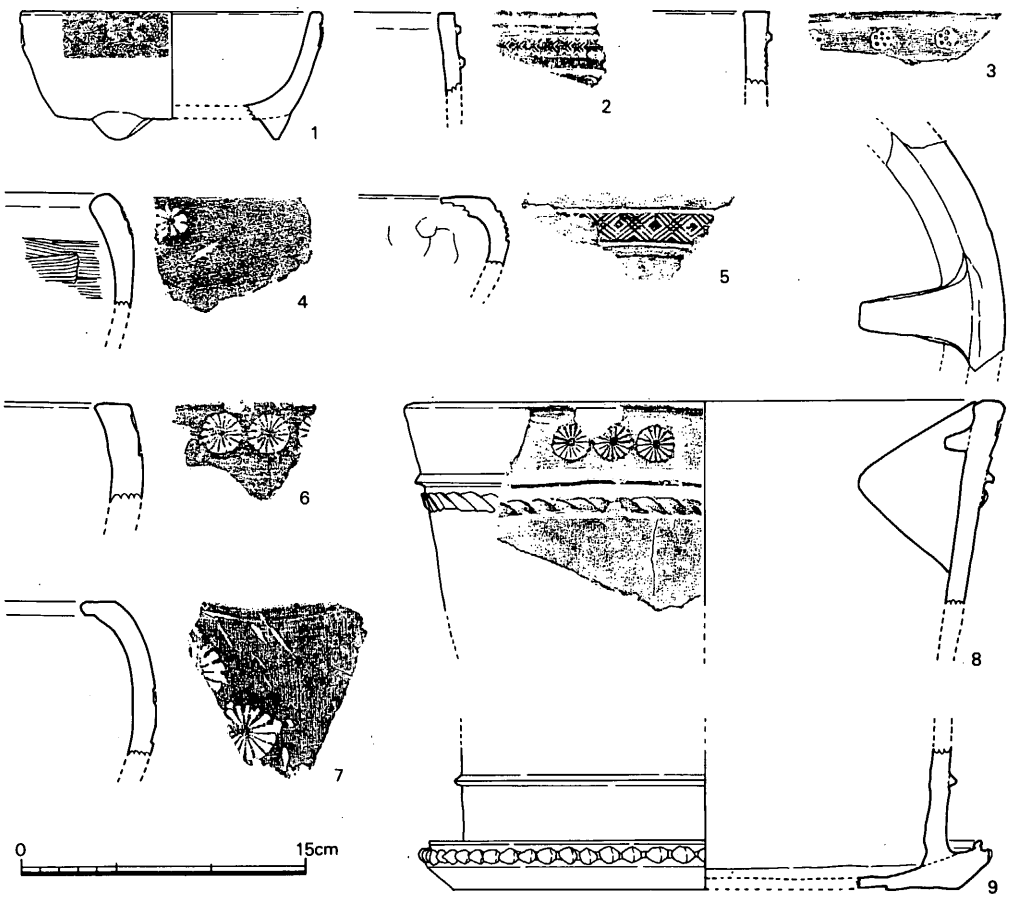
鉢（23）　ヨコナデ成形・板起し手法である。板起し後の調整はない。砂礫を多く含み、器面にまで浮き出ている。焼成は堅く、外面は茶灰色、内面は淡赤灰色を呈する。内面体部中位から内底にかけてよく摺れており、平滑である。

朝鮮陶磁器

象嵌青磁

杯（24・25）　24は八角形杯。灰色の胎に澄んだ灰青色の釉が全面にかかる。内底は型押しによる如意頭文の浮文、外面は白象嵌の縁取りの中に白・黒象嵌による菊花文を描いている。外底部には硅石目が3個ある。口縁部の最大長は11.9cmである。25は内底面に二条の圏線と如意頭文、体部外面に二条の圏線を白象嵌している。暗灰色の胎に灰色の強い緑色釉をかけている。外底部見込みにはヘラで押したような凹みが比較的整然と並んでいる。

鉢（27）　内面に魚文を白・黒象嵌している。内面は茶色の釉、外面は淡灰青色の釉がかか



第34図　SX3279・3313、黒色砂質土層、暗褐色土層出土鉢

る。淡茶灰色の胎。外底部は赤褐色を呈する。

壺（26）　胴部径10.2cmの小形品である。灰黒色の胎に雨点文と圏線を白象嵌している。釉は淡黄色を帯びた黒青色を呈する。高台部に白色の砂目がみられる。

ベトナム陶磁器

鉄絵

椀（18）　淡黄色透明な釉下に花文を描いている。畳付以内は灰白色を呈する。

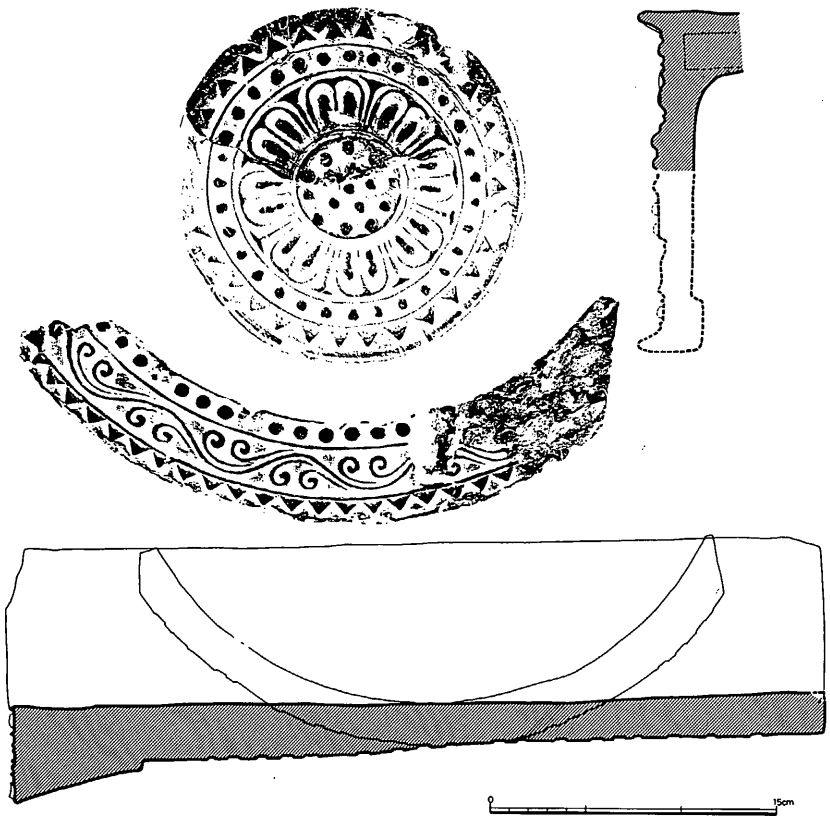
盤（ｄ）　淡茶色の胎土に貫入を伴う淡黄色の釉がかかる。屈曲した口縁部上面に唐草文の鉄絵が描かれている。

鉄釉白磁

椀（ｅ）　内面に型押しによる浮文がみられる。

青磁

椀（19）　内底にピンク色に発色した目跡、畳付部に白黄化した目跡が８個ある。両者ともに胎土中に砂粒を含むが、下半は白灰色、上半は灰色を呈する黄緑色の釉がかかる。直接接合し



第35図　軒先瓦拓影・実測図（1）

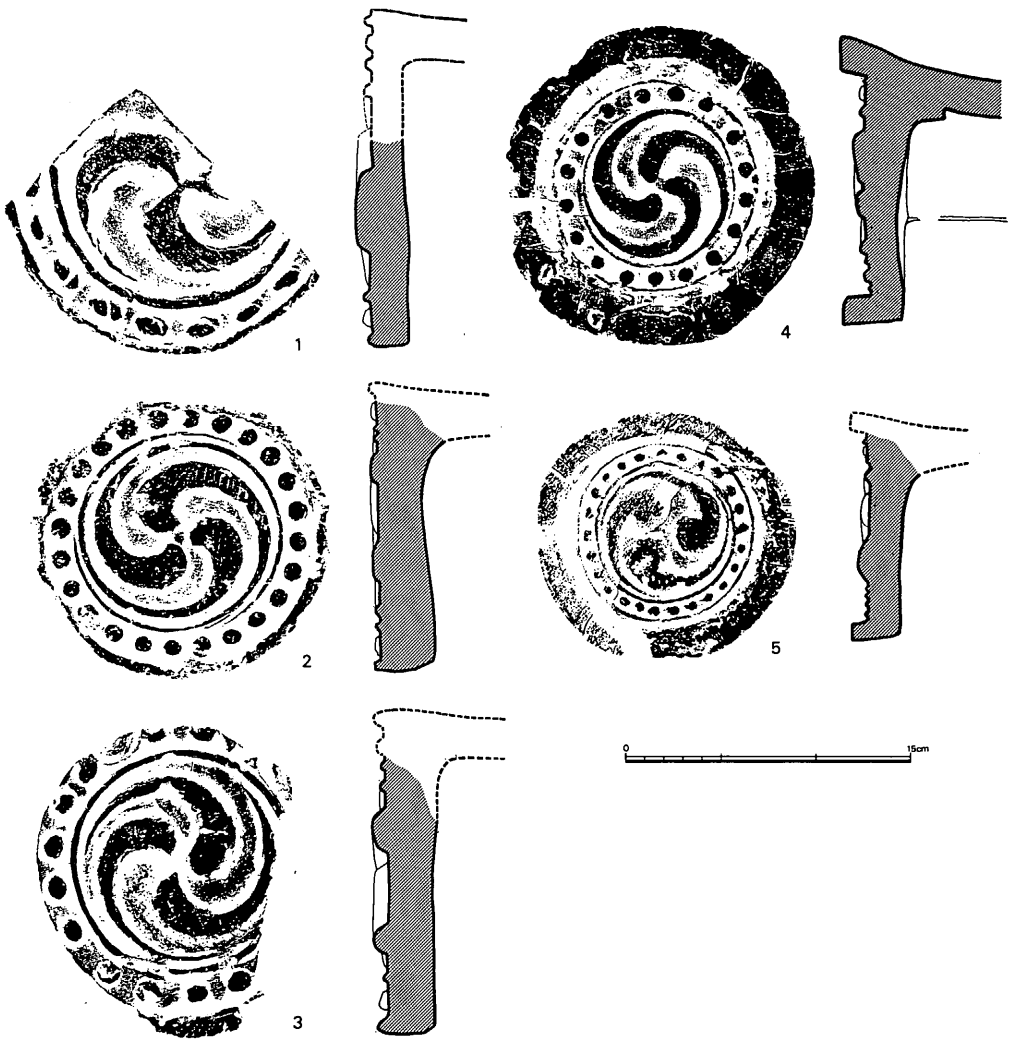
ない底部と体部を図示したが、上半は高麗の可能性がある。

SX3279・3313、黒色砂質土層、暗褐色土層出土鉢（第34図、図版54）

6を除いて、外面は磨かれ、内面は3・6は刷毛目、他はヨコナデである。1・4・6・8は菊花文を伴い、1・6・7・8は16弁、4は9弁である。3は梅花文、2・5は直違文である。6は赤茶色を呈する。9は文様構成や胎土・手法から8と同一個体になる可能性がある。1がSX3279、3がSX3313、4～9が黒色砂質土層、2が暗褐色土層出土。

瓦類（第35～37図、図版55・56）

両次の調査で出土した瓦類は丸・平瓦のほかに軒丸瓦239点、軒平瓦197点、文字瓦16点など



第36図　軒先瓦拓影・実測図（2）



第37図　軒先瓦拓影・実測図 (3)

である。特に軒丸瓦、軒平瓦は奈良時代を中心とした古代のものと鎌倉時代を中心とした中世のものとに大別できる。まず前者では老司Ⅰ式が圧倒的に多く、軒丸瓦61点、軒平瓦68点である。これらの分布をみると発掘調査区の西半部はきわめて稀薄であり、東半部にそのほとんどが集中しており、しかも北側寄りに、より多く分布している傾向が認められる。このことはまず第一に発掘調査区西半部では遺物を含む暗褐色土層および黒色砂質土層の堆積がほとんど認められないことによるものと考えられる。また発掘調査区の東北隅を中心とした東半部に多く分布していることはこの地域が観世音寺の主要伽藍に接した地域であることと無関係でないであろう。

次に中世の瓦は軒丸瓦178点、軒平瓦129点がある。しかしながら、そのほとんどが小片である。ここでは完形あるいは完形に近いものを図示したが、軒丸瓦では第36図－4が比較的多く出土している。軒平瓦は均正唐草文のものと剣頭文のものとに大別できる。第37図－7は向かっ

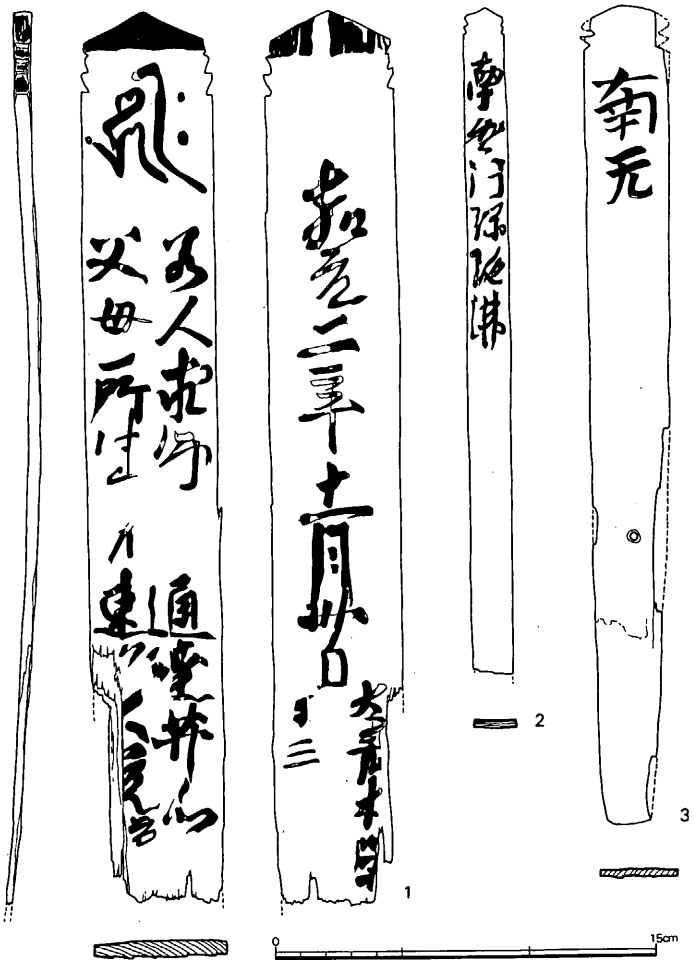
て右側から㊀、㊁、㊂の銘があり、８は向かって左側から㊃、㊄、㊅の銘がある。文字瓦には「佐」、「賀茂」、「平井瓦屋」などの銘のほかに「観世音寺」の銘が裏文字になって印されているものなどがある。

卒塔婆（第38図―１、図版57）

・「キリーク 若人求仏□通達(菩薩カ)(心カ)□□
父母所生(身カ)□速□(大カ)□□(覚カ)□」

・「嘉元二年十一月卅日□□□□(大カ)」

頂部を圭頭に作り、上端両側面の切り込みは五輪を意味するものであろう。下端部を欠損しており、現存法量は、長さ35.4cm、幅5.2cm、厚さ0.6cmである。両面ともほぼ全面にわたって墨書きされているが、その残存状態は必ずしも良くない。頂部と上端両側面の切り込み部には墨を塗っている。表面の梵字はキリークで、阿弥陀仏の種子である。その下位の願文は５文字で１句をなし、あるいはこの４句で完結するのかもしれない。しかし、右行はほぼ判読できるが、左行の下半部は損傷のため判読が困難であるが、類例から願文と推測される。裏面の嘉元２年は1304年に当たる。その下位には２行からなる墨書が見られ、施主の名などが記されていたのであろうが、わずかに１文字が推測されるのみで、判読できない。



第38図　卒塔婆実測図

板塔婆（第38図―2･3、図版57）

(2)「南無阿弥陀仏」

板目材を使用している。頂部を圭頭に作り、上端の両側面に２段の切り込みを

入れているが、五輪を意味するのであろうか。下端部は若干斜めに切断されているが、その意味は明らかでない。現存法量は、長さ26.2cm、幅1.7cm、厚さ0.4cmである。墨はきわめて薄く、判読しづらいが、各文字の全体的な字形などから判読した。いわゆる称名であるが、これ以外に文字さらには墨痕も認められないので、これがいかなる意味をもつものかは明らかでない。

(3) 「南無□□……」

板目材を使用している。②と同様に頂部は圭頭に作り、上端の両側面に2段の切り込みを入れている。ほぼ完形で下端部に向ってやや細くし、中位よりやや下位の中央に径0.3cm前後の孔がある。墨書はきわめて不鮮明で「南無」の部分が辛じて判読できる。長さ32.3cm、最大幅3.3cm、厚さ0.3cmである。SK3295出土。

柿経（図版58）

前述の卒塔婆などとともに、計5葉の柿経が出土した。いずれも何らかの損傷を受けているが、そのうちの1葉はかろうじて原形をとどめている。各葉の厚さは0.1cmにも満たないが、ほぼ共通しているので、個々については記さない。

すべてというわけではないが、墨も薄く、全体的に不鮮明であるため、現物に即しては判読しがたいものがある。しかし、後述のように、いまだ確認しえていない(5)をも含めて、内容的にはいずれも妙法蓮華経すなわち法華経の経文と判断されるので、現状では判読できないものについても、(5)以外の釈文は便宜的に各経文の該当部分をかかげる。

したがって、個々の内容についてとくに問題になる点はないが、判断の根拠については補足説明が必要であろうし、気づいた点も若干あるので、以下ではそれらを合わせて述べる。なお、「 」はそれぞれ行頭と行末であることを示し、カッコ内に記した文字は、現状では欠損しているが、本来はその行に存したものである。また、文字は便宜的に現行常用字体に改めた。

(1) ・「種種因縁　以無量諭　照明仏法　開悟衆（生）
　　・「如是等施　種種微妙　歓喜無猒　求（無上道）

頂部をやや圭頭気味に作る。下端部を欠いているが、残存状態は比較的によい。現存法量は、長さ14.2cm、幅1.6cmである。表面の各文字は判読しがたいが、字形的には「無量」や「照明仏法」などの文字を推定でき、それらの配列から巻第一の第84行に当たる序品第一の一節と判断される。裏面は鮮明ではないが、各文字をほぼ判読でき、同じく第117行がこれに当たる。

(2) ・「華光仏所為　其事皆如是　其両足聖尊　最勝無倫匹」
　　・「利弗　若国邑聚落　有大長者　其年衰邁　財富」

頂部を圭頭に作る。現状は2片に折れ、下端部を若干欠損しているが、全体的にはいまだ原形をとどめているとみなしうるし、さらにはこれが標準的な大きさかと推定される。その法量は、長さ17.5cm、幅1.7cmである。表面は全文が残存し、やや不鮮明な第3句の下半部を除けば、他の各文字はほぼ判読できる。巻第二の第85行に当たり、譬諭品第三の一節である。これに対

して、裏面の各文字は墨の残存が断片的であるが、中位に「有大長者　其年」と推定できる部分が見られるので、これは同じく第116行と判断される。

(3)　・（車　鹿車　牛車　今在門外　可以）遊戯　汝等於此」

　　・（火宅　宜速出来　随汝所欲　皆）当与汝　爾時諸」

上下両端を欠損する。現存法量は、長さ9.7cm、幅1.4cmである。両面とも墨の残存が比較的よいので、各文字は一応判読できる。また、両面とも現状の中位以下が空白になっているが、そこには墨の痕跡が全く認められないので、これらは行末部と考えられる。この点から、この写経では法華経の各行を忠実に書写しているといえる。これらは巻第二の第140・141両行に該当し、ともに譬諭品第三の一節であるが、連続する点が注目される。

(4)　・（菩）薩無数　志固精進　於仏智慧　皆不退転」

　　・（際　知）其数不　不也世尊　諸比丘　是（人所経国）

上下両端を欠損し、2片に折れている。現存法量は、長さ13.7cm、幅1.6cmである。全体的に墨が薄く、判読は困難であるが、表面では上位に「志固」、下端部に「皆不退」などと推定される文字が見える。とすれば、巻第三の第213行に当たる授記品第六の一節が想定され、他の残存字形がこの行の各文字に対応することも傍証となる。裏面は表面以上に不鮮明であるが、上位から中位にかけて「不　不也世尊」や「比丘」などと推定される文字が見えるので、巻第三の第227行である化城諭品第七の一節がこれに該当する。

(5)　・□□□□　當

　　・於喜□□□□

上下両端を欠損する小片で、現存法量は、長さ6.2cm、幅1.6cmである。両面ともごく一部の文字しか判読できないので、手掛りとなる語句を想定できず、しかも中間部でもあるので、いまだ具体的な経文を比定できていない。また、表裏も判別できない。

以上、各葉について述べたが、次にこの柿経についてまとめてみよう。

まず、これの年代であるが、前述のように、この溝から嘉元2年（1304）銘の卒塔婆が出土している点が参考になる。溝が機能した時期には一定の幅があるだろうから、ただちに同年とみなすことができないことはいうまでもないが、大きくは同時期と考えてよいだろう。

次に、確認できた4葉における各行の配列方法には3通りあり、一定していない点が注目される。(1)と(2)は、両面に記された行の相互関係からみて、ともに100葉を1単位として書写されたと推定される。すなわち、まず100葉の表面に第1行から第100行までを続けて書写し、そこでそのすべてを裏返しにした後、第100葉の裏面に第101行を書写し、そして第1葉の第200行に至る方法である。換言すれば、100葉を並べて1面となし、その表面から裏面に続けているのである。(4)も同じ方法であるが、この場合は10葉を1単位としている。これに対して、(3)は表裏両面が直接に連続する方法で、他の3葉とは全く異なっている。

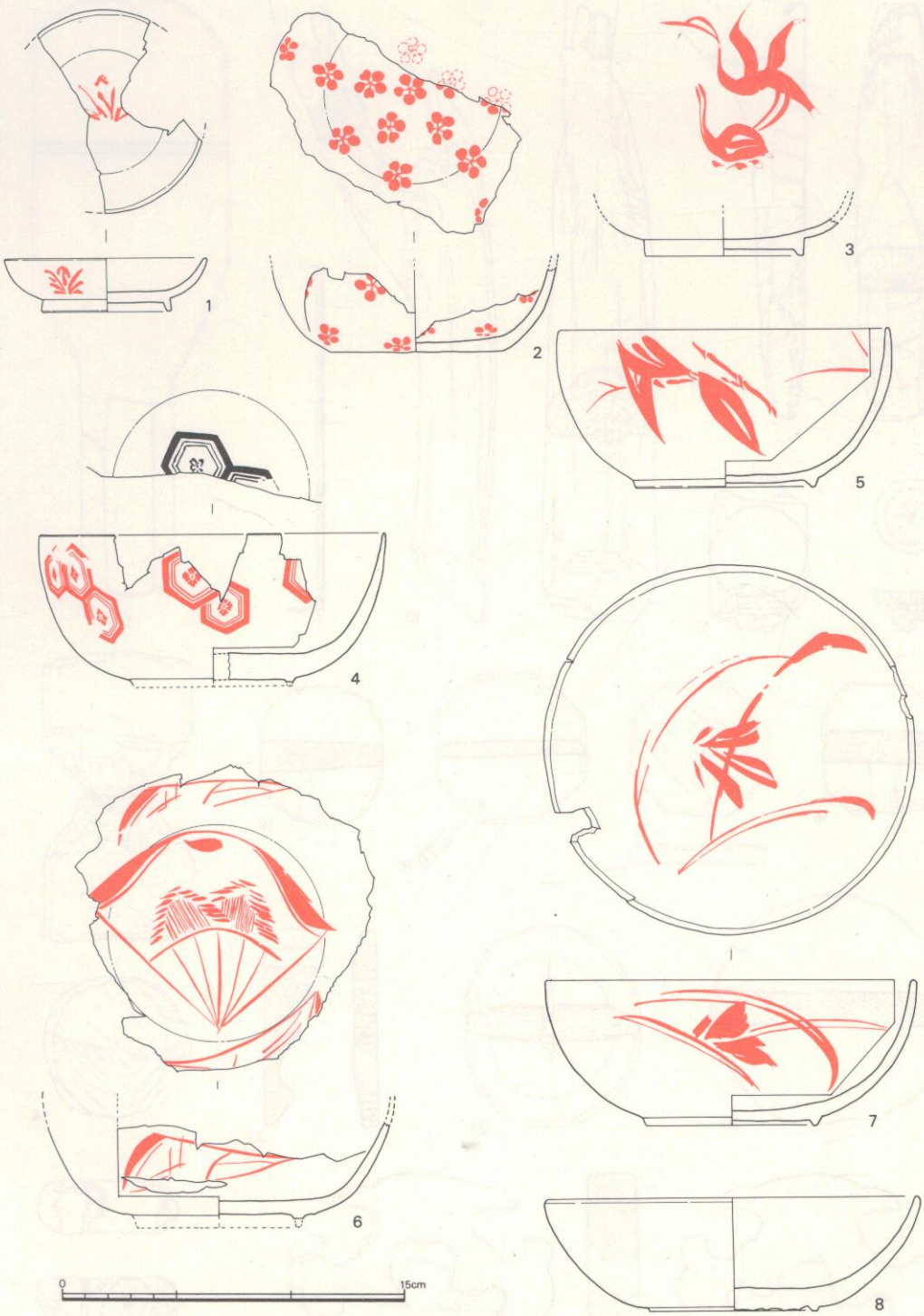
これらの書写において、各行の配列が首尾一貫していたとすれば、その方法には少なくとも3通りが存し、したがってこの柿経には3組のものが混じっていることになる。しかし、極端な想定かもしれないが、もともとこれらは一連のもので、たまたま配列方法だけが中途で変更されている可能性も否定できない。本来であれば、これらの筆跡も参考になるが、字形を確認できないものがほとんどであるため、この方法も利用できない。したがって、ここではいずれとも判断できないので、その結論は保留しなければならない。

これに対して、(1)と(2)は「如」の書き方から見て、同筆と推定される。しかし、(2)における各行の配列は(1)のそれの延長ではなく、全く独立しているので、この写経は100葉という多数の経木を1単位としながら、巻ごとに行なわれたようである。その場合、(3)では裏面となるべき偶数行が表面になっているので、巻第二を記した第1葉から第70葉までの間に片面だけの1葉が存したことになるが、その理由は明らかでないし、位置も特定できない。

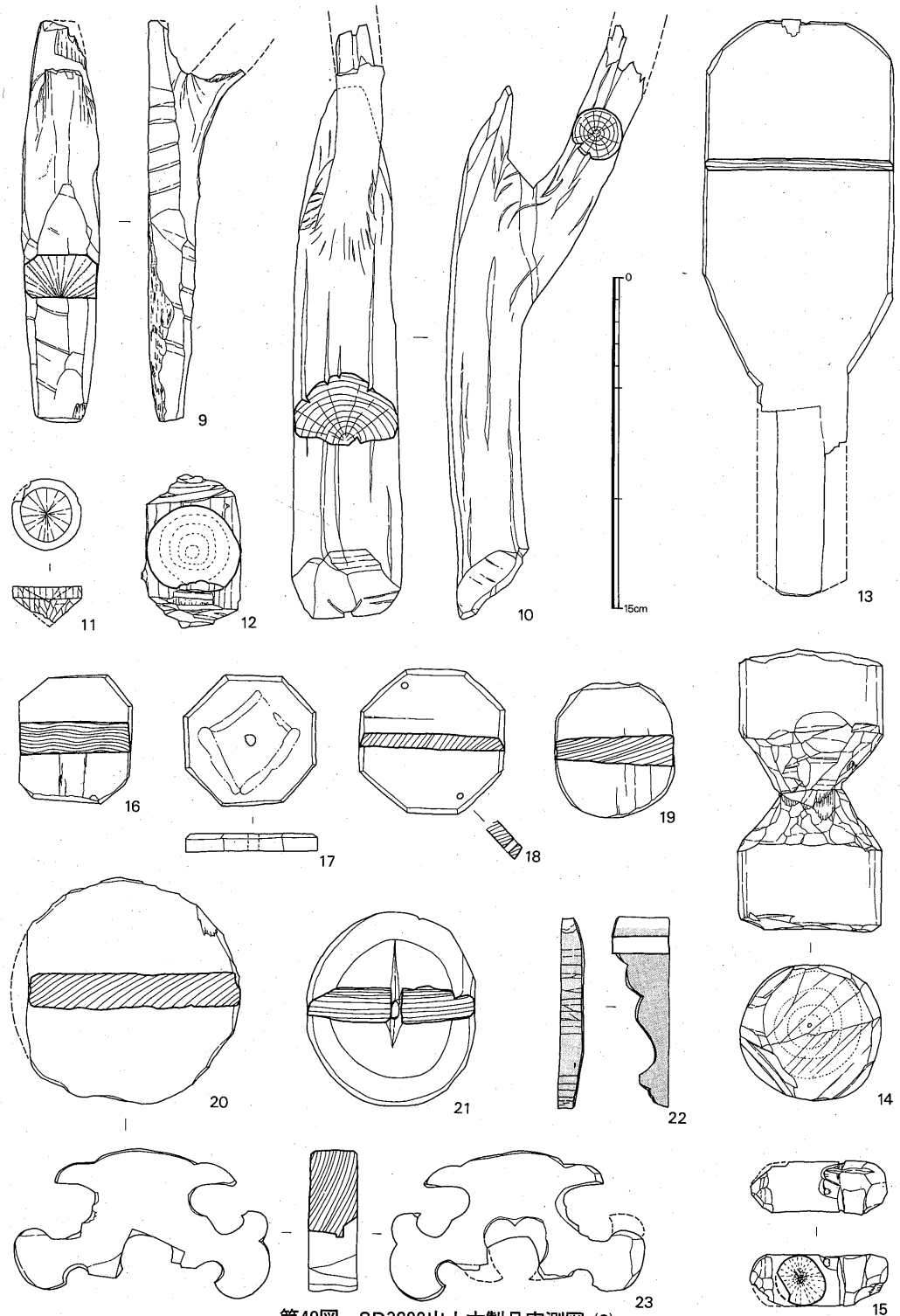
SD3200出土木製品（第39～42図、図版59～64）

漆皿（1）　口径8.8cm、器高2.3cm、高台径5.7cm。内外面に黒漆を塗布し、内底部と体部外面に朱漆で草花文を描く。体部外面の草花文は残存部分で二つ描かれている。本来は等間隔に三つ配されていたようである。

漆椀（2～7、a・b）　2は平底のもので、体部上半を欠失する。底径7.4cm。内外面に黒漆を塗布し、梅花文を散らす。外底部は漆の剝落が著しく木地が露出している。3は底面のみ残存しているもので、高台径7.0cm。内外面にやや茶色味を帯びた黒漆を塗布した後に、内底部に朱漆で鶴と亀を描く。4は口径15.2cm、底部の器肉の厚い椀で、高台端部が摩滅している。漆の剝落が著しいが、内外面に黒漆を塗布した後、内面には朱漆を塗り重ねる。内底部には黒漆で花文を中心に入れた亀甲繋文、体部外面には花菱入りの亀甲繋文を描く。この外面の亀甲繋文には二連と三連のものがある。5はほぼ完存品であるが歪みが著しく、図は復原して描いている。復原口径14.4cm、器高6.8cm、高台径7.8cm。体部と底部の器肉は等しい厚みに挽き出されている。底部には低い高台がつく。内面に茶色味がついた朱漆を、外面全体に黒漆を塗布する。体部外面には朱で竹の文様を描く。6は歪みが著しく、口縁部と高台端部を欠損している。全面に黒漆を塗布した後に、朱で内底部に笠松文を入れた扇の文様を描き、体部内面には草文を描く。外面にも部分的に朱漆の細線が描かれているが、図柄は不明である。7は完形品に近いが、歪みが著しい。そのため、復原的に図示した。復原口径16.2cm、器高6.3cm、高台径7.4cm。内外面に黒漆を塗布しているが、口縁部と高台端部は摩滅し剝落が著しい。内面に大きく朱漆で草花文を描き、体部外面にも相対する位置に、それぞれ同じ文様構成の草花文を描く。図柄は粗いタッチで簡素に描かれている。aは内外面に黒漆を塗布し、朱漆で内面に花文を入れた亀甲繋文、外面に三つ巴文を入れた繋文をスタンプする。今回の調査でこうした印判を使って文様を施したものが破片資料の中に数点認められる。bは漆の剝落が著しくかなり木地が露出



第39図　SD3200出土木製品実測図（1）



第40図　SD3200出土木製品実測図 (2)

している。内外面に黒漆を塗布し、朱で、飛翔する鳳凰の姿をちらす。ただし、文様構成は明確でない。

椀（８）　完存品だが全体に歪みが著しい。復原口径16.4cm、器高4.9cm、高台径7.2cm。高台は低く削り出されている。内面にロクロ目痕が顕著である。広葉樹の横木取り。

毬杖（９・10）　丸木材を半截し両端を削ってつくったもので、枝はそのまま柄として利用している。９は身部長18.1cm、幅3.5cm、厚さ2.1cm。上面と側面にも削りを加えて整えている。広葉樹。10は全面にクラックが入る。身部長24.0cm、幅4.2cm、厚さ3.3cm。広葉樹。

独楽形木製品（11）　広葉樹の心持材を切断し、一端に円錐状の抉りを入れ、他の一端を尖らせる。先端部分を欠失する。側面と先端部分は細かく削って整える。径3.2cm、残存高1.6cm。

毬（12）　広葉樹の丸木材をはつって切断し、側面は一部分削りを加えるが白木のままである。径4.3cm、長さ6.9cm。

杓子状木製品（13）　板目材の周縁を削って杓子状に整えたもの。柄は身に比較して短かい。周縁は両面から法をつける。柄の両側面は欠損している。全長26.0cm、身幅8.5cm、柄幅4.1cm、厚さ0.5cm。

槌のこ（14）　広葉樹心持丸材を切断し、中央部は両端から削り込む。身の周縁は樹皮を剝いだだけの白木である。中央部で切損している。長さ12.6cm、幅6.5cm。

陽物形木製品（15）　広葉樹の丸棒材を利用したもので、先端を丸く尖らせ、基部も粗く削って整える。先端近くに溝状の切り込みが一周する。上面に浅い切り込みを入れる。切り込み溝から先端にかけて樹皮を残す。長さ6.2cm、径2.3cm。

亀甲形木板（16～18）　ある製品の部材で、板材の角を削って八角形に整えたもの。16は杉の板目材、長さ5.8cm、厚さ1.45cm。17・18は正八角形に近い形状になっている。17は中心に径0.5cmの孔が貫通している。周縁の上端は斜に削って法をつける。表面には暗褐色の付着物が認められるが、これは他の部材とを接着させる膠のようなものかもしれない。杉板目材。長さ5.9cm、厚さ0.7cm。18も周縁をていねいに削って法をつける。周縁近くに径0.3cmの孔が二ケ所貫通している。長さ6.6cm、厚さ0.7cm。杉の板目材。

円形木板（19～21）　板材を円に近い形状に整えたもの。19は全体に腐植が進んでいる。周縁の削り痕も部分的に残っているだけである。長軸径6.1cm、最大厚1.4cm、最小厚0.8cm。杉と思われる板目材。20も腐植が著しくまた周縁の一部を欠損する。周縁は粗く削って整える。径10.8cm、厚さ1.6cm。杉の柾目材。21も全体に腐植し歪み著しい。周縁は斜に削り、上端はさらにゆるく法がつく。中央に長円形の孔が貫通する。長軸径8.8cm、厚さ1.6cm。杉の材目材。

支脚形木製品（22）　長方形の板材を支脚状に加工したもの。表面の両端部は斜に削って、緩く法を付ける。上端は他の部材に差し込んでいたようで、さらに表裏から削って山形につくる。側面には孤状の切り込みと抉りを入れて装飾性をもたせている。したがってこの側面が本来は前面を向いていたことになる。他方の側面（背面）と上端の差込み部分以外に黒漆

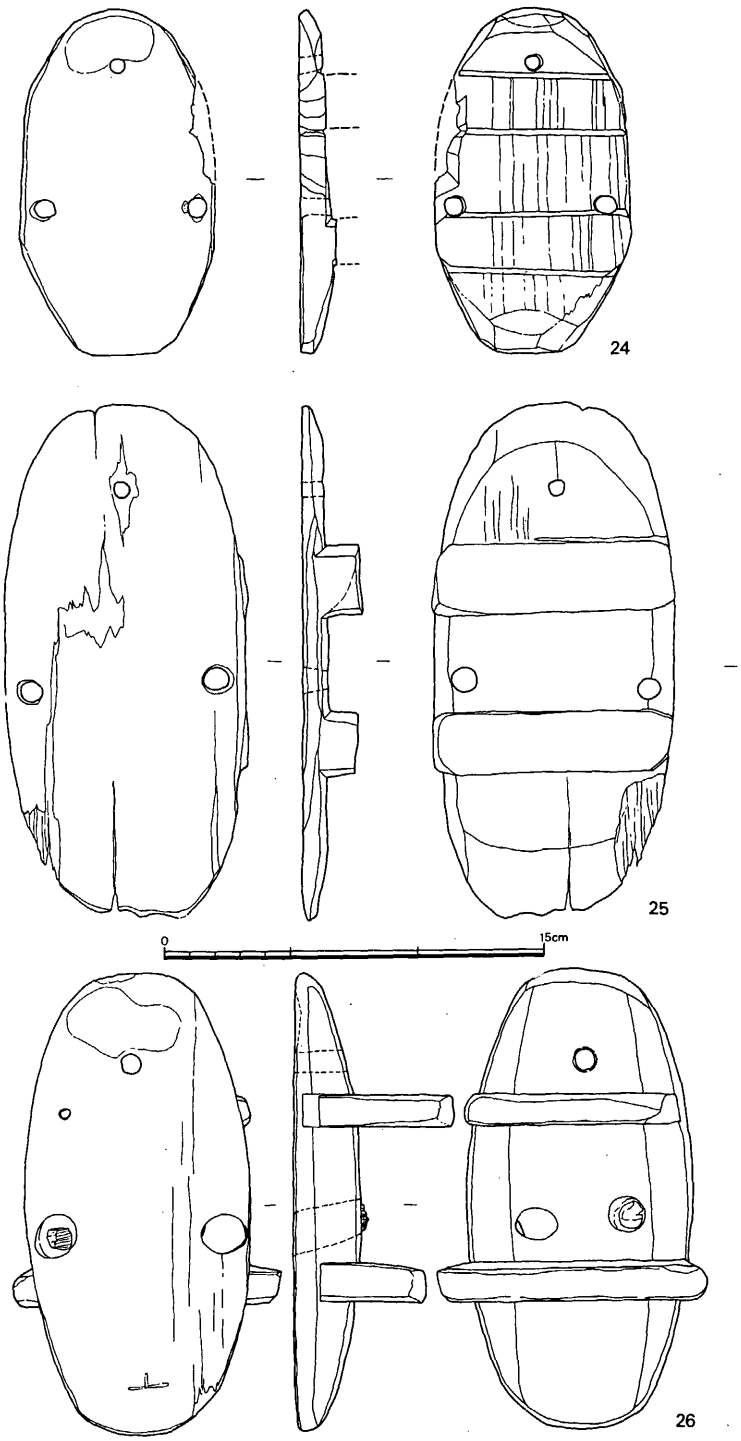
を塗布する。長さ8.1cm、上端部分の幅2.6cm、厚さ1.1cm。杉と思われる板目材。

琴柱形飾具（23）　厚目の板材を単頭双脚の琴柱状にしたもので、両脚間に一孔を設け飾具として取り付けたもの。三方は花先形に弧状の削り込みを入れ、その間には抉りを入れる。両脚間の孔の部分は表面を花弁状に、背面からは方形に欠き込みを施す。長さ6.4cm、幅11.5cm、厚さ2.2cm。杉の柾目材。

蓋形木板（a）　木目にそって中央部分で切損している。周囲を削って円形に整えたもの。周縁は斜に削って法をつける。径15.1cm、厚さ0.7cm。杉の柾目材。

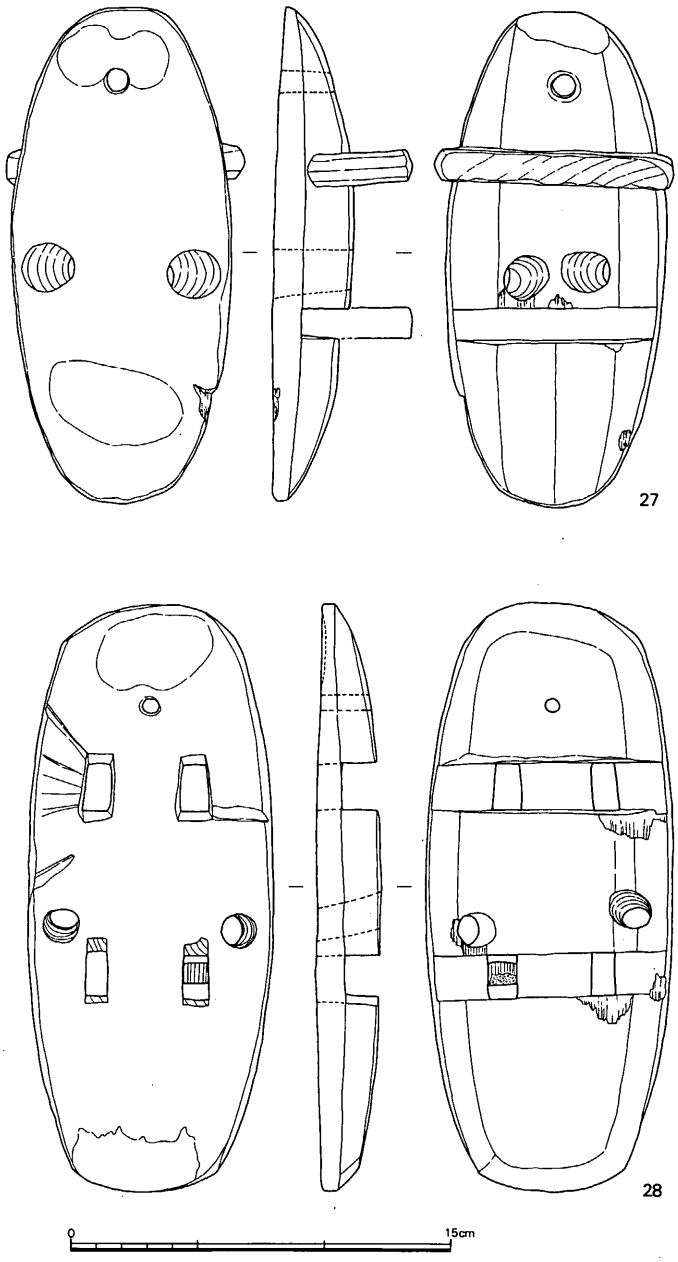
有孔木板（b）　板材を長方形に整え、中央部に径2.9cmの円孔を穿ったもの。円孔の周囲は浅く削って凹ませる。また下端部の両端には切欠きを入れる。長さ8.4cm、幅12.3cm、厚さ0.7cm。

下駄（24～28、a・b）　形状はほぼ長円形に近く周囲を整えている。鼻緒孔は前壺を台の中央前歯の前に設け、後壺は後歯の前にあ



第41図　SD3200出土木製品（3）

けられる。鼻緒孔の穿孔には、焼火箸を使用したと思われるものも認められる。形態は、一材から連続して台と歯をつくる連歯と、別々につくって着装する差歯に大別される。24・25は連歯のものである。台は薄目で裏面の両端をさらに斜に削る。鼻緒孔は垂直にあけられる。24の周縁は直線的で、後端は丸味を帯びていない。台の裏面に歯をつくる際の、鋸挽きの痕跡が顕著である。台表面の先端部分は使用のため摩滅し浅く凹んでいる。長さ13.1cm、幅7.1cm。子供用か。杉の板目材。25は歯の裏面が右に片ズレしている。長さ22.0cm、幅9.4cm、厚さ1.0cm。26～27は差歯の下駄。台は厚く、縦断面が舟底状になっている。鼻緒孔の後壺は斜に穿孔されている。25は両歯とも着装したまま残っていたもので、両歯の下端幅は台より広く台形状に整えている。歯は柾目材である。台は長さ18.2cm、幅8.9cm、厚さ2.2cm、杉か桧の板目材。27は前歯が残有するものであるが、底面の摩滅が著しい。後壺の内側は炭化しているところから、火箸による穿孔と思われる。台の表面の前後端は足裏の圧痕が良く残っている。台の長さ19.5cm、幅8.7cm、厚さ3.2cm。杉と思われる板目材。27は大形



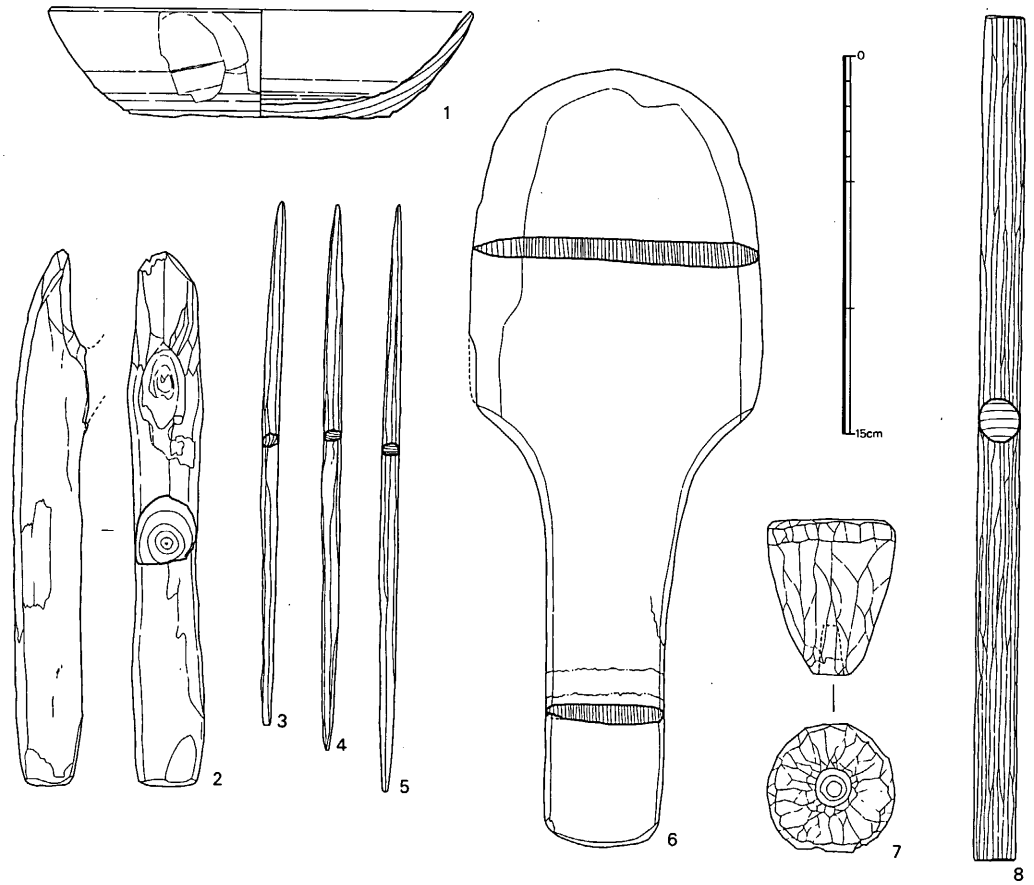
第42図　SD3200出土木製品 (4)

のもので、台には鼻緒孔の他に、歯を着装する長方形の枘孔が四ケ所あけられている。そのうちの一ケ所には楔が残存し、さらに他の孔には、放射状にのびる切り込み痕が認められる。台の長さ23.1cm、幅9.6cm、厚さ2.5cm。杉の板目材。ａ・ｂには歯の着装の為の枘孔が設けられ、幅0.5cm狭い長方形を呈し、二孔で一対をなす。台に四ケ所あけられる。

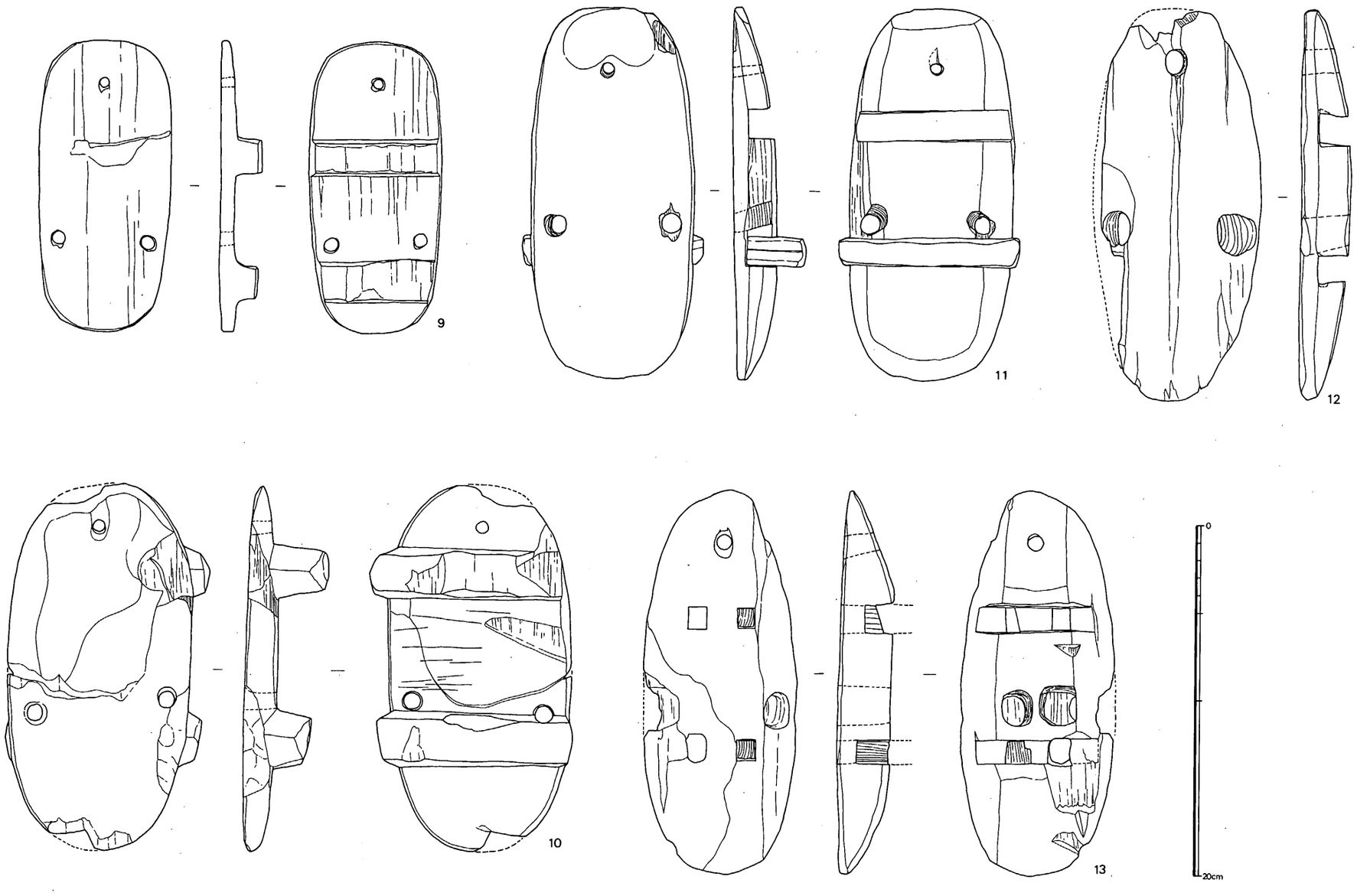
その他の遺構・層位出土木製品（第43・44図、図版65～68）

漆椀（ａ～ｃ）　いずれも残存状況が悪く大半を欠損し、また歪みが著しい為、図示するに至っていない。ａは内外面に黒漆を塗布し、朱で竹文を描く。ｂ・ｃは内外面に黒漆を塗った後、内面にさらに朱漆を重ね塗る。体部外面には朱で菊花文を描く。いずれも黒色砂質土層出土。

杯（１）　全体に歪みが著しい。底面は平坦に削られる。ロクロ挽きで整形されているが、体部外面に荒削り時の削り痕が残っている。漆は塗布されていない。口径16.7cm、器高4.3cm、底径10.2cm。広葉樹板目材の横木取り。ＳＫ3264出土。



第43図　その他の遺構・層位出土木製品実測図（1）



第44図　その他の遺構・層位出土木製品実測図(2)

毬杖（２）　広葉樹の自然木から幹を身部に、枝を柄として利用したもの。身部の底面は粗く削って平坦に整える。基部は底面から斜めに削る。柄は付根で欠損している。身部長21.2cm、先端部幅2.7cm、厚さ2.2cm。ＳＤ3300出土。

箸状木製品（３～５）　杉材を細い棒状に削り、さらに両端を削って尖らせたもの。中央部の断面はやや楕円形に近い形状である。１は長さ20.7cm、幅0.7cm。２は長さ21.6cm、幅0.7cm。３は長さ23.1cm、幅0.7cm。いずれもＳＫ3259出土。

杓子状木製品（６）　板材を薄くし杓子状に削ったもの。身部の周縁は両側から幅広く削って面取りする。柄の中程にはあたりの痕跡があり、浅く溝状に凹む。長さ30.6cm、身部幅11.5cm、厚さ1.0cm。柄部幅4.7cm、厚さ0.8cm。桐と思われる柾目材。ＳＫ3295出土。

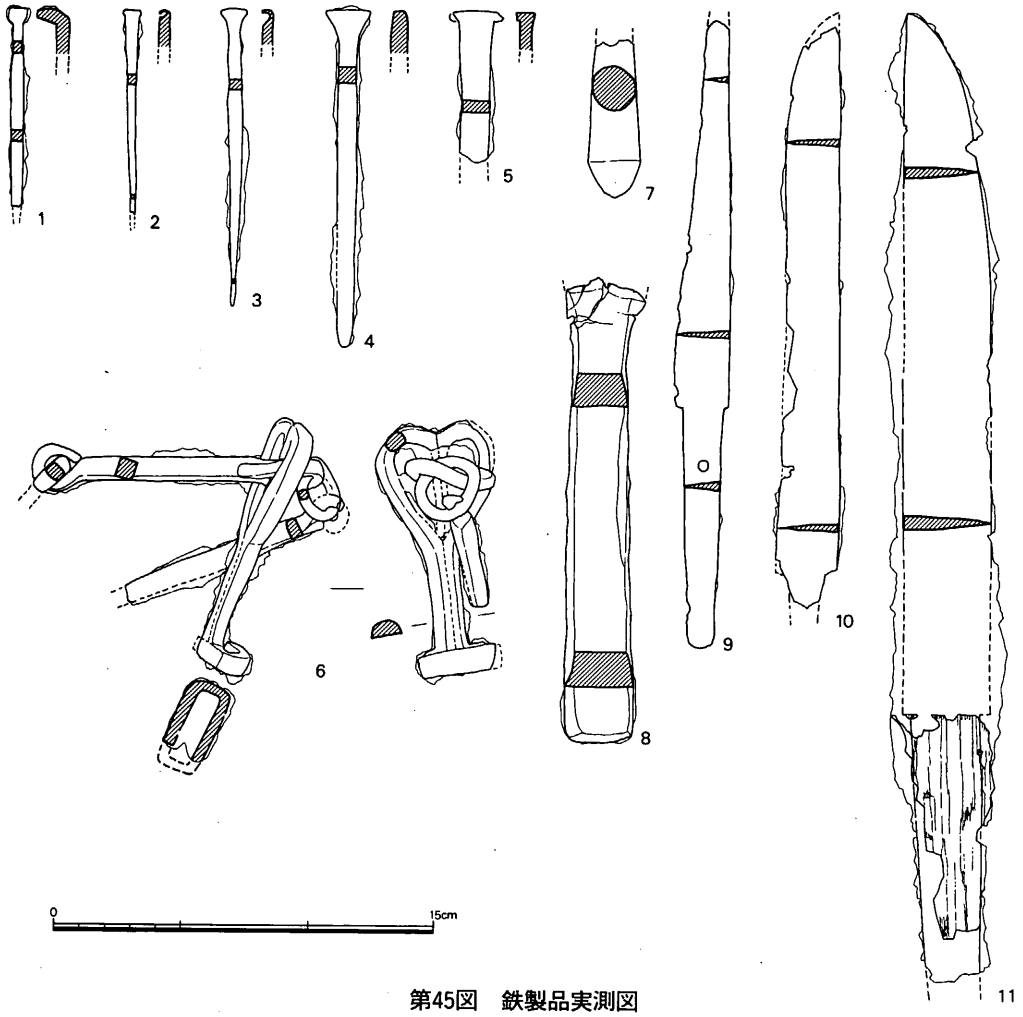
独楽形木製品（７）　丸太材を切断して、一端を平坦にし、他の一端に向って円錐状に細かく削って整えたもの。先端には上面径1.0cm、深さ2.0cmの円孔が抉り込まれている。長さ 6.2cm、基部径5.0cm。黒色砂質土層出土。

丸棒形木製品（８）　材をていねいに削って円柱状に整えたもの。両端には小さく面取りを施す。長さ33.2cm、径2.65cm、黒色砂質土層出土。

下駄（９～13）　ＳＤ3200出土と同様に連歯と差歯の二種類がある。９・10は連歯のもので、９は全体に腐植が進んでいる。形状は小判形に近い。台は薄く削られ、台と歯の横幅は等しい。後歯は欠損しているが、前歯の摩滅具合からみると右足用と思われる。長さ16.5cm、幅7.5cm。子供用か。黒色土層出土。10の台は長円形に周縁を整えている。鼻緒の後壺には楔が遺存している。台表面には足裏の圧痕をよく残している。また裏面には筋状の刃物痕が認められる。歯は厚く削り出され、下端幅が台より広い台形状につくられる。歯の側面は面取りを施す。長さ20.8cm、幅10.4cm。広葉樹板目材。ＳＥ3280出土。11～13は差歯のもの。台の形状は平面が長円形に近く、裏面は舟底状に削って整えている。11は台の先端部分が摩滅している。台表面には足裏による摩滅で著しく凹んでいる。歯は後歯が残り、台より幅広くつくる。台は長さ21.1cm、幅9.2cm、厚さ2.4cm。台は杉と思われる板目材。歯は柾目材。ＳＫ3259出土。12は先端がやや尖り気味に削られている。歯を差込む切り欠き溝では、深部がさらに浅く抉られている。残存長9.0cm、厚さ2.8cm、ＳＫ3160出土。13は、長円形を呈するもので、台に歯を着装するさいの方形枘孔が四ケ所あけられ、そのうち二ケ所の孔に歯の出枘が遺存している。長さ21.9cm、幅8.6cm、厚さ3.0cm。杉と思われる柾目材。黒色砂質土層出土。

鉄製品（第45図、図版69）

鉄釘（１～５）　いずれも身の断面が四角形の角釘であるが、用途によるものかその厚みや長さ、頭部の形状には数種のものがある。１は残存長7.8cm、厚さ0.5cm、頭部は折り曲げてＬ字形とする。２と３の頭部は薄くのばして折り返しているもの。このうち３は完存品で全長11.8cm、中央部の身幅0.6cm、頭部の幅は1.1cmと身より広くなっている。４は頭部を薄くのばし



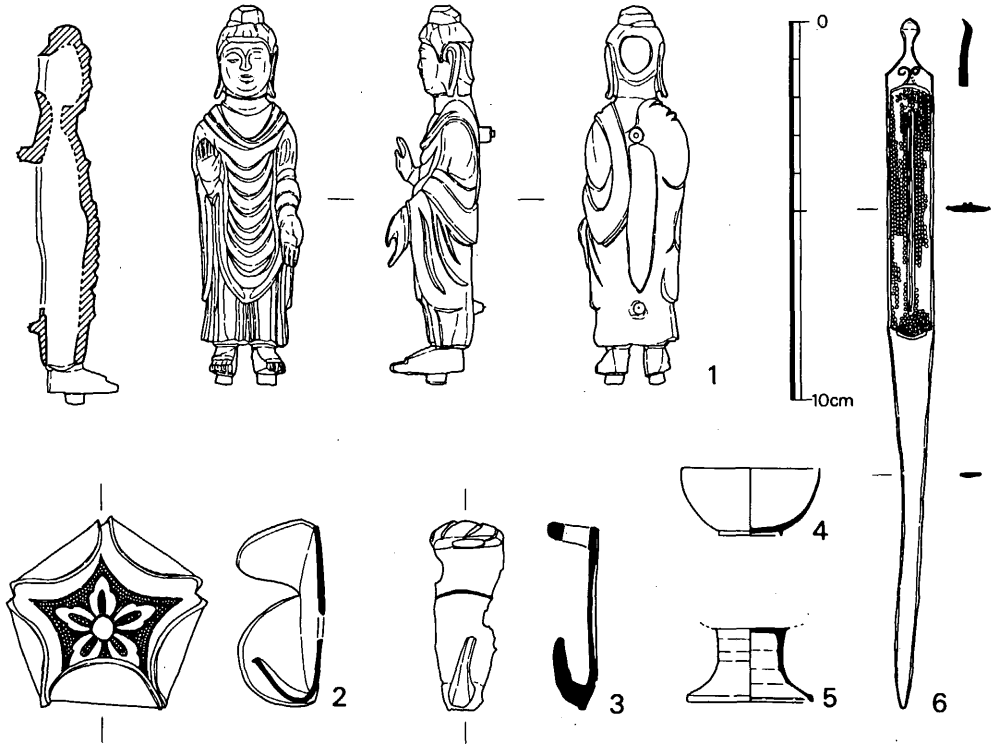
第45図　鉄製品実測図

て撥形につくったもの。先端付近は錆化しているため、形状は明確にしえないが、表面をみる限り丸味を帯びて収束している。全長13.3cm、中央部幅0.75cm。５は身幅1.1cm、厚さ0.5cmと幅広のもので、頭部をＴ字形に打ち出す。１・３・４は黒色砂質土層、2は土壙ＳＸ3207、５は暗褐色土層から出土した。この他、今回の調査で種々の遺構や層位から60本近い鉄釘が出土している。そのほとんどが中途で折損し、あるいは折れ曲っているものである。頭部を残すもののうち最も数量が多いものは、２や３と同様に、頭部を薄くのばして折り返しているものであった。

轡状鉄製品（６）　簡素な素環の轡と考えられるものである。全体に錆化が著しく形状に不明な点が多いので、やや復原して図示した。径2.9cm、厚さ0.4cmの小さな素環を鏡板とし、こ

れに衝、立聞が連結している。銜は断面四角形の角棒を柄とし、両端を蕨手状の環につくる。この二本を連結していわゆる二連銜としたものであるが、連結部分で一方の柄は欠損している。残存する柄をみると、柄を¼（90°）捻じっている。これは馬に装着した時、銜の両端が鏡板に対して同じ角度をとるように処置されたものである。この銜と小環の連結部は、同時に引手とも連結している。引手の端環は古墳時代の例にみられるような小環とは違って、大きくハート状の形をなし、装飾性を帯びている。この引手は錆化が著しく、詳細な形状が不明だが、表面観察では柄の断面はカマボコ形を呈している。手綱と連結する壺の部分は長方形にまわし、さらに付根をL字に屈曲させている。この造り方からみて鋳造品と考えることができる。立聞は銜と同じく棒の先端を蕨手状に造り、鏡板に取り付いている。この立聞は下半を欠損しているので、全体の形状は不明である。以上、それぞれの部品の連結具合からみて、小環を鏡板と仮定して記述した。黒色砂質土層出土。

丸棒状鉄製品（７）　先端部分のみ残存しているもので、身の断面は円形、先端に近づくにつれその径は徐々に広がる。先端は稜を形成して丸く尖る。先端は錆のため、敲打による摩滅は明らかでないが、タガネとしての用途が考えられる。黒色砂質土層出土。



第46図　金銅・銅製品実測図

角棒状鉄製品（８）　製品の柄に相当する部分で、身との接合部分は欠損している。断面は台形状に近く、基部付近が幅広い。現状では上方への反りが認められる。鋳造品と考えられ、表面の錆は赤化している。残存長18.4cm、中央部分の幅2.5cm、厚さ1.3cm。黒色砂質土層出土。

刀子（９～11）　９は切先が欠損している刀子で、現存長24.9cm、基部は9.4cmである。背関と刃関は明瞭な段がつく。刃部の刃こぼれが著しい。また、茎の関寄りに目釘孔が一つ貫通する。10は切先と茎部が欠損した刀子で、現存は22.9cmである。背関は明瞭だが、刃関は欠損し不明である。11は厚く錆に覆われているため、背と刃の通りは不明瞭である。平背造りのもので茎尻を欠損している。関部の形状は不明であるが、茎部分に柄の木質が残っている。この木質が始まる部分を関部と考えると、刃部長は27.5cmである。

金銅・銅製品（第46図、図版70）

金銅如来立像（１）　像高9.7cm。頭頂から台座へ差し込む足下の枘までを一鋳する。像背には光背を止めるための枘を二個造り出す。また、像背の後頭部、上背の二ケ所には鋳造の際、中型と外型が一体となるように、楕円形の孔が開けられている。さらに底面も両足間に孔が通じ、本体は中空となっている。与願、施無畏印を結んだ像容で、通肩衣を着け、正面にはU字の衣文が表わされている。鍍金は部分的に残存、本来ほぼ全面に施されていたようである。

飾金具（２）　丸味を帯びた花弁状の銅板を周縁が五角形となるよう内側に折り曲げたもので、全体に花の蕾がやや開いた形状になっている。内面は中心に孔をあけ、その孔を花心として周囲に花弁を配している。さらにこの外側には五つの連弧を細刻する。連弧に囲まれた部分と、花弁の子葉にあたる部分は魚子地になっている。長さ５cm、高2.2cm。溝ＳＤ3214出土。

鉤付金具（３）　下端部にフックを設け、頭部は環状につくり刻目を施す。黒色砂質土出土。

ミニチュア鋺（４）　体部から底部にかけて丸味を帯び、外底には低い高台が付く。ロクロで挽き出されたもので、口唇部の厚さは１㎜にも満たない程、薄手に仕上げられている。表面に泥等の付着物がこびりついているため、ロクロ挽きの痕跡はうかがえない。また体部には、後に内側から外側へ穿った小孔が認められる。口径3.6cm、器高1.8cm、高台径1.65cm。溝ＳＤ3200の上面に掘り込まれたピットより出土。

ミニチュア脚（５）　器物の脚にあたるもので、体部を欠損している。裾部は下半で大きく開き、端部が下方に肥厚する。脚径3.3cm、脚部高1.9cm。溝ＳＤ3236東の溝状遺構より出土。４・５とも密教法具の施壇具か。

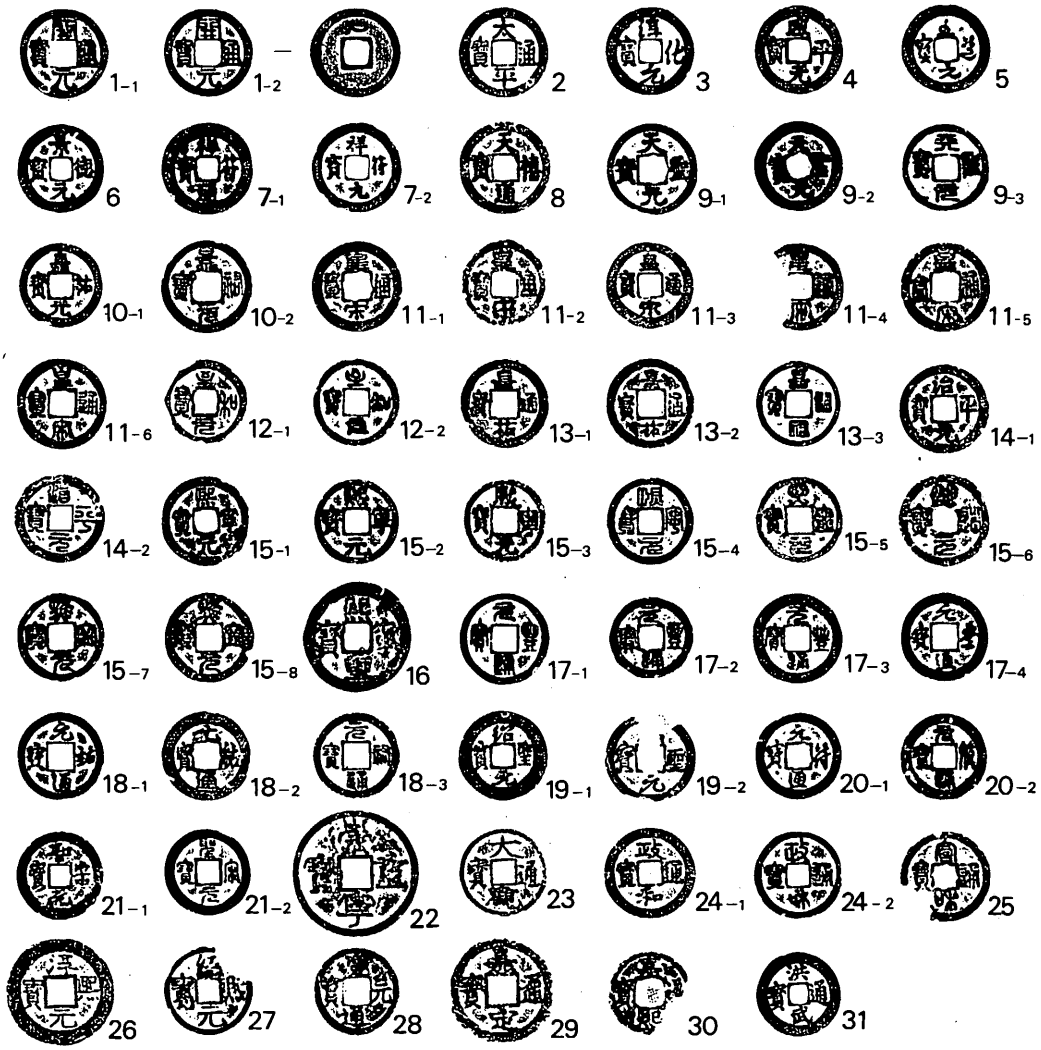
笄（９）　頭部に耳掻、下部先端は剣先状に尖らせて髪かきとする。上部の表面は長方形に区画し、その上端、下端とも花先形に整える。また区画の上端には蕨手状の浮彫が一対のびている。区画内の中央に２本の線を浮彫し、その周囲の地板に魚子を密に打つ。現存長18.1cm。上端部幅1.2cm、厚さ0.25cm。下端部幅0.5cm、厚さ0.15cm。暗褐色土層出土。

糸印（ａ）生糸の糸荷に添付されたいわゆる糸印と呼ばれる銅印である。完形で保存状況も

きわめて良好である。印面はほぼ正円で、二重の圏線に文字が陽刻されているが、判読できない。つまみは二匹の犬形動物が立位になって向い合い、互いに両前足で壺ないしカゴ様の容器を捧げ持つ、趣好を凝らしたものとなっている。印面径3.3cm、印面厚0.4cm、総高4.0cm。黒色砂質土層出土。

銅銭（第47図）

銅銭は第109次調査で136点、第111次調査165点の合計301点が出土した。これらは遺構面より上層の暗褐色土層、黒色砂質土層および各ピットなどから出土した。これらは第47図に示したように31種類に分類できるが、さらに書体によって細分できるものが多い。比較的出土量の多



第47図　銅銭拓影

いものとして「皇宋通宝」21点6種、「熙寧通宝」23点8種、「元豊通宝」34点4種、「元祐通宝」18点3種などがある。

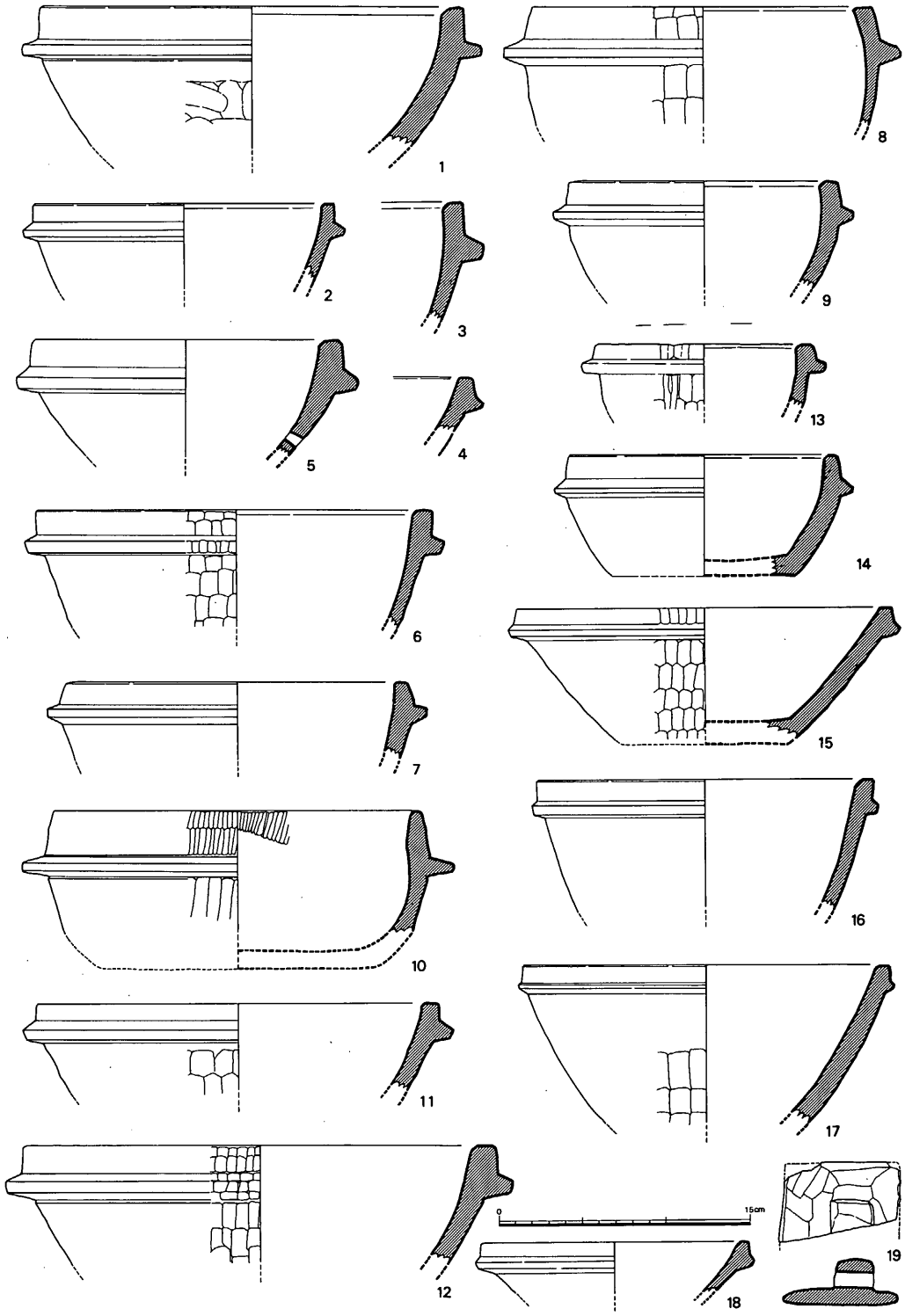
石製品

滑石製石鍋（第48図1～18、図版71）　1の体部中位に削り痕がみられるが、口縁部外面および内面は仕上げの削りのため削りの単位は明らかでない。SD3149出土。2は暗灰色、3は灰白色、4は淡黄白色の石材を用いている。2は口径18.0cm、4は鍔の削り出しは退化し、また底径も小さくなるタイプに復原できる。2～4はSD3200出土。5・6ともに暗灰色の石材。5は破損後一孔を穿っている。口径18.6cm。6は縦方向の細かいノミ痕が良く残っている。口径23.8cm。5・6はSD3300出土。7は暗灰色の石材。ノミ痕跡を消去している。口径20.5cm。SD3239出土。8は白灰色の石材。鍔部のノミ痕は仕上げのため単位は明らかでない。9・10と共に本遺跡出土品中古様を示す。口径21.4cm。10は灰白色、11は暗灰色、12は灰色の石材。口縁部内外を破損後ノミで削っているため本来の姿を残してはいない。10～12の口径は22.0・24.1・28.3cm。黒色砂質土層出土。13・14・16・17は暗灰色、15は鉄分を含んでいるため淡赤灰色、18は淡黄白灰色の石材。13は口縁部・体部に縦方向の溝を5つ入れ、瓜胴としている。12～18の口径は13.0・16.0・22.6・20.2・22.0・16.1cm。16～18はもっとも新期に属する。

滑石製スタンプ状製品（第48図19、図版71）　石鍋の再利用品である。鍔の部分を利用し、撮としている。裏面はノミ痕を残すが、表面は平滑に仕上げている。暗灰色の石材。

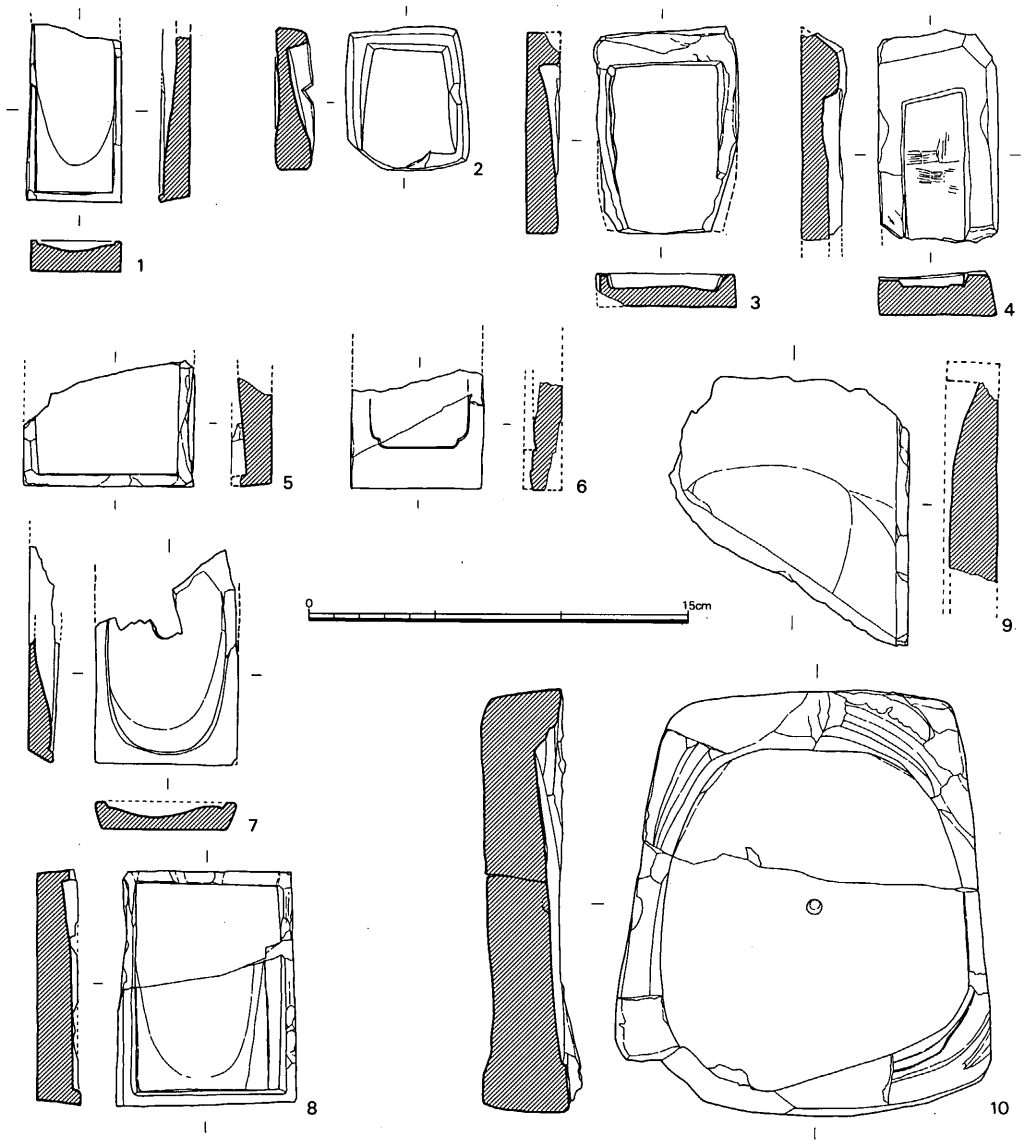
滑石製錘（図版71a・b）　a・bともに滑石製石鍋再加工品である。aは横7.3cmであるが、縦は折損しているため明らかでない。表裏とも煤や焦げ付きが著しいが側面にはない。このことから、錘として使用されたかどうか疑問である。bは横6.9cm、縦6.3cm。表裏ともに器面が剝離している。a・bともに暗褐色土層出土。

石製硯（第49図1～10、図版72）　1は小形の硯で、硯頭部を欠失している。硯頭部に向って幅がわずかに狭くなる台形硯である。側面は上方に広がって立ち上がるタイプで、底面は平坦である。硯尻幅3.8cm、厚さ1.2cm、周縁の高さ0.2cm。硯面は使用著しく、深い凹面となっており、硯面の全面に墨が付着している。丁寧な加工で、石材は暗灰色の硬質なものである。SD3200出土。2も小形の硯で、完形品である。硯頭幅4.2cm、硯尻幅4.8cm、長さ5.7cm。硯尻には縁部を有しない。海部と陸部の境いはない。硯面を硯尻から硯頭に向って傾斜させるだけである。硯面には使用痕があり、墨の付着もみられる。底面はわずかに凹面となっているが、加工によるものではない。石材は銀雲母を多く含む滑石である。硯尻の側面に硯加工前の黒化した部分があり、石鍋の再使用の可能性がある。黒色砂質土層出土。3は不整形の完形の硯で、滑石製石鍋の再使用品である。底面の全面に煤が付着しており、平坦であることから石鍋の底部片の再利用と考えられる。右側面のカーブは、石鍋の名残りとみられる。調整は雑で、陸部と海部との境は不明瞭で、縁部も硯尻付近は刻線を入れるだけである。黒色砂質土層出土。4

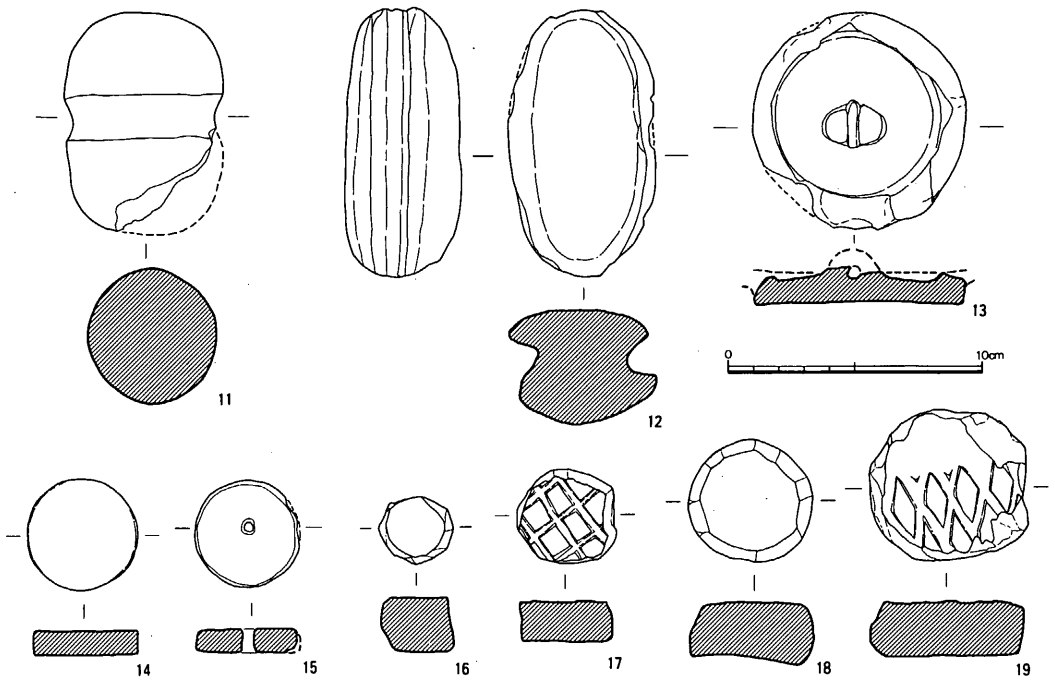


第48　石鍋実測図

は硯尻部を欠失しているが、硯面は長方形を呈する。ノミの加工痕を残す未調整の粗雑な硯である。硯面の前方部には海部とみられる浅い凹みを造っている。硯面にはとくにノミの加工痕が顕著で、使用された形跡はみられない。裏面に摩耗した痕跡があり、砥石の再使用品とみられる。灰白色を呈する粘板岩系の硬い石材である。幅4.7cm、残存長8.4cm。黒色砂質土層出土。5は硯尻部のみで縁部もほとんどが欠失しており、全形を知りえない。小豆色を呈する赤間石系の硬質の材質である。硯尻幅6.6cmを測る。暗褐色土層出土。6は硯尻部のみの小片で、縁



第49図　石製硯実測図



第50図　石製品・土製品実測図

部および裏面は剝離欠失している。硯面の一部が残存しており、隅部を櫻花状に削り出す。淡灰色を呈する硬質の片岩系の石材である。暗褐色土層出土。７は硯頭部を欠失し、全形は知り得ない。硯面は長円形を呈し、陸部の中央は使用のため摩耗し、大きな凹となっている。裏面は平坦で、側面が上方へ大きく開く形態である。硯尻幅と硯頭幅は同じとみられ､5.5cmを測る。黒色を呈する粘板岩系の石材である土壙ＳＫ3258出土。８は硯頭部の縁部を欠失しているが、ほぼ全形を知り得る。硯面の陸部と海部には明瞭な境はなく、比較的高い縁部を造り出している。硯頭と硯尻の幅はほぼ同じで約7.0cm、現存長約9.4cmを測る。裏面は平坦で、側面は若干上方に開く。硯面に墨の付着がみられ、陸部がわずかに凹む。小豆色を呈する赤間石系の硬質の石材である。黒色砂質土・暗褐色土層出土。９は硯面の一部を止める破片で形態についても推測できない。硯面に墨痕を残す。小豆色を呈した赤間石系の硬質の石材である。ピット出土。10は台形状を呈する大形の硯で、特異な例と言える。側縁部を部分的に欠失しているが、ほぼ全形を知り得ることができる。硯面は隅丸の台形状で、縁部は装飾化された２段ないし３段の段を有する。硯面の陸部と海部は必ずしも明瞭ではないが、硯頭の中央部を傾斜させる形でわずかに凹せている。陸部は摩耗し滑らかとなっており、墨のためか部分的に黒化している。また硯面の中央部に径0.5cm、深さ0.3cmの小孔がみられるが、意味は不明である。裏面は硯尻付丘を周縁に沿って若干凹せ脚状にしている。暗灰色ないし、赤茶褐色を呈する砂岩系の石質である。裏面にも摩耗した滑らかな部分があり、砥石の再加工か、もしくは再利用の可能性がう

かがわれる。硯頭幅11.0cm、硯尻幅14.7cm、長さ16.7cm、厚さ約3.2cm。小土壙、黒色砂質土層出土。

石錘（第50図11、図版72）　花崗岩を円筒状にし、さらに両端を平滑に丸く整える。中央に紐かけの断面凹状の溝が一周する。下端部を欠損。部分的に煤が付着している。残存長8.6cm、中央部径5.6cm。ＳＥ3240出土。

抉入片刃石斧（ａ）　ほぼ完存するが、刃部をやや欠損している。紐がかりの抉りは幅2.7cmの半円状。良く研磨された粘板岩製。全長17.3cm、幅4.9cm、厚さ2.2cm。土壙ＳＸ3192出土。

土製品（第50図、図版73）

土錘（12）　扁平な縦長の楕円形に整えたもので、周縁に紐かけの溝を切る。長さ10.6cm、中央部幅5.8cm、厚さ4.5cm。暗褐色土層出土。

蓋形土製品（13）　円盤状に整えたもので、背面中心部に紐かけと思われる鈕を設ける。鈕には径0.4cmの孔が貫通するが、高さは欠損していて不明である。周縁部は段を形成してさらに斜上方にのびている。縁端部が欠損している為、その径は不明である。表面は浅い凹面になっている。全体にナデて平滑に仕上げる。胎土に砂粒を多く混え、色調は黒灰色を呈す。表面径8.2cm、残存高1.55cm。ＳＤ3290出土。

小円盤状土製品（14～19ｂ・ｃ）　扁平な小円盤状に整えた土師質のものと、瓦の周囲を打ち欠いただけのものがある。14・15は全体をていねいなナデで整えたもので、15には焼成前に穿孔している。14は径4.4cm、厚さ1.0cm。ＳＤ3190出土。15は径4.2cm、厚さ1.0cm。暗褐色土出土。16～19は瓦の再利用品である。今回の調査で出土した小円盤状土製品37点のうち、９割近くをこの瓦再利用品が占めている。径と厚みには、ばらつきがあるが径から大きく３つに分けられる。16を含む径2.1～3.1cmの小形品と、17・18を含む径3.5～4.8cmの中形品、そして19を含む径6.1～7.0cmの大形品である。厚さは径を問わず1.5～2.7cmに収束する。それぞれの出土した割合は次のとおりである。小形品47％、中形品44％、大形品９％。こうしたものの他に瓦質土器を打ち欠いたものも一点出土している。ｂ・ｃは14・15と同様のもの。

鋳造関係遺物（第52～60図、図版74～81）

皿形の器の鋳型　１・２（外型）、３～５（内型）　この鋳型による製品は、高台を付した皿か、あるいは器の上面に把手様に環状の突起を造り出した椀蓋を思わせる。いま、何れとも決め難いが、後者の方がよりふさわしいようにも思われる。この後者の器は、乏しい知見では中世の作例を見ないが、古くは法隆寺献納御物や正倉院御物にその遺例があり、また『朝鮮古蹟図譜』（第９冊）にも高麗時代の遺品が収録されている。

外型　２箇

１は径17.8cm、厚４cm、粗真土は砂粒、すさを混入する。仕上真土は0.5～1.0cmの厚さで、黒味が塗布されている。３cm幅の湯口は黒変している。

中心部は成形時の引型板の心棒のあとが円孔（径およそ2.0cm）となっているが、この円孔は、別製の鋳物土片で塞ぎ、修正されている。

内側の鋳面を見ると、環状突起の外側即ち周縁部から甲盛の部分にかけては、仕上げ真土がよくのこるが、環状突起の内側の部分では中心部が僅かにのこるのみで、ほとんど破損している。従って、製品のその部分（上面）の詳細は分らない。ただ、中心部の残存部の面からみて、平らな面であったろうこと、また、かなり分厚いものであったと察せられる。

2は径17.6cm、厚4.2cm、前記1と全く同様のものであるが、中心部円孔の充填物は失われている。

内型　3箇

3箇とも同じつくり、同じ大きさのもので外型に合わせて用いたものであろう。

3は径14.7cm、厚2.9cm、二片に折損。背面は周縁を幅広く残して(0.25cm前後)、その内側を一段凹めてある。この背面は手捏ねになる。粗真土には砂粒、籾がらを混入。鋳面の仕上げ真土はほとんど剝落しているが、器の口縁部に応じる箇所に僅かにのこる（厚0.4cm)。

4は径14.8cm、厚2.9cm、三片に折損、接合しても小欠失がある。造り、大きさは前記3と同様である。上面は周縁寄りが灰色、その内側が褐色を呈している。この鋳型の中心部の円孔は外型1と同様に鋳物土片を嵌め込んで修正してある。

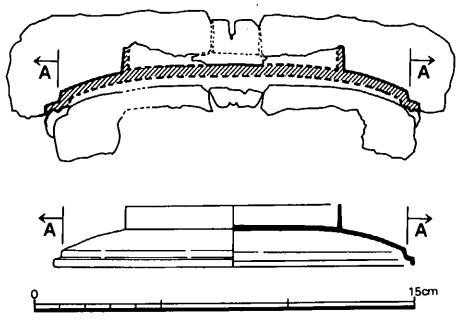
5は径14.7cm、高2.8cm前後、四片に折損、接合しても小欠失がある。鋳物土、造り、大きさなど前記の二箇と全く同様である。上面周縁部は暗灰色、内側中央部は明褐色を呈する。

以上の外型と内型とは、実際にどれとどれが組合せになったかわからないが、いずれも同形同大である点、規格品的なものとも思われ、製品の量産のほどを想像させる。その製品は、鋳造後の仕上げなど、なお、若干の加工もあったかもしれないが、おおよその形状は、緩やかな甲盛りがあり、おそらく冒頭に記したような蓋鋺の蓋と考えられる。第51図はその復原図である。外型1と内型4を用い、鋳上りの器肉厚みと内型周縁の凹みを考慮して図のように復原したが、Aの部分を湯の回らないハマリとみれば製品の周縁は段をもたないものとなる。

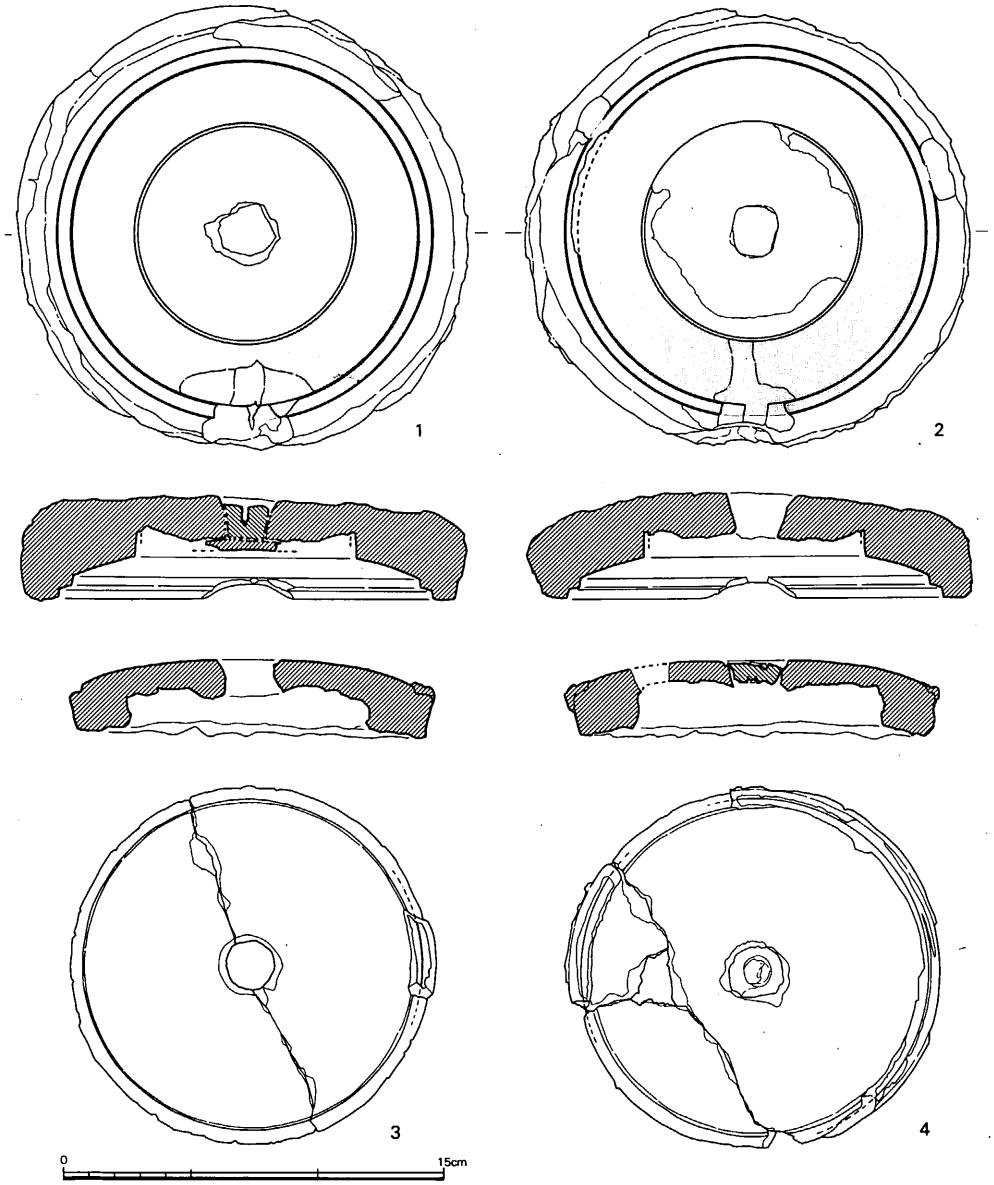
蓋形器の鋳型（外型6・7）

6は径11.4cm、高さ5cm、およそ3分の1を欠失し、なお大小数片に割れている。鋳面の大部分には仕上げ真土がのこり、塗布の黒味も認められる。仕上げ真土の厚みは、0.1～0.5cm。太い截頭円錐形の鈕の雌型を彫り込んだ、円い平ぶたの鋳型である。

7は径13.6cm、高（上部欠失）（現存）2.7cm、全体の形は前記6のようなものであったと思われるが、外面中央の部分が失われている。粗真土には砂



第51図　鋳型からおこした銅製蓋復原図

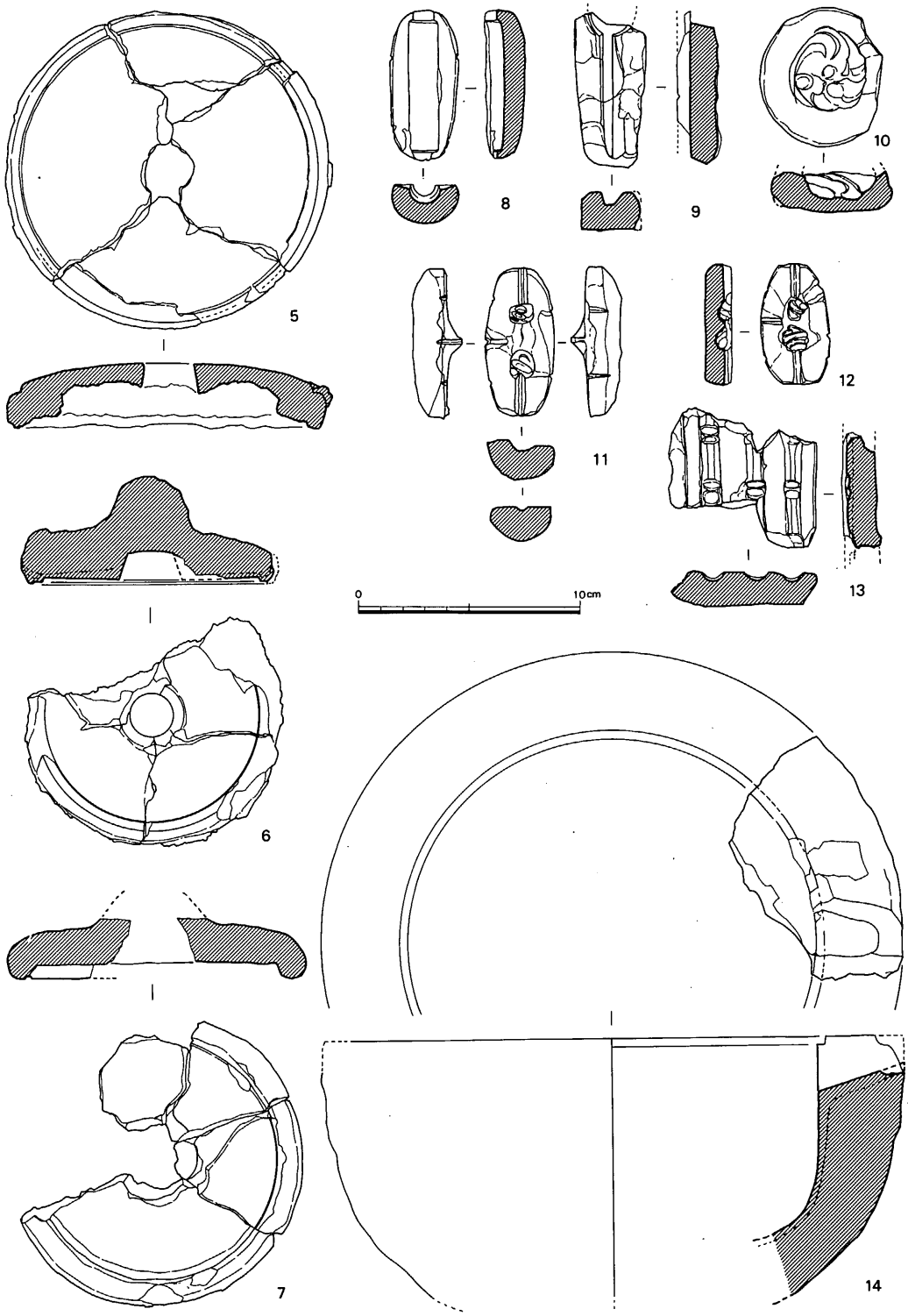


第52図　鋳型実測図 (1)

粒、籾がら等が混入。

用途不明金具の鋳型（８～13）

８は縦6.8cm、横3.1cm、全体の形は長楕円形、製品は断面半円、あるいは円形であろう。合わせ型の一方の分しかないので、よくわからない。上方および下方の左右（本稿での「上下左右」は、「実測図に向って」の意である。以下同じ）に合い印が刻まれている。



第53図　鋳型実測図 (2)

9は長方形、一方の側が欠損して詳細を欠くが、やや長目の柄を付した形と思われる。げ真土粗真土は僅かに残るだけ。

10は平面円形、製品は三つ巴文状の飾金具であろう。径6.2cm、高1.8cm、粗真土と仕上げとの区別がつきにくい。湯の流れた面は黒化。他は淡褐色。

11は平面長楕円形。縦6.8cm、横3.2cm、厚さ1.6cm。胎土は砂粒の混入が目立ち、粗。全体に赤味乳褐色を呈す。上、下端は型の合せ目部分と同じく削り均している。型の合い印は左右両側とも上中下の三箇所（右側の中段は欠損)。真土仕上げの状態は剝落もあって明らかではないが、全面薄く施されていたようである。

製品は瓢形の小金具と思われる。なお、鋳型面の上下方に見える一条の縦溝は、製品に円孔をあけるための茎の設置用のものと思われる。

以下、12・13も同種の金具の鋳型である。

12は縦5.5cm、横3.1cm、厚1.2cm、外表には砂粒が多い。真土はそれほど細密ではない。一部黒変している。湯口と思われる彫り刻みの周辺は摩滅している。11と同じく貫孔のための茎挿入用の溝がある。ＳＸ3305出土。

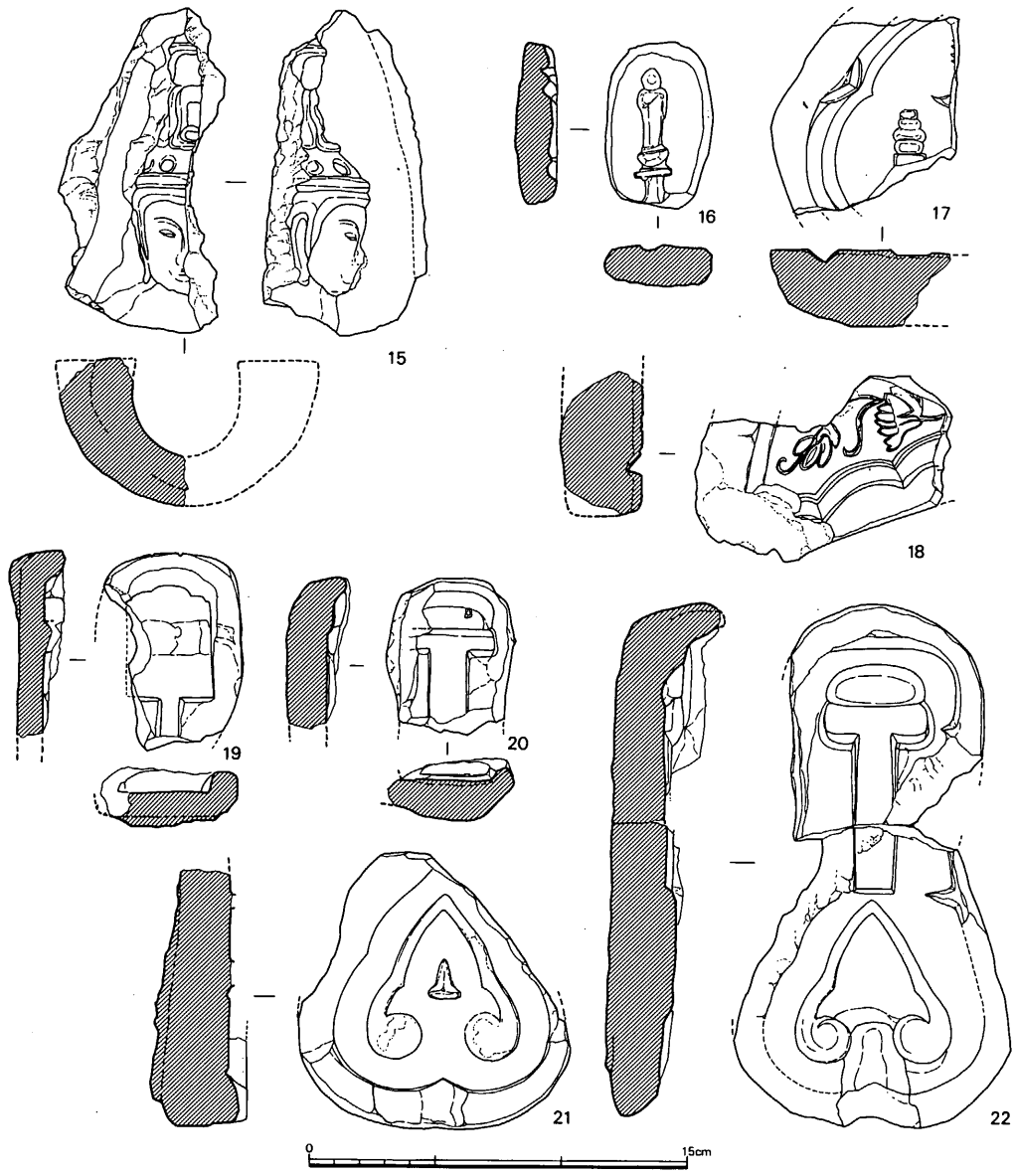
13は縦（上下方とも破損)(現在)6.4cm、横6.6cm、厚1.6cm、左右両側面、裏面は均して平らにする。粗真土に砂粒、すさを含むことは以上の諸品と同じ。製品は白玉を二箇重ねたような飾金具と思われる。鋳型の上下が折損してはっきりしないが、これも穿孔されたようである。

注口のある器の鋳型（14）

一見、片口を思わせる器の鋳型片である。縦(高)(下方破損、現在）11.7cm、横凡そ10cm、厚（上方）４cm、（下方）2.5cm、粗真土は小石、砂粒、籾、すさなど混え、いま灰白色を呈す。仕上げ真土の厚さは上方0.5～0.6cm、下方0.3cm、仕上げのときの挽き跡がよくのこる。黒味が僅かに認められる。製品は、大き目の注口を持つ容器で、下方に向って僅かに窄まり、腰部近くでおだやかに曲って底部を形造っているようである。上端は紐帯一条を以て口縁としているのが、この部分の鋳型の僅かな残存部からわかる。前記のようにまず片口が考えられるが、いわゆる提子のような提梁のついたものであったかもしれない。

菩薩形頭部の鋳型（15）

菩薩形頭部前面のうち左半分の鋳型外型残欠である。一見して、凹面を示す鋳型からも高い髻を結い上げた髪型の特徴がよくわかる尊像のものであり、額の上に冠帯もみとめられ、その下の髪際線の額中央での垂れは大きく時代の下降が暗示されているようである。のこる面部のおよその法量を測ると、面長約4.2cm、面幅約4.0cm、頭頂一顎約11.0cmほどの頭部であったことが計測される。地髪あたりを注意して見ると、髻が地髪に垂れる中に、丸い穴がみられ、同様のものが地髪にも認められる。それらの配置から考えて、おそらく頭上面の差込み穴であろ



第54図　鋳型実測図 (3)

うと思われ、関連して髻の上部をみると頂上仏面の形をたどることができる。頭部に十一面を付けるものは、通例では十一面観音像、千手観音像があり、そのいずれかの頭部であろうと考えられる。

鋳造については、面部耳うしろに頭部を前後に分けた平滑な割型の合わせ面がみられ、少なくとも頭部は前後に型合わせされたことがわかる。頸部底面にもやや平滑面がみられ、そのこ

とから次の二つのことが考えられる。ひとつは抜け勾配を考えて尊像の外型をいくつかに分割した寄せ型の鋳型のなかで、首から上は前後に分けられたことがわかることである。もうひとつは、尊像躰部に差し首とする頭部が、躰部とは別に前後の割型で別鋳されたことも考えておくべきであろう。

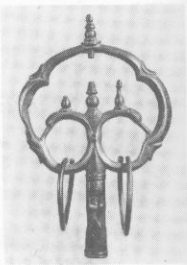
このように髻の高い菩薩像の様式は中国宋時代仏像の影響であり、九州において一般的には、13世紀半ば前後頃から畿内からの伝播によって広がると考えられている。しかしながら、伴出品や層位などから、13世紀前後ごろまでの当地での制作判断が可能であれば、中国宋時代の大宰府あたりへの直接影響も考えられ、興味がもたれる。ＳＸ3305出土。

小立像の鋳型（16）

蓮台に立つ小立像の、前後合わせ型の鋳型半面である。像高3.4cm、台座1.1cmの立像で、尊名を特定できないが、推測も含めて細部をみると次のようである。のこる鋳型にみられる肩から脇下にクロスする線条をたどると、もう一面の鋳型は左肩から右脇へクロスするものであろうと思われる。菩薩像の条帛、あるいは如来形の偏袒右肩の襟縁が想定される。しかしながら、頭上にはほんのわずかではあるが、肉髻が示されているようであり、左膝横にわずかに左手あるいは袖先の造作が見られ、右手を胸前にし左手を垂下して印をしめす如来立像の形相が考えられる。ＳＸ3305出土。

錫杖の鋳型（17）

錫杖頭部の輪の鋳型片である（第55図参照）。現在縦7.8cm、横7.2cm、厚3.0cm、製品の推定復原、輪の横径12.0cm前後。粗真土は砂粒を含む。いま全体に灰黒色を呈す。ＳＸ 3305出土。



第55図　錫杖（参考例）
奈良県桜井市長谷寺蔵（建長三年の銘）

錫杖の頭部は、ふつう杖の先端を相輪形または塔形につくり、その左右、輪の下端が内側に巻き込んで作る蕨手状の上に宝瓶などを安置し、また輪の頂上にも同じく瓶や塔形などを戴く。この鋳型片には、輪の一部と（蕨手上の）五輪塔の彫込みがのこる。五輪塔の右側、破損箇所の上方に点々と刻み目が認められるのはあるいは宝塔などの相輪部であるかもしれない。

この断片でその製作の時期を考えるのは些が難しいが、輪の曲線の張りや、その輪の括り目に附された半月形の鈷、あるいは五輪塔が、まだ本来のかたちを失っていない点からみて、鎌倉時代半ば、13世紀中葉の所産と見られる。共伴遺物からみると13世紀前後の可能性も考えられる。



第56図　磬（参考例）
福岡県甘木市出土（鎌倉後半～南北朝）

磬の鋳型（18）

普通に見る山形の磬の鋳型片である（第56図参照）。現在横10.5cm、縦6.7cm、厚3.3cm、製品の推定復原・脚の開

き18cm前後、縁厚0.8cm弱、粗真土は砂粒が多い。仕上げ真土は非常にうすい。全体に黄灰色を呈し、鋳面の保存は良好。黒味の塗布は認められない。いま、平たく均された型の合わせ面が、下方に大部分、左上に一部のこる。

この鋳型片では、磬の上辺を形づくる孤の状態や脚先のかたちがわからない。また、側縁の傾斜度や反りの有無も定かではない。さらに撞座の部分も欠くので時代の推定に苦しむ。ただ、一部のこる孤の線には、室町以降の磬によく見るような固定化した硬さはないようである。しかし、蓮唐草の図文にはとまどいの感が深く、決して流暢な絵付けとは言い難い。強いてその制作年代を思えば、鎌倉後半期に属するであろうか。ＳＤ3239出土。

なお、この鋳型片については、次のような鋳金家の遠藤喜代志氏の教示を受けた。

(イ)　この鋳型は未使用であろう（遺物の保存の状態から見て)。

(ロ)　その製作は、他の磬を原形として、それからの型抜き、いわゆる踏み返しによるものであろう（箆押しで施文したのであれば、仕上げ真土はも少し厚い筈である。この程度では箆押しの妙味は出ない)。

との二点である。とくに(ロ)については、鎌倉時代の磬に踏み返し品の多いことは早くいわれたが（広瀬都巽『日本銅磬の研究』)、それをさらに鋳型の段階で認め得る、という点で特筆すべきものがあろう。

飾金具の鋳型（19）

用途不明、縦8.0cm、横(現在)5.4cm、（推定復原)6.0cm、厚2.0cm、製品縦4.6cm、横(推定)3.4cm、粗真土は小石など混り極めて粗。製品は総体、将棋駒形で頭部は花先き形につくる。鋳型の鋳面は摩耗甚しくはっきりしないが、大小の凹凸があり、製品は透し文様の金具かとも思われる。ＳＸ3305出土。

不明金具の鋳型（20）

縦6.2cm、横5.1cm、厚2.3cm、全体に摩滅が甚しい。鋳型土は3層になっているようであるが、中真土、仕上げ真土の区別ははっきりしない。鋳型土は総体灰黒色。黒色砂質土層出土。

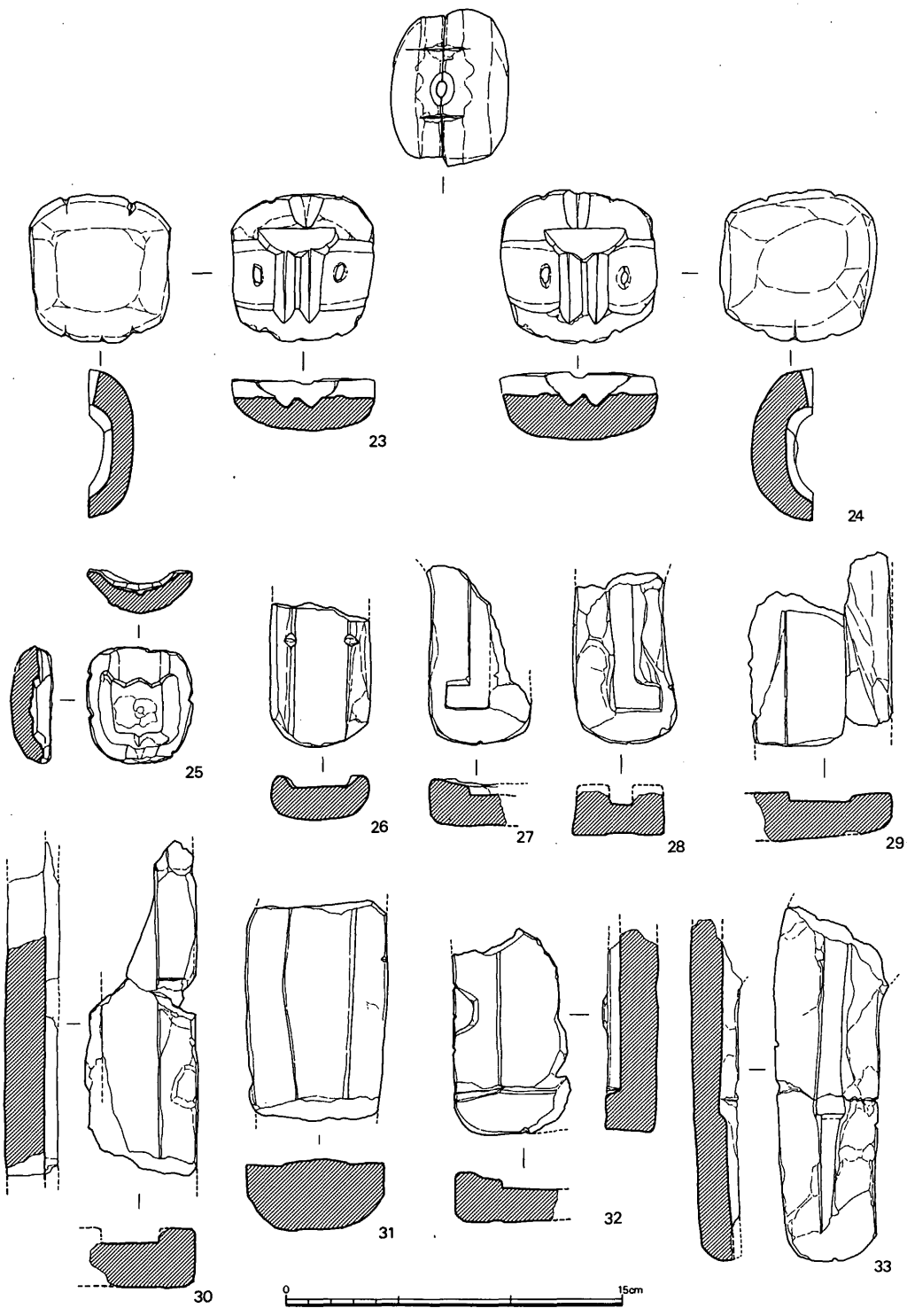
飾金具の鋳型（21）

22と同種の飾金具の鋳型片である。縦（現在）11.0cm、横10.7cm、厚（現在）3.8cm、鋳型土は３層のようであるが、不詳。

鋳口は下部にとる。鋳面は全面灰黒色を呈す。中央に三葉形、それを囲んで丸に尾を引いたかたちの文葉（丁子頭文あるいは如意形の雲文を聯想させるが不詳）を極く肉薄に凸に表わす。従って製品には、これらの文様は僅かに凹んでうつることになる。黒色砂質土層出土。

飾金具の鋳型（22）

（２片のうち上方分㋑はＳＸ3305出土、下方分㋺は黒色砂質土層出土）　前記21と同種で、これによってこの鋳型の全容をほぼ窺うことはできるが、文様の細部あるいはその用途など



第57図　鋳型実測図 (4)

はわからない。

（上方の分㋑）　縦9.3cm、横（現在）7.6cm、厚（最大部）4.3cm、鋳型土は21に同じ。鋳型面の彫り込みは、上部が深く（0.7cm）、下方に及ぶに従って浅くなる（0.3cm）。

（下方の分㋺）　縦12.0cm、横11.0cm、厚（最大部)3.5cm、21とほぼ同様であるが、これにあっては、㋑から続く彫り込みがある（深さ0.25cm）。そして、その下方の文様の中心部は三角状に凸に表わすが、それは21の三葉形文よりもさらに薄肉である。

以上、製品は縦22.0cm、横（最大部）11.0cmの金具で、もし上下方向が図のようであるとすれば、中心に三角状の文様をごく浅く鋳凹せ、その三角状文なりの輪郭をもつ金具に、立聞状金具を付した形の飾具であったと思われる。その厚みは速断できないが、立聞状部はやや厚く且つ頭部から下に向って薄く、また、立聞状部に続く三角状金具は比較的薄手に造られたのではなかろうか。

刀装具の鋳型（23、24）

それぞれ合わせ型の２個とも完存。鞘の足金物の鋳型と思われ、造りは入念である。

23は縦6.6cm、横6.3cm、厚2.3cm、粗真土と仕上げ真土の区別は認められない。ただ外表面に籾がらの混った土が付着しているが、これは２箇の型を固定した土のなごりであろうか。総体に精緻な造りで、鋳型土は堅く焼きしまり、ほとんど全体にわたって黒変している。また、上端２箇所、下端３箇所に合い印を刻す。湯口は上端にとる。

鋳面には雲母が僅かに認められる。この鋳面の上段と下段は、もう１箇の型との合わせ面になるが、その仕上げもまた意が盡されている。上・下段の型の合わせ面にはさまれた中段が、彫り込みのある箇所であるが、その彫り込みの左右はそれぞれ空間にのこし、中ほどに小ぶりの柄が各１箇造り出されている。柄はこの空間内に納める巾置を固定するためのものと思われる。

彫り込みは、五弁の花先き形を頭部にして、その下に稜の著しい脚２本を付したかたちであるが、工作は見るからに際立っている。

24は縦6.8cm、横7.0cm、厚3.0cm、23と全く同様の造りであるが、外形がやや大きい。また鋳型土の黒変化は23ほどではない。

これら23・24の合わせ型は、今回出土の鋳型のなかで、その対の２個ともが完存する唯一の例である。造りの精巧なことはいうまでもないが、幅置の置き方など、このような金具の鋳造の実際を知る上で特に注目される。ＳＫ3295出土。

刀装具の鋳型（25）

鞘尻の金具の鋳型と思われる。縦5.2cm、横4.7cm、厚1.8cm、鋳型土は3層であろう。粗真土は籾がらを含む。外表面、鋳面とも赤褐色を呈す。湯口は下方中央部。彫り込みの上方は空間とし、面は綺麗に仕上げられている。あるいは23、24の足金物の鋳型に見たように、ここに幅

置を納めたのではなかろうか。

彫り込みは、細部はわからないが、下方（即ち鞘尻の先端）を花先き形（３弁で中央に稜を立てている）とした方形輪廓の内側に大小の凹凸があるようで、ふつうの鞘尻金具の文様と変りないものと思われる。黒色砂質土層出土。

刀装具の鋳型（26）

縦6.4cm、横4.5cm、厚1.9cm、外表部の鋳型土は砂粒と籾がらを混えるが比較的密で、いま全体赤褐色を呈している。鋳型土の質、鋳型の作り、変色の工合など、前記16の鞘尻金具の鋳型と同趣で、恐らく刀の鞘金具の鋳型と思われる。ＳＤ3200出土。

不明金具の鋳型（27～33）

これらは31を除いて、すべて同質の鋳型土、同様の造りになる。鋳型土は、粗真土は砂粒、籾がらを混入し、現在灰黒色を呈す。製品の用途はわからない。一括して摘要を次に表示する。27～30、32、33はＳＸ3305。31はピット出土。

品目（図の番号）	鋳型の法量（cm）			合い印	その他
	縦	横	厚		
27	（現在）8.0	（現在）4.5	2.1	下端中央１箇 左側面下方１箇	28と同種（整品同じ）
28	（現在）8.6	（現在）4.6	1	下端中央１箇 左側面上方１箇	27と同種（整品同じ）
29	（現在）8.6	（現在）6.2	（現在）2.2		30と同種（整品同じ）
30	（現在）14.9	（現在）5.1	2.7	右側下端近く２箇	29と同種（整品同じ）
31（これは別種）	（現在）9.6	（現在）6.4	3.3	右側上方に１箇	鋳型土の質、鋳型の造りが他と異り、出土地点も別。いま、全体に赤褐色を呈す。彫り込みは両側に各１条の溝。整品の形など不明。
32	（現在）9.2	（現在）4.8	2.5	下端に１箇 左側に３箇	図の左方が、対の鋳型との合わせ面。この面に半円形を凸に造るのは、柄として使用するためか。
33	（現在）15.7	4.6	2.2	右側に２箇 左側に１箇	造りが、27、28に酷似する。

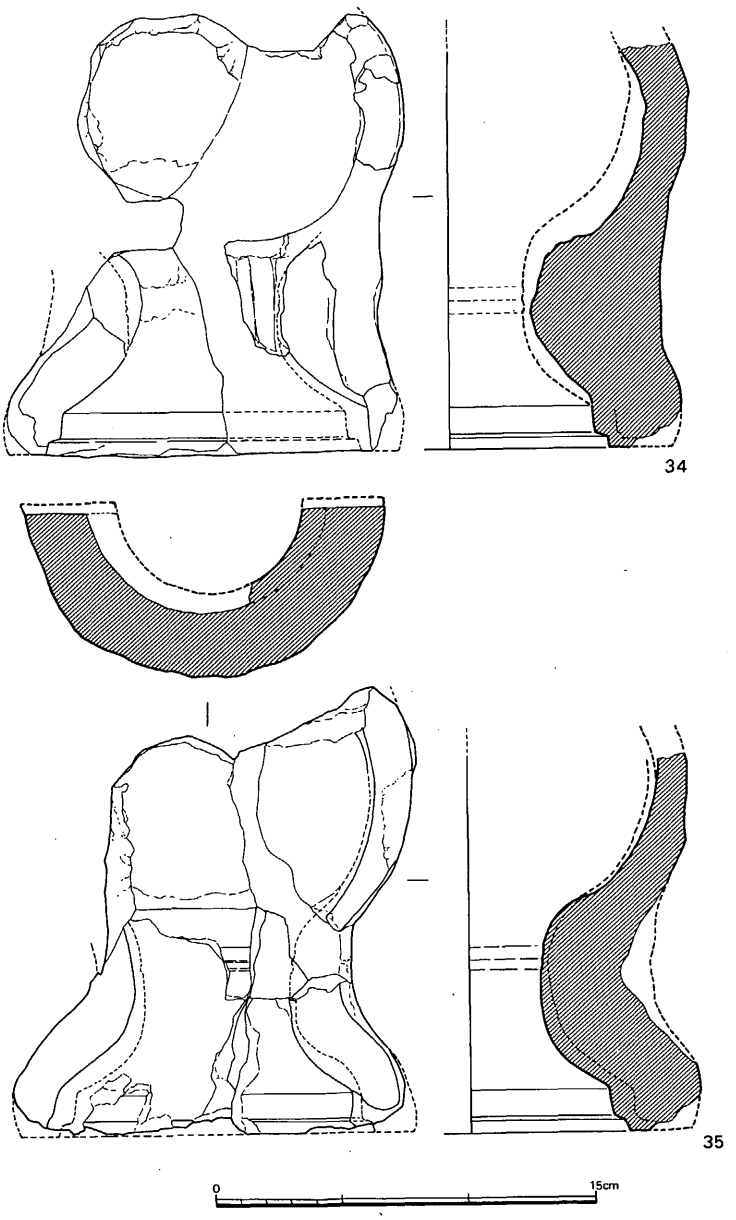
華瓶の鋳型　（34～37）　密教法具の華瓶の鋳型片と思われる。大(34、35)、小（36､37）あるが、４箇の相互関係は不明。

密教法具の華瓶はその形から亜字形華瓶とも通稱される。広い口から細まった頸部、大きく張った胴部、それに続く締った腰部と広く開いた脚部など、非常に特徴的である。そして、ふつう頸部と腰部に２～３条の紐飾りをめぐらす。

この４箇の鋳型片による製品の形状は、仏具その他器物の口辺部や台脚と共通のものではあるが、34～36の示すおよその外曲線から看取される器形は、亜字形華瓶をおいてほかに考えられない。そして、35の括れ目には、この種華瓶に付きものの前記紐飾りの彫りが、痕跡的にではあるが

認められる。ただ、これら鋳型片が、亜字形華瓶の口辺部であるか、あるいは脚部であるのかについては判断に苦しむ。鋳面はいまほとんど破損して製品の正確な形状はわからないし、また多少歪んでもいる。現状により胴部とその上下の曲線のつながり具合から、一応、34、35（冒頭で「大」とした）を脚部、36・37（同じく「小」）を口辺部と考えた。

冒頭で記したように4箇の相互関係はわからないが、小を口辺部、大を脚部とした場合の、亜字形華瓶を想定するのは、今の場合当然かとも思われる。次にそれについて一瞥したい。製品の華瓶の大きさについて—これらの鋳型片からすると、華瓶はごく内輪にみても（鋳面の鋳物土の剥落や鋳造後の仕上げなどを考慮して）、口径7cm、底径10.5cm（かなり正確）前後であったと思われる。これは平安～鎌倉期のこの種華瓶としては大型の部類に属するもので、この時期の法具を数多く収録した『密教法具』（奈良国立博物館監修）をみても、底径10cmに達するものは僅か数例にすぎない。もっとも、鎌倉後半以降、この種の仏具類が次第に大型化して行くことはすでに



第58図　鋳型実測図 (5)

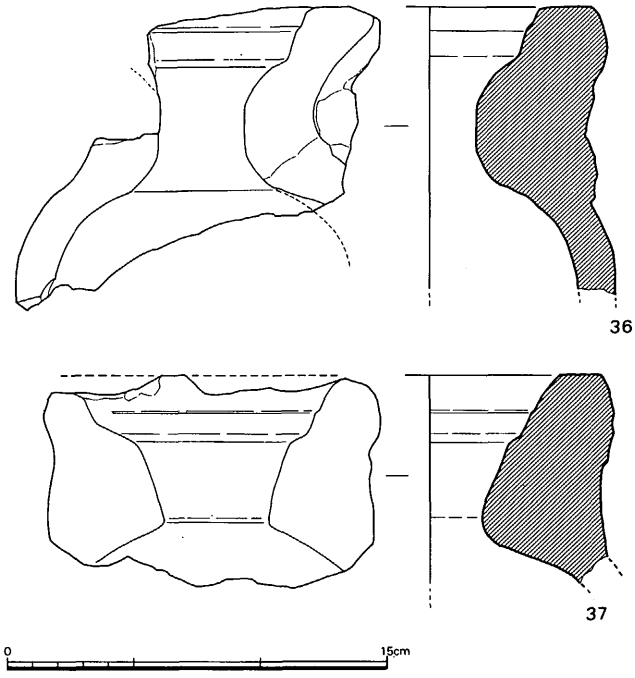
〈華瓶の鋳型細目〉

1．粗真土は砂粒、すさ、籾がらを混え、非常に粗(灰黒色)。仕上げ真土はほとんど失われ、粗真土も剝離の部分が多いと思われる。表面は灰白色ないし赤褐色を呈する。

2．脚部（34、35）では、下端の仕上げ真土の部分が比較的よくのこっているので、この部分の状態(例えば中型と巾置の関係）を窺うことができる。

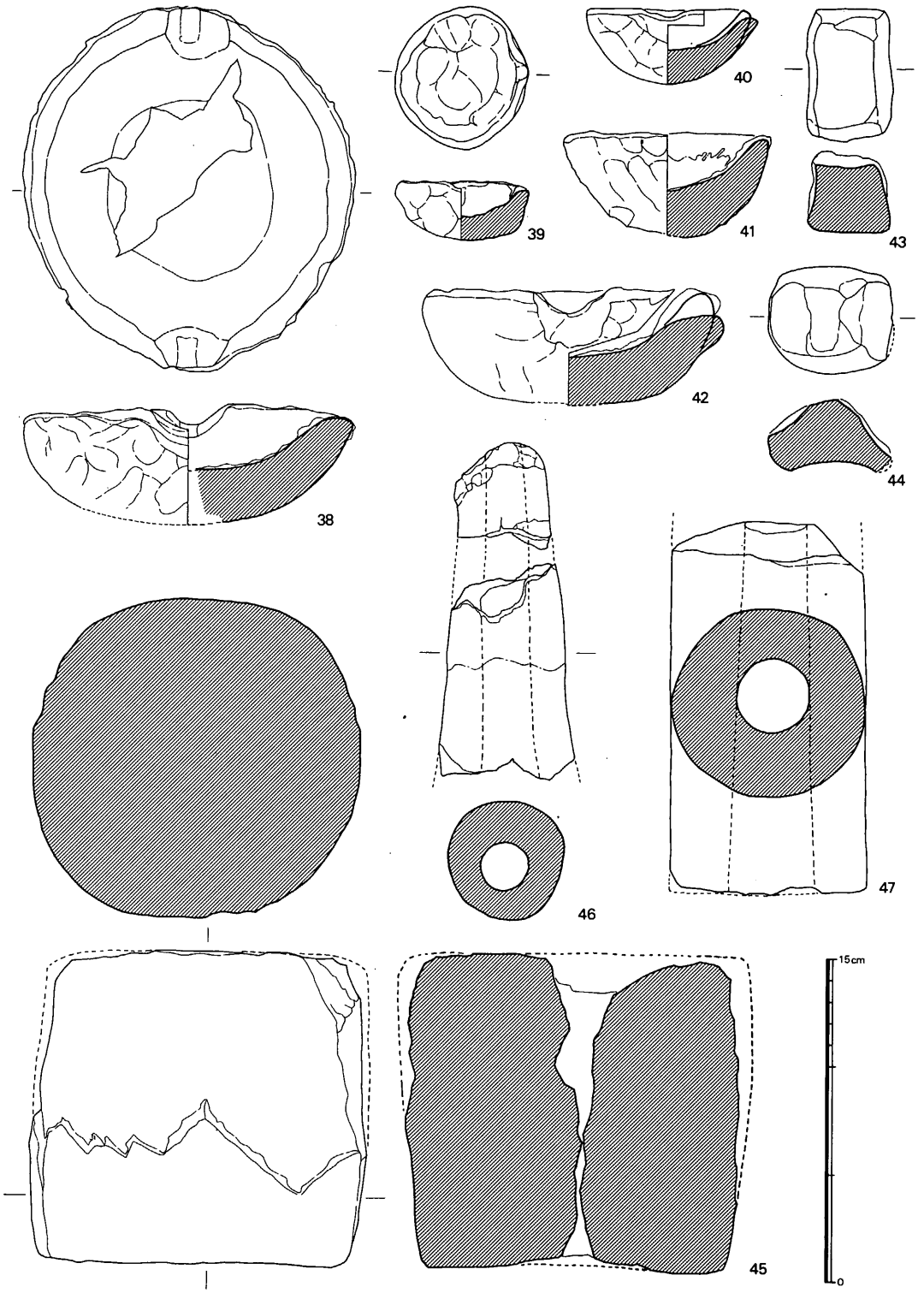
3．4箇とも鋳型を縦に合わせた合わせ面がのこっている。

4．下表で、法量は「現在の状態の最大箇所」。単位はcm。



第59図　鋳型実測図 (9)

番号	のこっている部分	法量 縦	横	厚	対の型との合わせ面ののこる箇所	その他
34	脚部から胴部上方	17.5	15.0	腰部 4.5 胴部 2.0	右側上・下 左側　下端	6片を接合
35	脚部から胴部上方	17.7	16.0	胴部1.5～1.8 脚部 2.3	右側　下 左側　下	4片を接合
36	口辺から胴部上方	12.0	12.8	頸部 4.1 口辺 3.0 肩部 1.7	右側　上 左側　下	3片を接合
37	口辺から頸部上方	13.0	8.5	頸部 4.8 口辺 2.8	右側　上 左側　下	2片を接合



第60図　鋳造関係遺物実測図

指摘されるところである(『前掲書』ほか石田茂作氏著録)。

華瓶の底径と口径—これらの鋳型の華瓶では、底径に対して口径が非常に小さい。口径がやや小、というのが華瓶の通形のようであるが、これは前掲書掲載の諸遺品に徴しても過小である。華瓶の大形化とともに、口径の割に底径がより大きくなることもまた指摘されている。ただ、それを具体的に知る参考資料は公けにされていない。

以上、これらの鋳型の華瓶は、その推定される大きさと部分的な形からだけいえば、鎌倉後半以降、一般の華瓶が辿る変遷の過程のなかにある、といってよかろうか。いずれもＳＫ3295出土である。

坩堝（38～42）

鋳造にさいし、炉で溶かした各種の鉱物を受け、溶けた湯を鋳型に流し込む道具。いずれも砂粒を多く含む粗土を用い、手捏でつくられる。38は口径16.8cm、残存高5.1cm、底部付近の器肉厚さ2.4cm、深さ2.7cm。湯を差す注口は、相対する２ケ所に設ける。内面と外縁部分には、ガラス化した溶解物が厚く付着し多数の気泡がみられる。外面には二次的火熱を受けた形跡は認められない。39は小形のもので、口径5.4cm、高さ2.7cmをはかる。湯差は片口である。灰褐色の地肌に指頭痕が顕著にみられるが、溶解物はまったく付着していない。あるいは別の用途の為のものか。40は完形の小形品で、口径7.8cm、高さ3.5cmをはかる。胎土には砂粒の他に籾殻が混入。内面に溶解物が薄く付着し、外面底部に火熱を加えた痕跡が認められる。片口のもの。41は約¼近くを欠損する。口径9.9cm、高さ4.6cm。注口は２ケ所に設ける。内面に溶解物が付着、外面底部に２次的火熱を受けている。42は約¼が残存するのみである。復原口径13.3cm、残存高5.1cm。外底部はやや平坦である。内面に厚く溶解物が付着する。これらの坩堝内面に付着した溶解物は、赤褐色、黒色、緑色を呈する。銅の鋳造品製作に用いられたものか。38はＳＸ3375、39はＳＤ3217、40・41はＳＸ3313、42はＳＫ3295から出土。

小型手捏土製品（43・44）

ともに鋳造に関する道具の一種と考えられる手捏の土製品。胎土は砂粒が多い粗土である。43は長方体に整え、器面を平滑にする。上面は凹状にくぼむ。44も同様の胎土で両側面と底面を強くくぼませて、断面が琴柱状となる。いずれも黒色砂質土層出土。

鞴羽口（46・47）

46は鞴に取り付く先端部分のもの。先端にかけて徐々にすぼまる。同一個体と考えられる２片が出土。残存長15.5cm、先端部の内径1.8cm。胎土は砂粒を多く含む粗いものだが、外表はナデて平滑にされる。先端から約1.0cmの範囲は二次的火熱を受けて黒青色に変色し、それより後方は素焼き本来の淡赤褐色を呈す。先端部にガラス化した溶解物が付着。47は円筒状のもので、先端部分を欠損する。この欠損部分のみは二次的火熱を受け青色を呈す。一方の端部は比較的残りが良く、タタラ送風口に取り付く端部と思われる。残存長17.1cm、径9.1cm、内孔径3.3

cm、46はＳＤ3300、47は暗褐色土層出土。

坩台（45・ａ）

いずれもるつぼ台である。45はやや胴張りがある。小石の多く混った極めて粗い土で作り、表面には細密な鋳物土がかけられていたようである。いま上面と側面上方をのこして粗土、鋳物土とも剝落している。上面径13.6～14.0cm、高14.0cm、３片に破損。ａは中央に径1.7cmの円孔が通る。側面に指頭痕が顕著、底面は平坦である。径11.3cm、残存高6.7cm。黒色砂質土層出土。

注：１．鋳型の「溶湯（即ち製品）に接する面）は省略して「鋳面」と記した。
２．鋳物土は「粗真土」、「中真土」、「仕上げ真土」の三層からなるもの、あるいは二層だけのものもあるように見受けられ、その間の識別が困難であるので、原則として「粗真土」、「仕上げ真土」で記述し、必要ある場合は「中真土」の語を用いた。
３．文中「上、下、左、右」と記しているのは「掲載の実測図に向って」の謂である。

小結

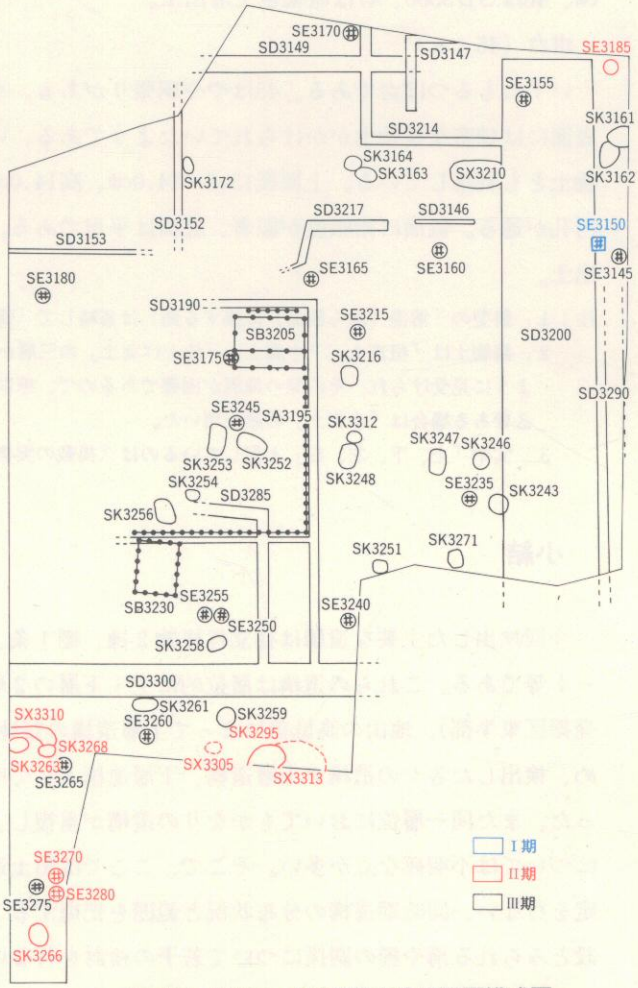
今回検出した主要な遺構は掘立柱建物２棟、柵１条、井戸19基、それに多数の溝、土壙、ピット等である。これらの遺構は層位的に上・下層の２層にわたって構築されているが（とくに発掘区東半部）、地山の高低差によって上層遺構の整地層が部分的で、かつ一定していないため、検出した各々の遺構を上層遺構、下層遺構として明確に峻別することはきわめて困難であった。また同一層位においてもかなりの遺構が重複し、錯綜しているため、各遺構の先後関係については不明確な点が多い。そこで、ここでは出土遺物を中心に主要遺構の大まかな年代比定を行ない、同時期遺構の分布状況と範囲を把握することによって、その傾向や、区画する施設とみられる溝や柵の関係について若干の検討を行ない結びとしたい。

今回検出した遺構を記述の便宜上、Ⅰ～Ⅲ期に大きく分け、さらにⅡ期を２小期、Ⅲ期を３小期に分けて検討を進めたい。Ⅰ期を９・10世紀代、Ⅱ－１期を11・12世紀代、Ⅱ－２期を13世紀前半代、Ⅲ－１期を13世紀後半代、Ⅲ－２期を14世紀代、Ⅲ－３期を15・16世紀代として年代的に位置付ける。各期別による主要遺構を表に記し、その期別による遺構の分布状況については第61図に概念図として示した。

Ⅰ期　この期に属する遺構として明確に捉えられるのは井戸ＳＥ3150のみである。この井戸は９世紀中頃～後半代のもので、本調査域ではこの期およびこの期以前の遺構もこの井戸の他は存在しない。

Ⅱ期　この期の遺構は東西溝ＳＤ3300の南側に集中してみられる。この溝の北側地域では発掘区の東北隅部で検出したＳＥ3185とした一種の溜枡様の遺構が存するだけである。ＳＫ3295は鋳型が出土した土壙であり、この周辺から多数の鋳型片が出土している。

Ⅲ期　この地域において大きな画期がみられる時期である。Ⅱ期ではＳＤ3300の北側地域では遺構の存在がほとんどなかったが、この期になって溝や柵で囲まれた建物や、井戸・土壙等が出現し、徐々に増加し、14世紀代になって最盛期を迎える。溝および柵で囲まれた地域は大まかに６前後のブロックに分けられる。溝は「コ」字状や「Ｌ」字状などを呈するもので、四周を囲繞する形の完結した形の溝はなく、中途で終息ないし、行方が不明瞭となるものがほとんどである。ＳＤ3290とＳＤ3200はＳＤ3290が層位的に後出するが、いずれも東辺部を大きく区画する溝である。またＳＤ3300は南辺部を大区画する溝である。この大区画の中に先述の小溝で画された６前後の小区画のブロックがある。溝と建物がセットで確認できたのは２ブロックだけで、他ブロックでは建物として摑み得ていない。ＳＤ3190とＳＡ3195で画されたＳＢ3205は大区画のほぼ中央部の位置を占めており、主要な地域であったことを窺い知る。これに後出するブロックとしてＳＤ3285で画された内部にはＳＢ3230が存するが、南辺部のＳＤ3300で画される形となっている。



第61図　第109・111次調査遺構配置模式図

６ブロック前後の小区画がどのような変遷をもち、どのような関連を有するのかは今回必ずしも詳らかにはし得なかったが、区画された内部には一見してピットが密集している所があり、建物の想定が可能な箇所がいくつかみられる。この点については今後に検討の余地を残している。

以上、各期についてその概略を記した。本調査では９世紀後半～15世紀代の遺構を検出した

が、古代の観世音寺と直接関連づけ得るような遺構はきわめて少なく、この調査結果をもって結論を得るには至らなかったが、いくつかの示唆に富む成果があった。その第１点はＩ期ないしそれ以前に建物跡が存しないことは南門のこの地域が一種の空閑的なものであったこと。第２点はＳＤ3300の掘削時期は明らかでないが、第II期の遺構がこの溝を境として南側に集中しており、この溝によって何らかの制約を受けていたとみられ、この北側地域に遺構が出現してくるのは第III期すなわち13世紀後半代になってからである。このことは古代観世音寺の寺域との関連を窺い得る。第３点として、現在の参道が古くからあった可能性はＳＤ3200・3290が現在の参道に並行していることからうかがい知れる。そしてこの溝は南門推定位置付近から始まっており、そこに何らかの規制を予測できること等、本次調査は今後の古代末～中世の観世音寺の解明に大きな手掛りとなる資料を得ると同時に多くの問題を提起することとなった。

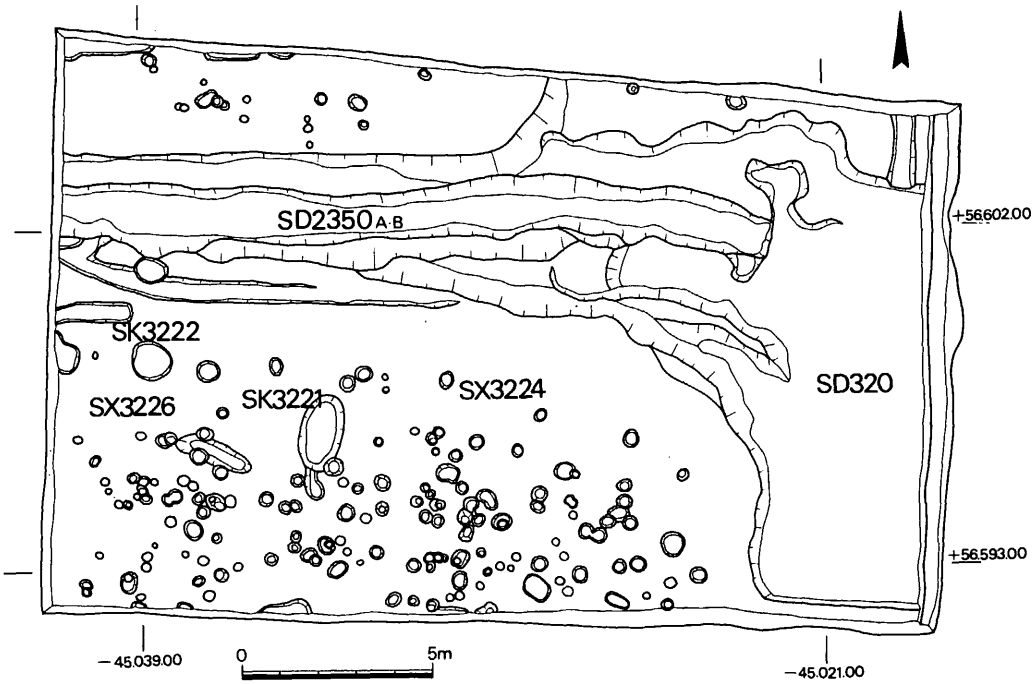
主要遺構 / 期別		建物、柵、井戸、溝、土壙、その他
Ⅰ　期		ＳＥ3150
II　期	1	ＳＥ3270、ＳＥ3280、ＳＤ3241、ＳＫ3263、ＳＫ3266、ＳＫ3268 ＳＫ3295、ＳＸ3289、ＳＸ3310
	2	ＳＥ3185、ＳＸ3305、ＳＸ3313
III　期	1	ＳＢ3205、ＳＡ3195、ＳＥ3155、ＳＥ3240、ＳＥ3245、ＳＥ3265 ＳＤ3153、ＳＤ3190、ＳＫ3161、ＳＫ3164、ＳＫ3172、ＳＫ3247 ＳＫ3248、ＳＫ3251、ＳＫ3252、ＳＫ3253、ＳＫ3254、ＳＫ3256 ＳＫ3259、ＳＫ3261、ＳＫ3271、ＳＫ3312、ＳＸ3306
	2	ＳＢ3230、ＳＥ3160、ＳＥ3180、ＳＥ3215、ＳＥ3235、ＳＥ3275 ＳＤ3147、ＳＤ3149、ＳＤ3200、ＳＤ3214、ＳＤ3217、ＳＤ3285 ＳＤ3300、ＳＫ3162、ＳＫ3163、ＳＫ3216、ＳＫ3243、ＳＫ3246 ＳＫ3258、ＳＫ3261
	3	ＳＤ3146、ＳＤ3152、ＳＤ3290、ＳＸ3277、ＳＸ3279

3　第110次調査

本次調査は住宅建設に伴う事前の調査である。本調査地周辺の地域については、昭和54年度から開始された観世音寺地区土地区画整理事業に伴う調査として、かなりの面積を既に調査しており、今回の調査地は数少ない未調査地域となっていた。今回の調査の主目的は隣接地の調査、第14次調査(昭和46年度および59年度実施)と第76次調査（昭和56年度実施）で検出された南北溝ＳＤ320と、昭和59年度に実施した第92次調査検出の東西溝ＳＤ2350Ａとの交わる地域になり、その状況の把握にあった。調査地は蔵司跡の南方約180ｍに位置し、県道吉木ー関屋線から南に延びる道路に接した地域で、南北15ｍ×東西24ｍ(約350㎡)の発掘区を設定し調査した。調査は昭和62年11月30日に開始し同年12月14日に終了した。地番は太宰府市大字観世音寺字大楠332－2番地である。

検出遺構

検出した主要な遺構は溝２条、土壙2基、それにピット群である。当地域は既に土地区画整理事業が終了しており、旧表土は除去され、整地土である真砂土を除去すると、床土がありその下に遺物包含層である灰褐色土層が認められる。この灰褐色土層は発掘区南方に向って厚くなり、



第62図　第110次調査遺構配置図

約30cm程あり、北側ではほとんど認められず、床土除去後遺構面となる。また発掘区東側では灰褐色土層の下層で暗灰色粘質土層が認められる。発掘区北側よりで東西方向溝ＳＤ2350を検出、さらに東側よりで暗灰色粘質土層除去後溝ＳＤ320を検出した。

ＳＤ2350とＳＤ320で画された区域では、浅い小土壙および、径20cm～30cm前後のピット群を検出したのみで、掘立柱建物の柱穴等の遺構は認められなかった。

溝

SD320　発掘区の東側で検出したもので、今回は西肩部の位置をプランで確認するに止め、溝の発掘は行なわなかった。前述したように過去３回の調査によって、幅約12ｍ、長さ約153ｍ分を確認しており、今回調査の結果も、その延長上にあることを再確認した。

SD2350Ａ・Ｂ　発掘区北側よりで検出した東西方向の溝である。この溝は新・旧二時期があり、溝の東端はＳＤ320と直交する形となる。これは道路を隔てた西側隣接地の第92次調査（昭和59年度）で、長さ約33ｍ分検出し、さらに第83次調査（昭和58年度）で約68ｍ分を検出しており、位置関係から、この溝の延長上にあり、一連の溝であることが明らかとなった。旧期の溝ＳＤ3220Ａは幅1.20ｍ～2.0ｍ、深さ0.40ｍ～0.50ｍで、西から東へ向う流路をとる。新期の溝ＳＤ3220Ｂはほぼ同位置で、幅が約2.8ｍで広くなっている。ＳＤ320との切り合いはなく、ＳＤ320とある時期に同時に存在していたとみられる。

出土遺物

SD2350Ａ出土土器（第３図、図版28）

土師器

高台付皿（１）　口径12.8cm、器高1.6cmの有高台の皿である。全体にヨコナデ調整で、外底にヘラ切り痕と板状圧痕を残す。

SX3224出土土器（第３図、図版28）

ＳＤ2350の南側に位置するピットから出土した土器である。

土師器

椀（２）　口径16.0cm、器高6.8cm、体部に丸味をもつ、高台は外に開いている。淡茶白色を呈する軟質の土器である。

黒色土器

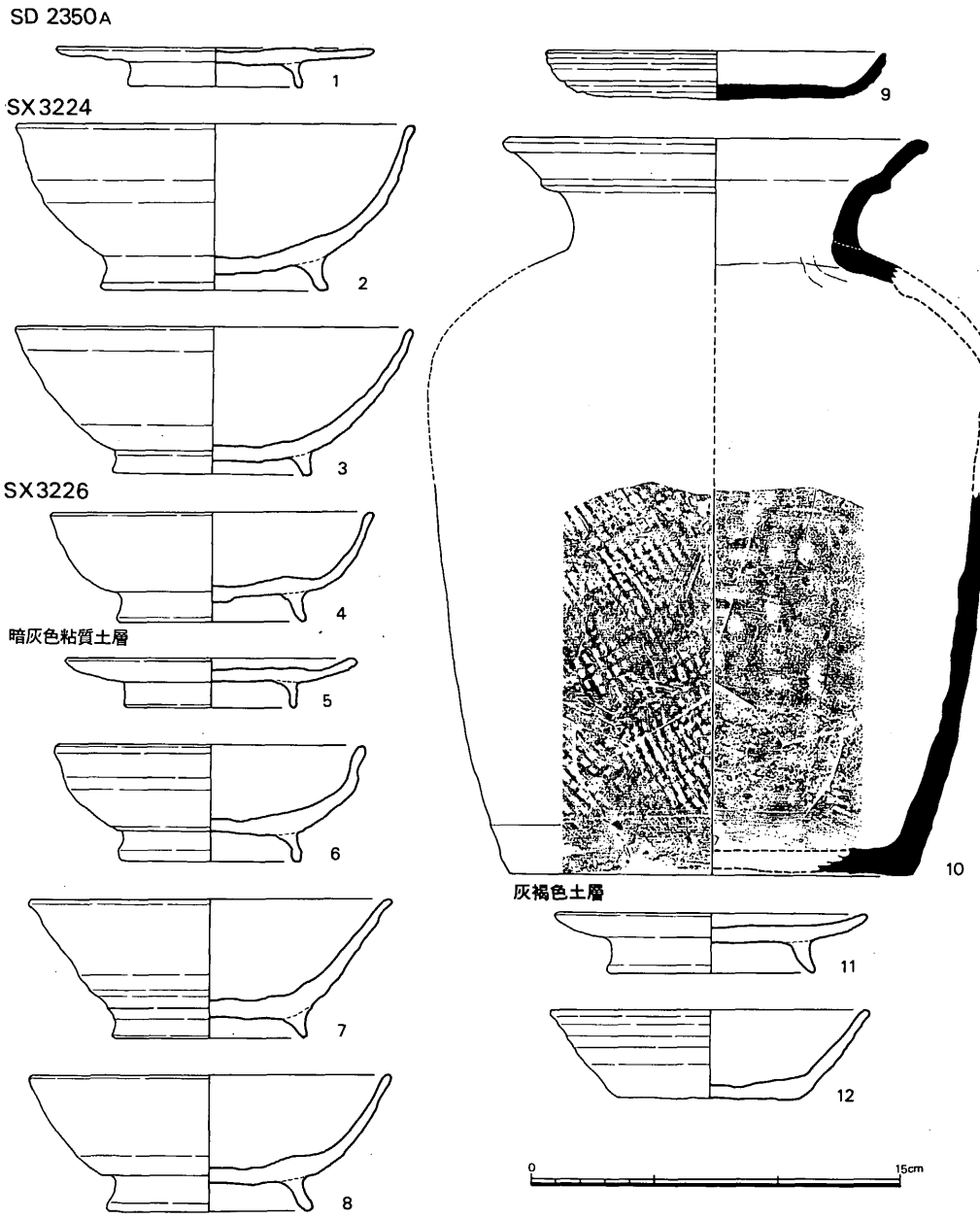
椀（３）　内面を黒色に燻した黒色土器Ａ類の椀である。口径16.0cm、器高6.1cm。内彎気味の体部に、低い高台を貼付ける。内面は黒色に燻した後ヘラミガキで仕上げている。外面は茶褐色の軟質の土器である。

SX3226出土土器（第３図、図版28）

ＳＤ2350の南側に位置し、発掘区西南隅部で検出したピットから出土した。

土師器

椀（４）　口径13.0cm、器高4.5cmの外に開く高台を貼付し、底部にヘラ切り痕と深い板状痕を残す。淡茶白色を呈し軟質である。



第63図　SD2350A、SX3224・3226、暗灰色粘質土層、灰褐色土層出土土器実測図

暗灰色粘質土層出土土器（第３図、図版28）

須恵器

皿（９）　口径13.8cm、器高2.0cm。体部、口縁部はヨコナデで、外面にはヨコナデの痕跡が明瞭に残る。内底はナデ調整し、外底はヘラ切り未調整である。胎土は精良で、焼成も良好である。

土師器

高台付皿（５）　口径11.8cm、器高2.0cm。外底部にヘラ切り痕を残す。

椀（６～８）　６は口縁部を外反させる椀である。口径12.5cm、器高4.8cm。外底にヘラ切り痕と板状圧痕を残す。７は直線的な体部が外傾する椀で、底部と体部との境いに外に開く高台を貼付する。口径14.6cm、器高5.7cm。内面に油煙が付着する。８は口径14.6cm、器高5.6cm。

灰褐色土層出土土器（第３図、図版28）

須恵器

壺（10）　肩部を欠失しており、直接に接合しないが、熊本県北山浦窯出土例を参考に図上復原を行った。口径17.2cm、器高30.1cm。口縁部は朝顔形に開く。外面は頸部直下から正格子の叩きを行った後に、部分的にナデ消している。また、体部下位(底部付近)はヘラ削り調整をする。体部の内面はヨコナデであるが、布目痕と指頭痕と思われる凹凸がみられる。内面の体部下位と底部には白色の固形化した石灰状の付着物がある。底部の内面はほとんどが剥離し欠失して不明であるが、外面はヘラ切り未調整である。

土師器

高台付皿（11）口径12.6cm、器高2.5cm。外に開く高台を有する皿である。外底部にヘラ切り痕を残す。

杯（12）　口径12.8cm、器高3.7cm。外傾する体部はほぼ直線的である。外底部にはヘラ切り痕と板状圧痕を有する。

瓦類

この調査で出土した瓦類は少量の丸・平瓦の他に軒丸瓦８点、軒平瓦５点、文字瓦７点である。これらは東西溝ＳＤ2350の下層および遺構面を覆う暗灰色粘土層、灰褐色土層から出土した。軒丸瓦には老司II式とその系統を引くもの、および鴻臚館式などがある。軒平瓦では老司II式がある。文字瓦には「賀茂」、「佐」、「平井」、「平井瓦」銘などのものがある。

小結

今回の調査で検出した主要な遺構は、東西溝ＳＤ2350と南北溝ＳＤ320である。ＳＤ2350Ａ・Ｂは第92次調査（昭和59年度）で検出したＳＤ2350Ａ・Ｂと位置関係から一連の溝と考えられる。これはＳＤ320と直交し、これに流れ込んでいる。一方、昭和58年度に実施した第83次調査

検出の東西溝ＳＤ2350とも位置的に合致し、このことから一連の計画に基づいて掘削されたと考えられる。ＳＤ2350Ａ・Ｂは第92次調査と埋没時期についても、10世紀代と同じであり、これまで不明であったＳＤ320との関係についても、今回の調査によって連続することが判明した。

そして、ＳＤ320については、プランのみの確認であったが、今回の調査により、ほぼ153ｍ分に近い範囲を確認したことになる。

4　第112次調査

調査の契機は、個人住宅建設の届出がなされたことによる。この地は学校院北辺部にあたり、第18次調査地の西、第37次調査地の北に位置し、建物等の検出が十分に予想された。調査時には既存の建物があり、対象地全域の調査は無理との判断から、約78㎡を対象地とした。地番は太宰府市大字学業215である。

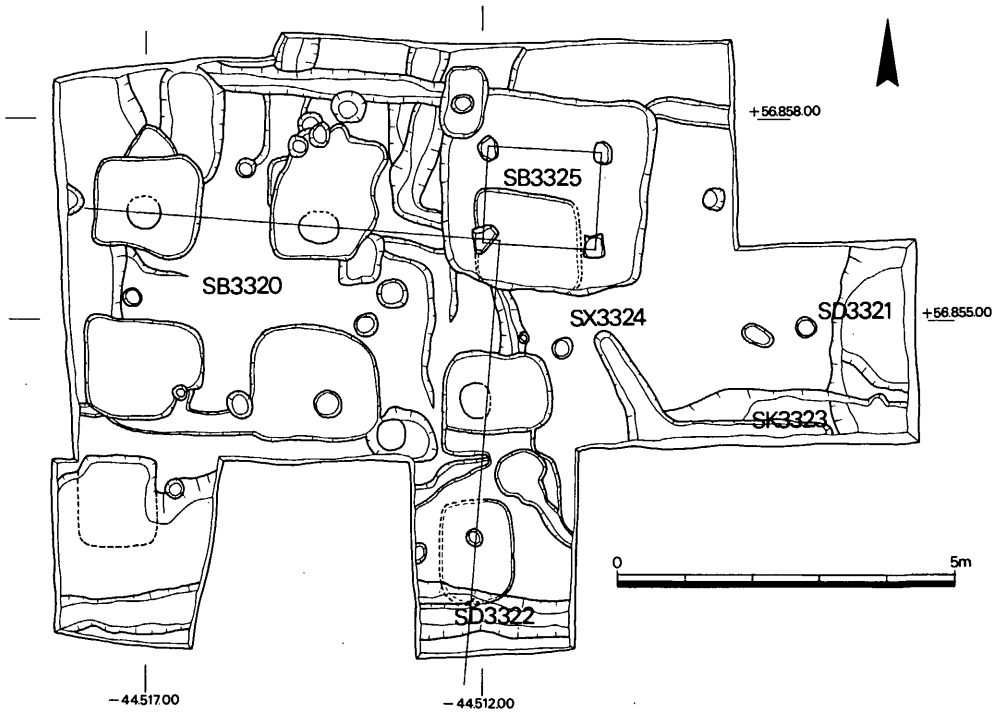
昭和53年１月27日に調査を開始し、掘立柱建物１棟、竪穴式建物１棟、土壙等を検出、調査し、同年２月２日に終了した。

検出遺構

掘立柱建物

SB3320　ＳＢ3325とＳＤ3322と先後関係があり、ＳＢ3320が先行する。２間以上×２間以上の総柱建物であるが、調査範囲が狭いため方位等は明らかでない。柱掘形は1.5ｍから1.9ｍ程ある大きなもので、柱痕跡は径0.5ｍである。

竪穴式建物

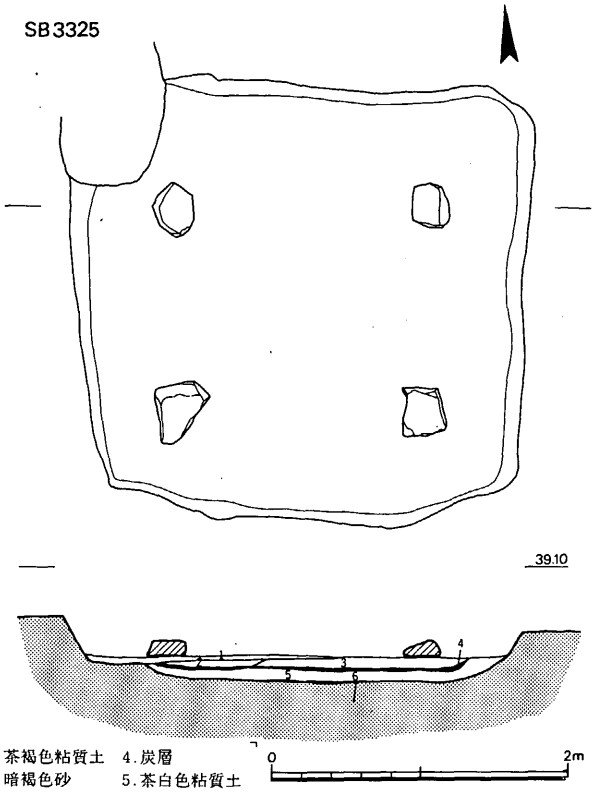


第64図　第112次調査遺構配置図

SB3325　約３ｍ×３ｍの正方形の竪穴である。炭を2層挟んで約0.2ｍ貼床をしている。この貼床の上に0.3ｍの礎石を4個配し、東西1.7ｍ、南北1.4ｍを測る。貼床中から多くの土器、特に甕が出土し、それらは８世紀後半頃の特徴を示している。

溝

SD3322　発掘区南端で東西に走る。幅0.6ｍを測り、西から東へ流れる素掘りの小溝である。溝中から多くの土器が出土した。



第65図　SB3325実測図

出土遺物

SB3325出土土器（第66図）

須恵器

杯（１・２）　１は口径11.6cm、器高3.2cm、2は口径17.8cm、器高5.4cmである。底部はヘラ切り離しのままで再調整はない。貼床出土。

皿（３）　口径19.7cm、器高2.3cmである。底部はヘラ切り離しのままである。貼床から出土した。

甕（４）　口径30.5cmを測り、底部を欠失する。体部外面は格子目叩き、内面は青海当具痕を残す。焼成は軟質で、灰白色を呈する。

SD3322出土土器（第67図、図版83）

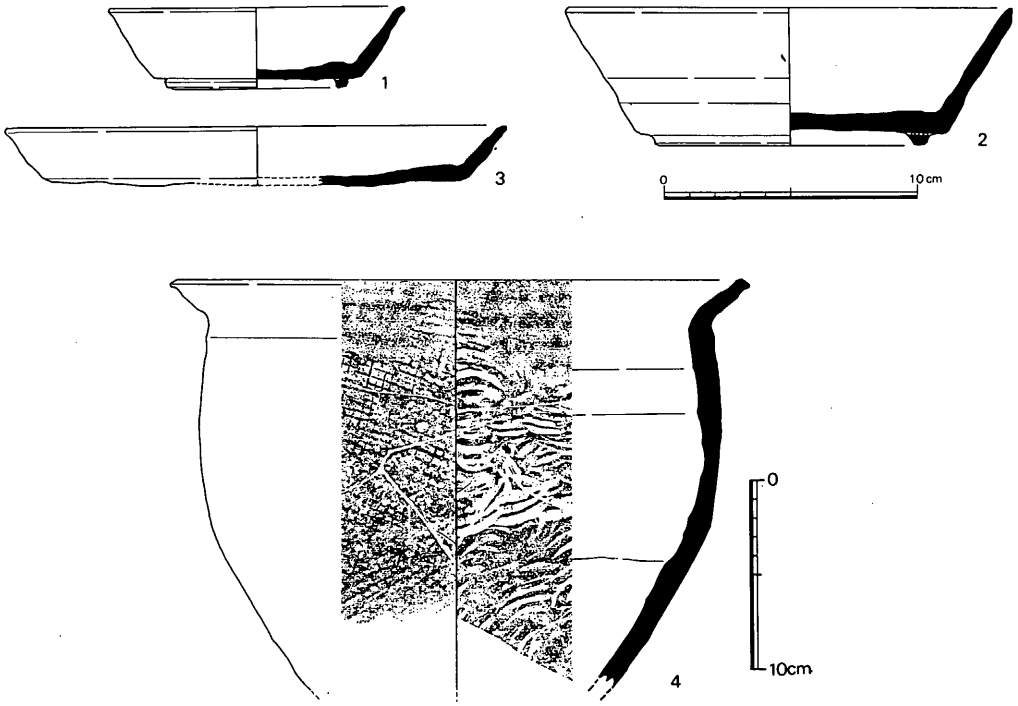
須恵器

蓋（１～３）　２の縁部は若干屈曲する。１・２の外天井部を回転ヘラ削りするが、３はヘラ切り離しのままである。

杯（４～６）　すべて外底部はヘラ切り離しのままで、６の高台畳付部分に板状圧痕がみられる。

土師器

杯（７～14）　外底部は全て回転ヘラ削りである。７はヨコナデ、ナデ仕上げであるが、他は内外面共にヘラミガキを施す。14は７～13に比して、器高が高く、しかも体部の立ち上がりが急であり、古期の特徴を有する。８の外底部には「×」の線刻がある。



第66図　SB3325出土土器実測図

椀（15・16）　外底部に再調整はない。内外ともにヘラミガキをしている。

皿（17・18）　両者ともに外底部は回転ヘラ削りである。体部内外面共にヘラミガキをしている。外底部に８と同様な線刻がある。

溝出土の土器の代表的なものを図示した。土師器杯14を除いて、８世紀後半代に属するといえよう。

赤褐色粘質土層出土土器（第67図、図版83）

発掘区中央東部に遺構を覆って堆積した層から出土した土器である。

須恵器

蓋（19・20）　19の外天井部は回転ヘラ削り調整、20は未調整である。

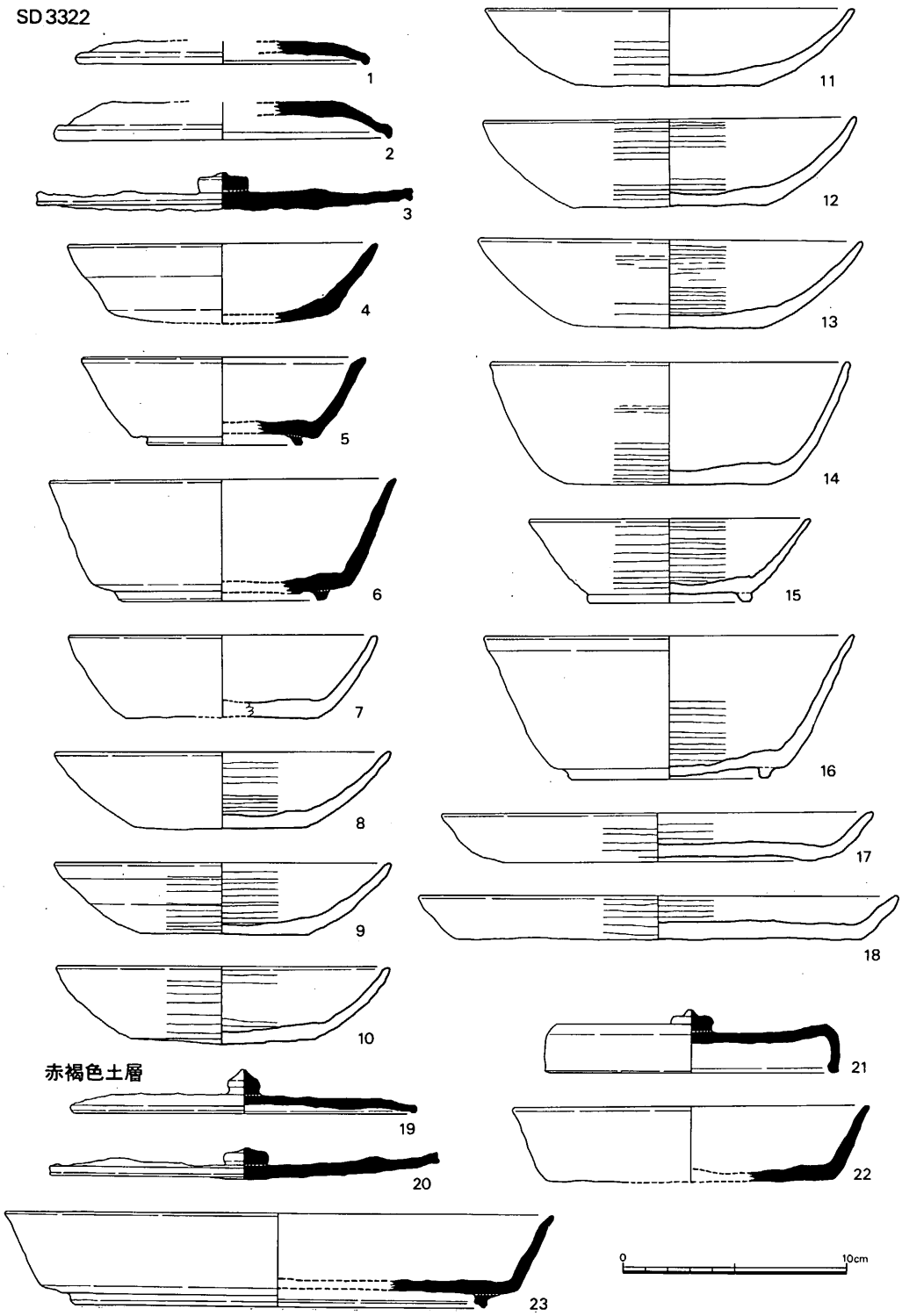
杯（22）　外底部はヘラ切り離しのままで再調整はない。

盤（23）　外底部は回転ヘラ削りである。

壺蓋（21）　薬壺形壺の蓋で、外天井部は回転ヘラ削りである。

瓦塼類（第68図）

今回の調査で出土した瓦類は丸・平瓦の小片が若干量出土したのみである。また発掘南側で検出したＳＤ3322からは文様塼が出土した。長方形の唐花文塼で中央の蓮華文を中心に唐花文がめぐり、四隅には覗唐花文を配する。またこれらの文様の間は水波文を一面に配している。

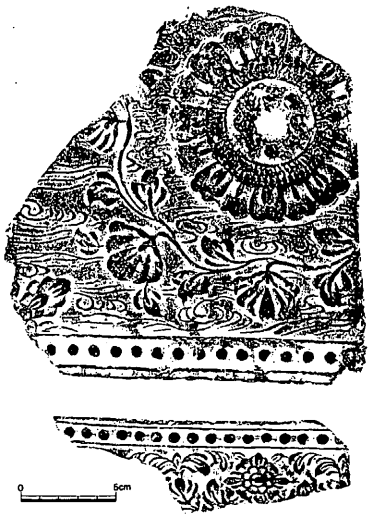


第67図　SD3322、赤褐色土層出土土器実測図

側面にも繊細な唐花文を配している。

小結

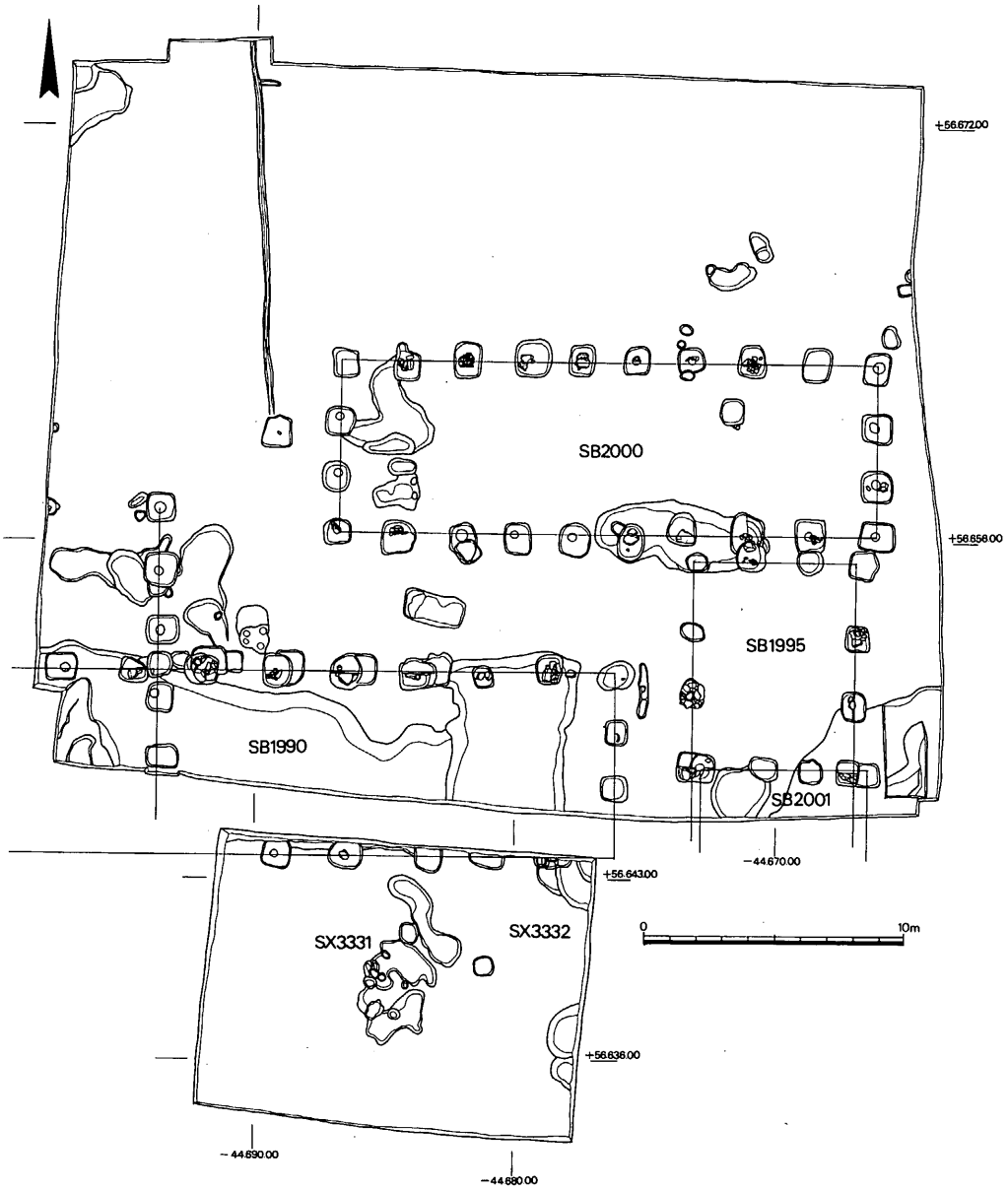
学校院地区中央部では、これまでに第18・37次調査として2回調査を実施して来た。第18次調査での顕著な遺構は井戸ＳＥ400、1基だけであった。この井戸から出土した土器は大宰府の９世紀前半代の標式土器としている。第37次調査では、南北廂を有する建物を始め計４棟を検出している。しかし、いずれの建物も平安時代に属し、学校院の初見史料である、天応元年（781）の太政官符「……府学校六国学生医生算生有二百余人……」にみられる時期の建物跡は未確認であった。本次調査により、学校院中央部それも北端部にまで、太政官符にみられる時期には建物が配されていたことが確認されたことは大きな成果であった。それに、竪穴式の建物も大宰府跡では初見であり、これも特筆されることである。学校院中央地区の調査はまだ一部であり将来が期待される。



第68図　SD3322出土文様塼拓影

幸いにして、地主との話し合いで、遺構を傷つけることのないように土盛工法をもって施工して頂くこととなった。

5．第114次調査



第69図　第75・114次調査遺構配置図

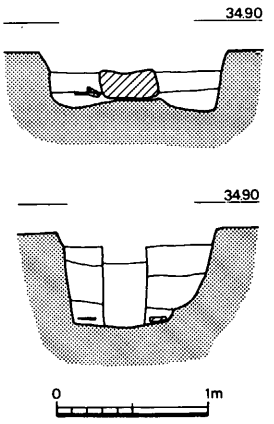
本調査は住宅建設にともなう事前調査である。調査地は政庁跡東側にある月山丘陵の南側で昭和56年度に行った第75次調査地の南隣接地である。また条坊復原案では左郭五条二坊の地にあたる。地番は太宰府市大字観世音寺字日吉255番地である。

検出遺構

調査の結果、検出した主な遺構は第75次調査で検出した掘立柱建物（ＳＢ1990）の未検出部分であった南側柱列の柱穴５個と土壙および粘土採掘壙と思われるものなどである。

掘立柱建物

SB1990　第75次調査では南北棟建物２棟、東西棟建物２棟を検出している。このうち発掘区南側で検出したこの建物は梁行２間分、桁行８間分を検出しただけで、南側柱列と西側妻の柱列は未検出であった。今回検出した柱穴はこの南側柱列の柱穴５個である。掘形はいずれも一辺が約1.0ｍ～1.2ｍ程度の隅丸方形である。西端の掘形埋土の断面には柱根痕跡がよく残っており、それによると柱の直径は30cm前後であったと思われる。また西端から２番目の掘形底部には30cm×30cm程度の石を礎板状に据えている。また東端部の掘形内には石と瓦などを詰めており、第75次調査の所見と一致している。この調査によって、この建物も他の３棟と同様に梁行が３間であることが明確となった。桁行は西側妻の柱穴が未検出であるが９間と推定される。また梁行、桁行の柱間寸法は第75次調査の際に、すでに明らかになっており、再度記すと桁行は中央５間分は各々2.7ｍ、その両側各２間分は各々9.55ｍである。梁行はいずれも2.2ｍである。



第70図　SB1990柱掘形断面図

その他の遺構

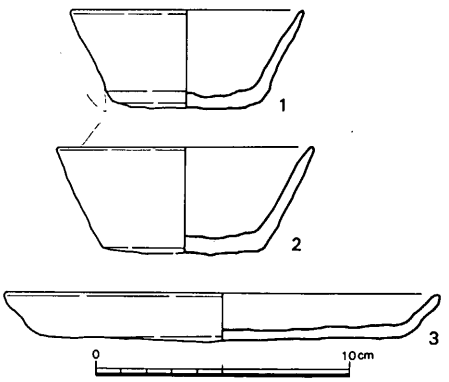
SX3332　発掘区東北隅で検出した。一部分を検出したのみで大部分は発掘区外に延びている。深さ約0.3m程度の比較的浅い土壙で、埋土には土師器、須恵器の破片を多く含んでいるが、大部分は小片で図示できるものはきわめて少い。

出土遺物

出土遺物は土師器、須恵器および丸・平瓦の破片で、これは主に柱掘形、土壙状ＳＫ3332および遺構面を覆う灰色砂質土層から出土した。

ＳＸ3332出土土器（第71図）

土師器



第71図　SX3332出土土器実測図

杯（１・２）　いずれも小形の杯で、１は口径9.2cm、器高3.9cm、底径5.9cm、２は口径10.0cm、器高4.3cm、底径6.3cmを測る。どちらも器面が風化しているため調整は観察できない。底部はヘラ切り離しのままである。胎土は小さな砂粒を若干含む。焼成はあまく、淡赤茶色を呈する。

皿（３）　口径17.0cm、器高2.1cm、底径14.1cmを測る。内、外面ともにヨコナデ調整、底部はヘラ切り離しのままである。胎土は精良。焼成は良好で淡赤茶色を呈する。

瓦類

主に掘立柱建物ＳＢ1990の柱掘形およびＳＸ3332から出土した。大半は丸・平瓦の小片で凸面の叩きは縄目のものが多い。柱掘形から出土した完形の丸瓦は全長38.6cm、玉縁長6.2cmで凸面は横方向のヘラナデによって丁寧に調整している。凹面は布目痕跡が顕著に残っている。両側縁はヘラケズリにより調整している。胎土は精良、焼成はややあまく黒色を呈する。

小結

今回の調査は昭和56年度に行った第75次調査の補足調査ともいうべきものである。検出した遺構もすでに明らかになっている掘立柱建物ＳＢ1990の柱穴であり、今回新たに検出した顕著な遺構もなく、結論として述べる事項はない。ここでは第75次調査の小結の一部を再録し、小結とする。

この地域で検出した建物は４棟であるが、すべて梁行は３間である。この梁行が３間の建物は大宰府史跡では数は少い。第15次調査（政庁跡回廊東北隅）で検出したＳＢ360と第77次調査（学校院東辺部）で検出したＳＢ700の2棟を始めとする。ＳＢ360は回廊基壇の下層から検出したもので、回廊の成立時期を８世紀初頭頃に考えており、したがって、この建物の時期が限定できる。またＳＢ700では柱穴から長頸壺が出土しており、その特徴から８世紀後半代と考えられる。

一方ＳＢ1990、ＳＢ2000などの柱穴から出土した瓦類はいずれも古い特徴を有したものばかりであり政庁第２期開始期前後頃のものである。さらに両者の主軸の振れが政庁第２期の建物の振れに近似していることなど、梁行３間の建物は古い時期に位置付けられ、この地域の建物群は政庁第２期の成立期と相前後した段階に造営されたものと考えられる。

別　表

番　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
SE3240（第109・111次調査）								
	皿a							
1	10	8.1	5.3	1.3		○		
2	11	8.4	5.8	1.4		○	○	
	皿b							
1	8	7.1	5.4	1.6		○	○	
2	9	7.5	6.3	1.6		○	○	○
	杯a							
1	13	12.9	9.0	2.7		○	○	○
2	14	13.0	9.2	3.1		○	○	○
3	15	13.1	7.4	2.9		○	○	○
4	16	13.4	7.4	2.9		○	○	○
5	17	13.6	8.7	2.6		○	○	○
	杯c							
1	12	12.5	9.0	3.1		○	○	○
SE3275								
	皿a							
1	23	7.5	5.7	1.3		○	○	○
2	24	7.8	5.8	1.4		○	○	○
3	25	8.0	6.0	1.0		○	○	○
4	26	8.1	6.3	1.0		○	○	○
5	27	8.4	5.4	1.2		○	○	○
6	28	8.7	6.0	1.1		○		
7	29	8.8	6.5	1.5		○	○	○
	杯a							
1	30	11.9	6.8	2.8		○	○	○
2	31	12.3	7.4	2.7		○	○	○
3	32	12.3	7.9	2.8		○	○	○
4	33	12.5	7.3	2.4		○	○	○
5	34	12.9	9.3	2.8		○	○	○
SD3147								
	杯a							
1	1	12.0	8.2	2.8		○	○	○
2	2	12.1	7.9	2.8		○	○	○
3	3	12.2	8.0	2.5		○	○	○
4	4	12.2	8.1	2.6		○	○	○
5	5	12.6	8.0	2.4		○	○	○
6	6	13.0	8.3	2.7		○	○	○
SD3153								
	皿a							
1	7	8.2	6.2	1.4		○	○	○
2	8	8.3	6.2	1.3		○	○	○
3	9	8.4	6.5	1.3		○	○	○

番　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
	杯a							
1	10	12.5	8.6	2.8		○	○	○
2	11	12.8	9.0	2.6		○	○	○
3	12	13.0	8.6	2.9		○	○	○
4	13	13.0	7.8	2.9		○	○	○
5	14	13.2	8.0	2.7		○	○	○
6	15	13.6	9.7	2.8		○	○	○
SD3190								
	皿a							
1	16	7.7	5.5	1.2		○	○	○
	杯a							
1	17	12.0	7.6	3.0		○	○	○
2	18	12.5	7.9	2.6		○	○	
3	19	12.6	8.1	2.9		○	○	○
4	20	13.1	8.6	2.9		○	○	○
5	21	13.1	8.3	3.0		○	○	○
6	22	13.2	7.9	2.9		○	○	
7	23	13.2	7.8	3.0		○	○	
8	24	13.3	8.2	3.0		○	○	○
9	25	13.4	9.4	2.9		○	○	○
10	26	13.4	7.7	3.4		○	○	
SE3200								
	皿a							
1	16	7.1	5.1	1.3		○	○	○
2	17	7.2	5.2	1.2		○	○	○
3	18	7.4	5.2	1.2		○	○	○
4	19	7.5	5.2	1.3		○	○	○
5	20	7.6	6.2	1.0		○	○	○
6	21	7.8	5.5	1.3		○	○	○
7	22	7.9	5.8	1.1		○	○	○
8	23	8.0	6.2	1.0		○	○	○
9	24	8.0	6.1	1.1		○	○	○
10	25	8.0	5.3	1.2		○	○	○
11	26	8.0	6.1	1.3		○	○	○
12	27	8.0	6.0	1.7		○	○	○
13	28	8.1	6.0	1.1		○	○	○
14	29	8.1	6.0	1.4		○	○	
15	30	8.2	6.5	1.0		○	○	○
16	31	8.2	6.1	1.2		○	○	○
17	32	8.2	6.1	1.4		○	○	○
18	33	8.4	6.1	1.0		○	○	○
19	34	8.4	7.2	1.0		○		
20	35	8.4	6.4	1.2		○	○	○
21	36	8.5	5.9	1.2		○	○	○
22	37	8.5	6.6	1.3		○	○	○

番　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
23	38	8.5	6.3	1.0		○	○	○
24	39	8.6	6.3	1.3		○	○	○
25	40	8.7	6.5	1.2		○	○	○
	Ⅲb							
1	1	5.6	3.2	2.0				
2	2	6.6	3.9	1.9		○	○	○
3	3	6.7	4.5	1.9		○	○	○
4	4	6.7	4.3	1.8		○	○	○
5	5	6.9	4.2	2.0		○	○	○
6	6	6.9	4.1	1.9		○	○	○
7	7	6.9	5.1	1.8		○	○	○
8	8	7.0	4.1	1.7		○	○	○
9	9	7.0	5.2	1.7		○	○	○
10	10	7.0	5.3	1.8		○	○	○
11	11	7.1	4.1	1.9		○	○	○
12	12	7.2	4.6	1.7		○	○	○
13	13	7.8	5.3	2.1		○	○	○
14	14	8.4	5.9	1.7		○	○	○
15	15	8.0	5.3	1.8		○	○	
	Ⅲc							
1	41	7.9	6.5	2.0		○	○	?
2	42	8.2	6.6	1.9		○	○	?
	杯a							
1	43	11.7	8.2	2.5		○	○	○
2	44	11.7	7.7	2.7		○	○	○
3	45	11.7	7.4	2.7		○	○	○
4	46	11.7	8.3	3.2		○	○	○
5	47	11.7	8.0	2.8		○	○	○
6	48	11.8	8.3	2.4		○	○	○
7	49	12.0	7.9	2.6		○	○	○
8	50	12.0	7.3	2.7		○	○	○
9	51	12.0	7.6	3.0		○	○	○
10	52	12.0	7.2	3.1		○		
11	53	12.1	7.7	2.5		○	○	○
12	54	12.1	7.6	2.7		○	○	
13	55	12.1	8.2	3.0		○	○	
14	56	12.2	8.5	2.5		○	○	○
15	57	12.2	7.7	2.5		○	○	○
16	58	12.2	8.2	2.5		○	○	○
17	59	12.2	7.5	2.6		○	○	
18	60	12.2	7.6	2.6		○	○	○
19	61	12.2	8.4	2.7		○	○	○
20	62	12.2	7.6	2.7		○	○	
21	63	12.2	7.4	2.7		○	○	○
22	64	12.2	8.4	2.9		○	○	○
23	65	12.2	7.4	3.0		○	○	
24	66	12.3	8.2	2.5		○	○	○

番　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
25	67	12.3	7.6	2.5		○	○	○
26	68	12.3	7.5	2.6		○	○	○
27	69	12.3	8.6	2.8		○	○	
28	70	12.3	7.8	2.7		○	○	○
29	71	12.4	7.4	2.7		○	○	○
30	72	12.4	7.8	2.7		○	○	○
31	73	12.4	8.0	2.9		○	○	○
32	74	12.5	7.6	2.7		○	○	○
33	75	12.5	7.8	2.9		○	○	○
34	76	12.5	8.2	2.9		○	○	○
35	77	12.5	7.6	3.0		○	○	○
36	78	12.6	8.2	2.5		○	○	○
37	79	12.6	8.0	2.6		○	○	○
38	80	12.6	7.3	2.8		○	○	○
39	81	12.7	9.2	2.5		○	○	○
40	82	12.7	7.9	2.9		○	○	○
41	83	12.8	8.1	2.8		○	○	○
42	84	12.8	8.0	2.8		○	○	○
43	85	12.9	8.9	2.7		○	○	○
44	86	13.1	7.4	2.7		○	○	○
45	87	13.1	8.8	3.0		○	○	○
46	88	13.1	7.9	3.1		○	○	○
47	89	13.2	7.7	3.0		○	○	○
48	90	13.2	8.3	3.2		○	○	○
49	91	13.2	8.3	2.8		○	○	○
50	92	13.4	8.1	3.2		○	○	○
51	14	15.3	9.5	3.4		○	○	○
52	95	16.4	11.2	3.2		○	○	
	杯b							
1	93	14.0	8.3	3.4		○	○	
	杯c							
1	96	15.4	9.8	5.0		○	○	
SD3214								
	杯a							
1	27	12.1	7.4	2.6		○	○	○
2	28	12.4	8.5	2.8		○	○	○
3	29	12.4	8.1	2.6		○	○	○
4	30	12.8	8.4	3.2		○	○	
SD3217								
	杯b							
1	1	12.1	6.0	2.9		○	○	○
2	2	12.2	6.8	3.0		○	○	
3	3	12.3	7.0	3.2		○	○	○
4	4	12.4	7.1	2.9		○	○	○
5	5	13.0	7.3	3.2		○	○	○

番　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
6	6	13.1	7.1	3.4		○	○	○
7	7	13.4	8.3	3.0		○	○	○
8	8	13.4	7.4	3.4		○	○	○
9	9	14.0	7.6	3.4		○	○	○
SD3231								
	Ⅲa							
1	31	7.9	5.4	1.2		○	○	○
2	32	8.1	6.0	1.1		○	○	○
3	33	8.5	6.5	1.2		○	○	○
	杯a							
1	34	12.0	7.7	2.5		○	○	
2	35	12.7	7.9	2.7		○	○	○
SD3290								
	Ⅲa							
1	7	8.1	5.8	1.3		○	○	○
2	8	9.1	6.1	1.4		○	○	○
	Ⅲb							
1	6	6.9	4.5	1.7		○	○	○
	杯a							
1	9	12.5	7.7	2.8		○	○	○
2	10	12.6	8.3	2.7		○	○	○
3	11	13.2	9.0	2.6		○	○	○
4	12	13.5	8.8	2.8		○	○	○
5	13	13.6	9.3	2.7		○	○	○
SD3300								
	Ⅲa							
1	17	7.7	6.4	1.2		○	○	○
2	18	7.9	5.7	1.3		○	○	
3	19	8.1	5.8	1.1		○	○	○
4	20	9.1	6.3	1.2		○	○	○
5	21	9.5	7.1	1.1		○	○	○
	Ⅲb							
1	15	7.0	5.2	1.8		○	○	○
2	16	7.2	6.0	2.0		○	○	○
	杯a							
1	23	11.6	7.2	2.6		○	○	○
2	24	12.2	8.0	2.8		○	○	○
3	25	12.3	7.5	2.6		○	○	○
4	26	12.5	8.3	2.6		○	○	○
5	27	12.8	8.3	2.6		○	○	○
6	28	14.5	9.4	3.0		○	○	
	杯c							
1	22	10.9	7.0	3.9		○	○	○

番　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
SK3246								
	Ⅲa							
1	12	7.0	4.9	1.3		○	○	○
2	13	7.4	5.6	1.3		○	○	○
3	14	7.4	5.2	1.1		○	○	○
4	15	7.6	5.4	1.2		○	○	○
5	16	7.6	5.6	1.3		○	○	○
6	17	7.7	5.7	1.2		○	○	
7	18	7.7	5.3	1.5		○	○	○
8	19	8.0	6.0	1.2		○	○	○
9	20	8.0	6.0	1.3		○	○	○
10	21	8.1	6.2	1.1		○	○	○
11	22	8.2	5.9	1.3		○	○	
12	23	8.2	5.9	1.0		○	○	○
13	24	8.3	6.4	1.2		○	○	○
14	25	8.4	6.0	1.2		○	○	○
15	26	8.3	5.6	1.3		○	○	○
16	27	8.5	6.0	1.2		○	○	○
17	28	8.5	6.4	1.2		○	○	
	杯a							
1	29	11.6	7.3	2.7		○	○	
2	30	12.1	7.7	2.5		○	○	
3	31	12.2	7.8	2.5		○	○	○
4	32	12.3	7.6	2.8		○	?	
5	33	12.3	7.1	2.5		○	○	○
6	34	12.3	7.6	2.8		○	○	
7	35	12.6	7.8	3.2		○	○	○
8	36	12.8	8.0	2.6		○	○	○
9	37	13.0	8.2	2.7		○	○	○
10	38	13.0	8.2	3.0		○	○	○
11	39	13.1	9.0	3.1		○	○	○
12	40	13.2	9.4	2.9		○	○	○
13	41	16.4	11.7	4.1		○	○	○
SK3247								
	Ⅲa							
1	1	8.6	6.6	1.1		○	○	
2	2	8.8	6.8	1.3		○	○	○
	杯a							
1	3	12.8	9.2	3.0		○	○	○
2	4	13.0	8.2	2.0		○	○	○
SK3248								
	Ⅲa							
1	5	7.8	5.4	1.3		○	○	○
2	6	7.8	5.5	1.6		○	○	○

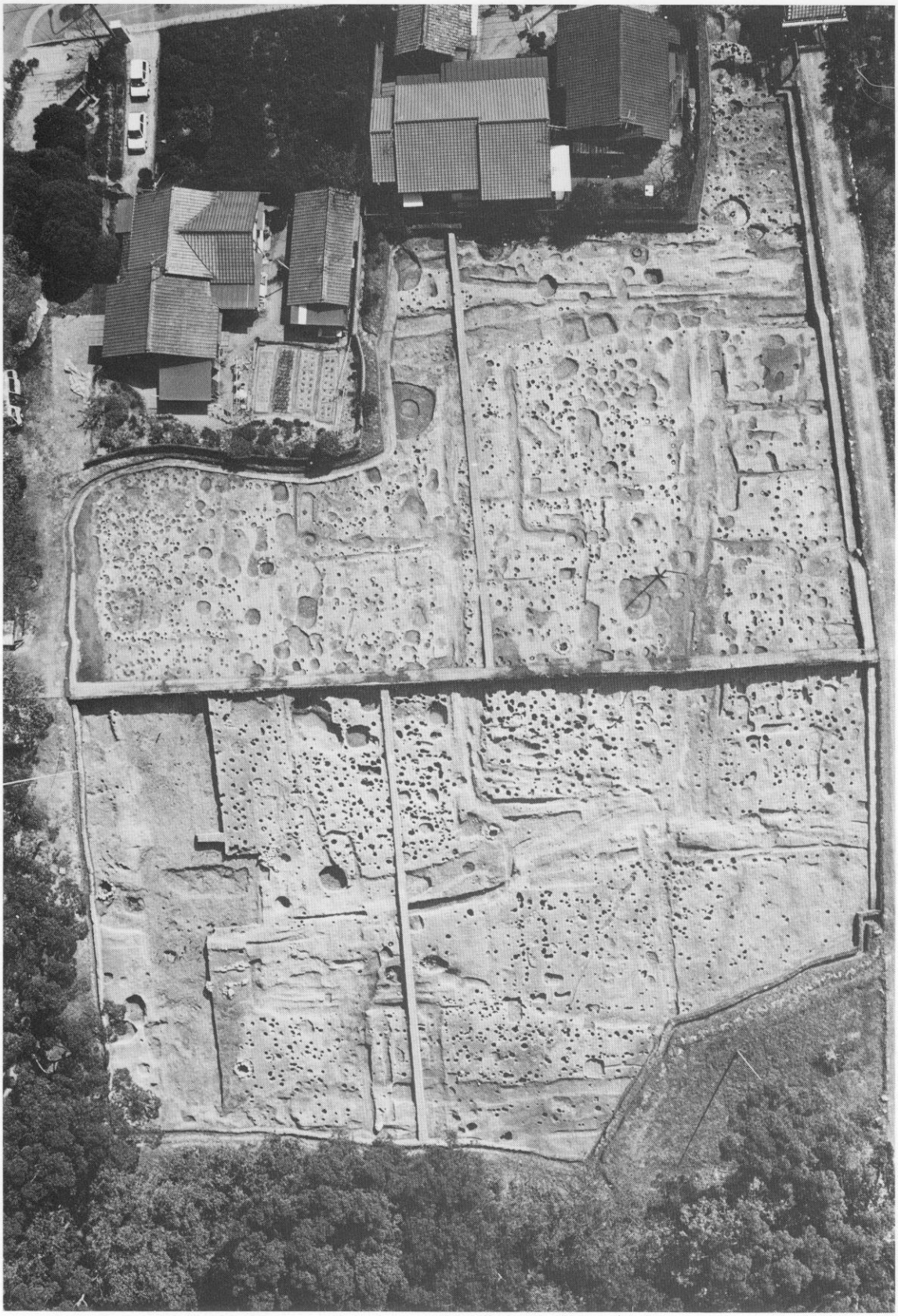
番　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
3	7	7.9	5.7	1.4		○	○	○
4	8	8.3	6.1	1.2		○	○	○
5	9	8.5	6.6	1.3		○	○	○
6	10	8.8	6.6	1.3		○	○	○
	杯a							
1	11	12.7	8.3	2.7		○	○	○
2	12	12.9	9.2	2.4		○	○	○
3	13	13.2	8.2	3.0		○	○	○
4	14	13.2	8.1	3.0		○	○	○
5	15	13.6	8.7	2.6		○	○	○
	杯b							
1	16	13.9	8.6	3.0		○	○	○
SK3259								
	皿a							
1	18	7.9	6.2	1.2		○	○	○
2	19	8.0	5.7	1.2		○	○	○
3	20	8.0	5.8	1.3		○	○	○
4	21	8.2	5.8	1.1		○	○	○
5	22	8.3	5.9	1.0		○	○	○
6	23	8.3	6.0	1.1		○	○	○
7	24	8.0	5.6	1.4		○	○	○
8	25	8.4	5.9	1.3		○	○	
9	26	8.4	5.7	1.6		○	○	○
10	27	8.5	6.2	1.5		○	○	○
11	28	8.5	6.5	1.6		○	○	○
12	29	8.9	6.8	1.3		○	○	
	杯a							
1	30	11.9	7.9	2.7		○	○	○
2	31	12.2	7.3	2.5		○	○	○
3	32	12.3	8.4	2.2		○	○	○
4	33	12.4	7.5	2.3		○	○	
5	34	12.4	7.6	2.6		○	○	○
6	35	12.4	7.4	2.6		○	○	○
7	36	12.6	8.3	2.8		○	○	○
	杯b							
1	37	13.3	7.8	2.5		○	○	○
SK3261								
	皿a							
1	1	7.5	5.3	1.5		○	○	○
2	2	7.9	5.9	1.5		○	○	○
3	3	8.8	6.1	1.3		○	○	○
	杯a							
1	4	12.8	7.3	3.0		○	○	○
2	5	13.7	8.7	2.9		○	○	○
3	6	13.8	8.3	3.0		○	○	○

番　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
4	7	14.0	7.7	3.2		○	○	○
SK3266								
	皿a							
1	1	8.2	6.4	0.9		○	○	○
2	2	8.3	6.7	0.9		○	○	○
3	3	8.5	6.9	1.1		○	○	○
4	4	8.6	6.9	1.2		○	○	○
5	5	8.6	6.9	0.9		○	○	○
6	6	9.3	7.6	1.1		○	○	○
	杯a							
1	7	13.9	8.7	2.3		○	○	○
2	8	14.7	9.2	2.8		○	○	○
3	9	14.4	8.5	2.7		○	○	○
SK3268								
	皿a							
1	10	8.7	5.7	0.8		○	○	○
2	11	9.0	7.1	1.2		○	○	○
3	12	9.6	7.2	1.3		○	○	○
4	13	9.8	7.1	1.4		○	○	○
	杯a							
1	14	15.1	10.3	2.7		○	○	○
2	15	15.2	10.4	2.6		○	○	○
3	16	16.0	10.8	3.0		○	○	○
4	17	16.3	11.0	3.2		○		○
	瓦器椀							
1	18	16.4	6.9	6.1				
SK3271								
	皿a							
1	22	7.8	6.0	1.2		○	○	○
2	23	7.8	5.2	1.2		○	○	○
3	24	8.2	5.8	1.5		○	○	○
	皿b							
1	21	7.6	4.6	1.7		○	○	○
	皿c							
1	25	8.4	5.9	2.1		○	○	○
	杯a							
1	26	12.3	8.2	3.2		○	○	○
2	27	12.5	8.3	2.7		○	○	○
3	28	12.7	8.8	2.8		○	○	○
4	29	13.0	8.6	2.6		○	○	○
SK3295								
	皿a							
1	1	8.5	6.9	1.3		○	○	

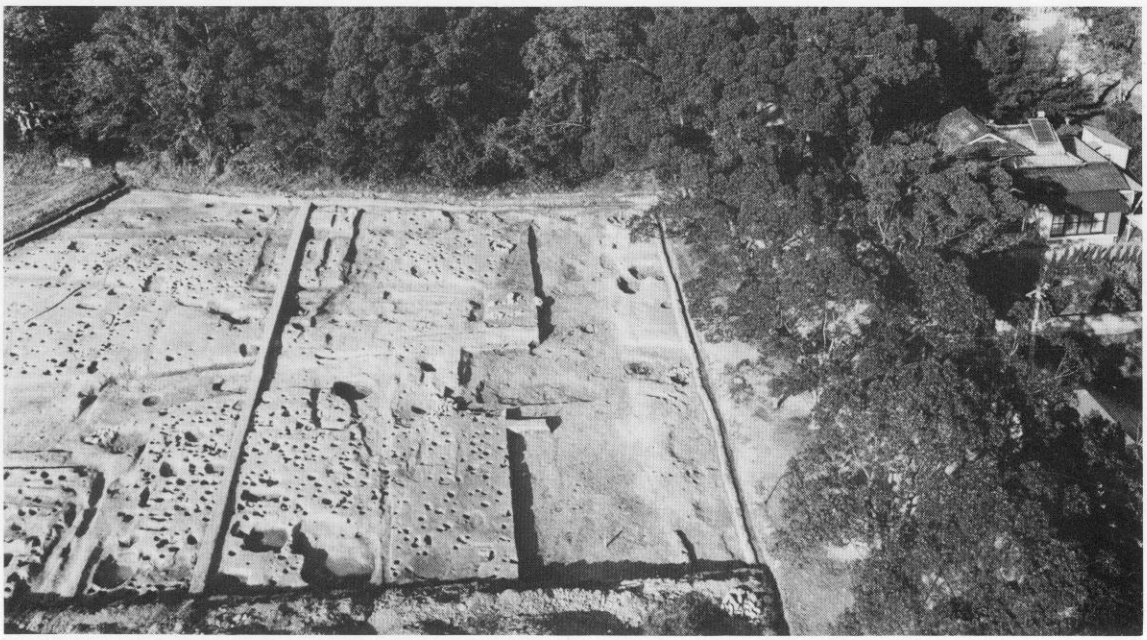
番　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
2	2	8.8	6.2	1.2		○	○	○
3	3	8.8	6.8	1.3		○	○	
4	4	9.0	7.9	1.2		○	○	○
5	5	9.1	7.7	1.3		○	○	○
6	6	9.1	6.7	1.2		○	○	○
7	7	9.3	7.5	1.0		○	○	
8	8	9.3	7.3	1.1		○	○	○
9	9	9.5	7.3	1.0		○	○	○
10	10	9.6	7.3	1.5		○	○	
11	11	9.6	7.7	1.4		○	○	○
12	12	10.1	7.5	2.0		○	○	○
13	13	9.4	7.4	1.5	○			
	杯a							
1	14	14.3	9.5	3.1		○	○	○
2	15	14.8	9.4	3.2		○	○	○
3	16	14.6	10.0	2.7		○	○	○
4	17	15.0	10.6	2.7		○	○	○
	丸底の杯							
1	18	15.3	12.0	3.0	○			
2	19	15.7	9.0	3.4	○			○
	瓦器皿							
1	20	10.9	8.0	1.8	○			○
	瓦器椀							
1	21	17.7	6.9	6.4				
SX3310								
	皿a							
1	6	8.4	6.8	0.9		○		
2	7	8.5	6.7	1.0		○	○	○
3	8	8.7	6.9	1.1		○	○	○
4	9	8.8	6.5	1.0		○		
5	10	8.8	6.9	1.2		○	○	
6	11	8.9	6.9	1.1		○	○	○
7	12	9.0	6.9	0.9		○	○	○
8	13	9.0	7.0	0.9		○	○	
9	14	9.2	7.3	1.0		○		○
10	15	9.3	7.3	1.2		○	○	○
11	16	9.4	7.3	1.1		○	○	○
12	17	9.7	7.9	1.1		○	○	○
13	18	9.7	7.9	1.1		○	○	○
14	19	9.7	7.7	1.1		○	○	○
15	20	9.7	7.3	1.2		○	○	○
16	21	9.7	7.5	0.7		○	○	○
	皿c							
1	22	10.9	7.7	2.0		○	○	○
	杯a							
1	23	14.9	9.9	3.6		○	○	○

番　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
2	24	14.9	9.0	3.2		○	○	○
3	25	15.1	10.8	3.2		○	○	○
4	26	15.3	10.8	3.2		○	○	○
5	27	15.4	10.6	3.0		○	○	○
6	28	15.5	10.7	3.2		○	○	○
7	29	15.5	10.5	3.1		○	○	○
8	30	15.5	10.6	3.1		○	○	○
9	31	15.7	10.1	2.9		○	○	○
10	32	16.2	11.5	2.5		○	○	○
SX3313								
	皿a							
1	1	9.0	6.7	1.1		○	○	○
2	2	9.0	7.3	1.1		○	○	○
3	3	9.1	7.7	1.3		○	○	○
4	4	9.1	6.8	1.0		○	○	○
5	5	9.2	7.8	0.9		○	○	○
6	6	9.6	7.7	1.0		○	○	○
7	7	9.6	7.1	1.3		○	○	
8	8	8.8	6.5	1.4	○		○	○
9	9	9.1	6.3	1.5	○		○	○
10	10	9.4	7.6	1.2	○		○	○
11	11	9.7	7.6	1.2	○		○	○
12	12	10.0	7.6	1.3	○		○	○
	丸底の杯							
1	18	14.6	11.0	3.4	○			○
	杯a							
1	13	14.2	10.0	2.7		○	○	○
2	14	14.3	10.1	2.9		○	○	○
3	15	14.3	8.3	3.1		○	○	○
4	16	15.9	11.3	3.0		○	○	○
5	17	14.3	10.0	3.0	○			○

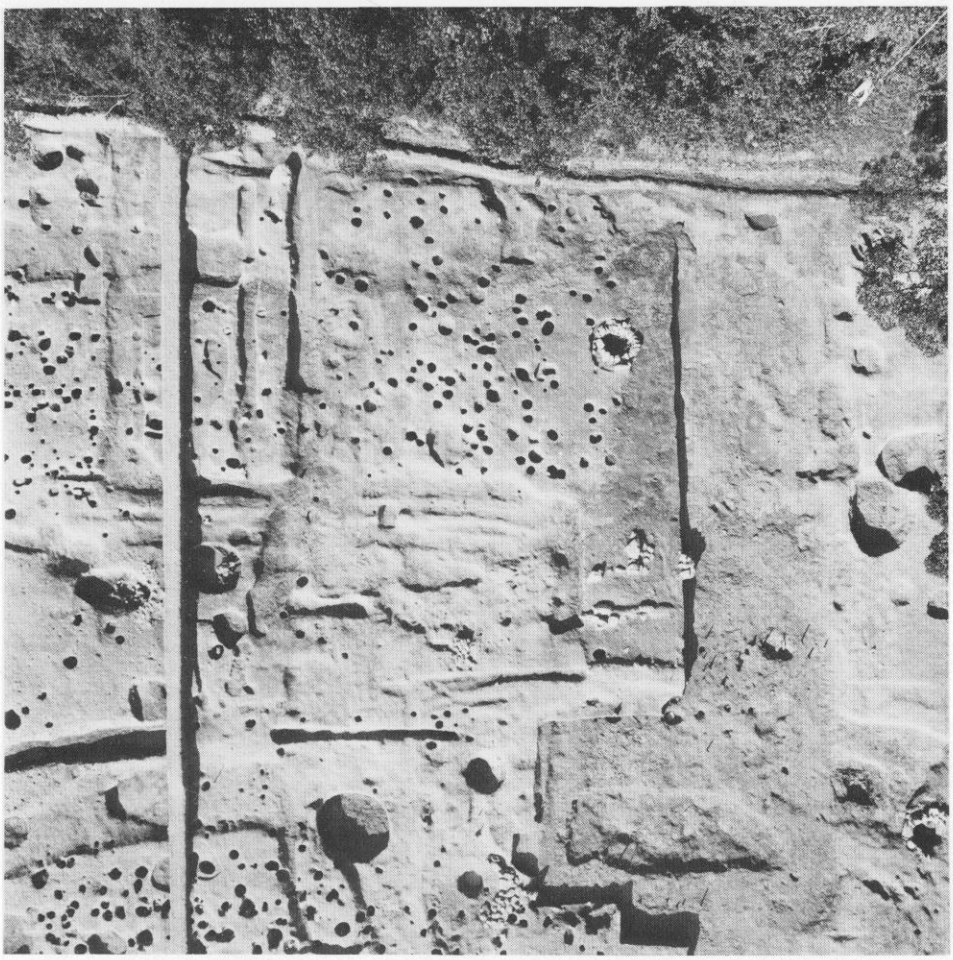
図　版



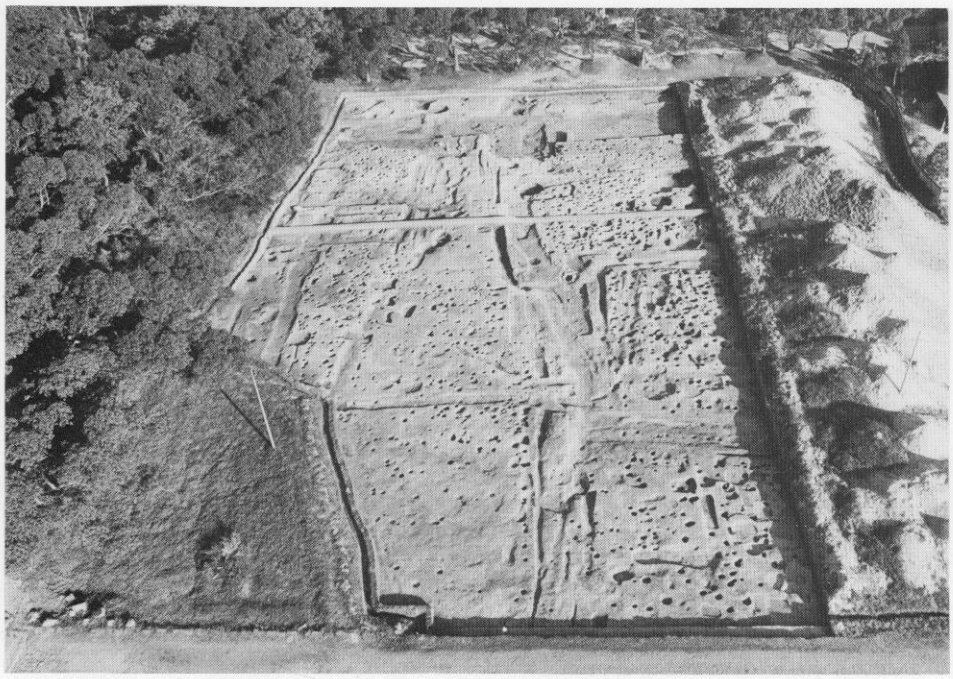
第109・111次調査区全景（空中写真）



▲ 第109次調査区東半部（空中写真）

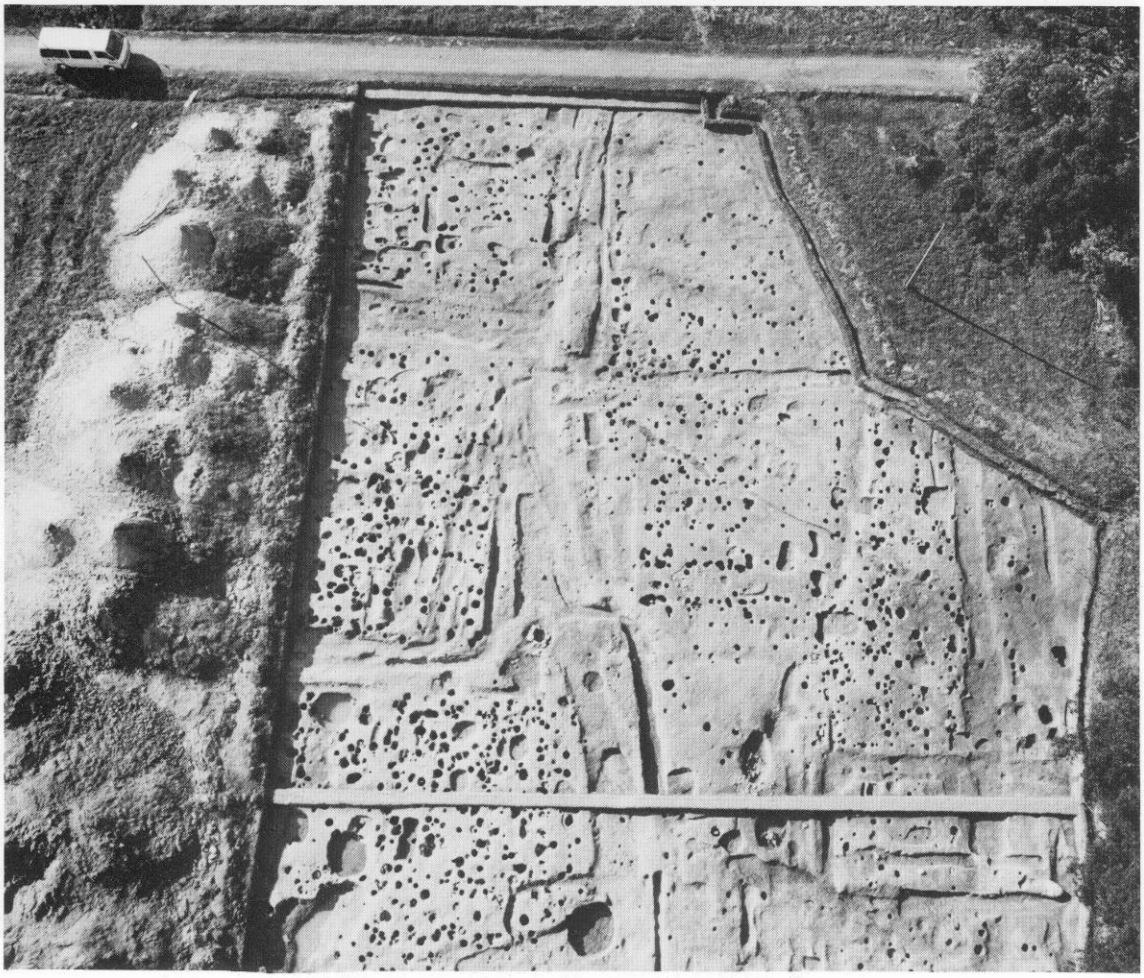


◀ 第109次調査区東半部（空中写真）

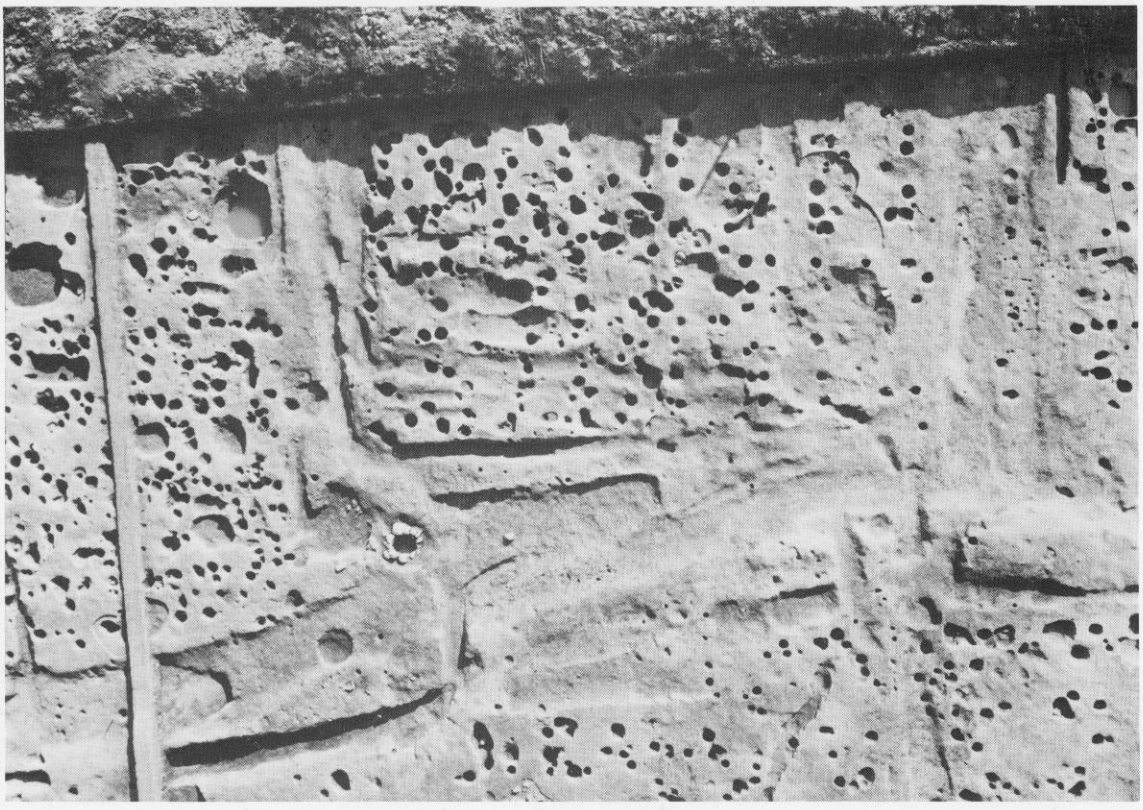


◀ 第109次調査区全景（西から）

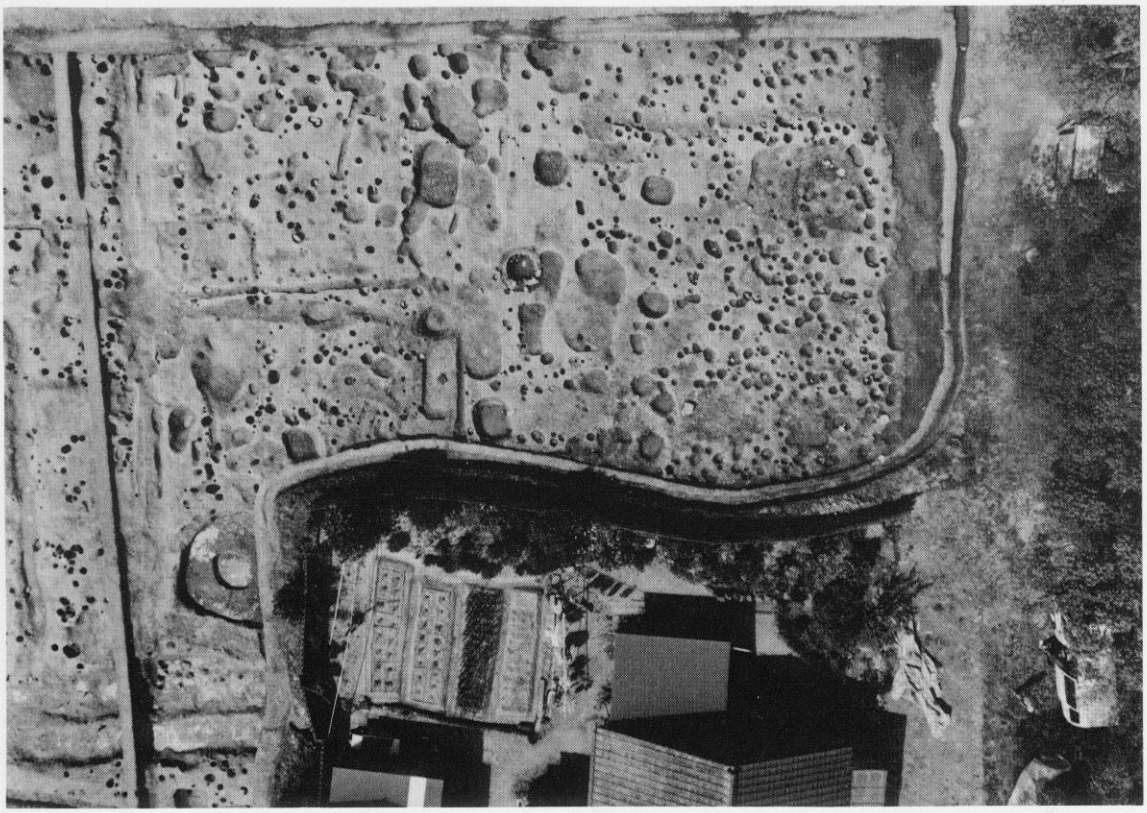
▼ 第109次調査区西半部（空中写真）



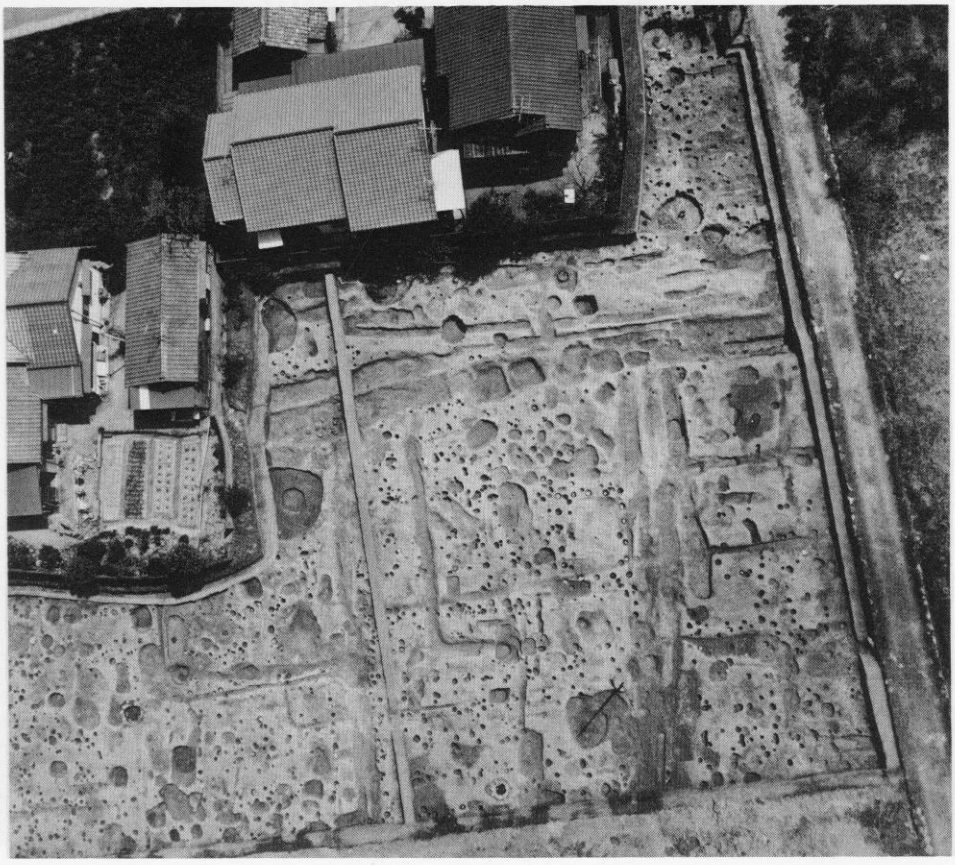




(上)　溝 SD3214・3147、井戸 SE3155など（東から）
(下)　溝 SD3214、井戸 SE3145など（空中写真）



第111次調査▲
区東半部
（空中写真）



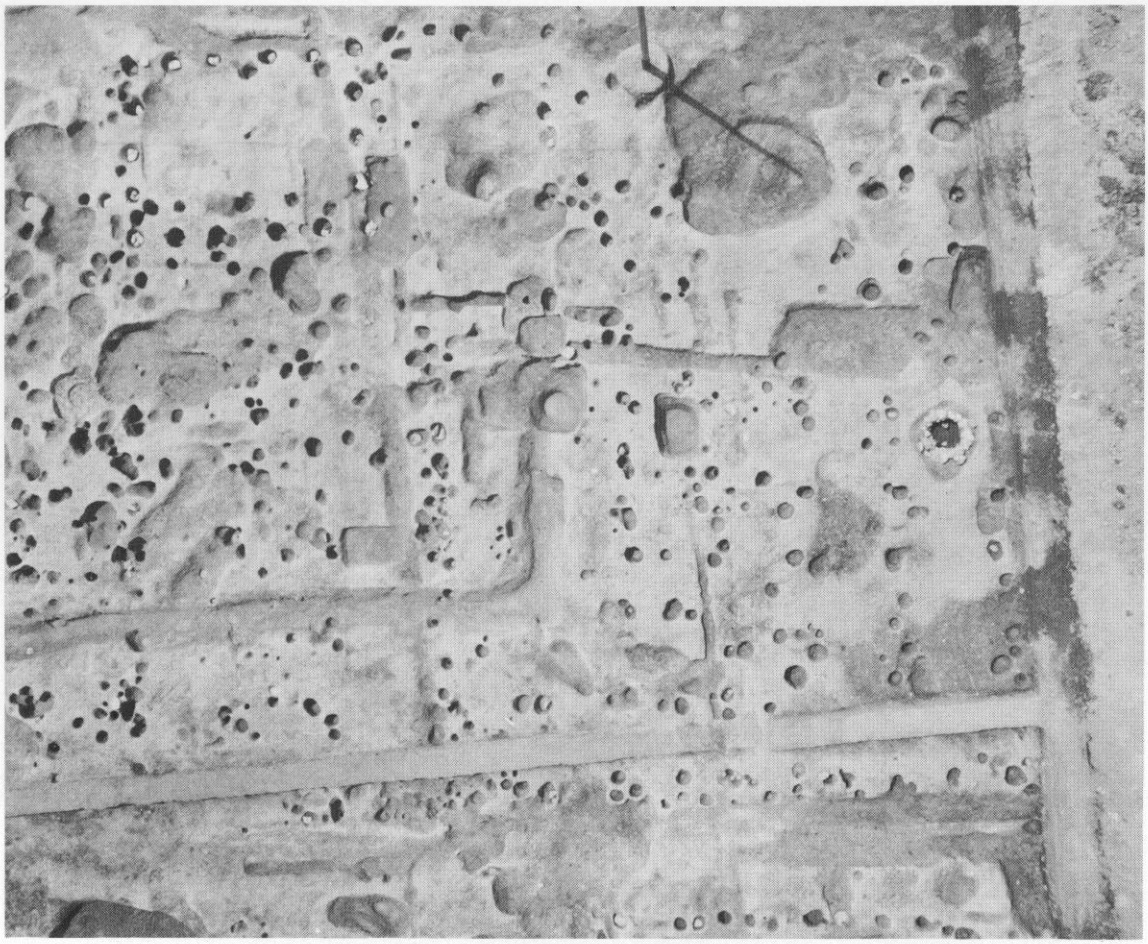
第111次調査▶
区西半部
（空中写真）



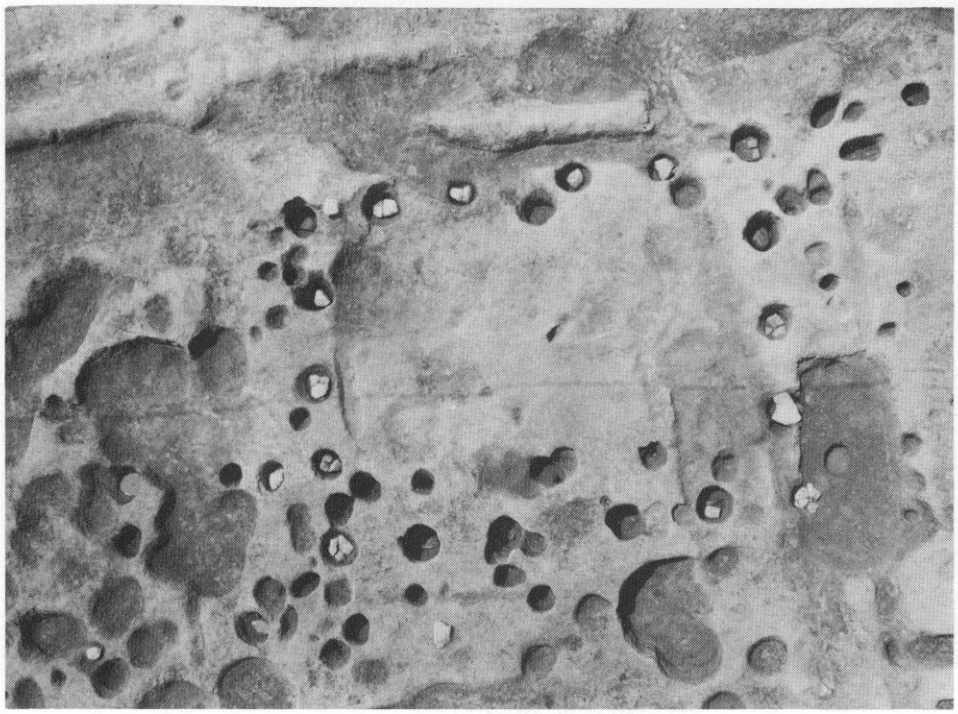
溝 SD3290、土壙 SK3242・3243など（北から）



溝 SD3190・3285、柵 SA3195など（北から）



掘立柱建物 SB3230、溝 SD3190・3285、柵 SA3190、井戸 SE3245など（空中写真）



◀ SB3230全景
（空中写真）



井戸 SE3150（南から）



井戸 SE3250（北から）



井戸 SE3255（西から）



井戸 SE3215（南から）



井戸 SE3180（東から）

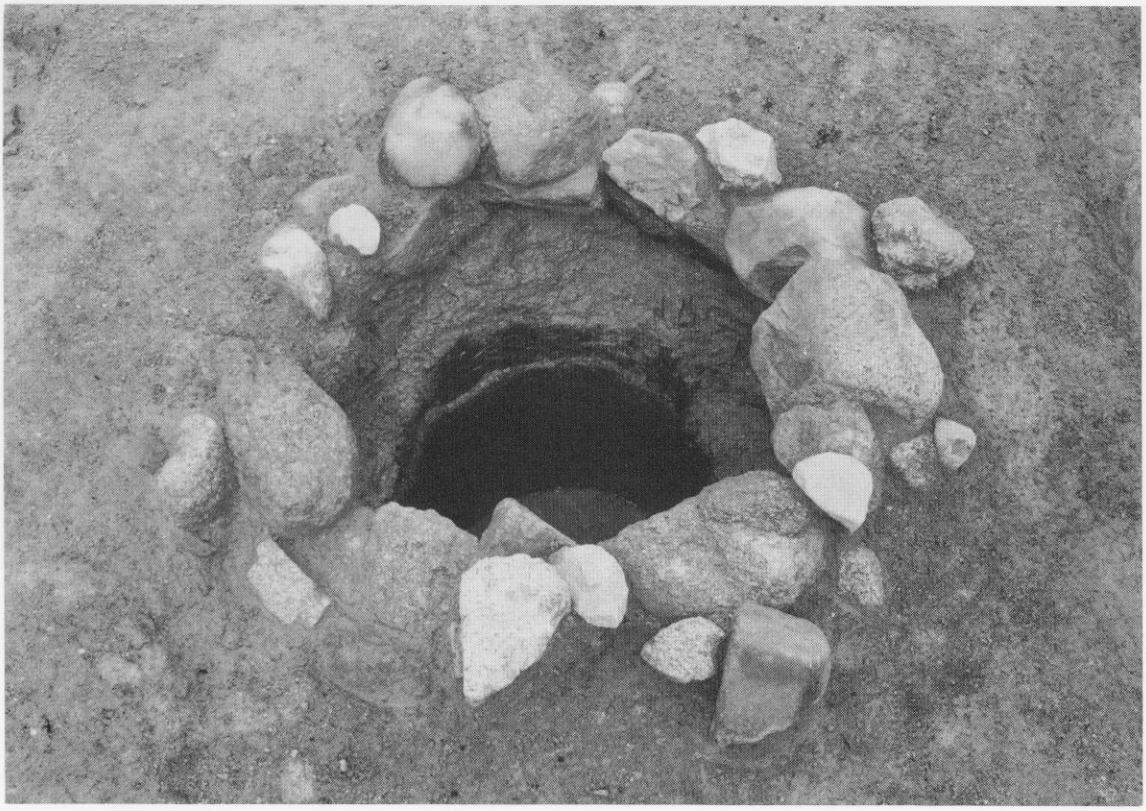


井戸 SE3185（東から）





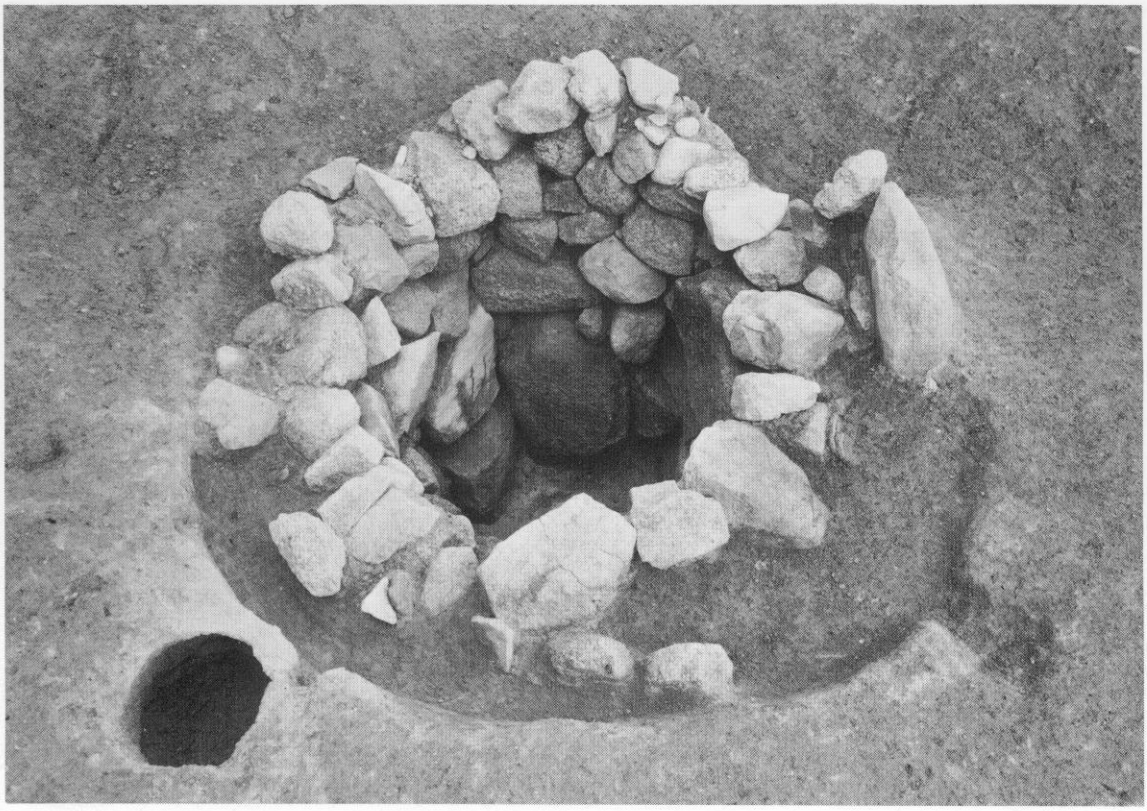
(上)　井戸 SE3270・3275・3280、土壙 SK3264（北から）
(下)　井戸 SE3270（東から）



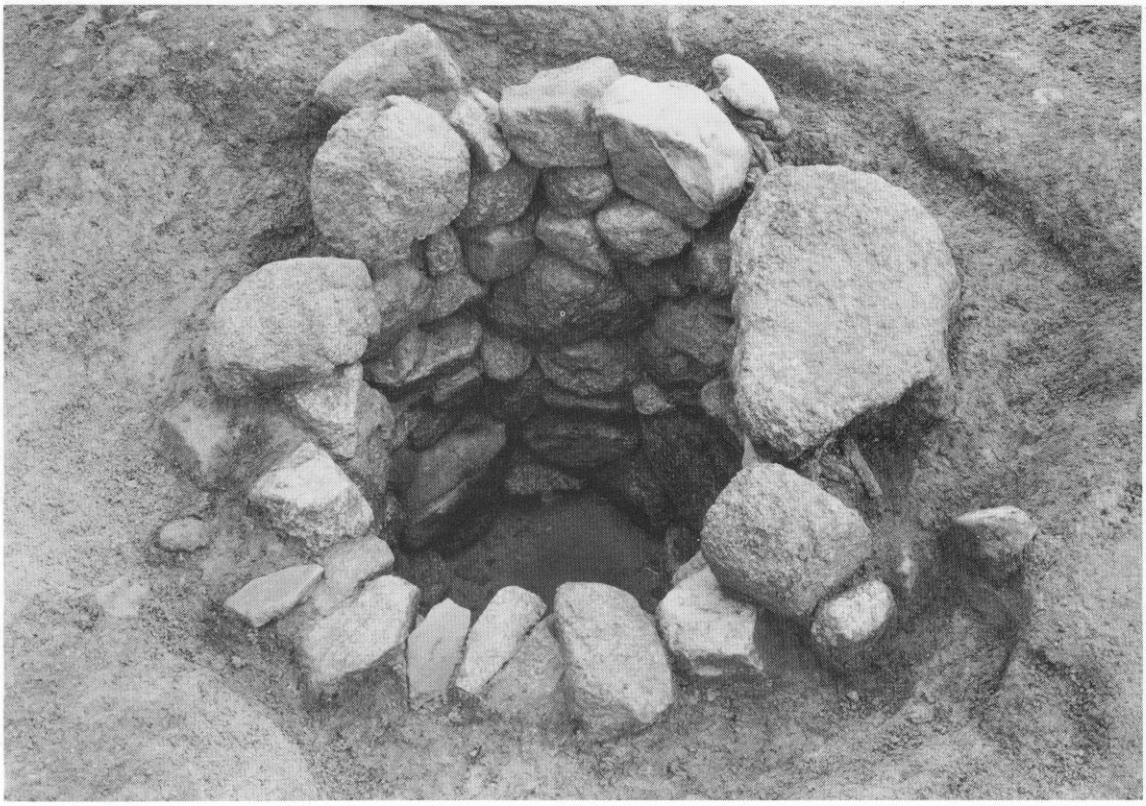
井戸 SE3245（東から）



井戸 SE3145（東から）



井戸 SE3155（西から）



井戸 SE3165（東から）



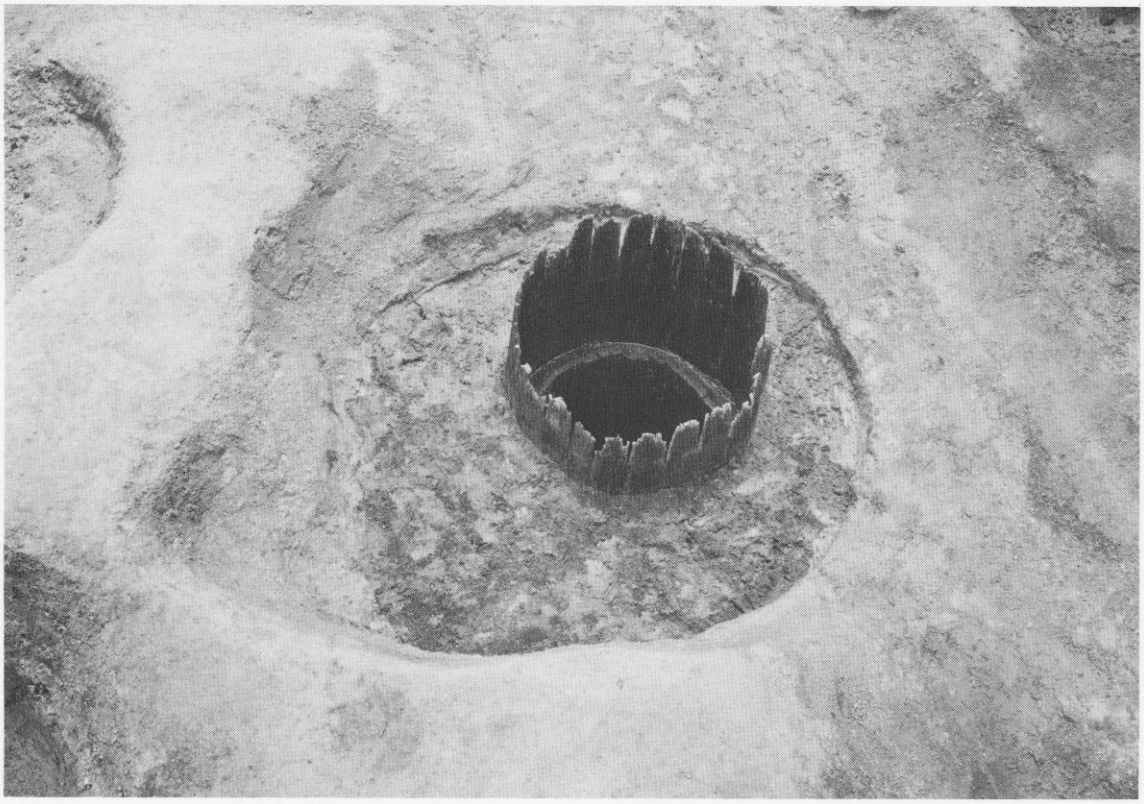
井戸 SE3235（北から）



井戸 SE3275（北から）



井戸 SE3160（東から）



井戸 SE3260（西から）



井戸 SE3265（北から）



井戸 SE3265近影（西から）



井戸 SE3240（西から）



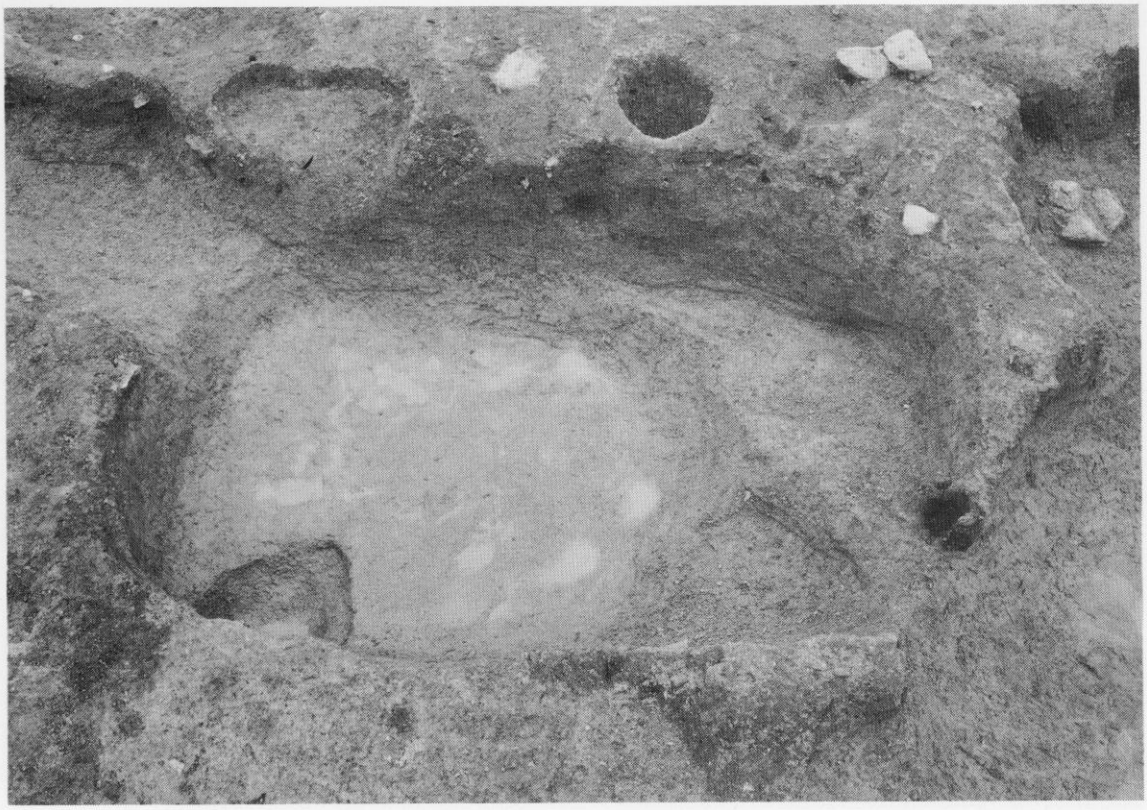
井戸 SE3240近影（西から）



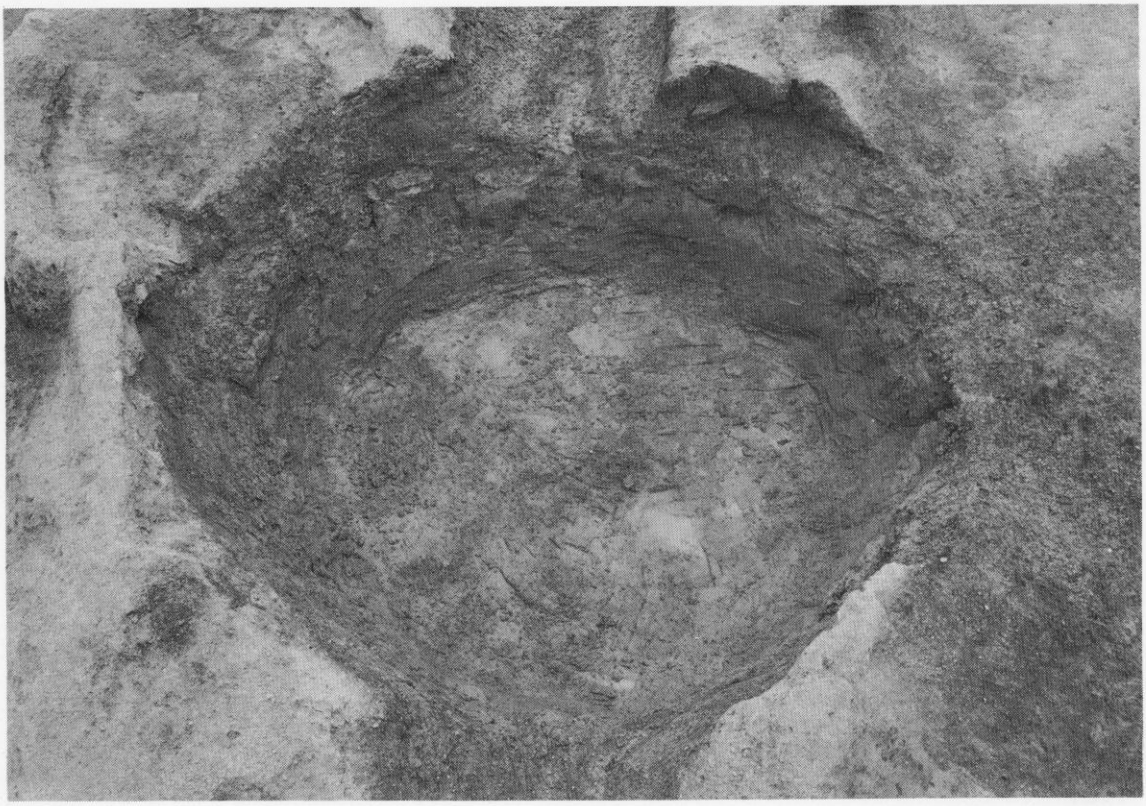
井戸 SE3280（北から）



土壙 SK3246（西から）



土壙 SK3247（東から）



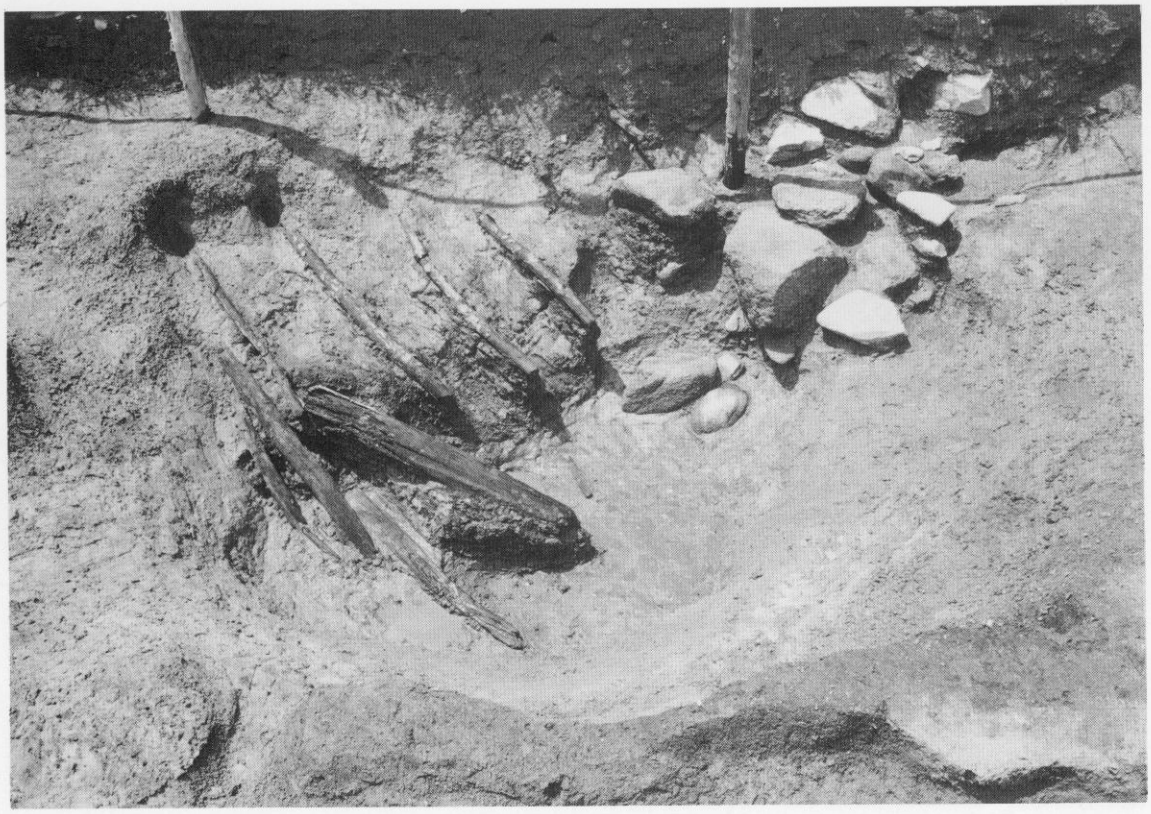
土壙 SK3259（西から）



土壙 SK3266（南から）



土壙 SK3268（北東から）



土壙 SK3295（北から）



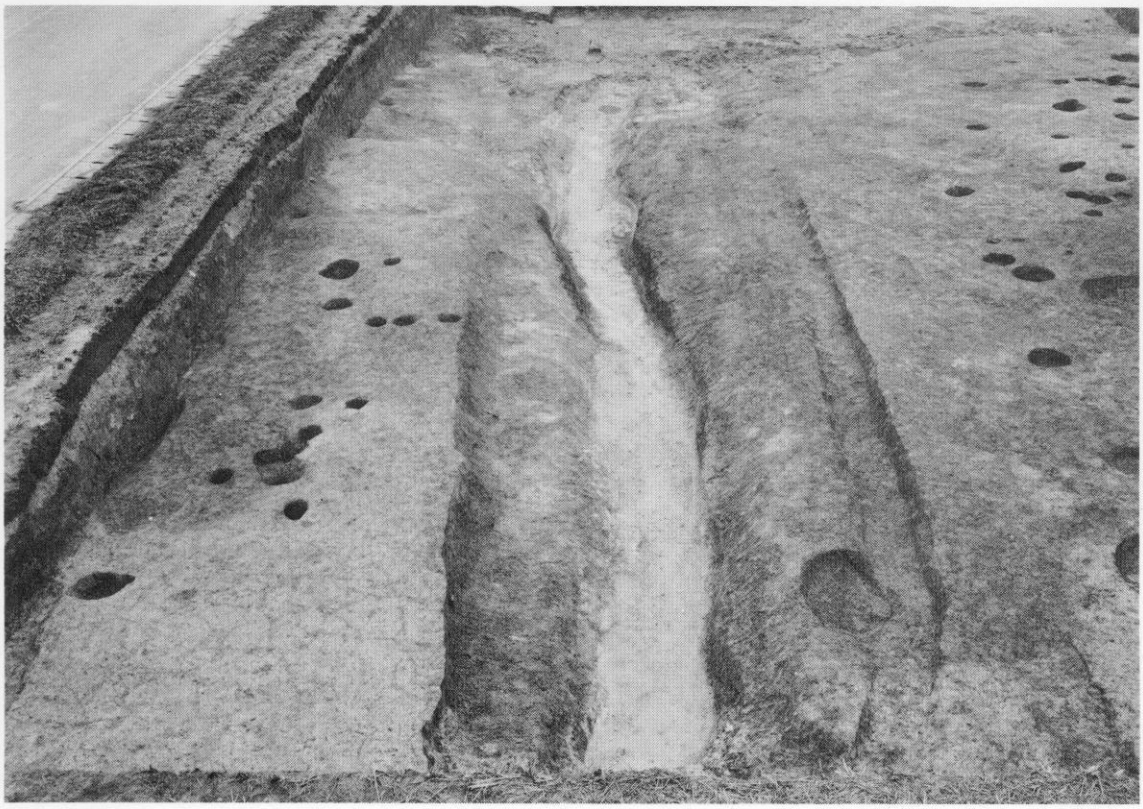
土壙 SK3295近影（北から）



第110次調査区全景（東から）



第110次調査区全景（西から）



溝 SD2350A・B（西から）



溝 SD320（北から）

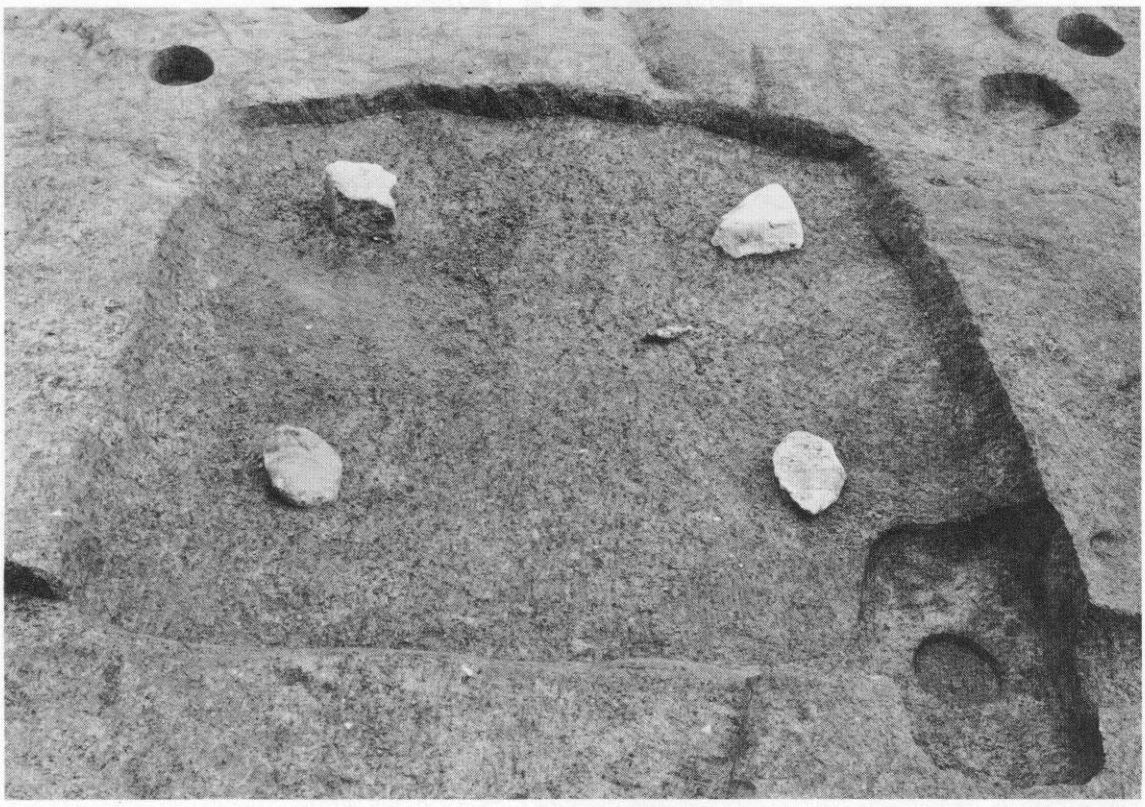


第112次調査区全景（西から）



第112次調査区全景（東から）





(上)　第112次調査区全景（北から）
(下)　竪穴式建物 SB3325（北から）



第114次調査区全景（東から）



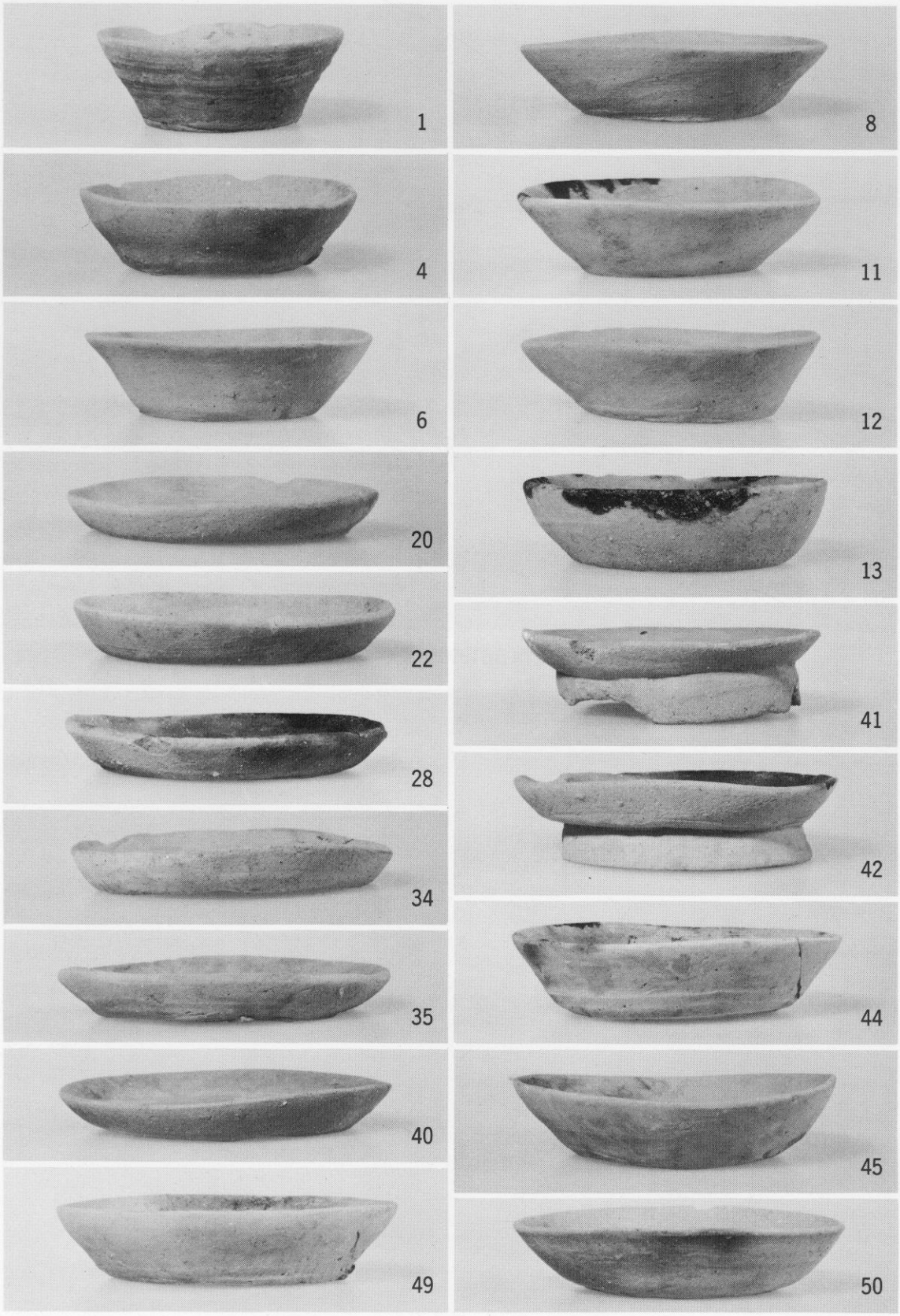
掘立柱建物 SB1990柱掘形（南から）



掘立柱建物 SB1990柱掘形（南から）



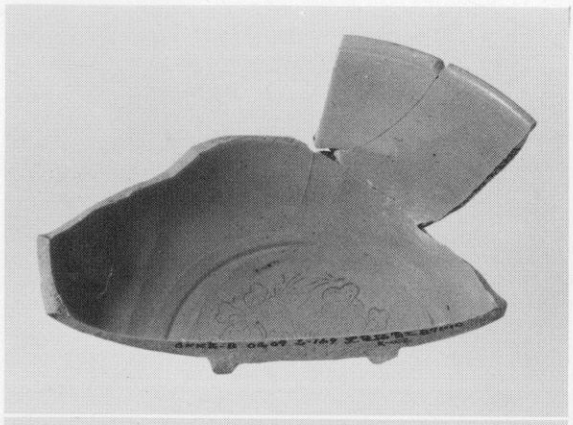
掘立柱建物 SB1990柱掘形（南から）

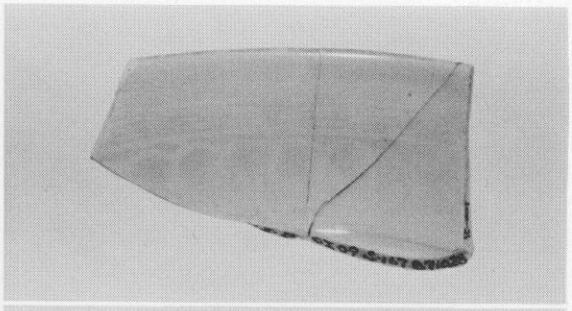


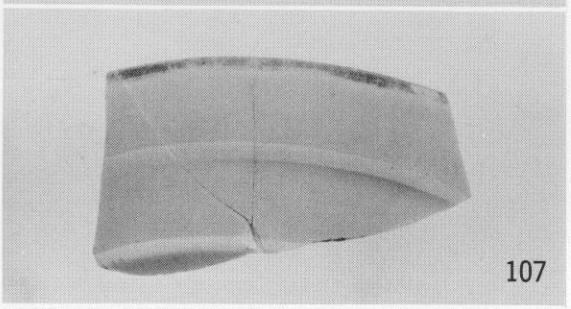
第109・111次調査　SD3200出土土器

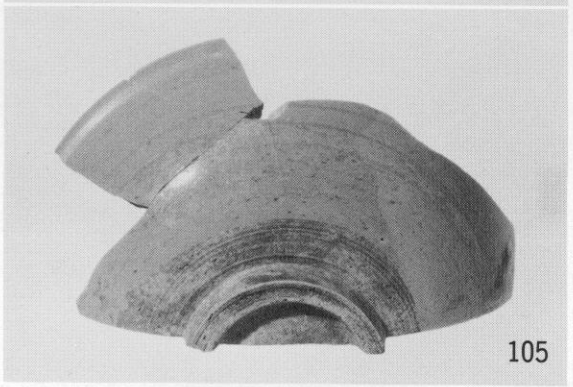


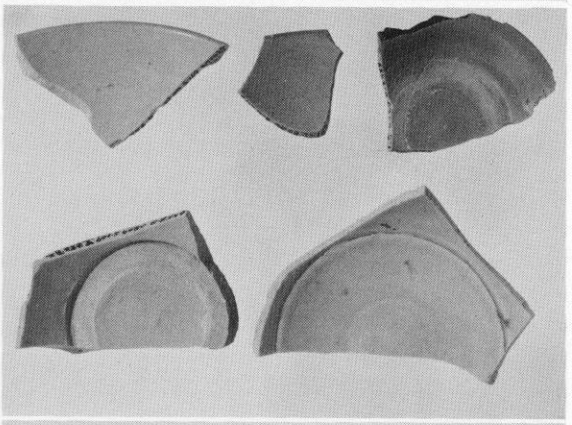
第109・111次調査　SD3200出土土器

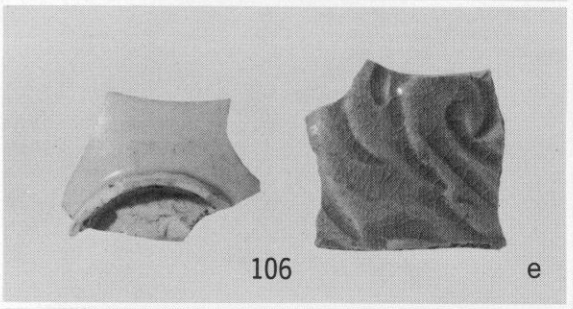


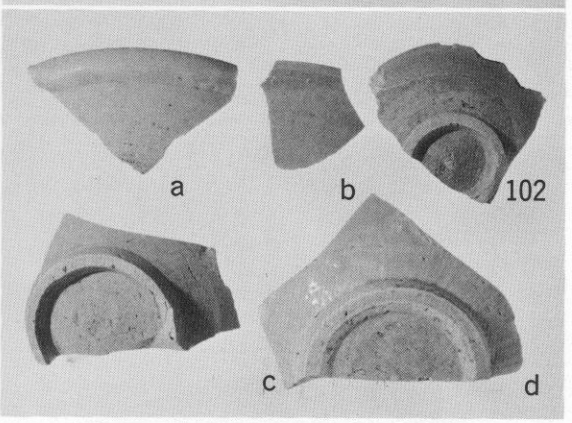


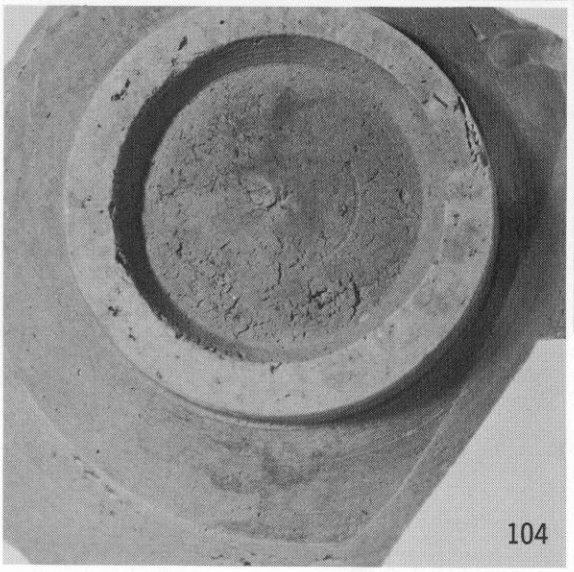




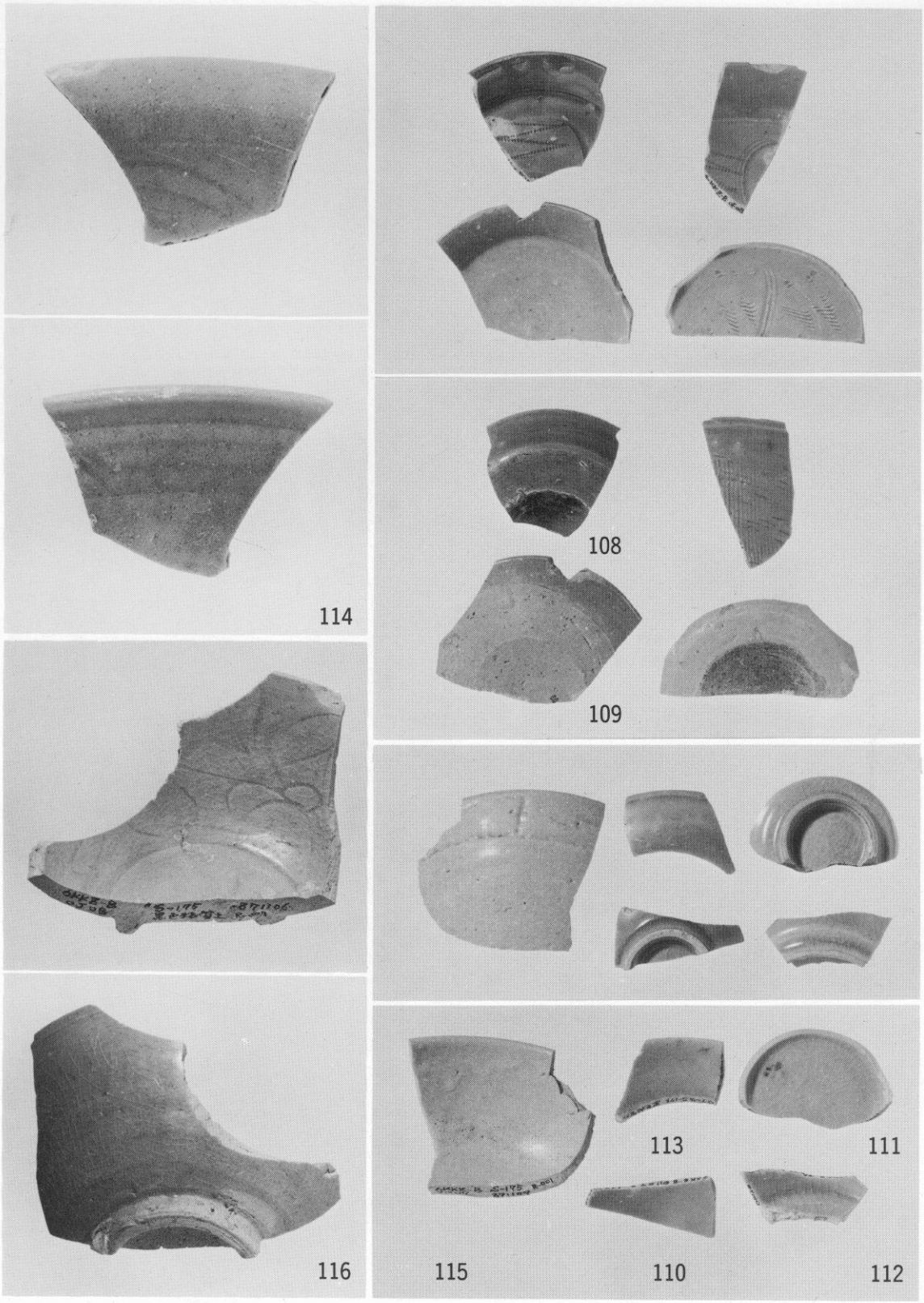




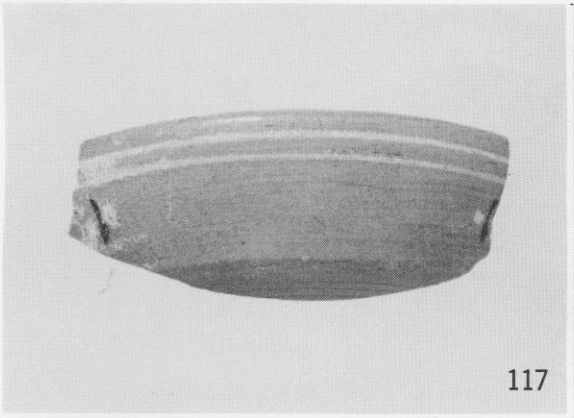


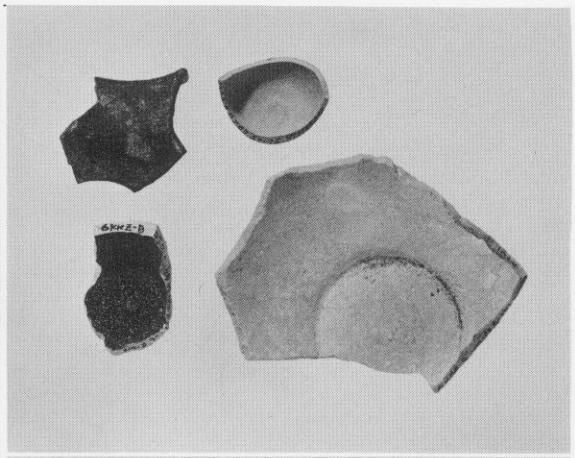


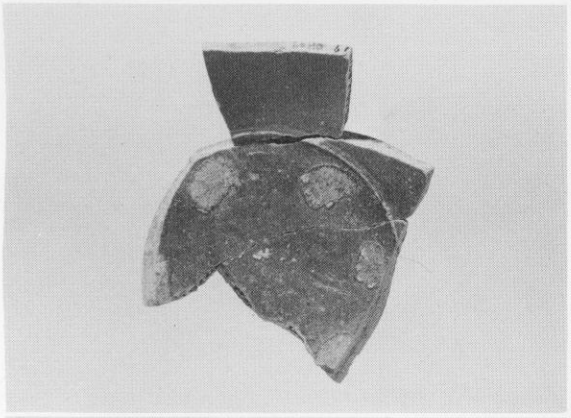
第109・111次調査　SD3200出土陶磁器

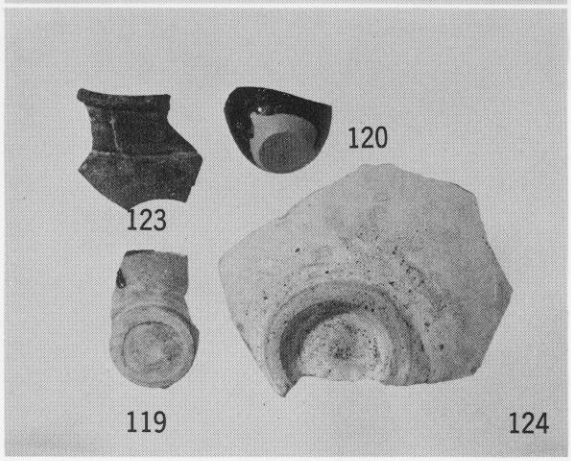


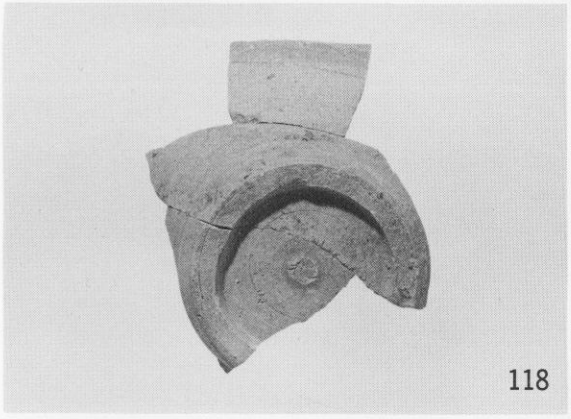
第109・111次調査　SD3200出土陶磁器

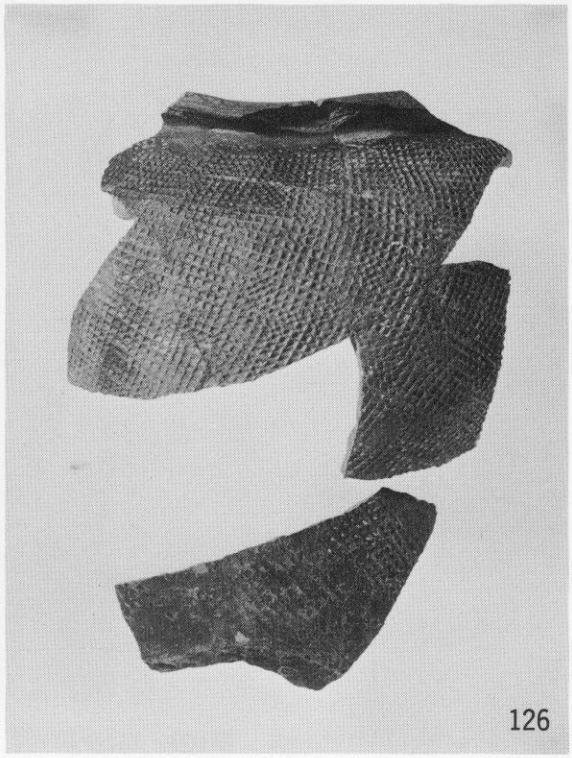

117

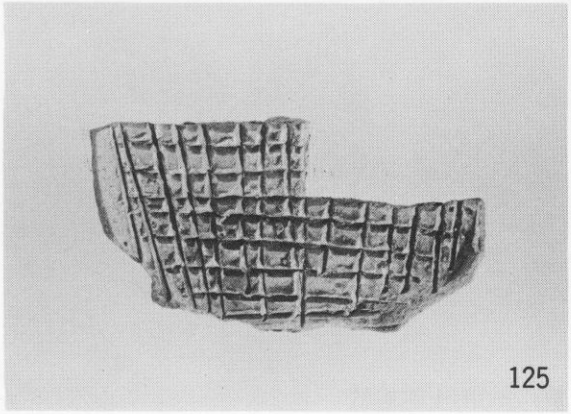




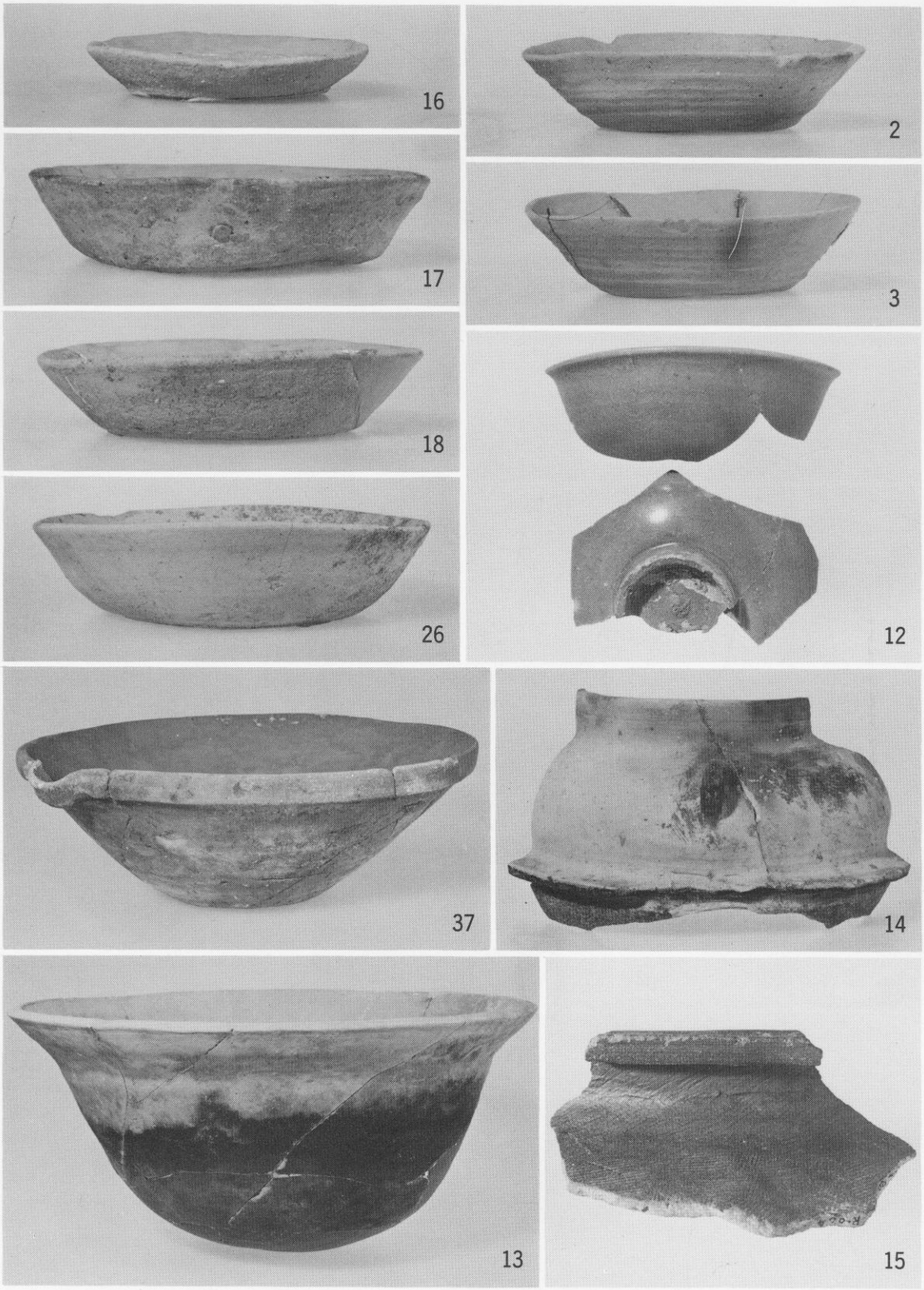

120
123
119
124


118

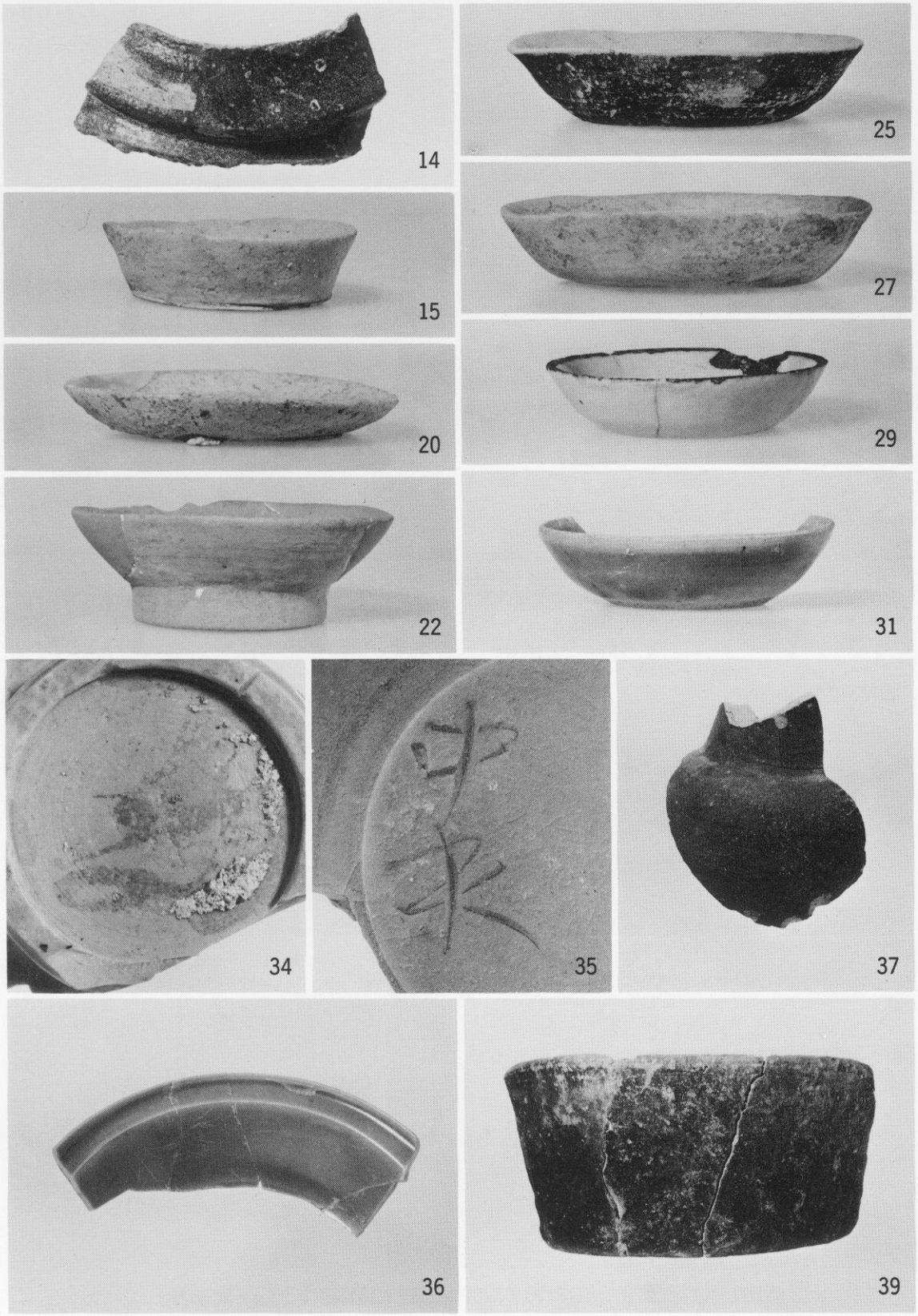

126


125

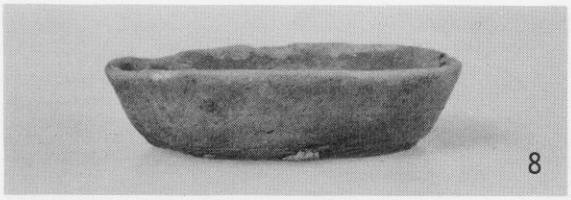
第109・111次調査　SD3200出土陶磁器

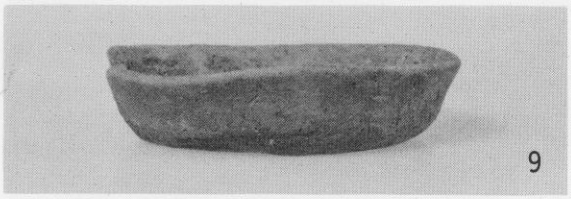


第109・111次調査　SD3190・3239・3217・3241出土土器・陶磁器

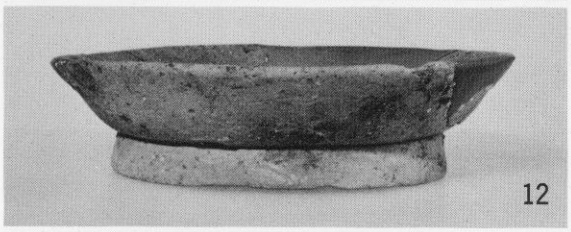


第109・111次調査　SD3290・3300出土土器・陶磁器


8

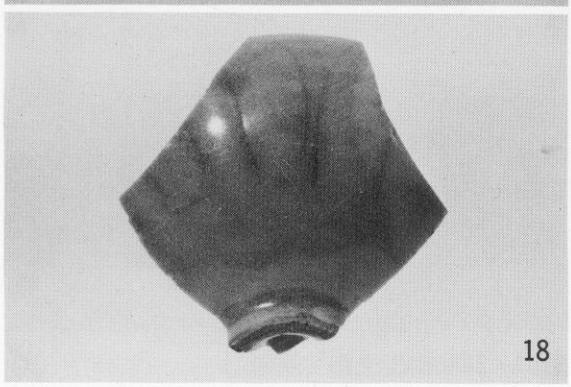

9

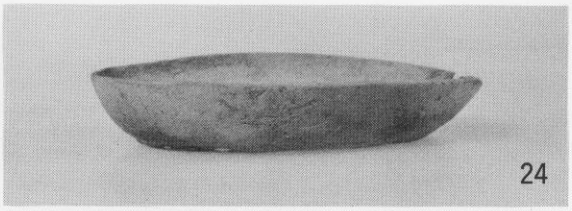

10

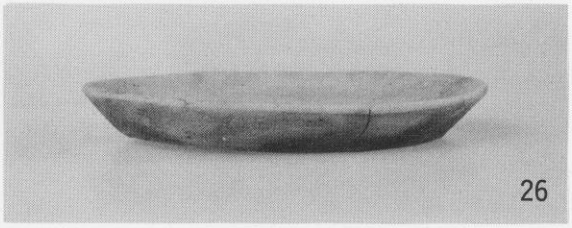

12

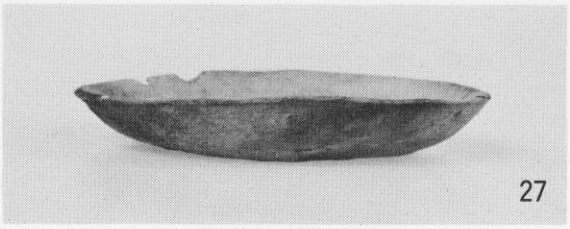

14

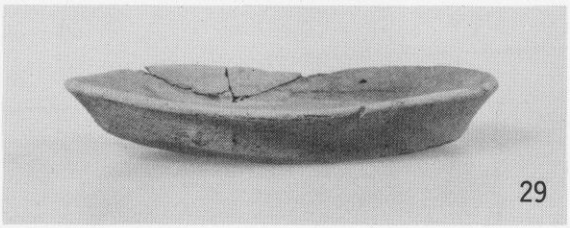

16

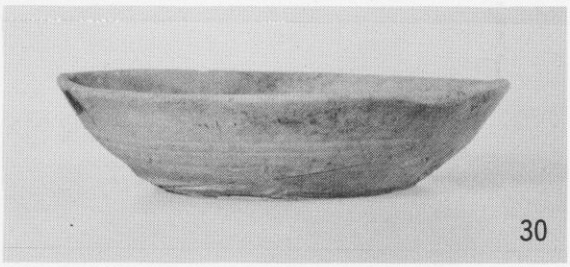

18

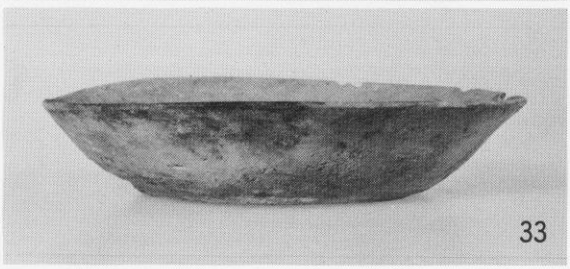

24


26

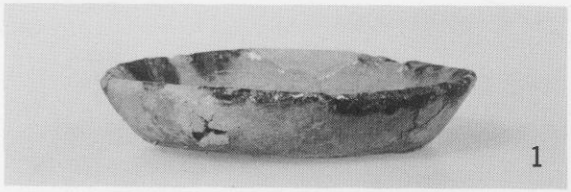

27

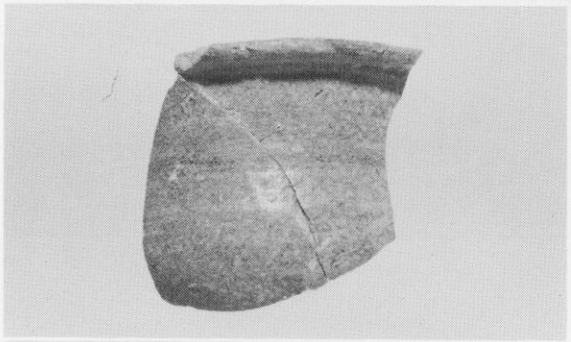

29

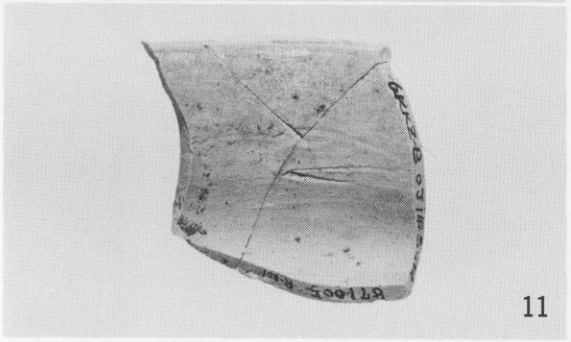

30

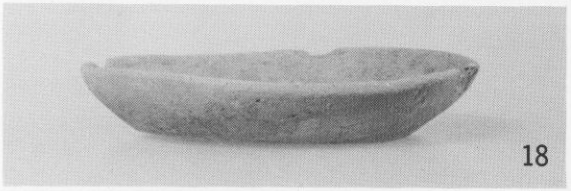

33

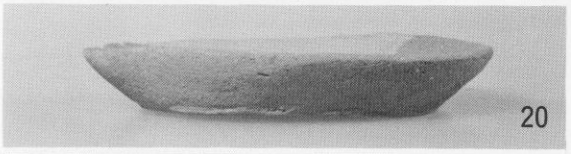
第109・111次調査　SE3240・3265・3275出土土器・陶磁器


1

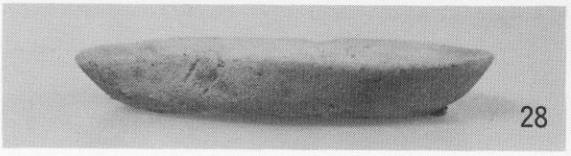


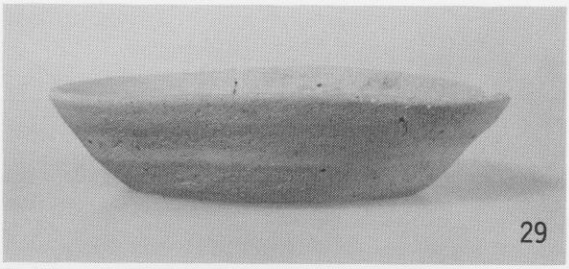

11

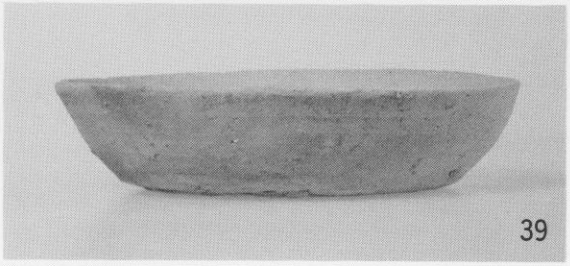

18


20

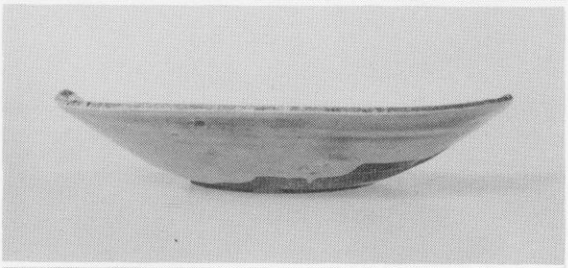

26


28


29

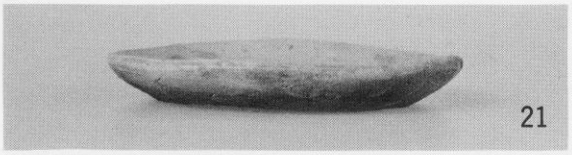

39

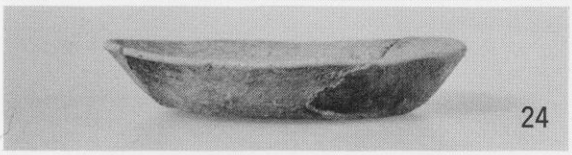

42

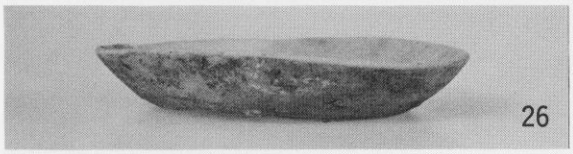


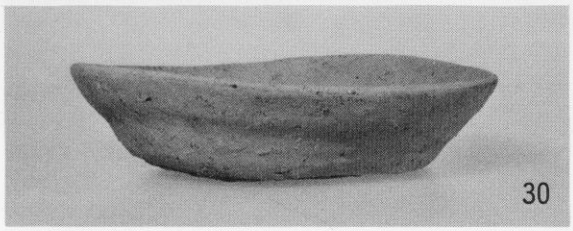

43

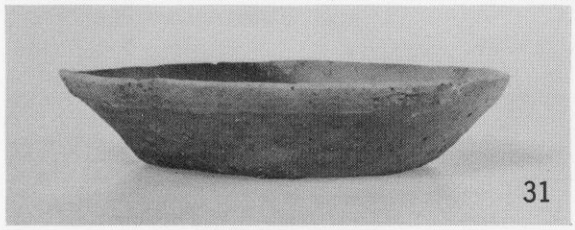
第109・111次調査　SK3161・3164・3246出土土器・陶磁器

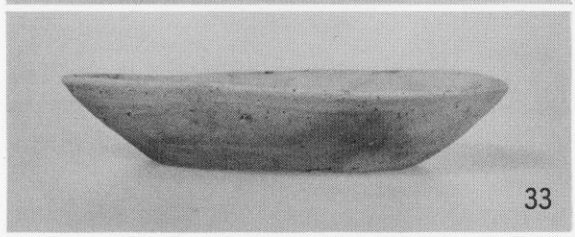

21

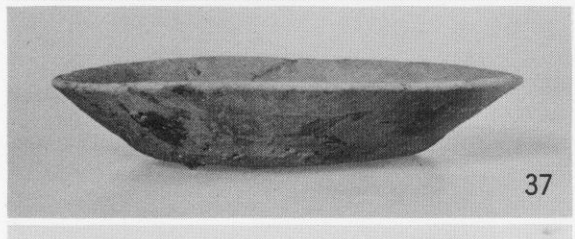

24

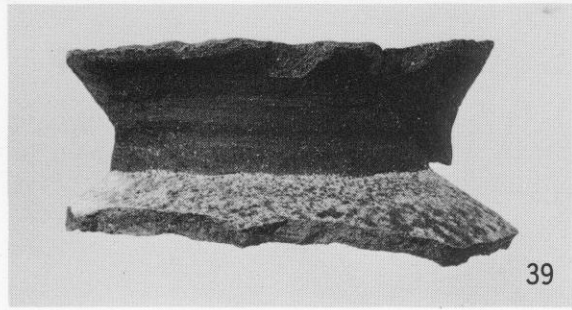

26

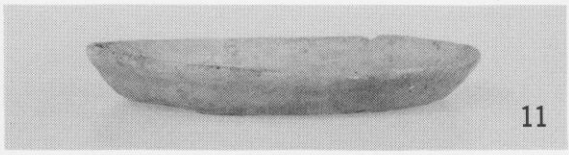

30

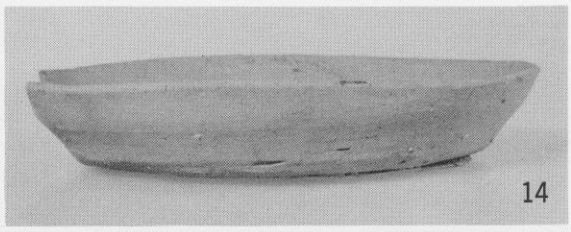

31

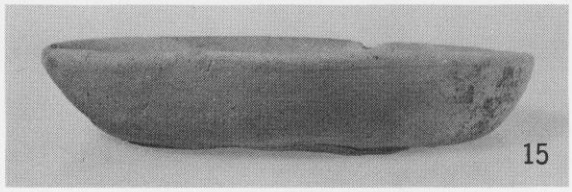

33


37

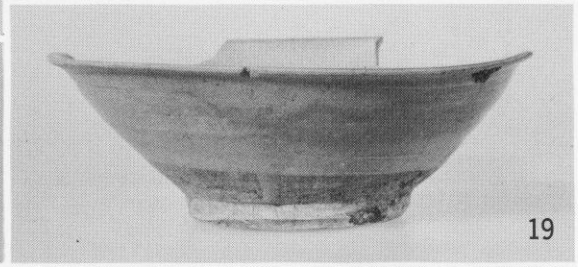

39

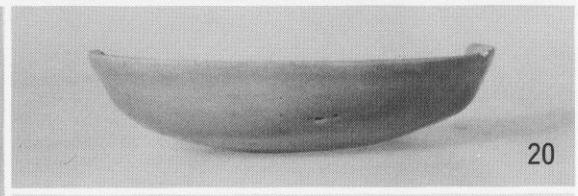

11


14


15

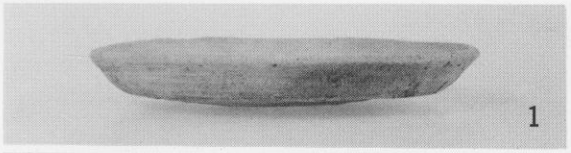

18

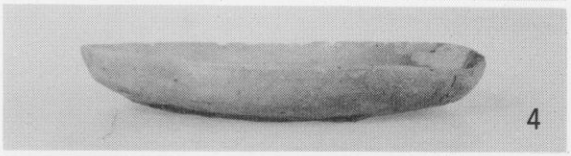

19

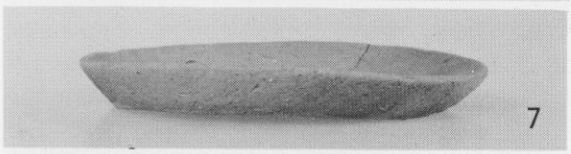

20


31

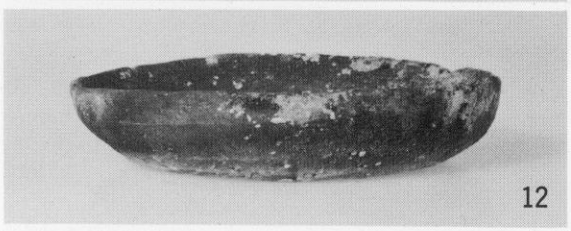
第109・111次調査　SK3247・3259・3261・3268出土土器・陶磁器

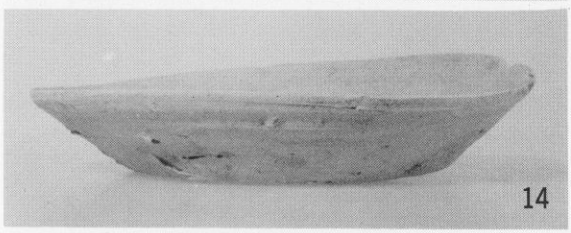

1


4


7

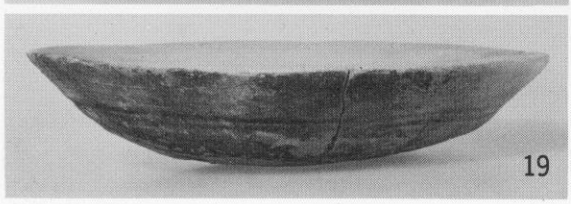

11

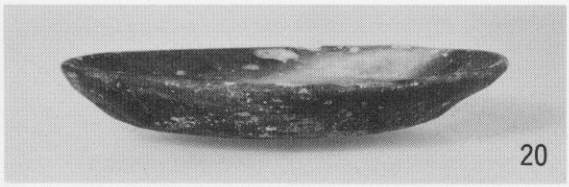

12

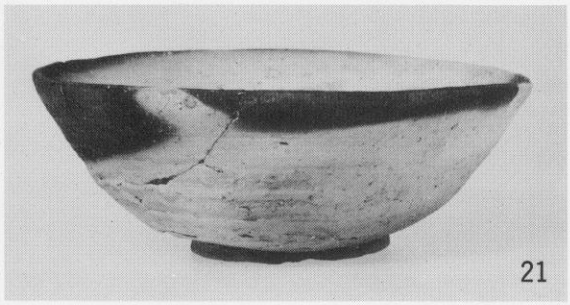

14

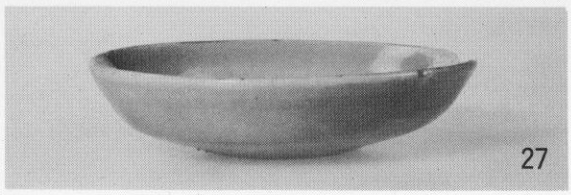

17


18

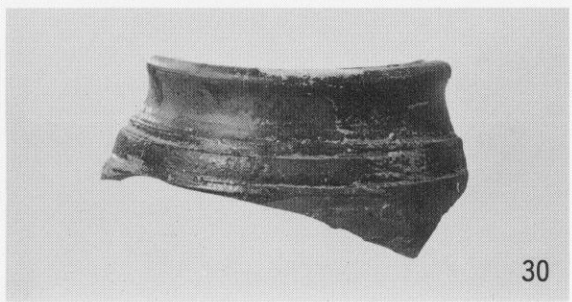

19

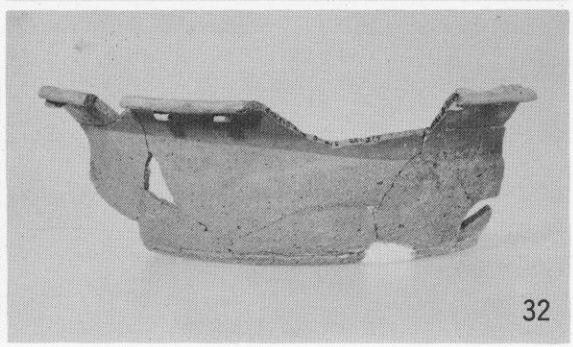

20


21

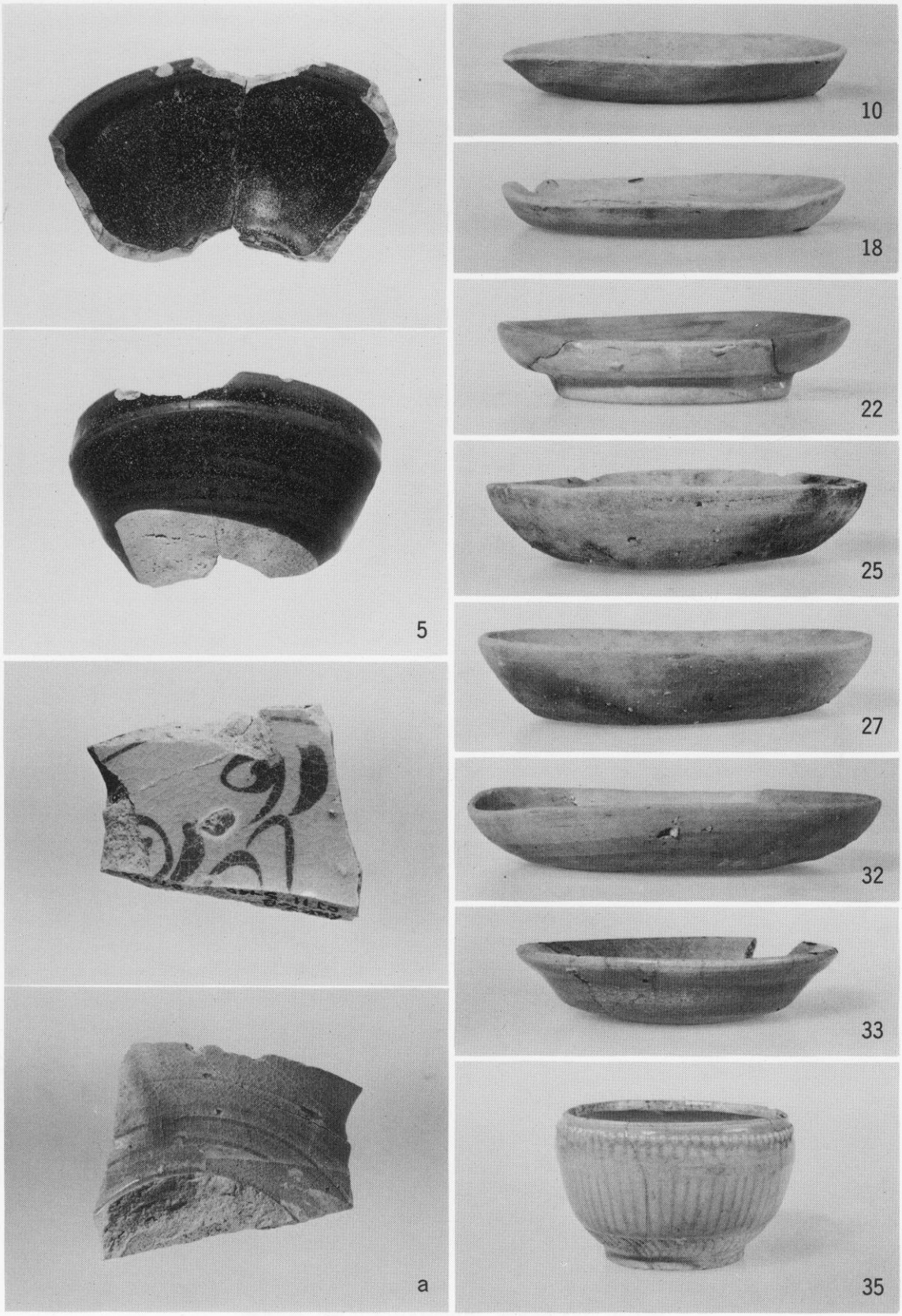

27


29

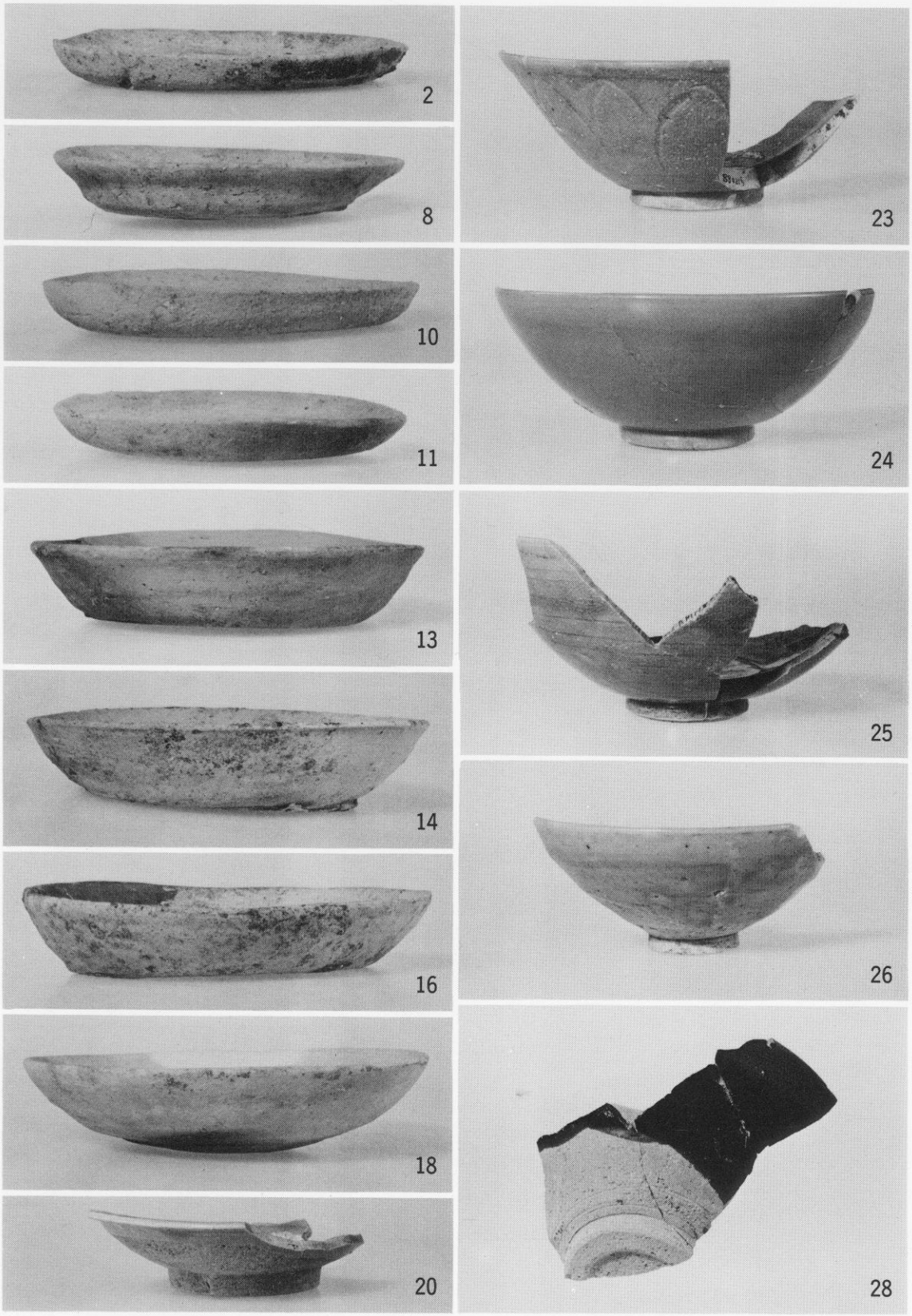

30


32

第109・111次調査　SK3295出土土器・陶磁器



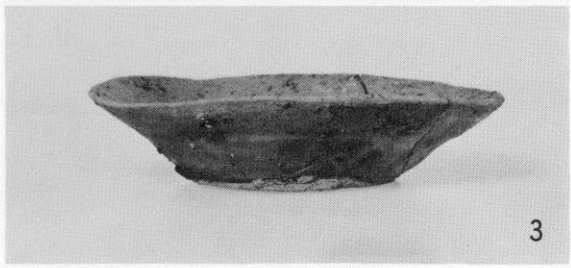
第109・111次調査　SX3210・3310出土土器・陶磁器



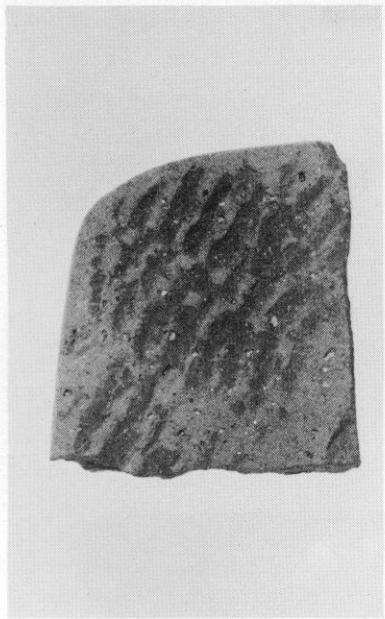
第109・111次調査　SX3313出土土器・陶磁器

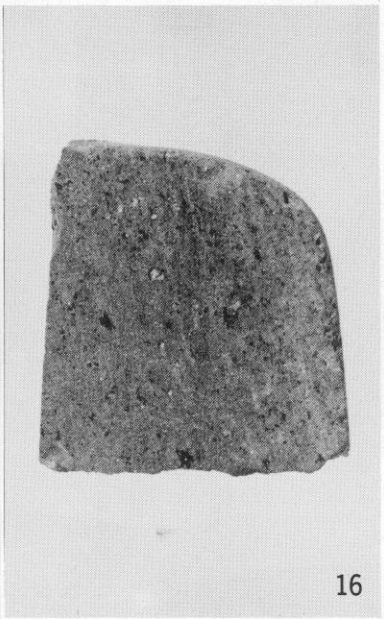

1

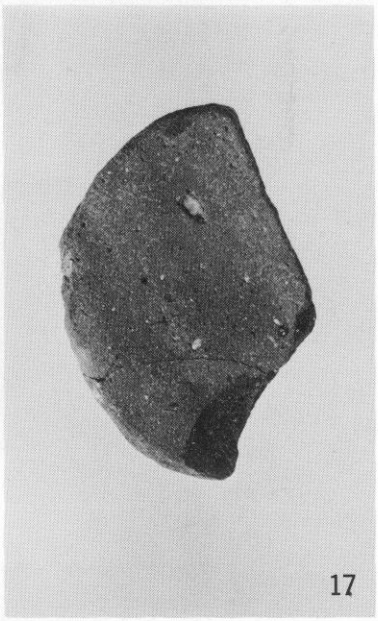

2


3

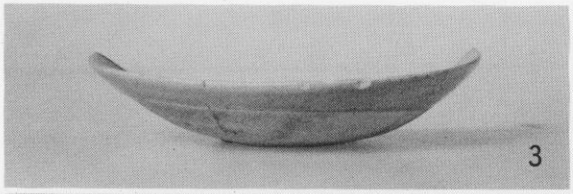

18

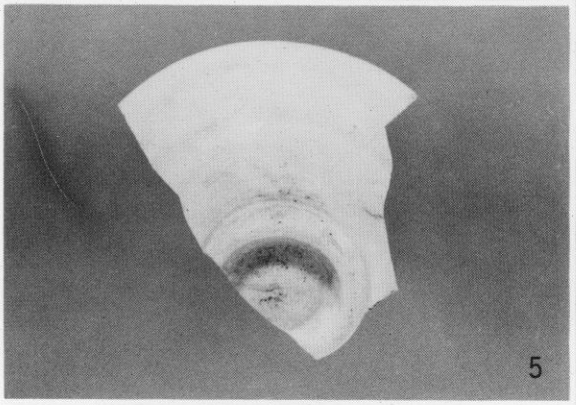


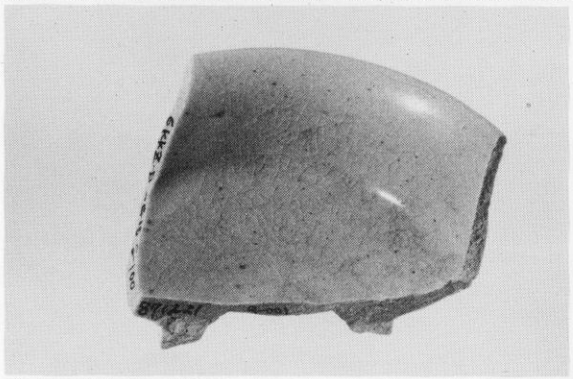

16

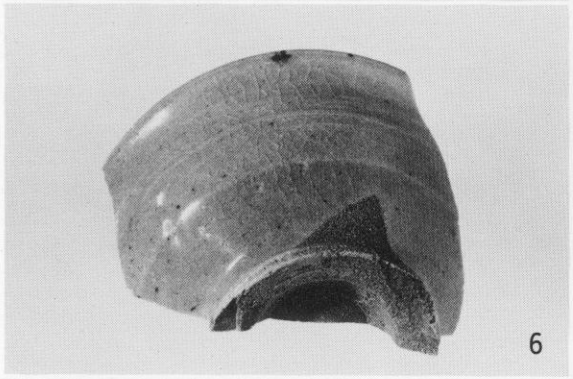

17

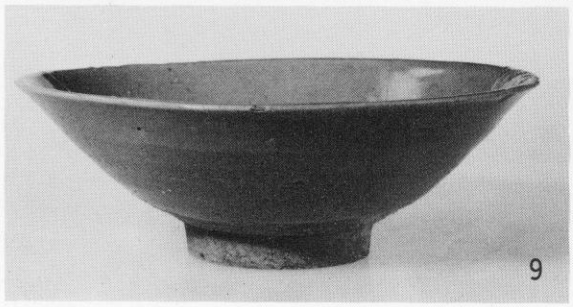
第109・111次調査　SX3277・3292、SD3152、出土土器・硯

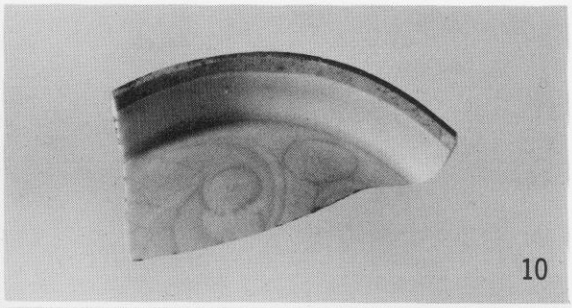

3

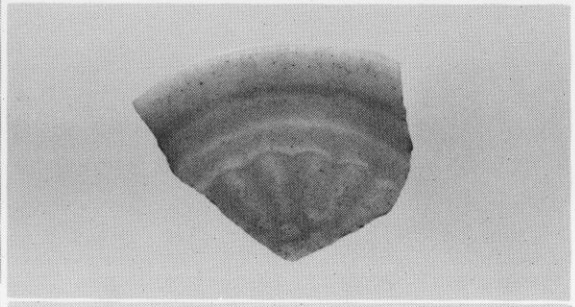

5

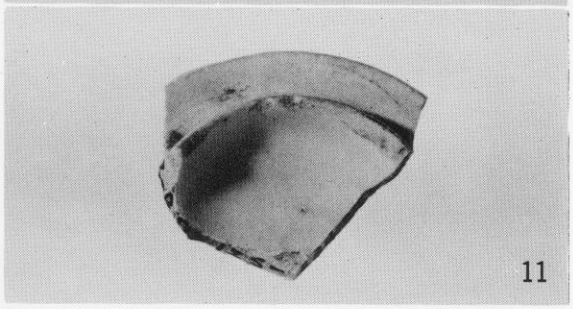


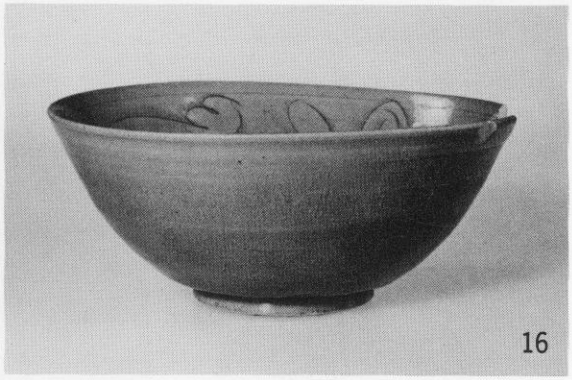

6


9


10

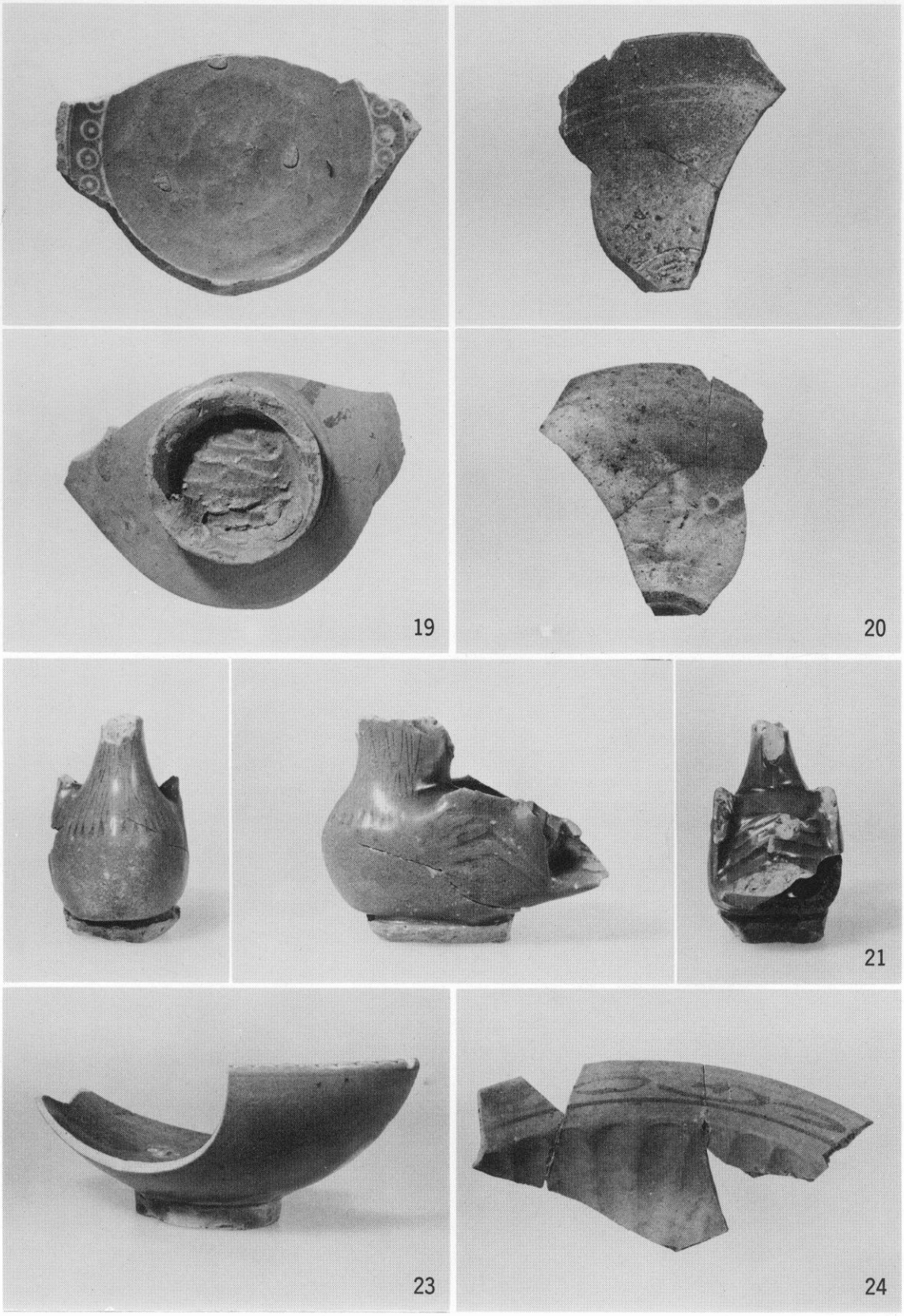



11


16


17

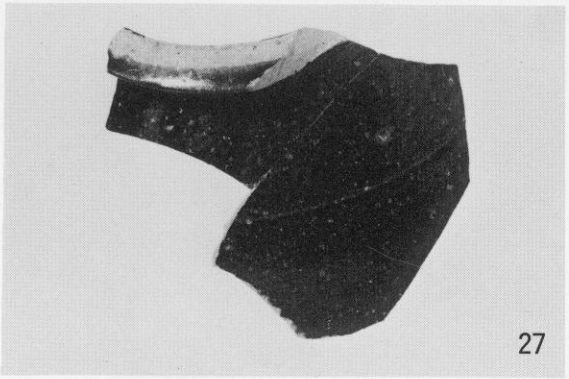
第109・111次調査　遺構出土陶磁器

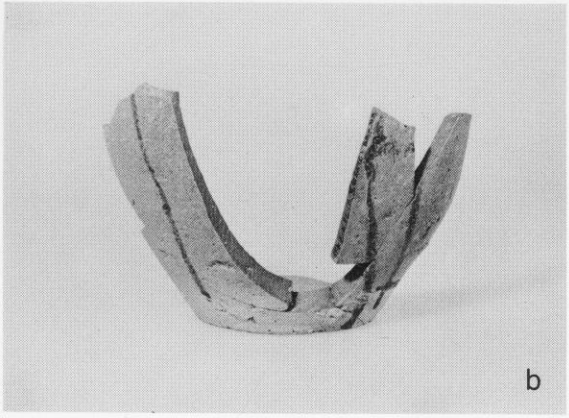


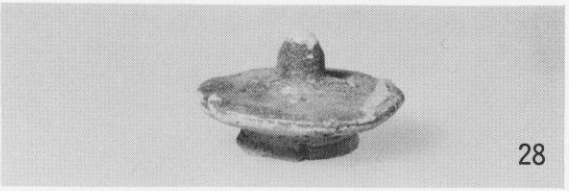
第109・111次調査　遺構出土陶磁器

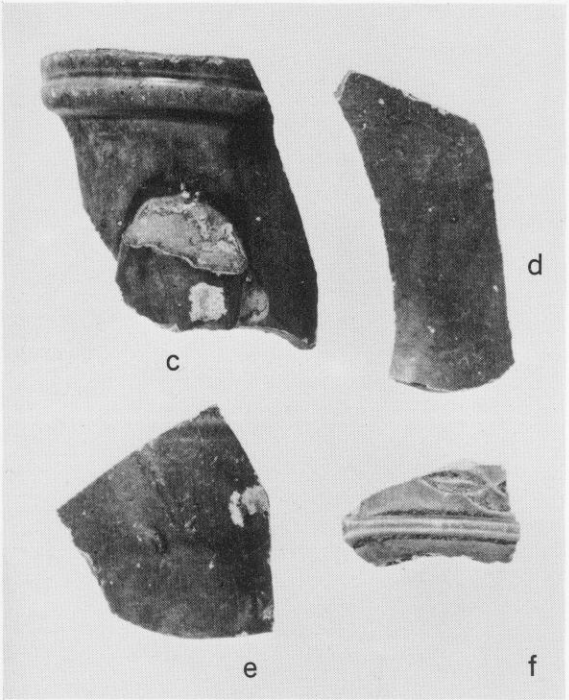

25


a


27


b


28

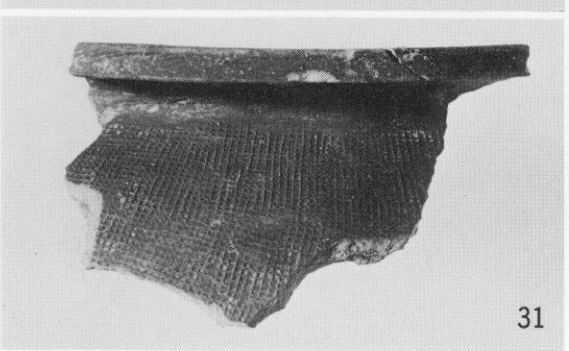

c

d

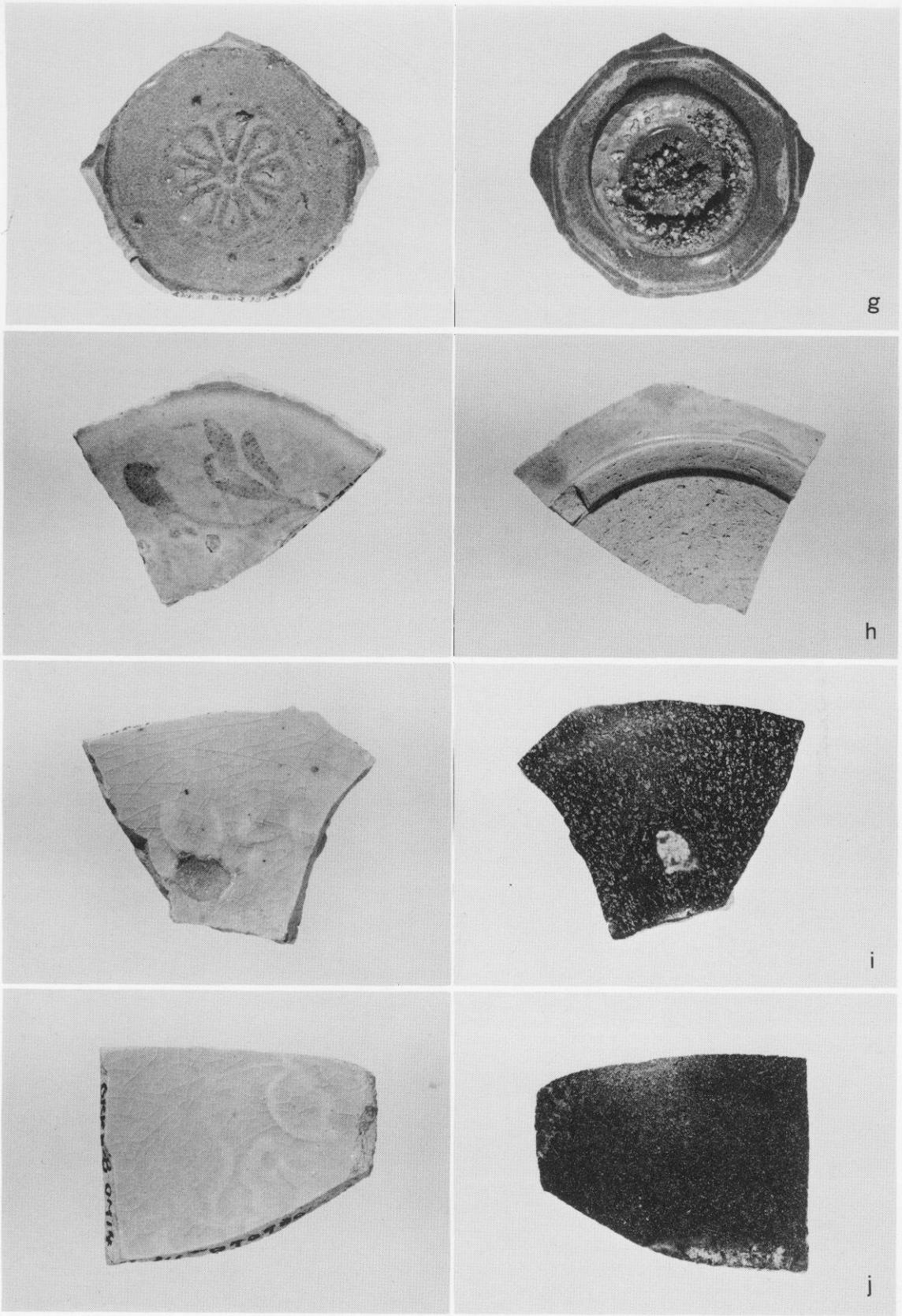
e

f


29

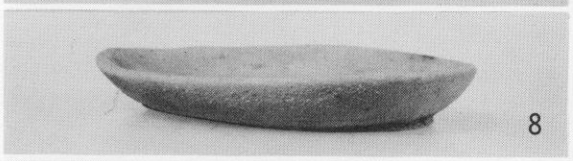

31

第109・111次調査　遺構出土陶磁器

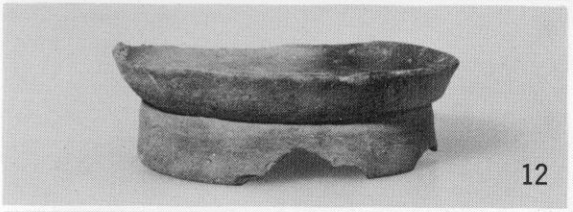


第109・111次調査　遺構出土陶磁器


6

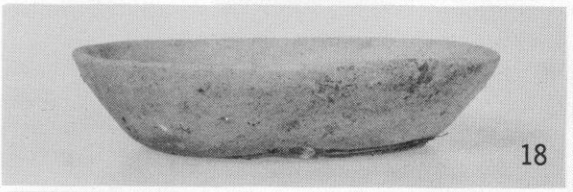

8

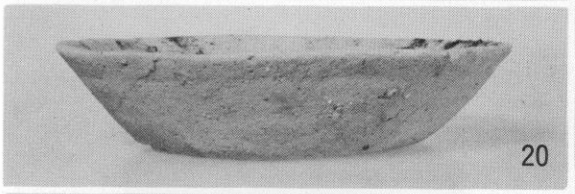

11

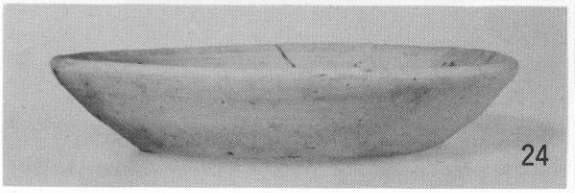

12

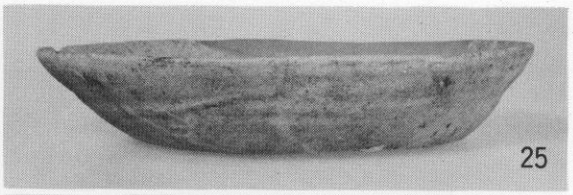

13

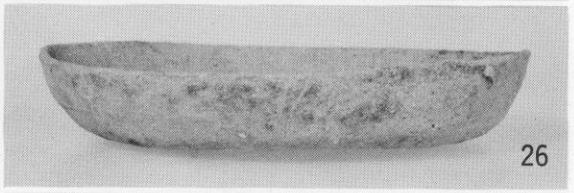

16


18

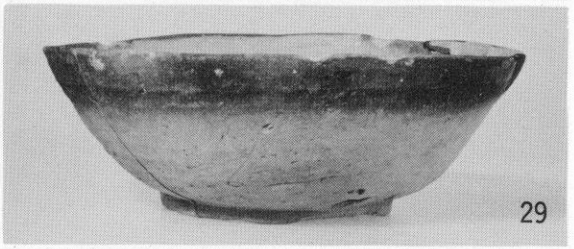

20

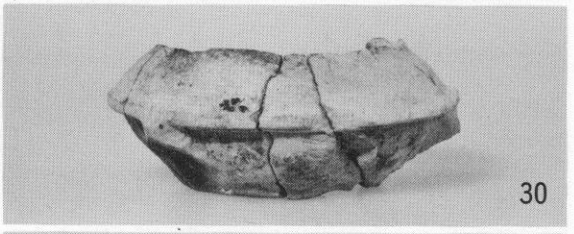

24


25


26

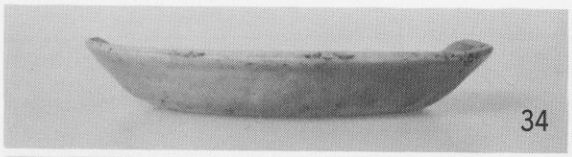

28


29


30

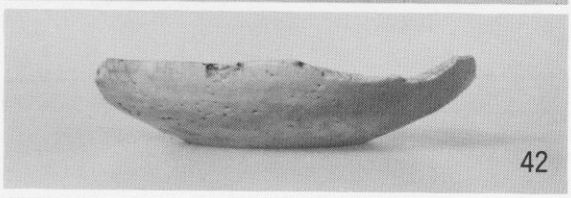

31

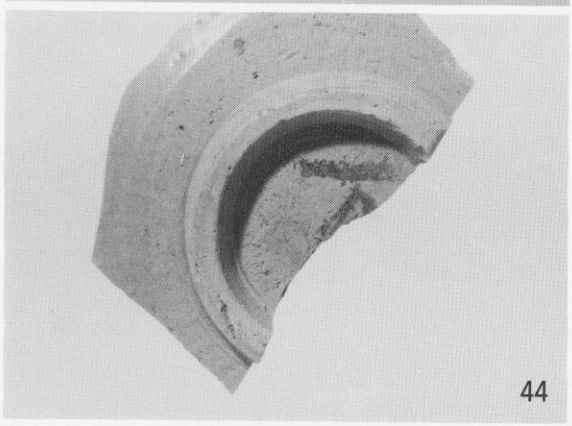
第109・111次調査　黒色砂質土層出土土器・陶磁器

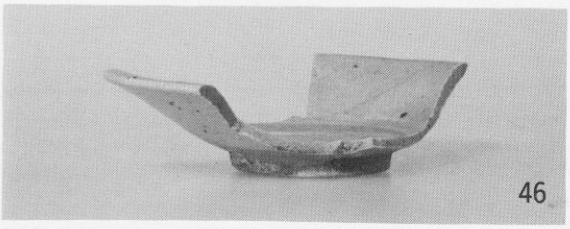

34


37

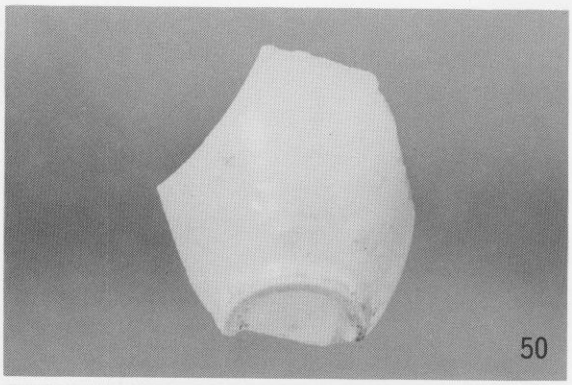

39


42


44


46


49


50

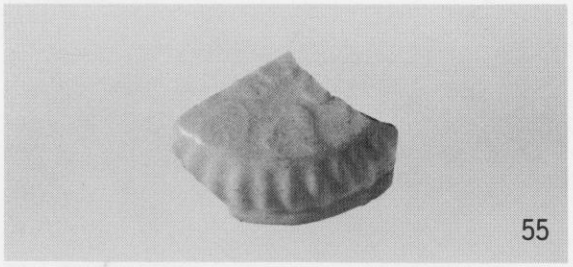

52

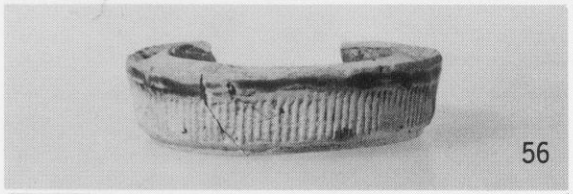

53

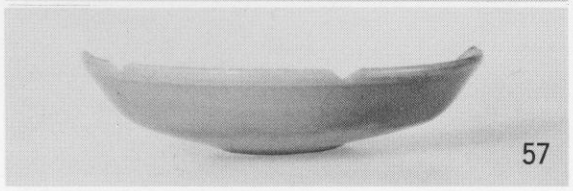


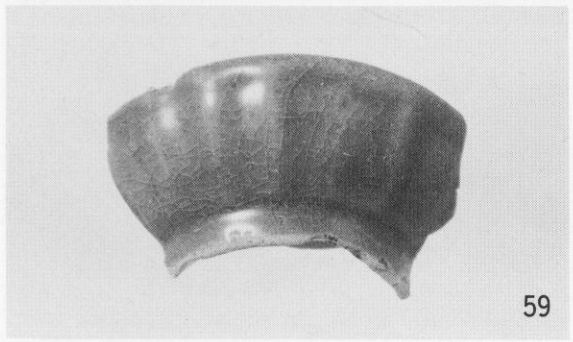

54

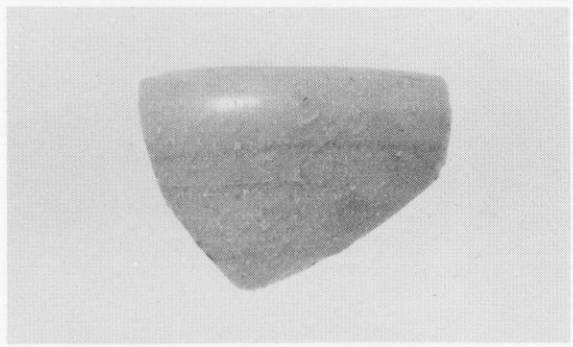
第109・111次調査　黒色砂質土層出土土器・陶磁器

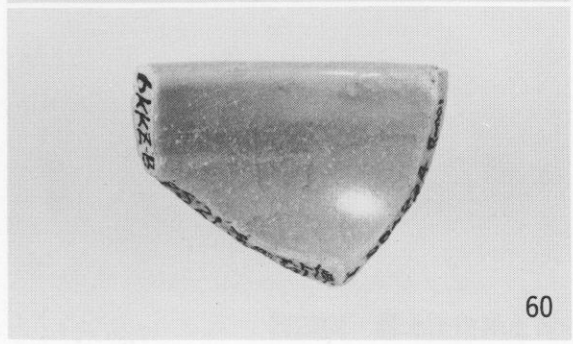

55

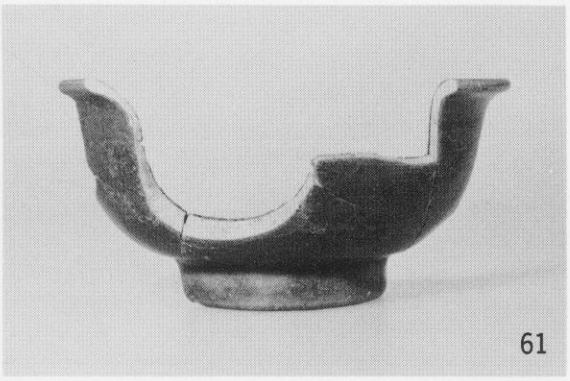

56


57

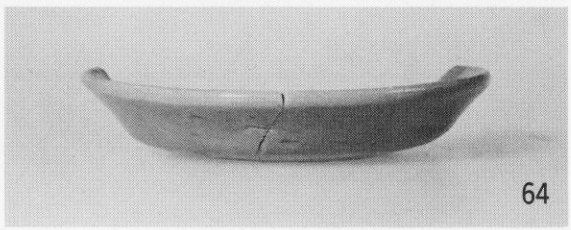

59




60


61


62

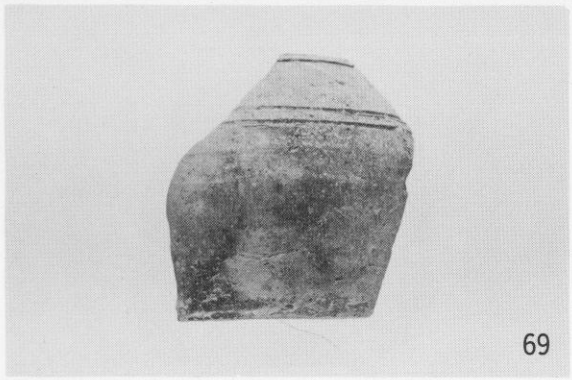

64


65

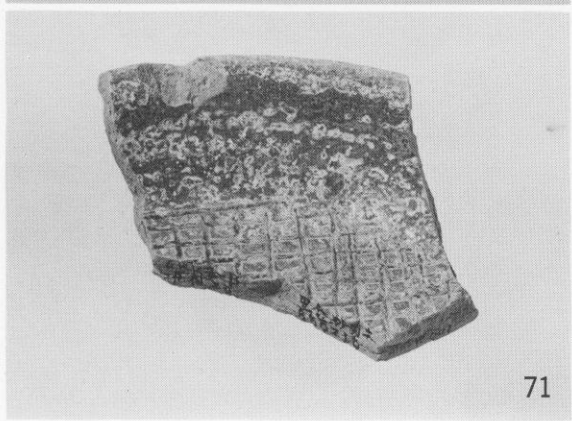

66

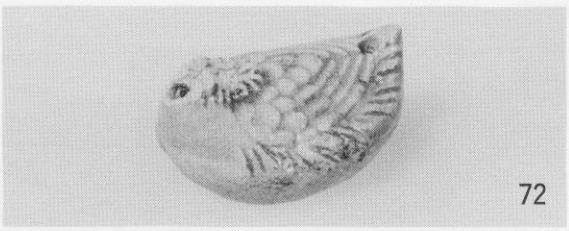
第109・111次調査　黒色砂質土層出土土器・陶磁器

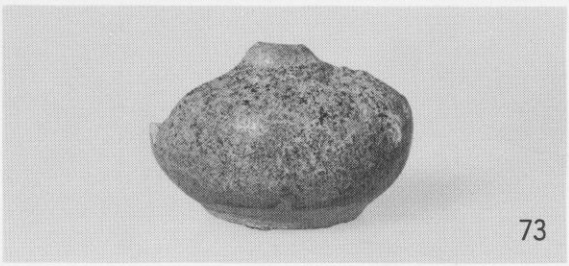

67

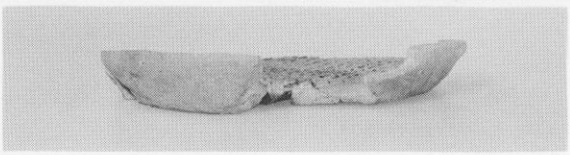

69

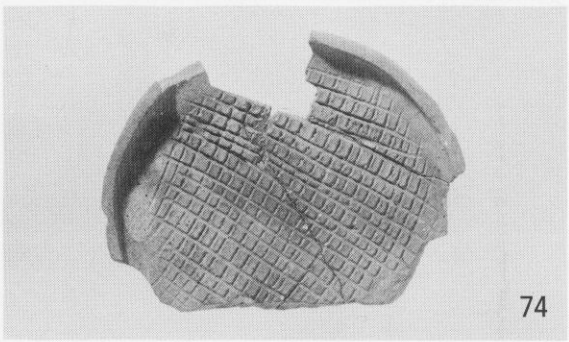

70


71


72


73

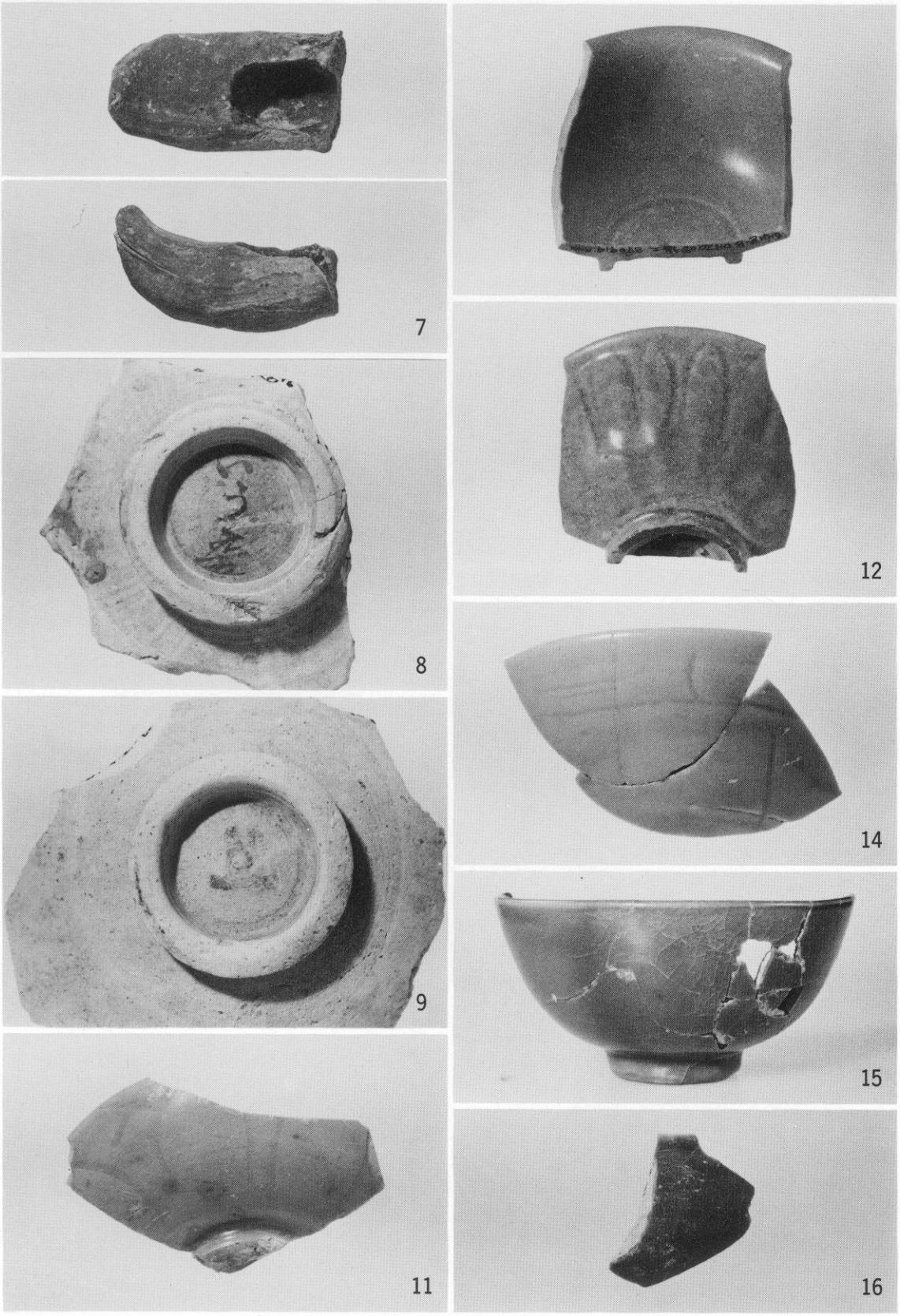



74

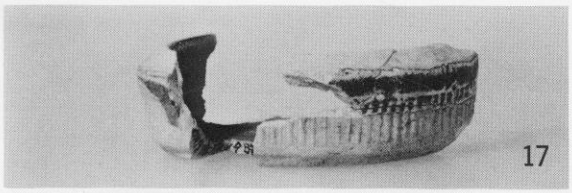

77

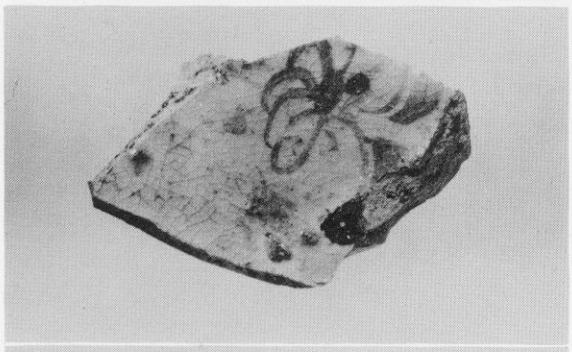

a

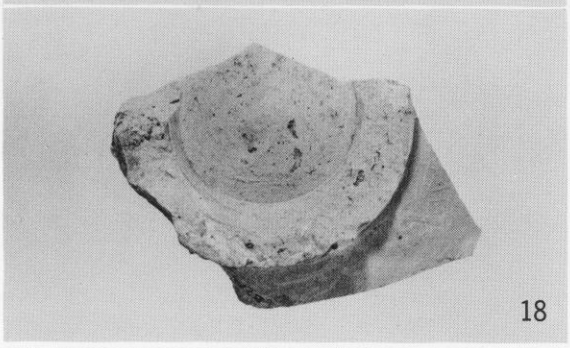
第109・111次調査　黒色砂質土層出土土器・陶磁器

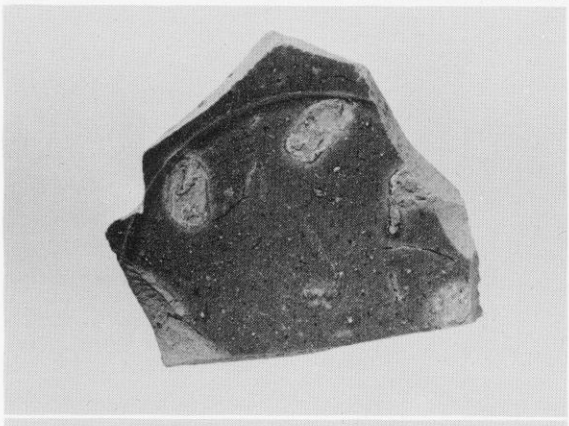


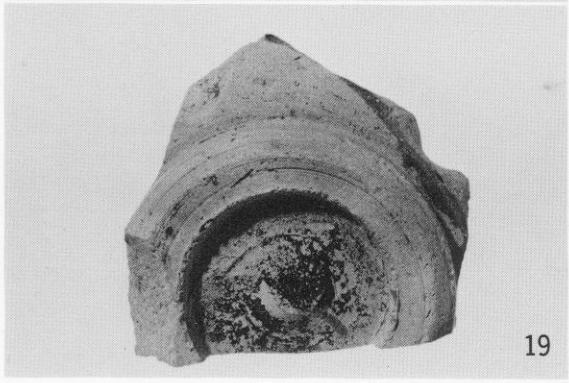
第109・111次調査　暗褐色土層出土土器・陶磁器

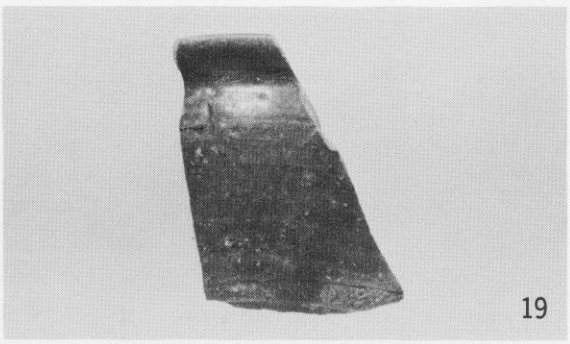

17

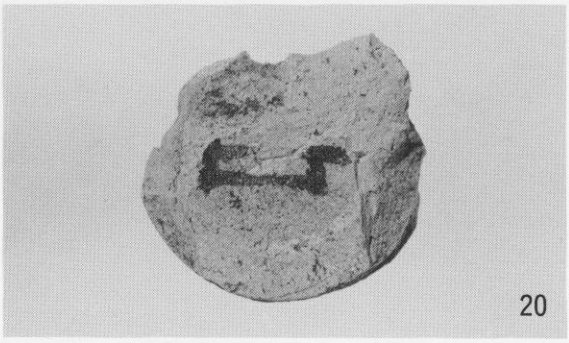


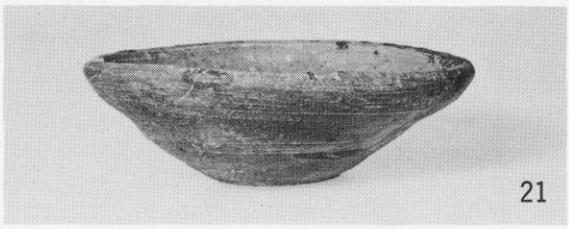

18

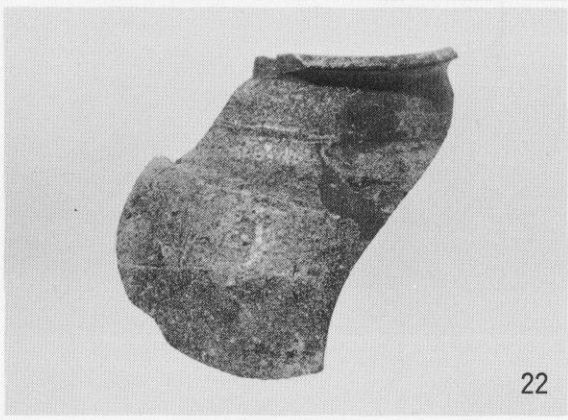



19


19

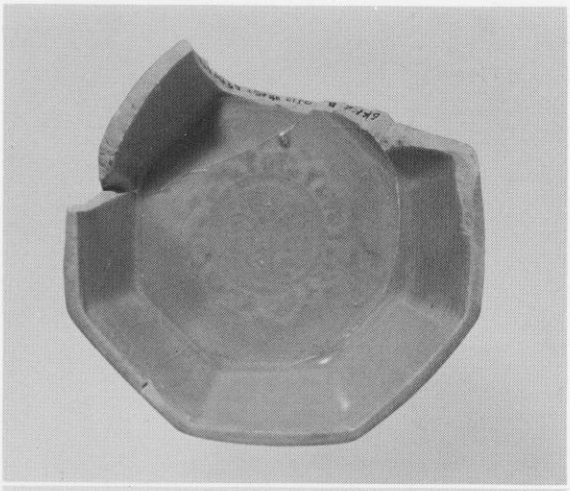

20

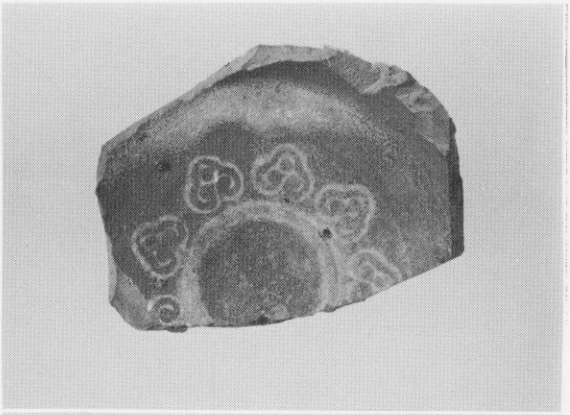

21

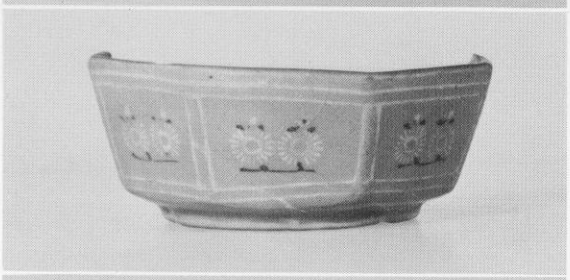

22


23

第109・111次調査　暗褐色土層出土土器・陶磁器

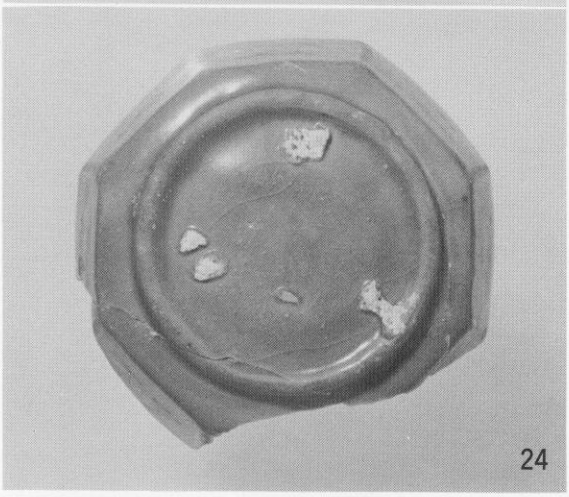




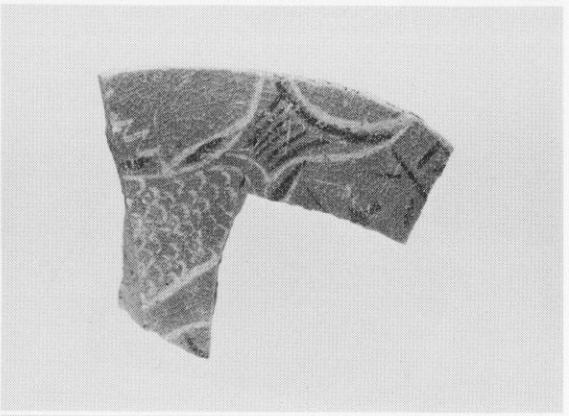


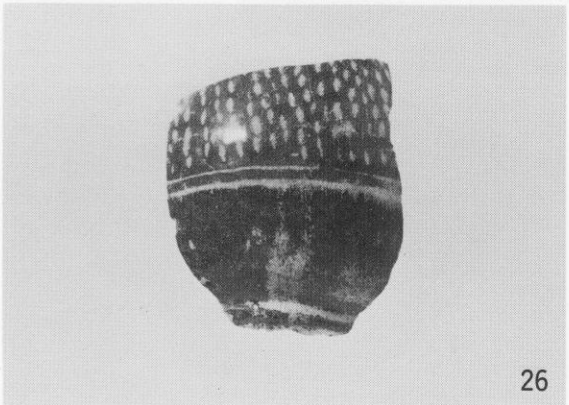


25

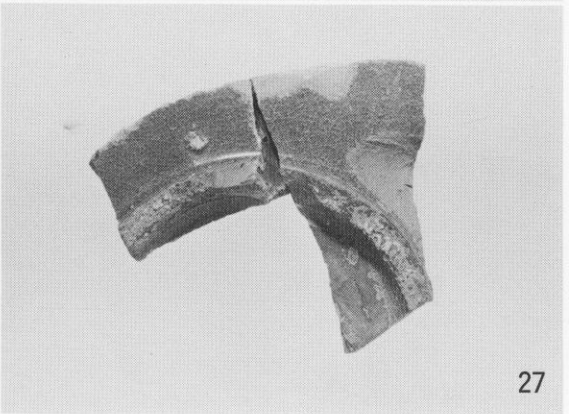


24



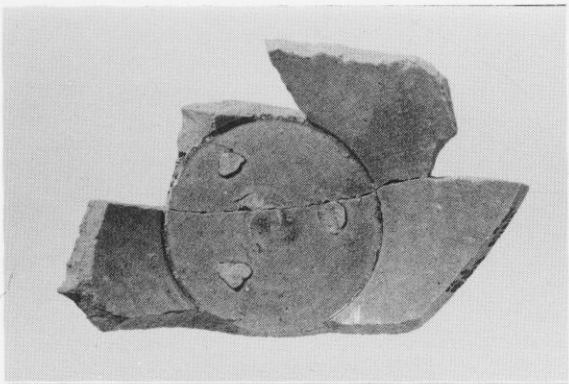


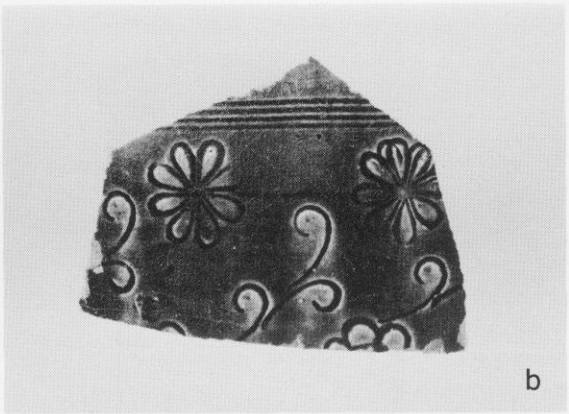
26

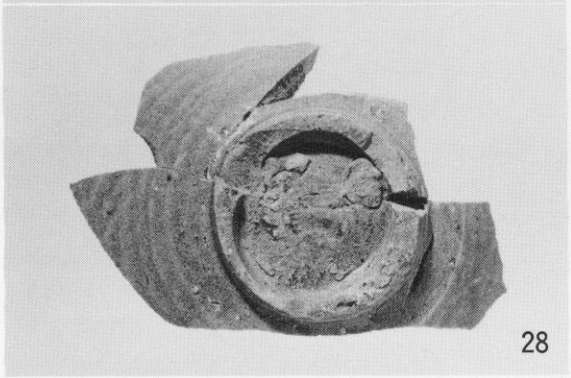


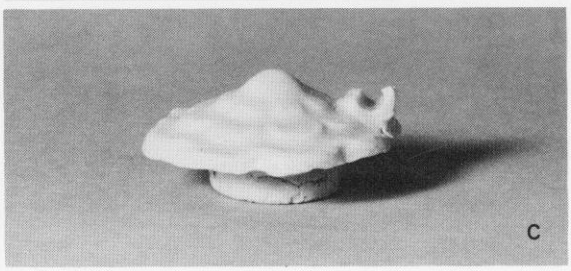
27

第109・111次調査　暗褐色土層出土陶磁器

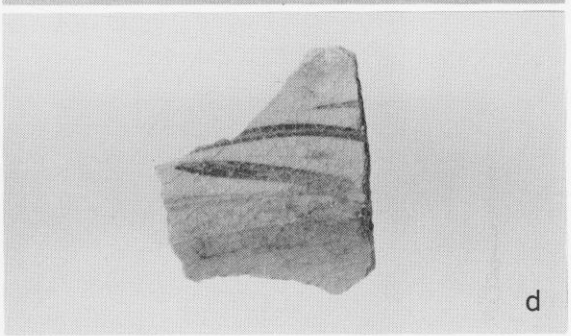


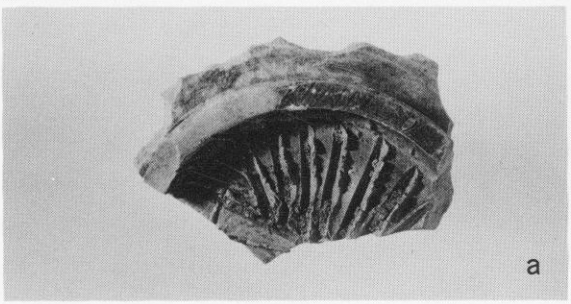


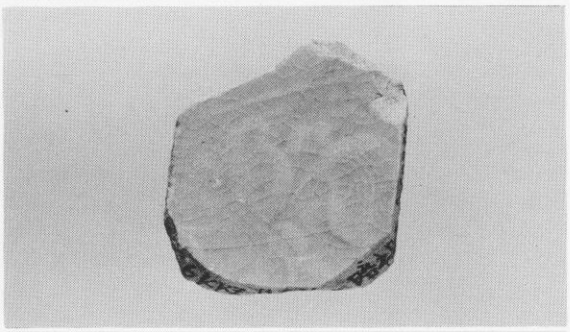


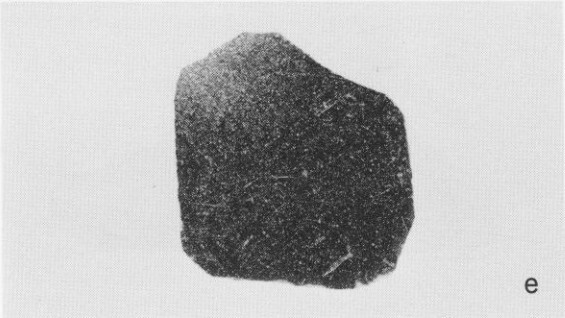




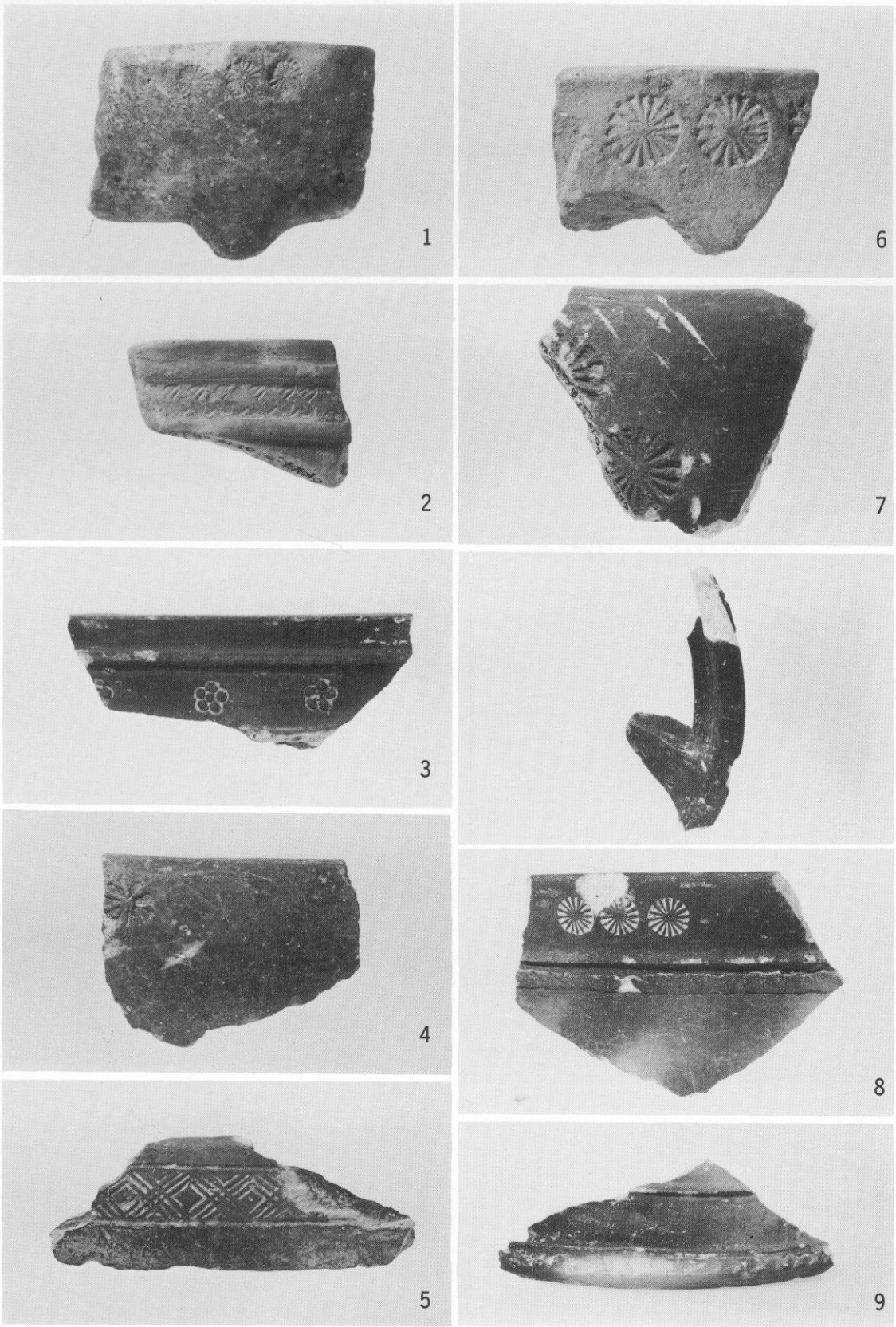




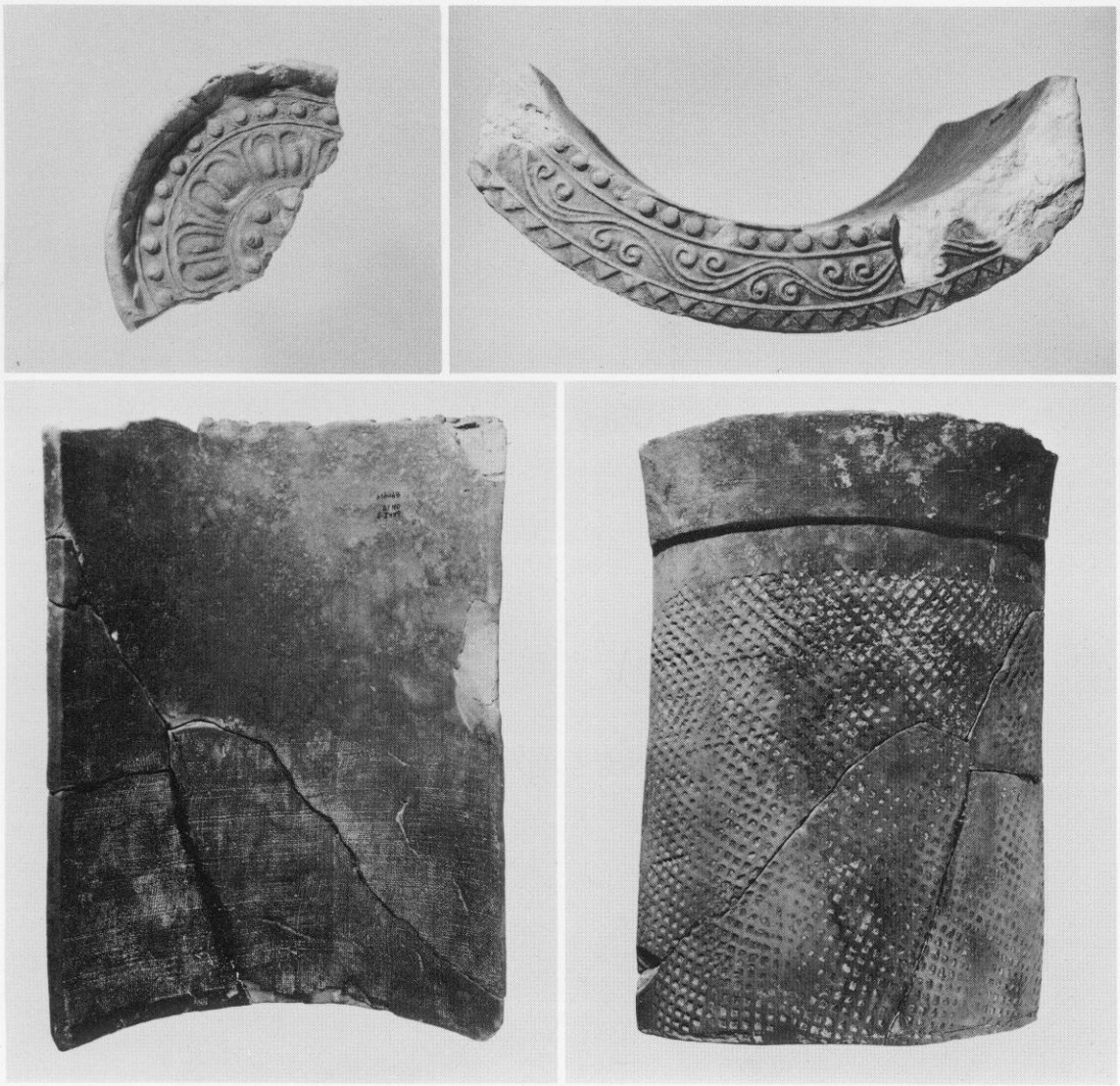




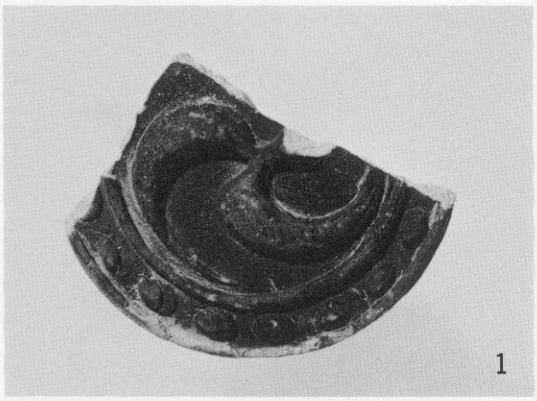
第109・111次調査　暗褐色土層出土陶磁器



第109・111次調査　SX3279・3313、黒色砂質土層・暗褐色土層出土鉢



第109・111次調査　出土軒丸瓦・軒平瓦


1


2

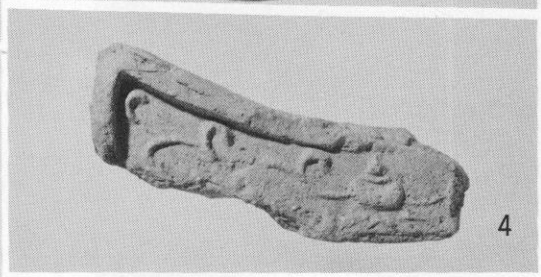

3


4

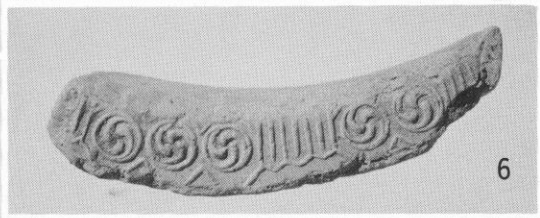

1


2


3


4


5

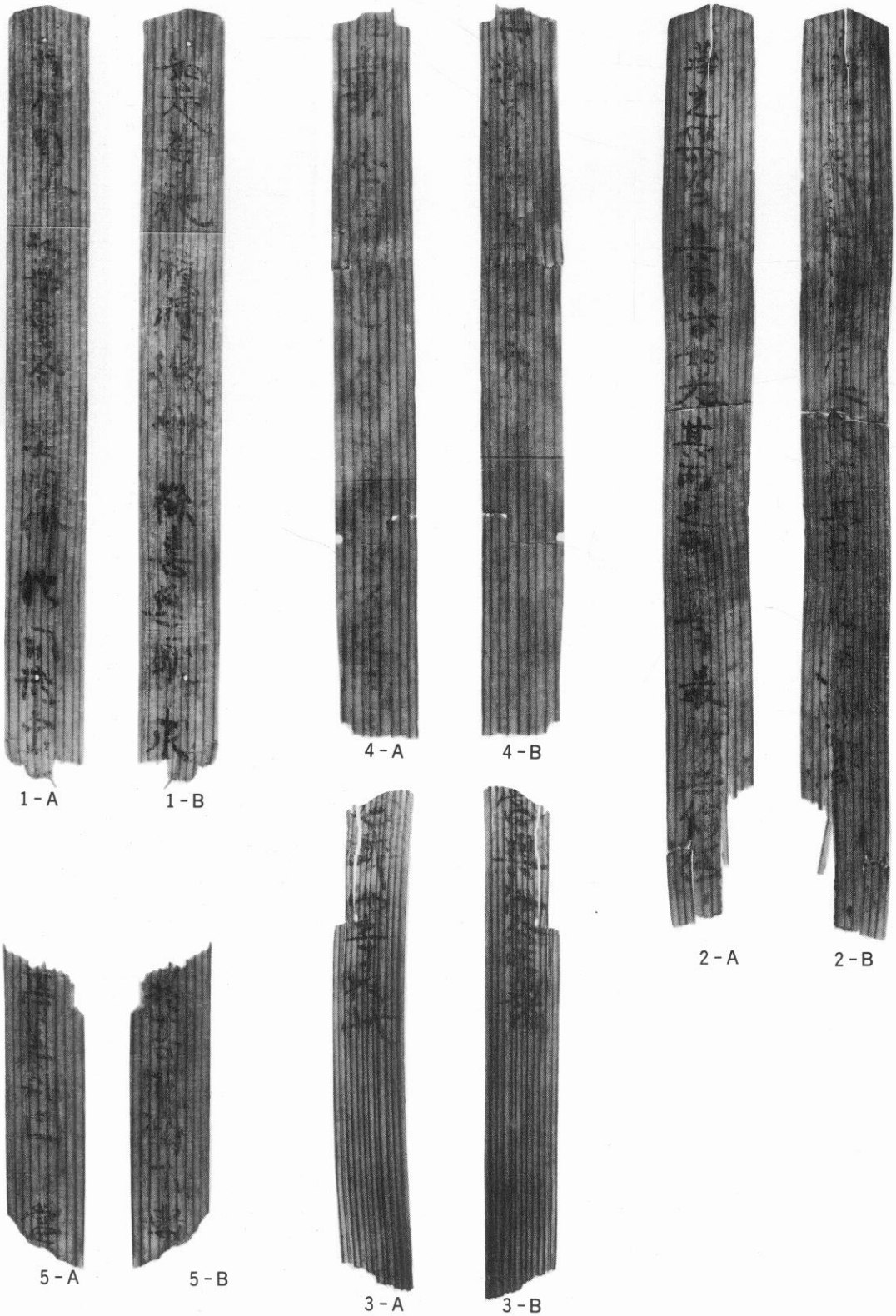

6


8

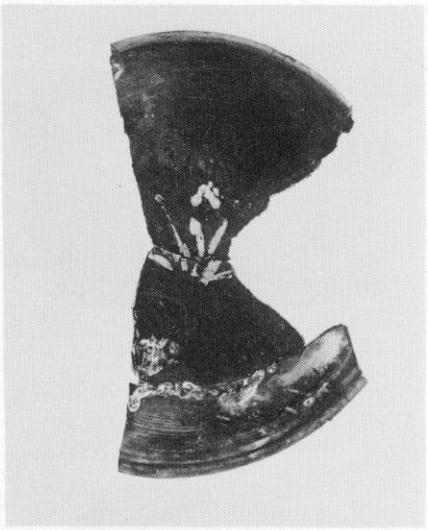
第109・111次調査　出土軒丸瓦・軒平瓦

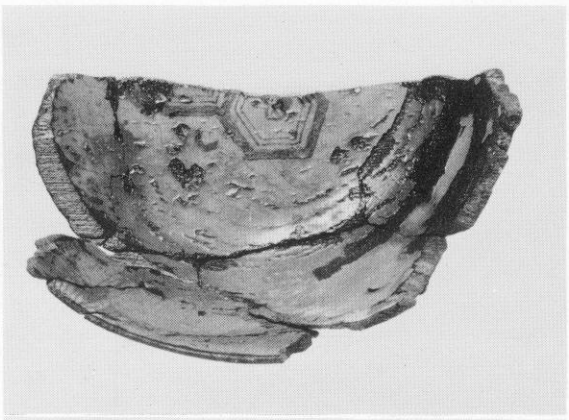


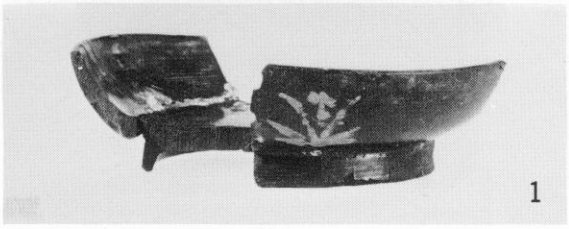
第109・111次調査　卒塔婆

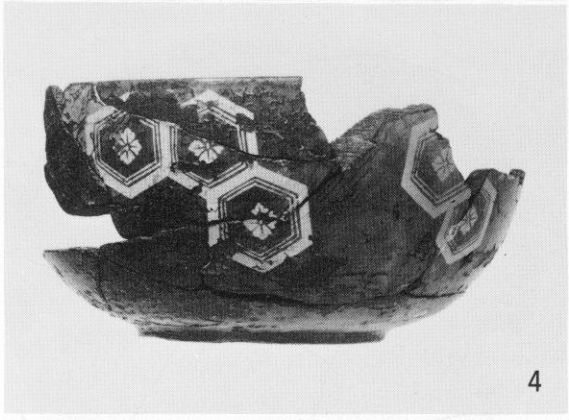


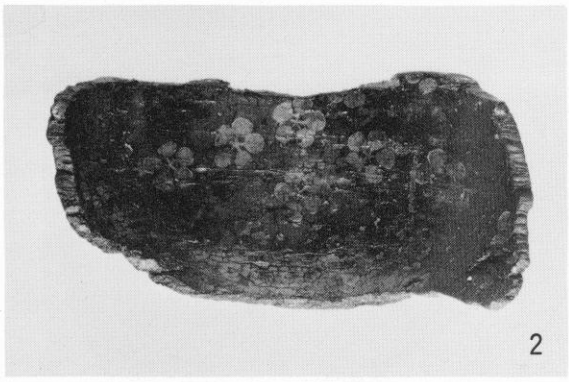
第109・111次調査　柿経

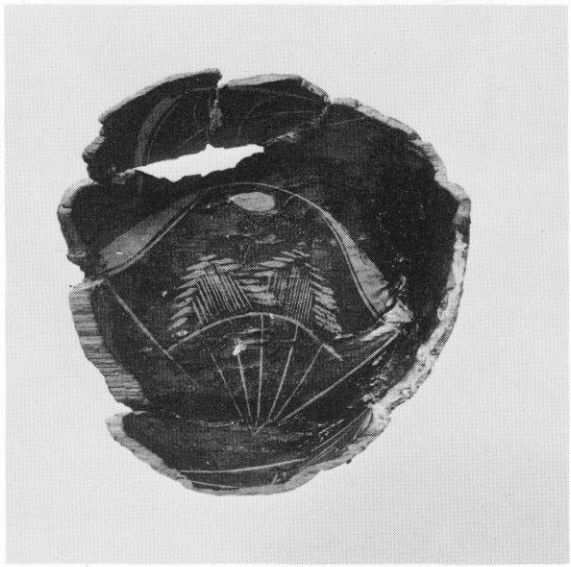


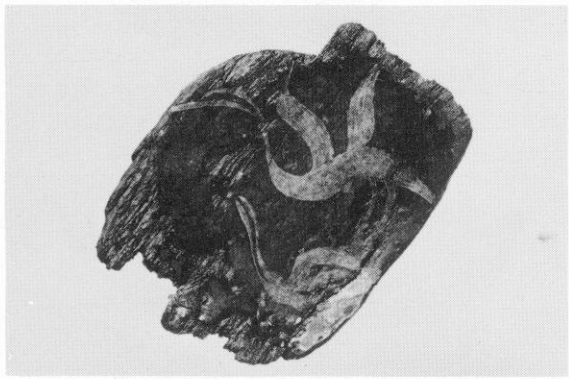


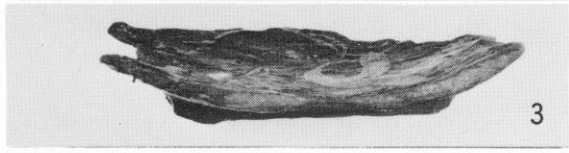


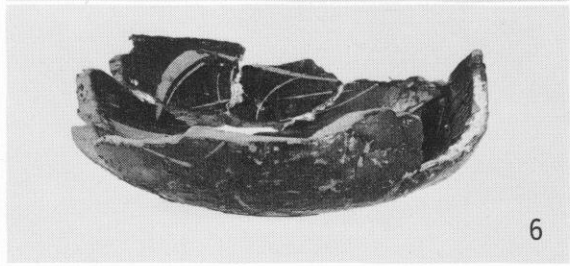




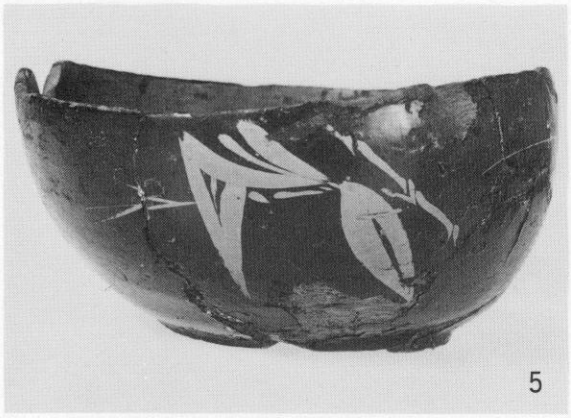


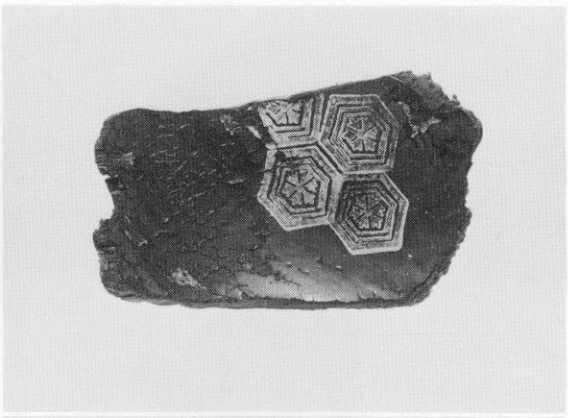




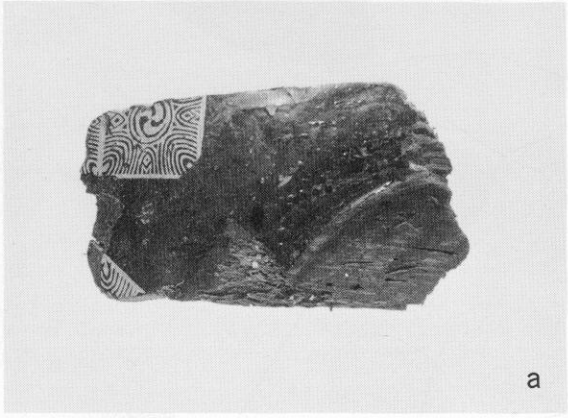


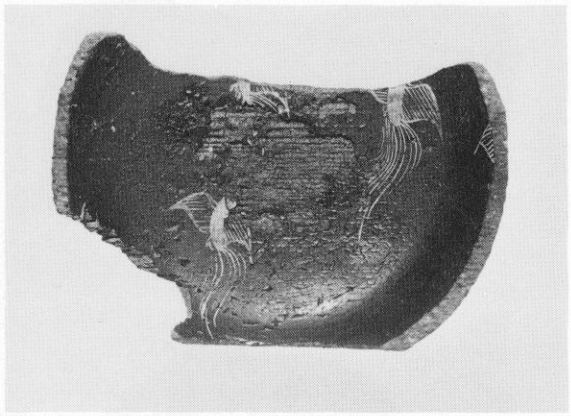
第109・111次調査　SD3200出土木製品

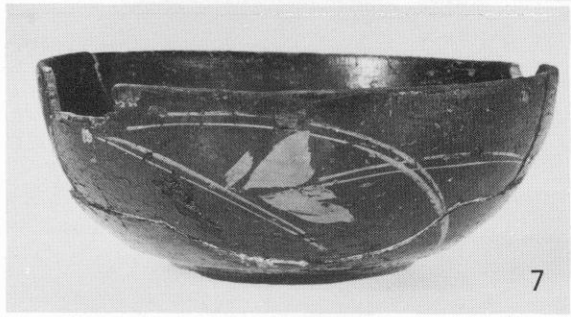

5

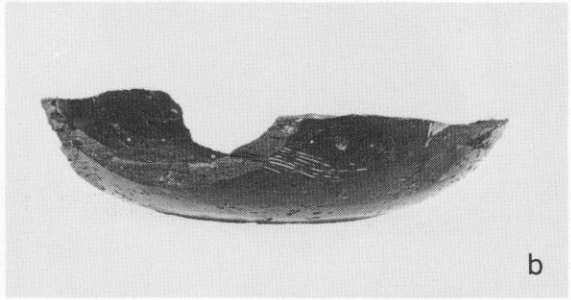


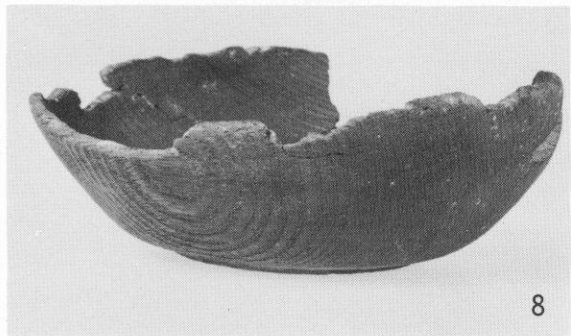



a

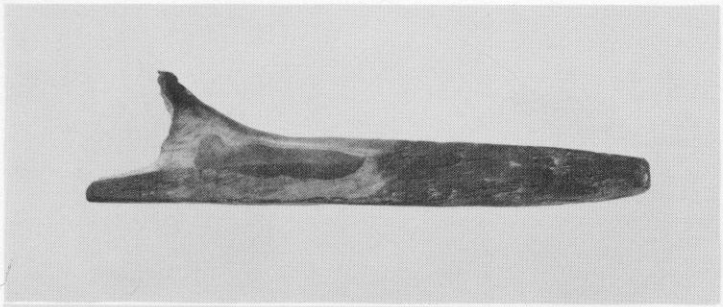


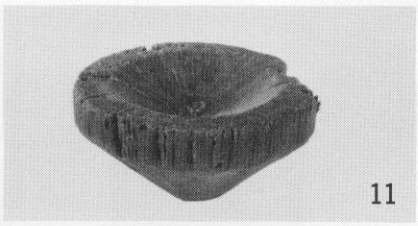

7


b


8

第109・111次調査　SD3200出土木製品

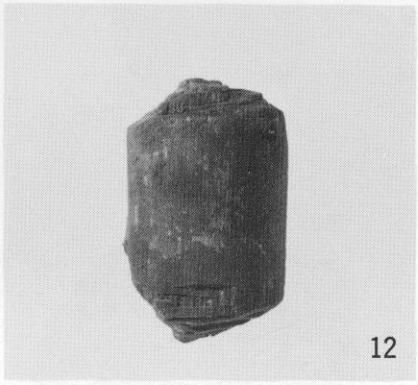




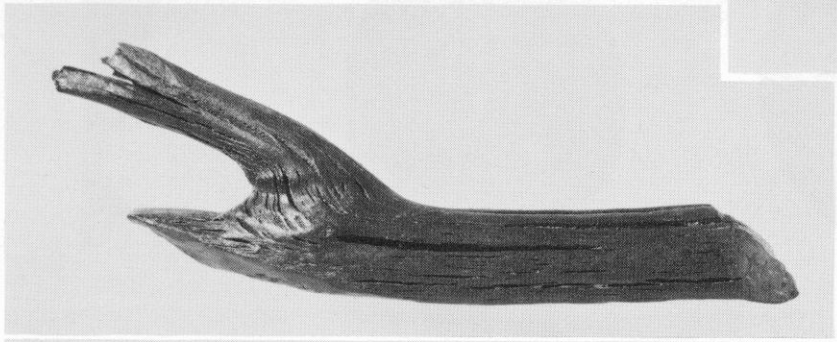
11

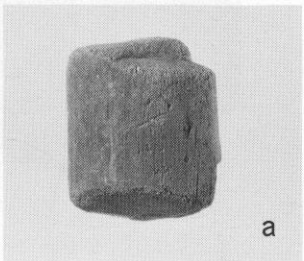


9

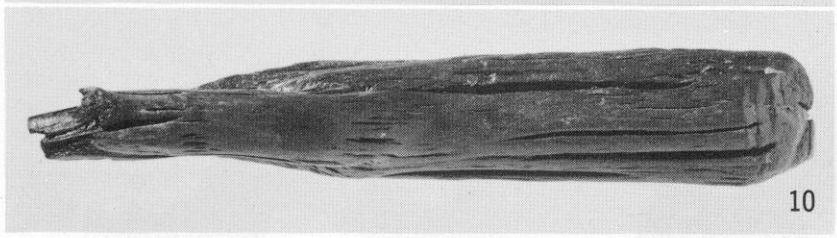


12

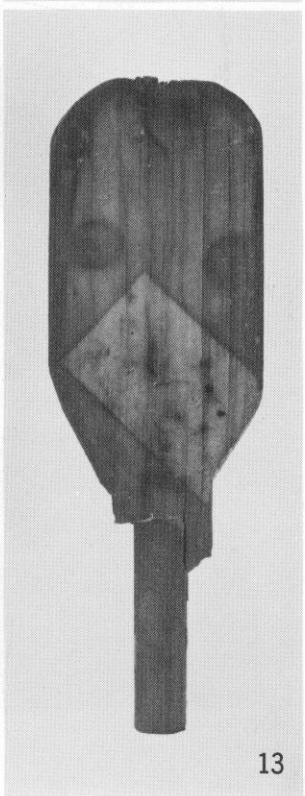




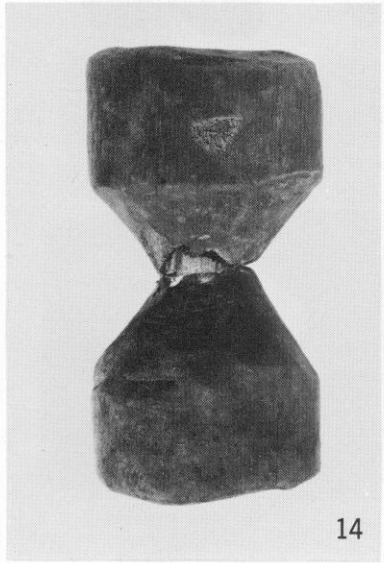
a



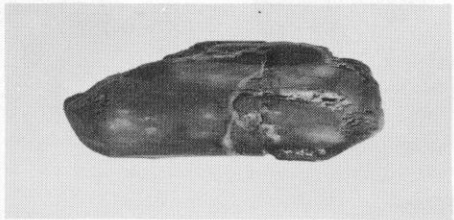
10

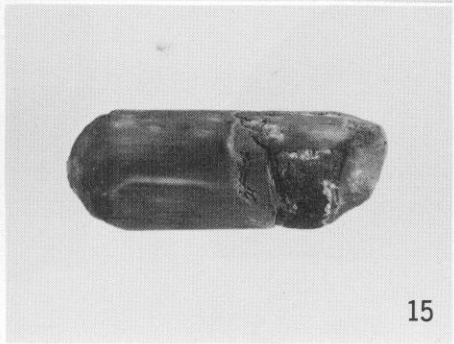


13



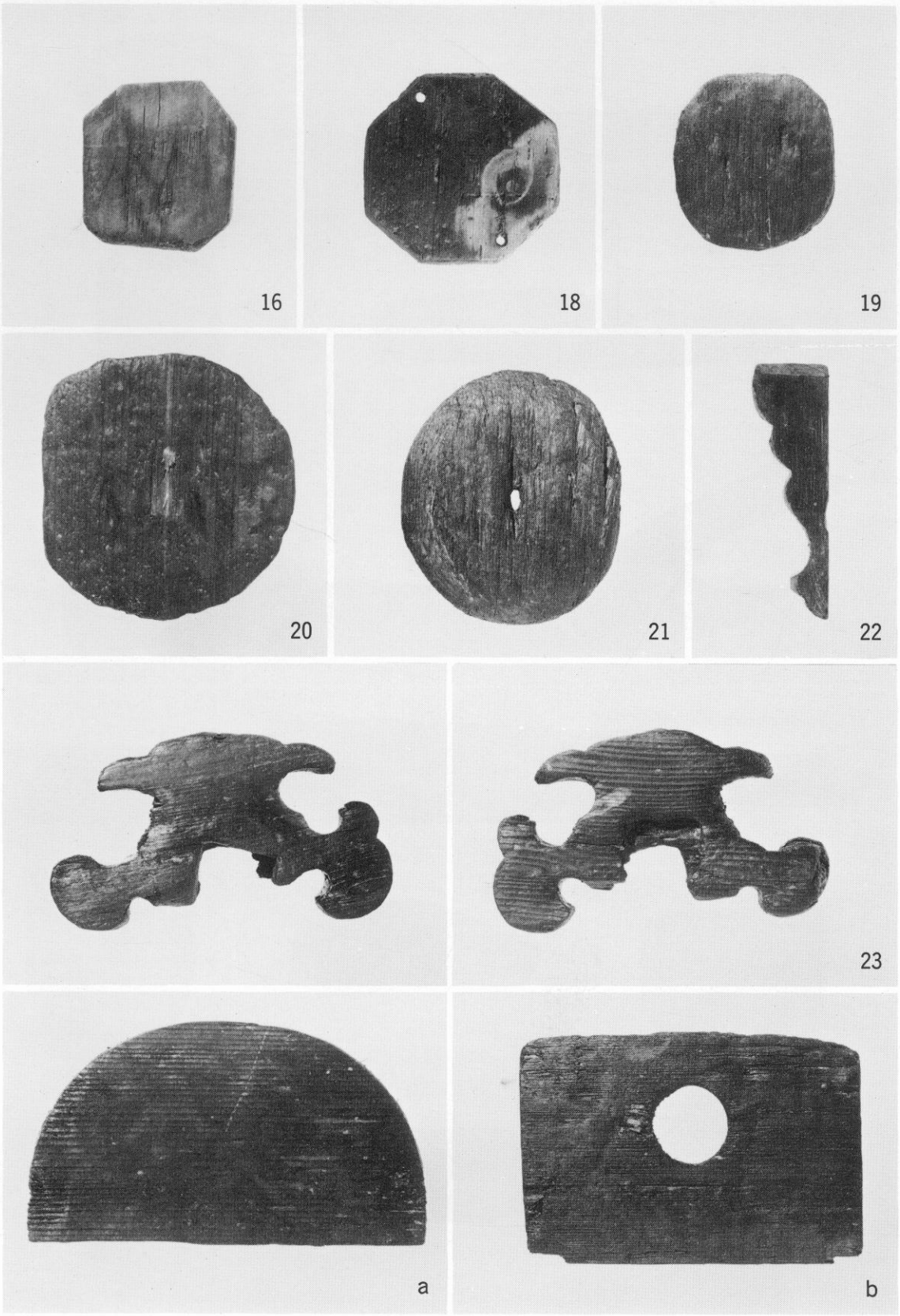
14



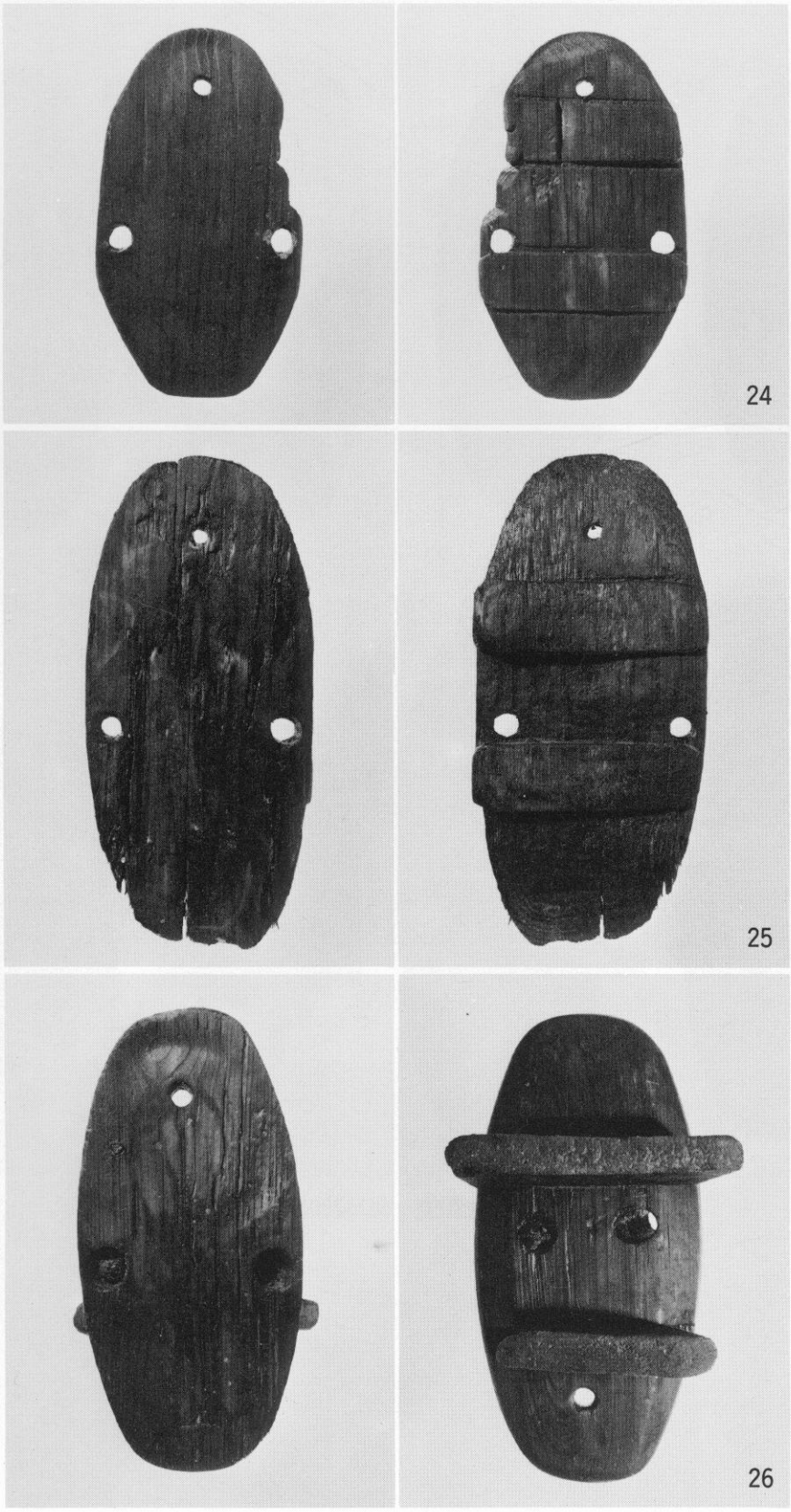


15

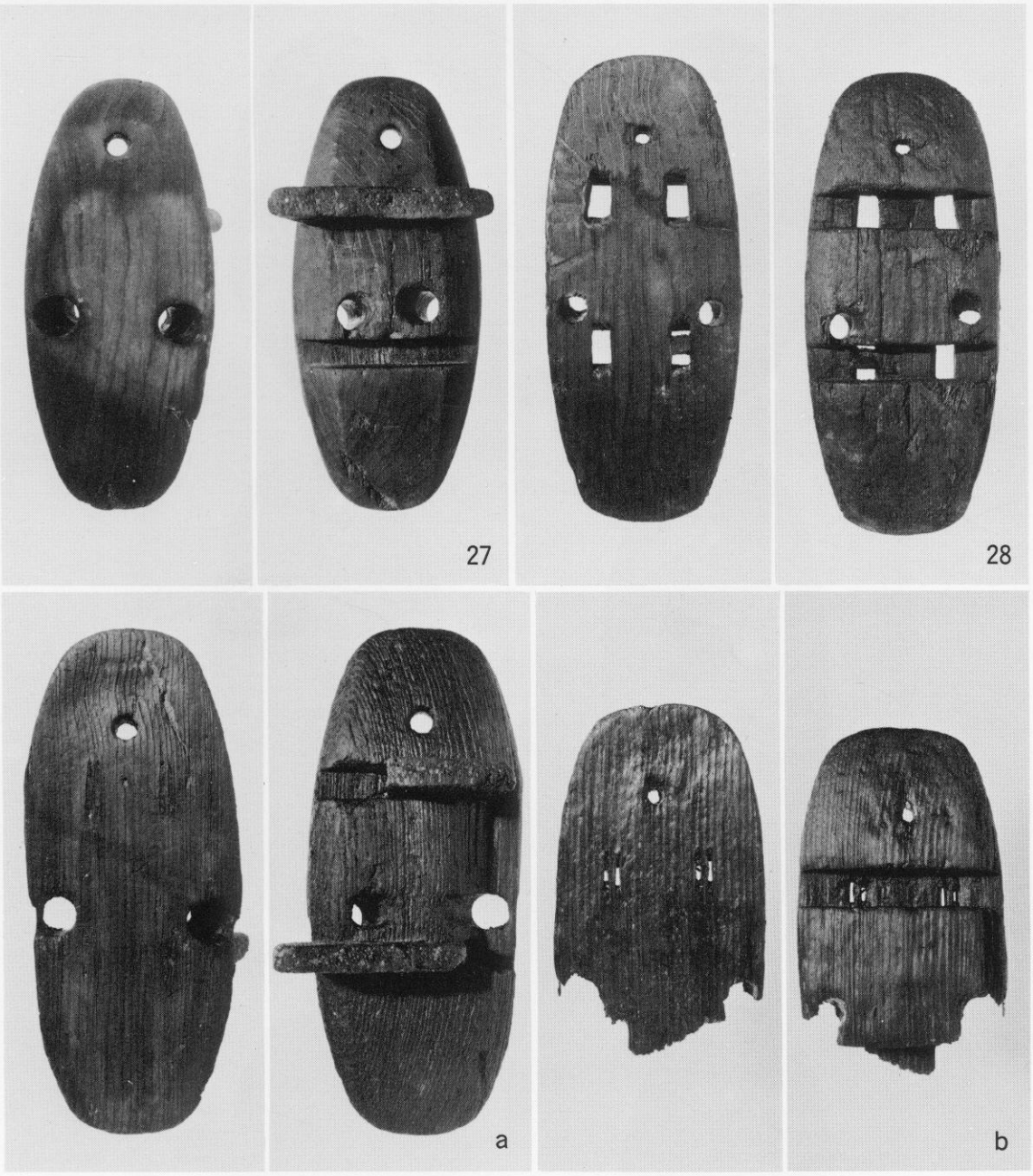
第109・111次調査　SD3200出土木製品



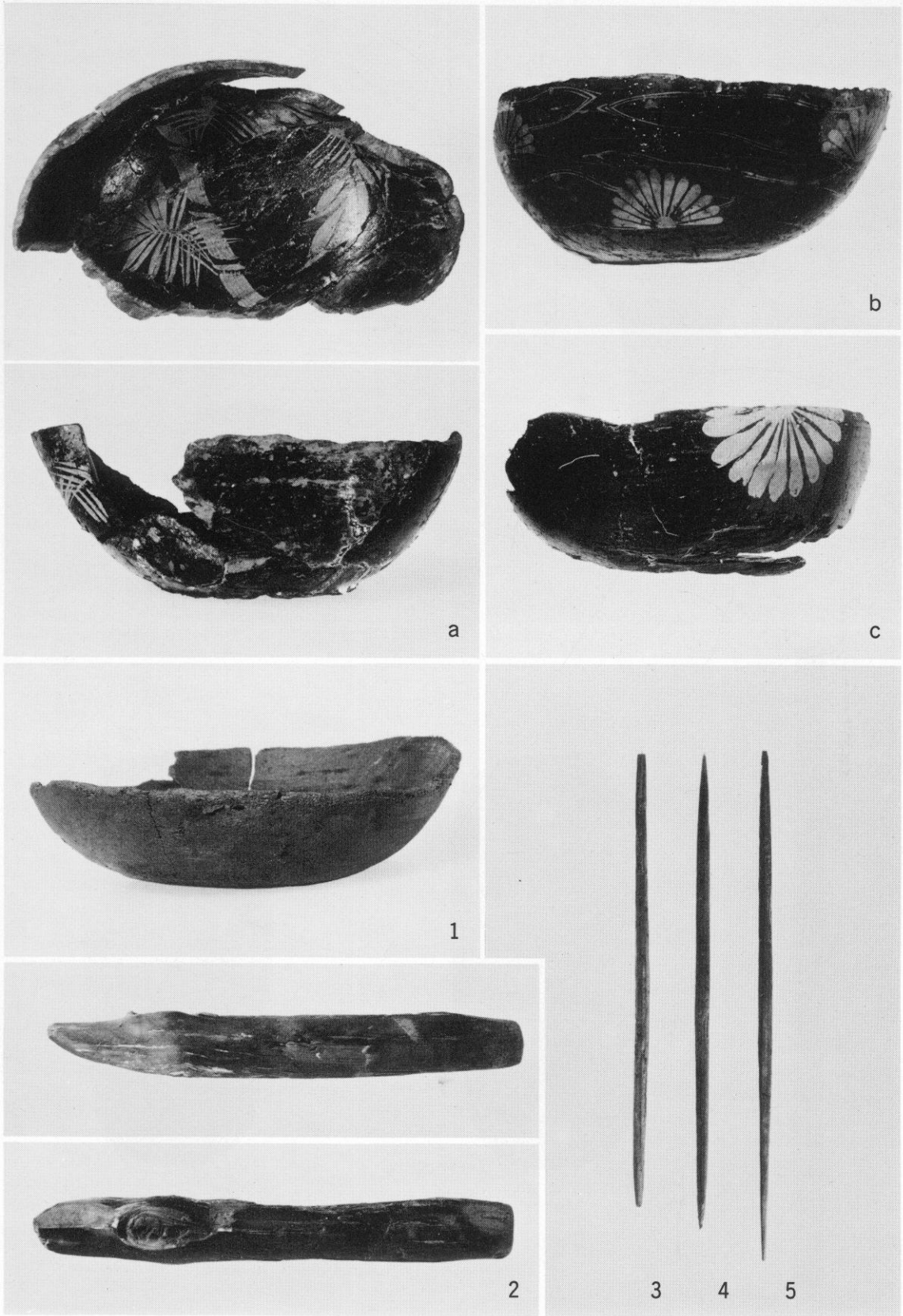
第109・111次調査　SD3200出土木製品



第109・111次調査　SD3200出土木製品



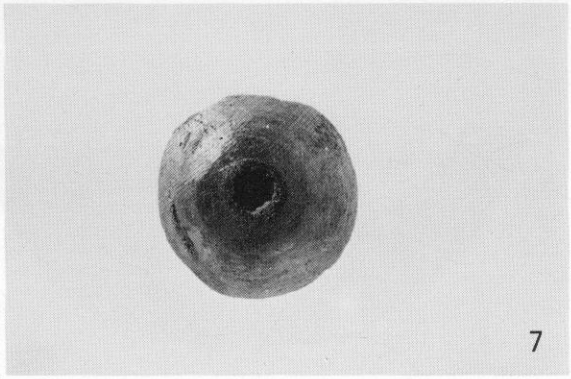
第109・111次調査　SD3200出土木製品

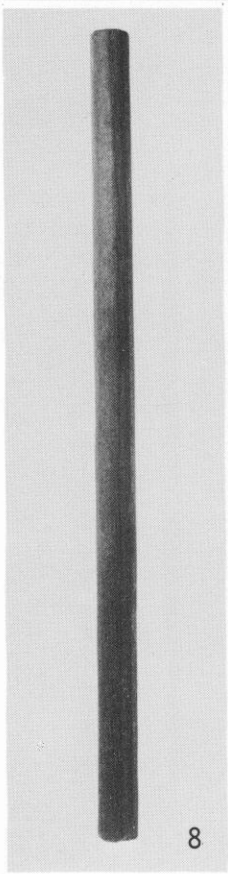


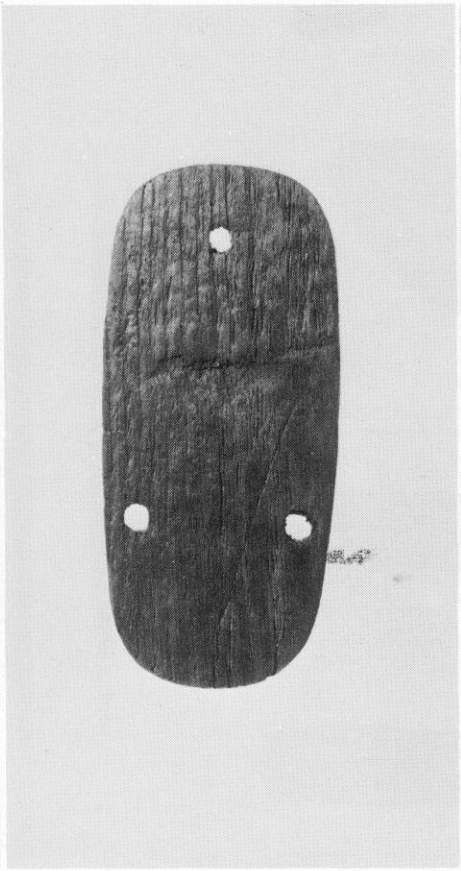
第109・111次調査　その他の遺構・層位出土木製品

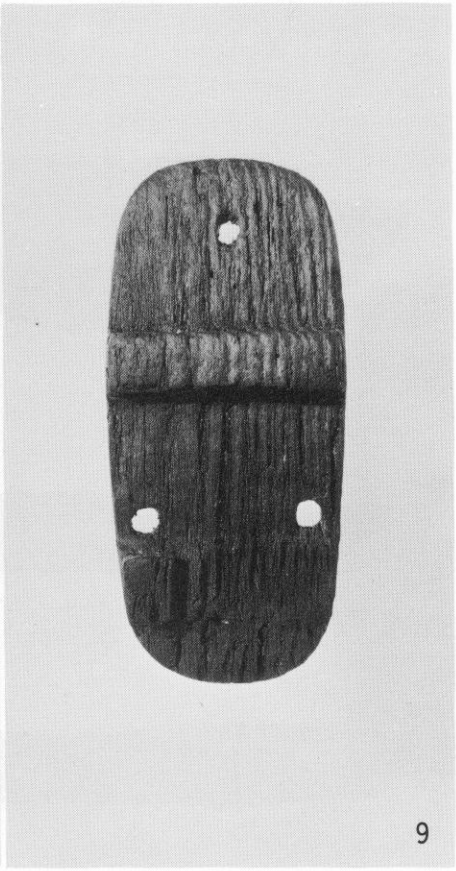

6



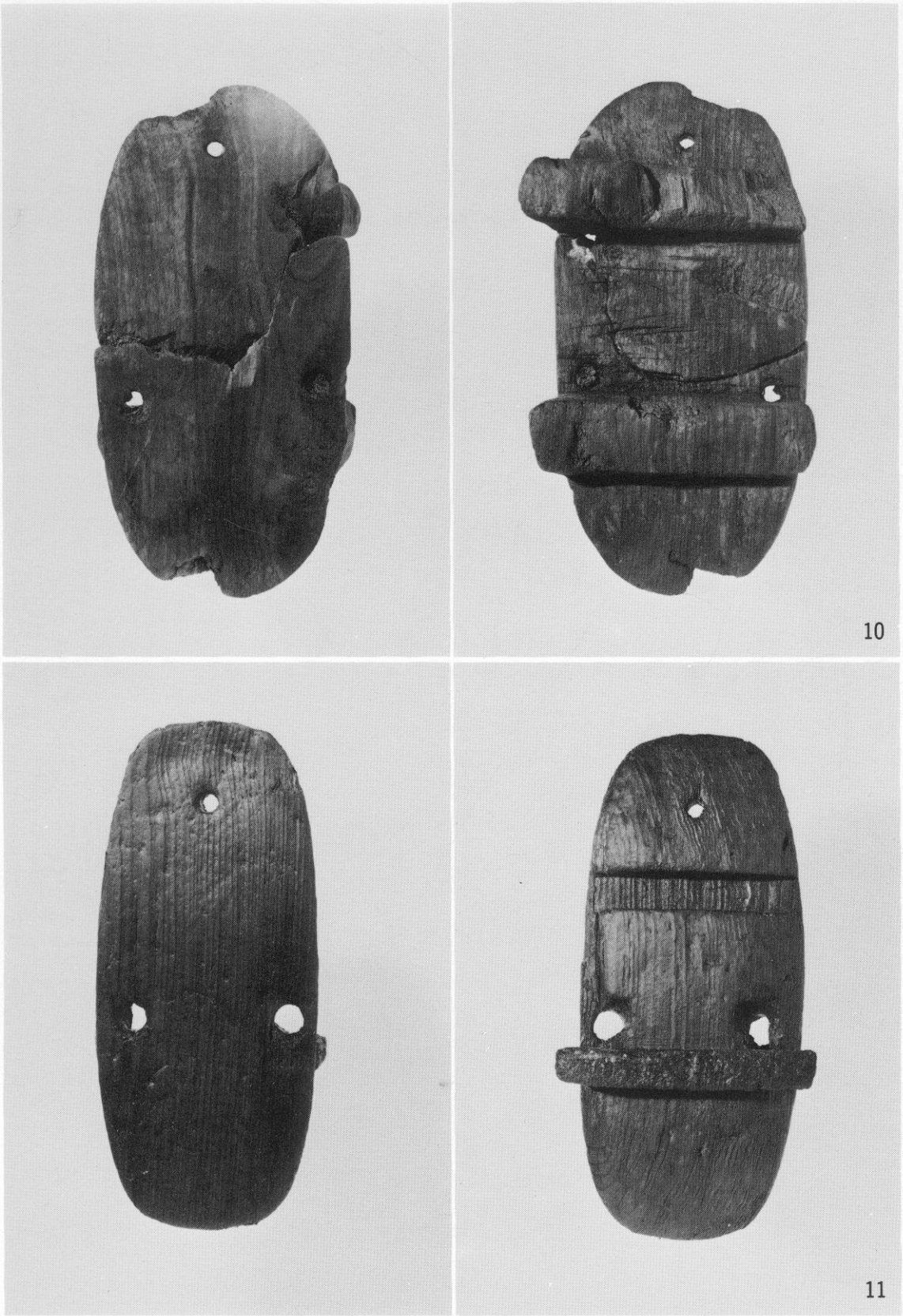

7


8

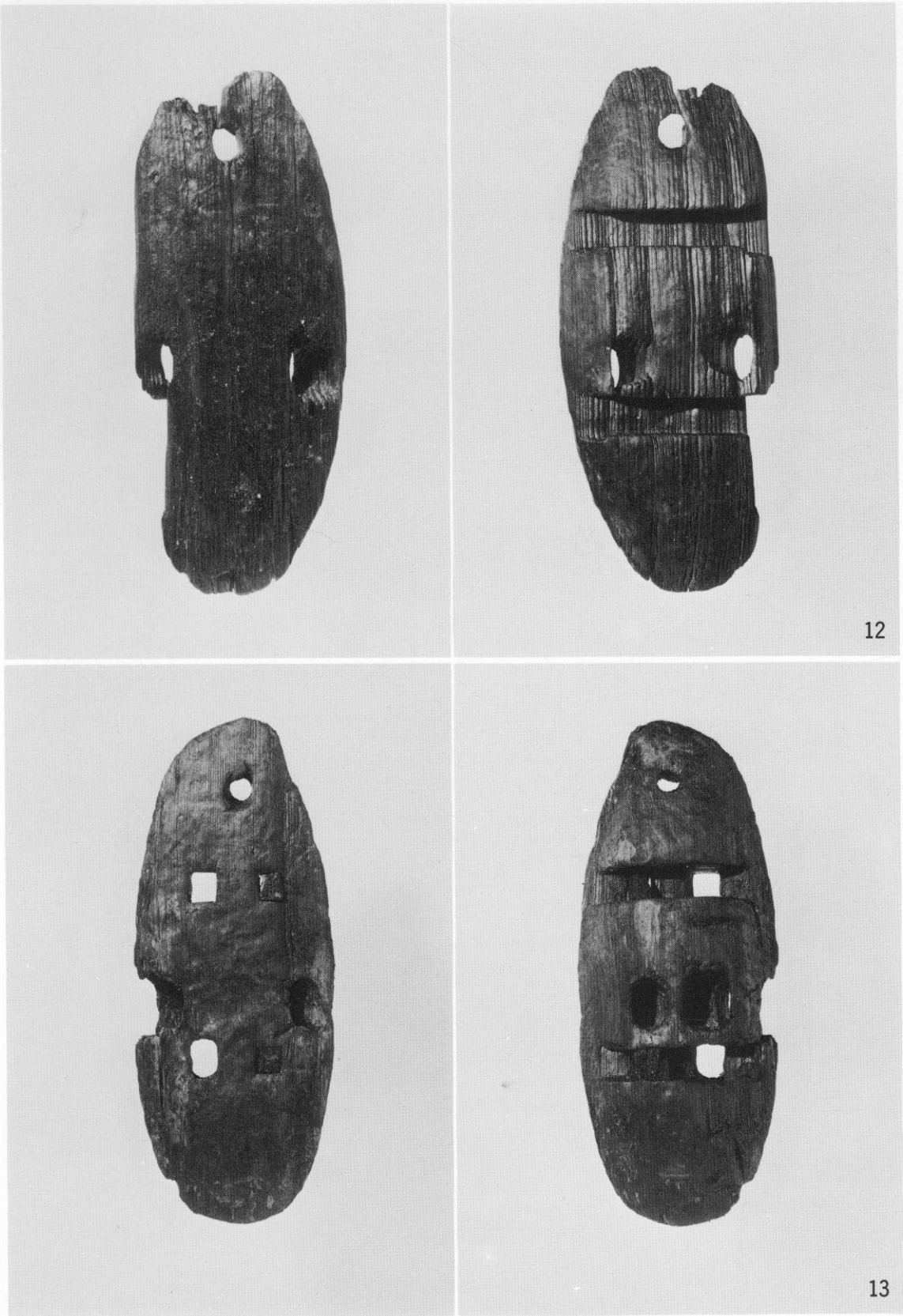



9

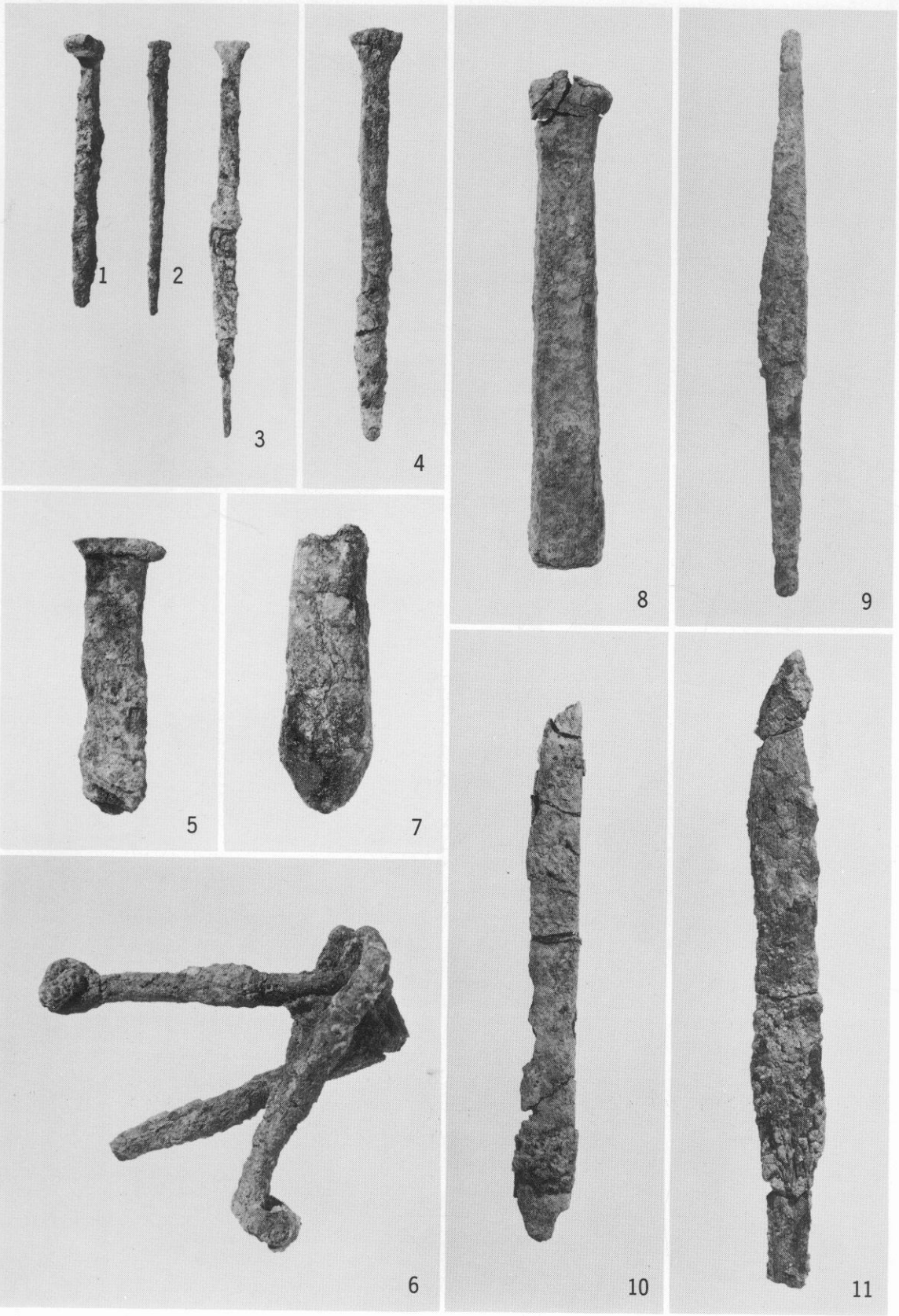
第109・111次調査　その他の遺構・層位出土木製品



第109・111次調査　その他の遺構・層位出土木製品



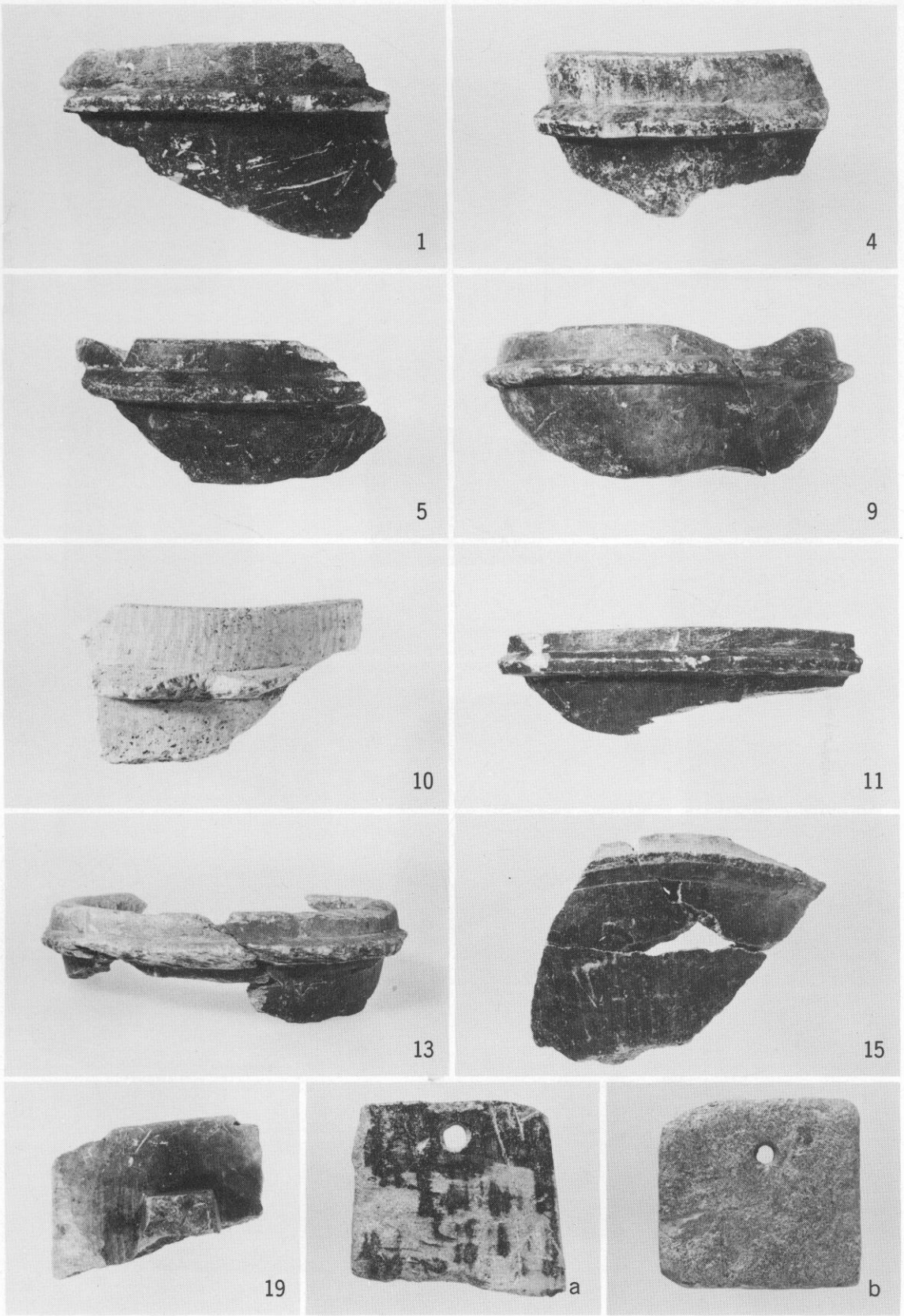
第109・111次調査　その他の遺構・層位出土木製品



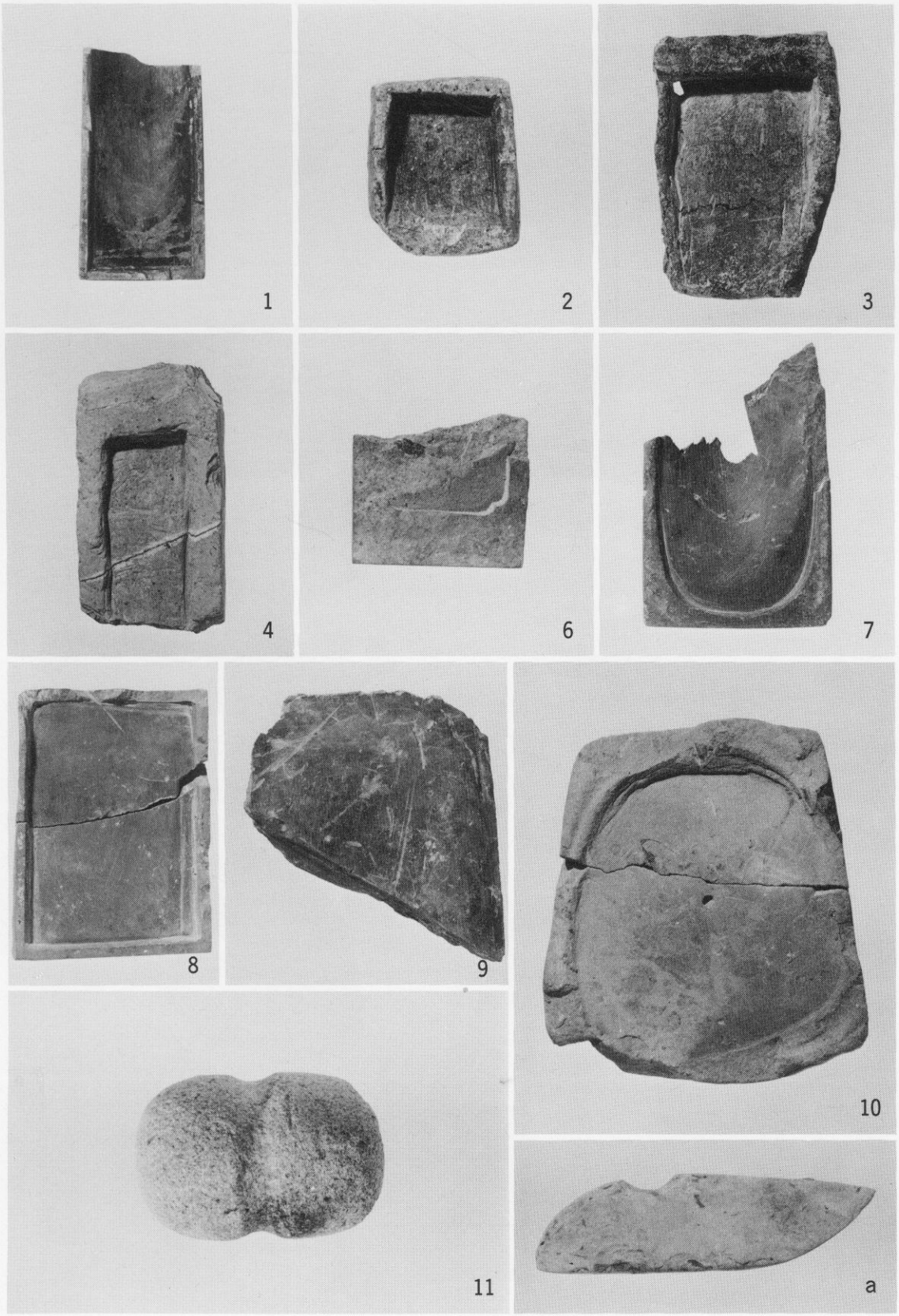
第109・111次調査　出土鉄製品



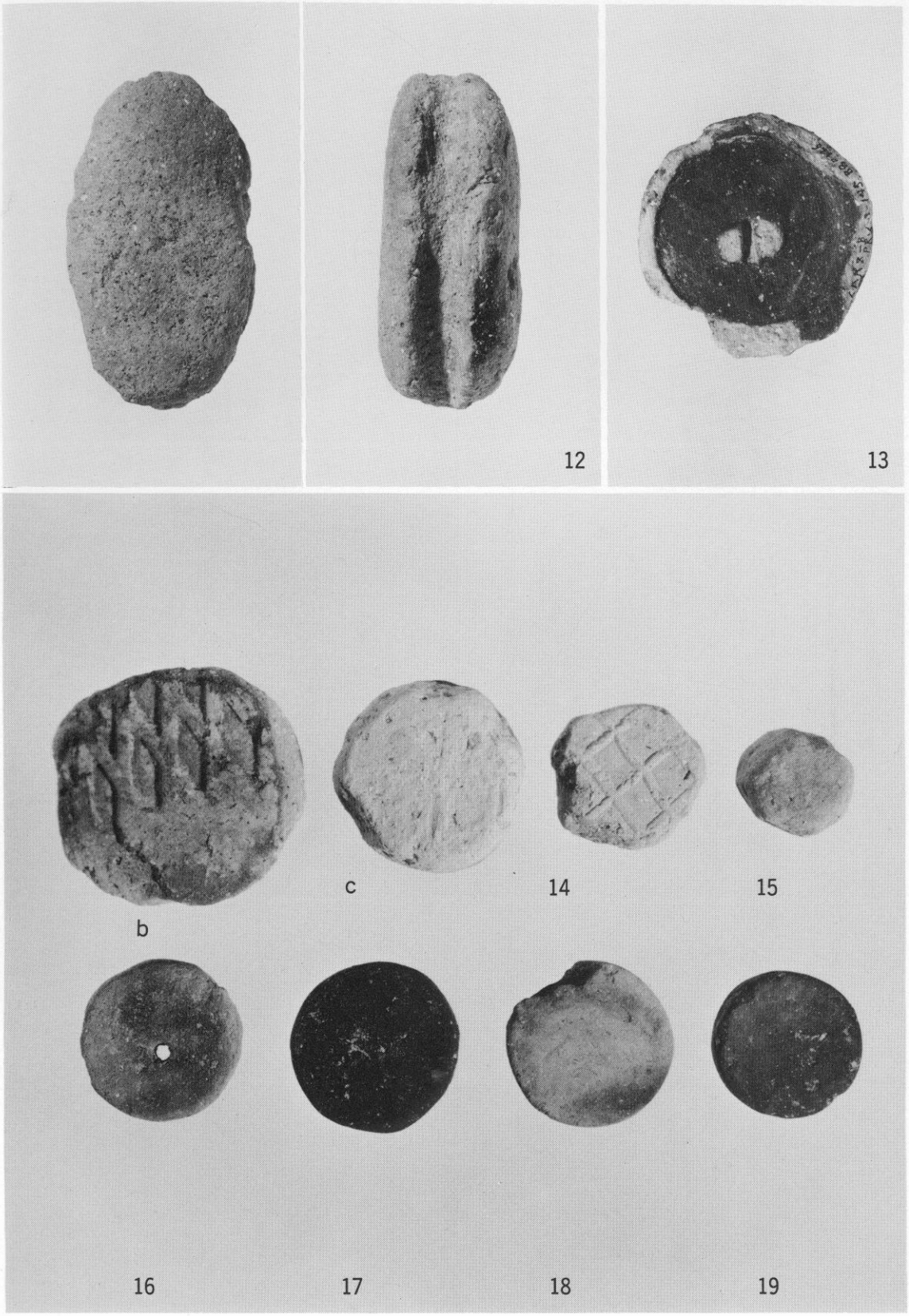
第109・111次調査　出土金銅・銅製品



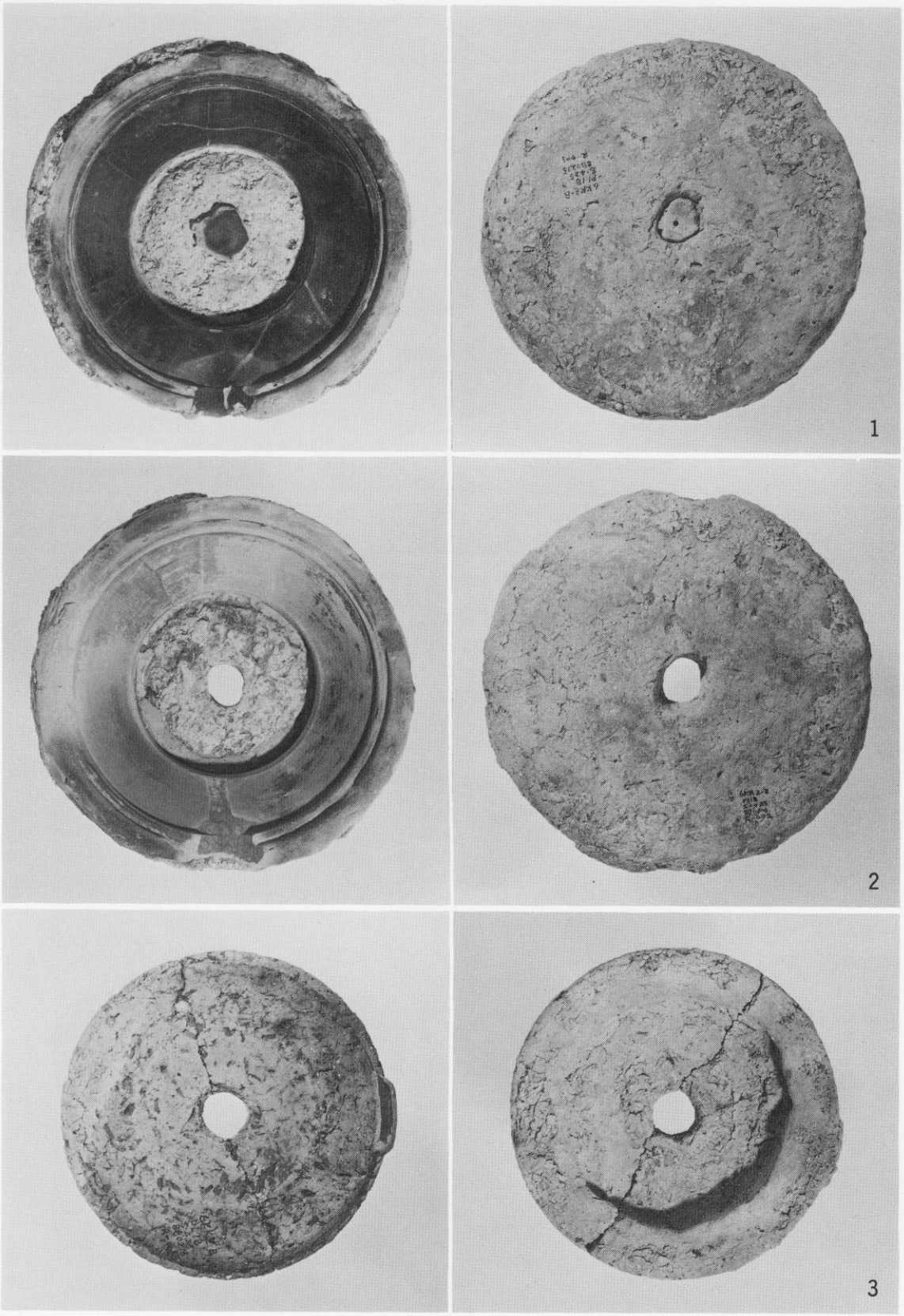
第109・111次調査　出土滑石製石鍋・石製品



第109・111次調査　出土石製硯・錘・石斧

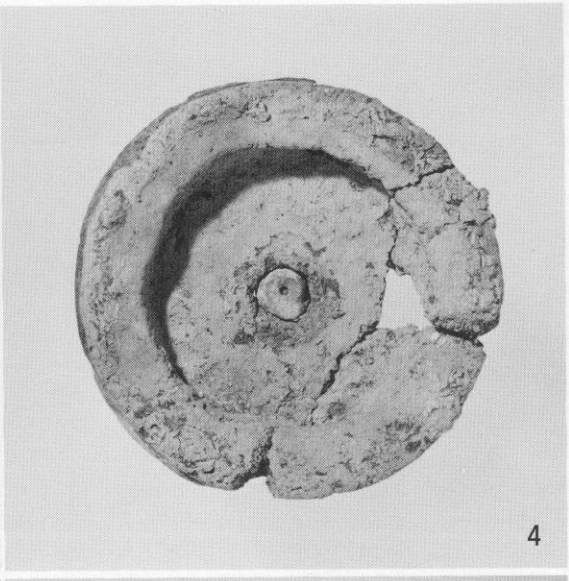


第109・111次調査　出土土製品

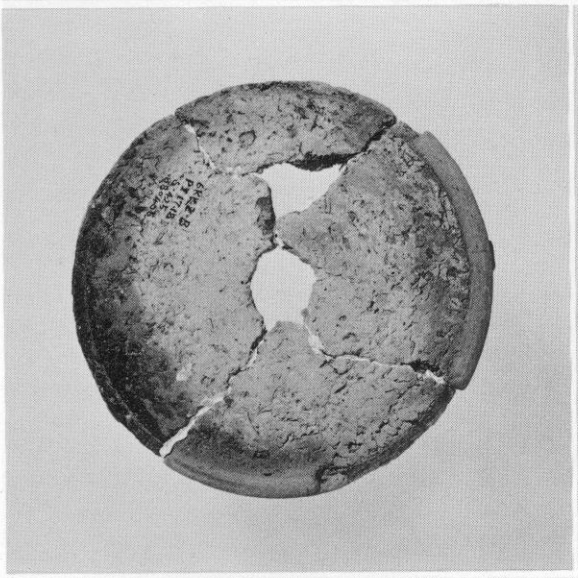


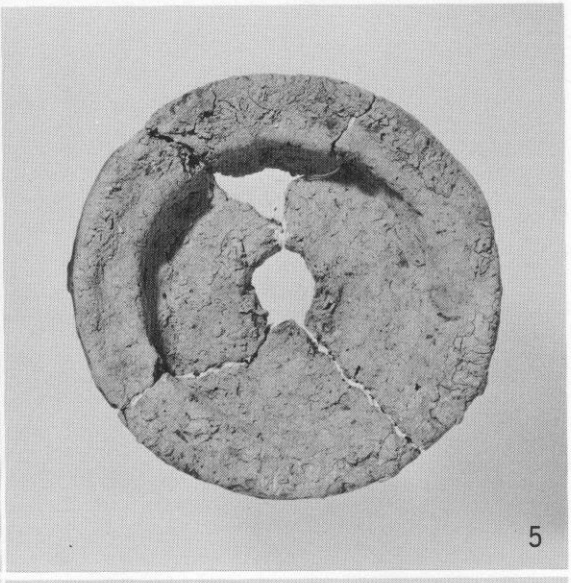
第109・111次調査　出土鋳造関係遺物



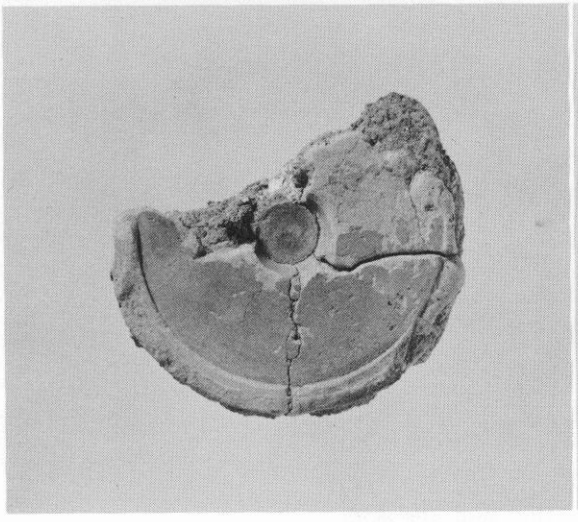


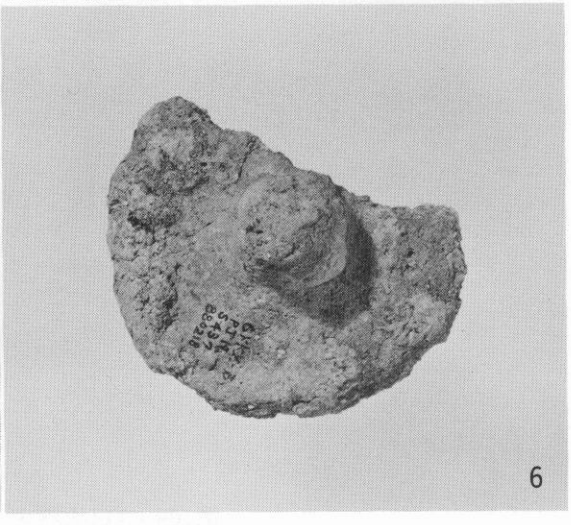
4





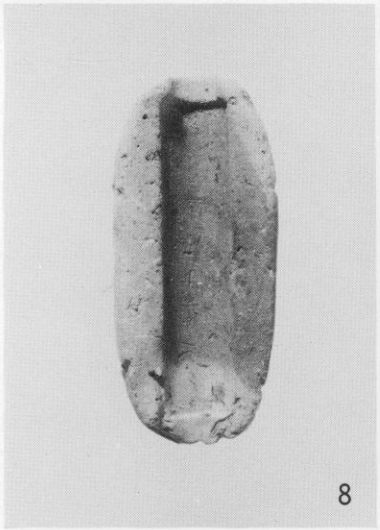
5





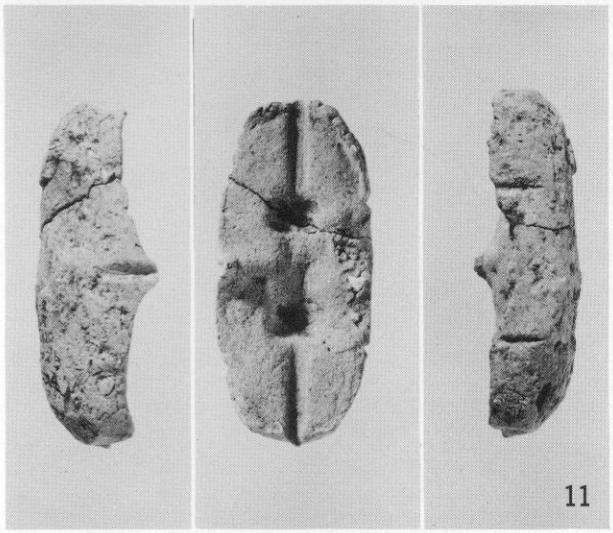
6

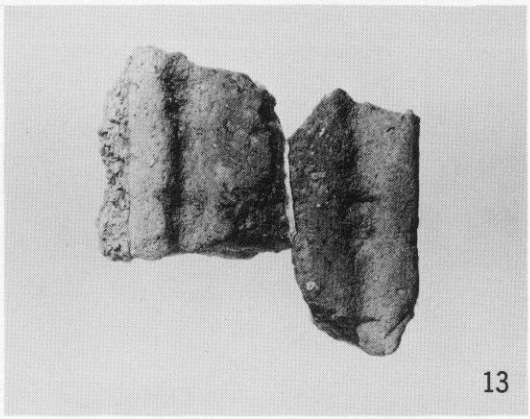
第109・111次調査　出土鋳造関係遺物


8

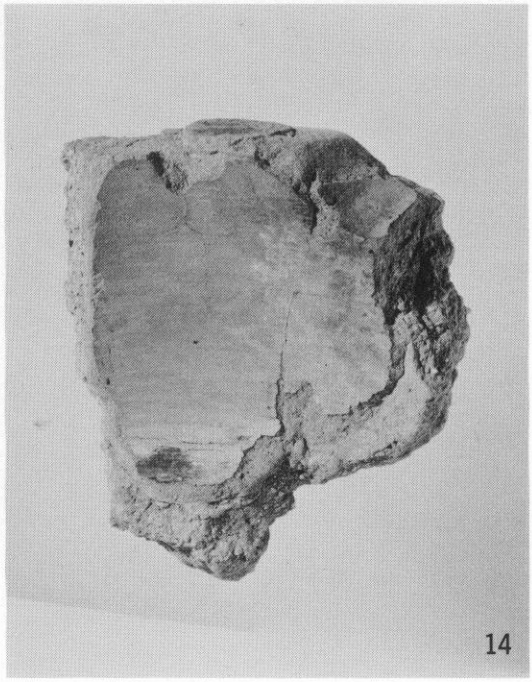

9


10

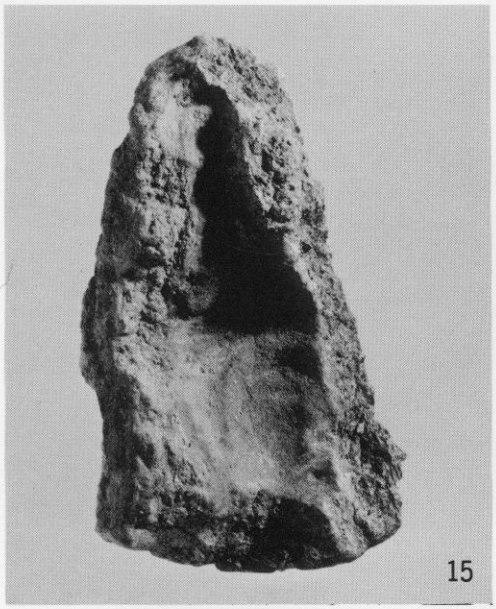

11

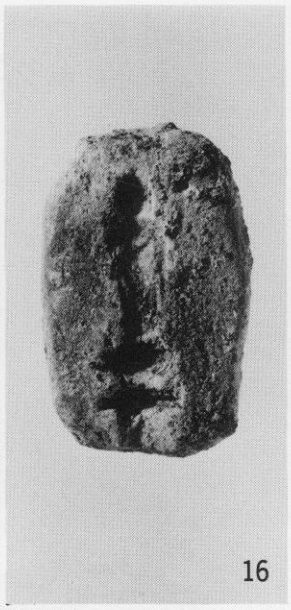

13

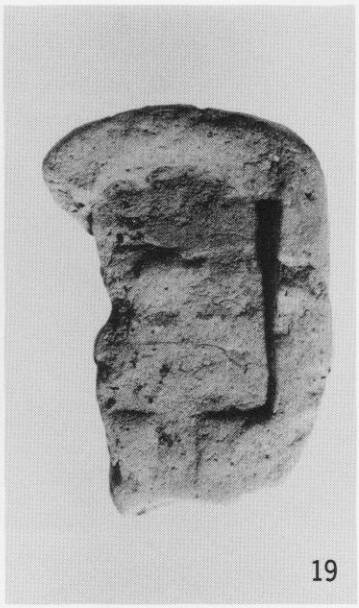

12

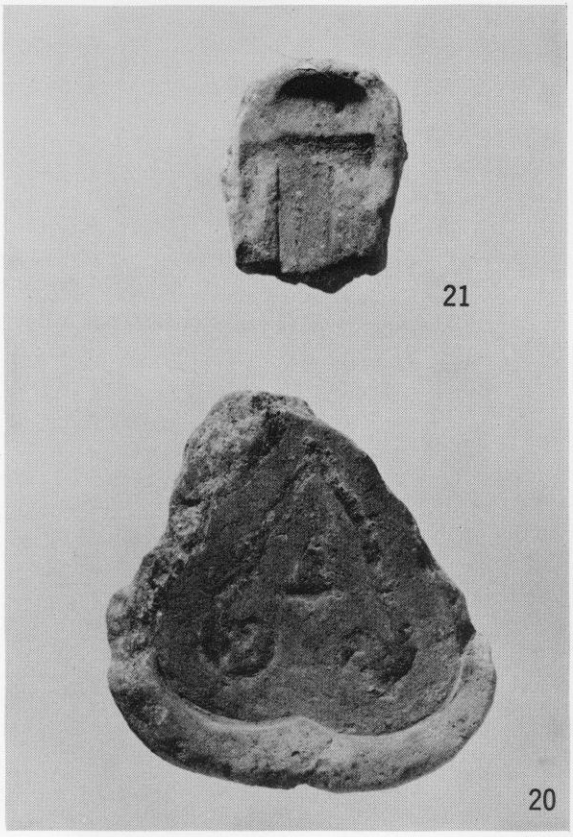

14

第109・111次調査　出土鋳造関係遺物


15


16

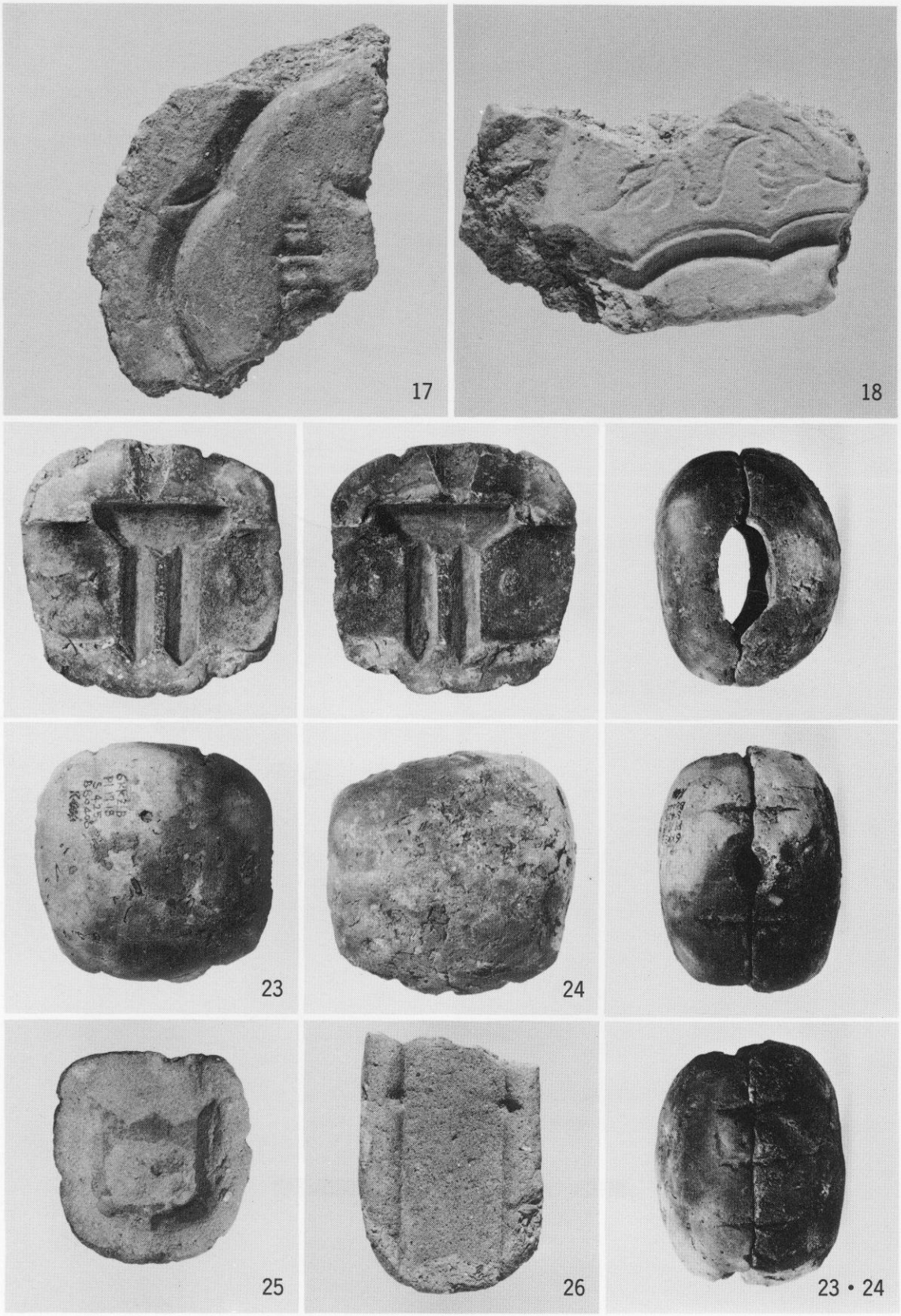

19


21

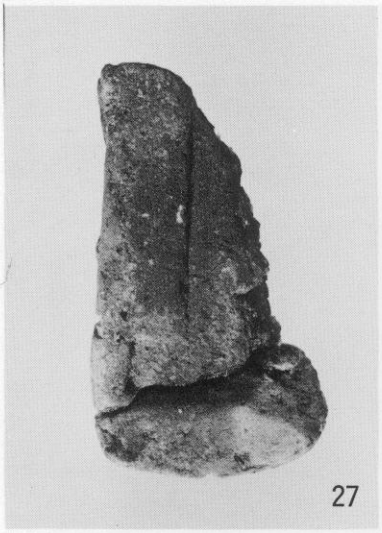
20


22

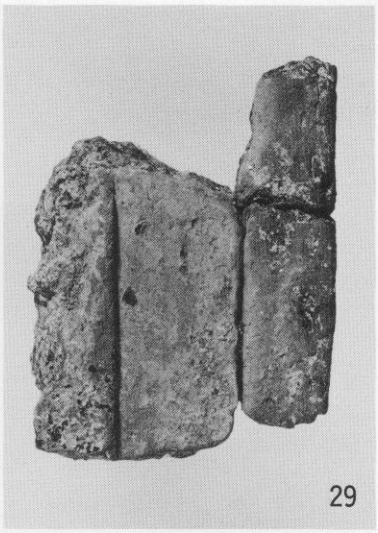
第109・111次調査　出土鋳造関係遺物

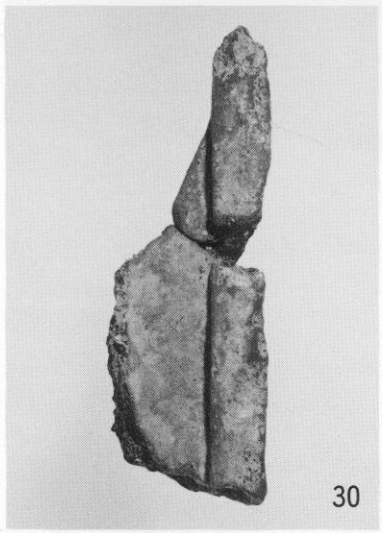


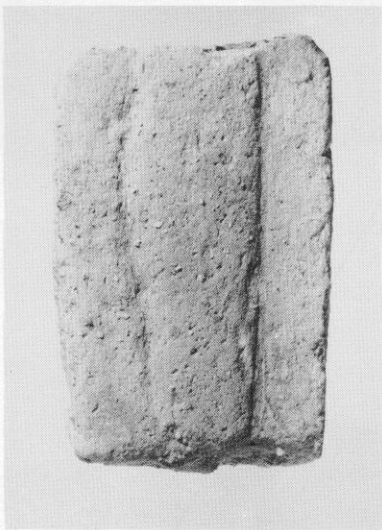
第109・111次調査　出土鋳造関係遺物


27

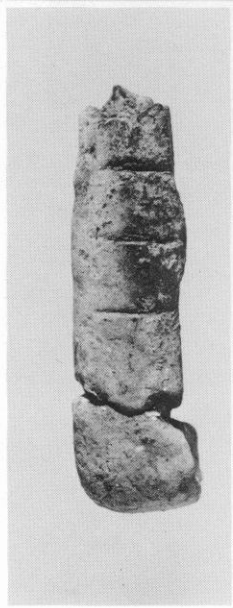

28


29


30

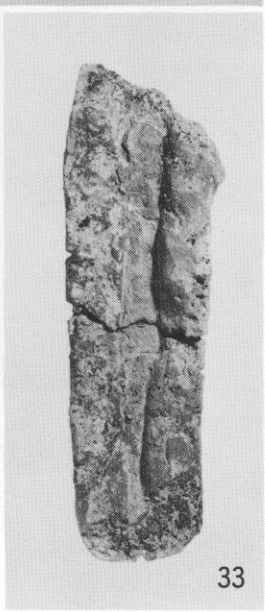



31

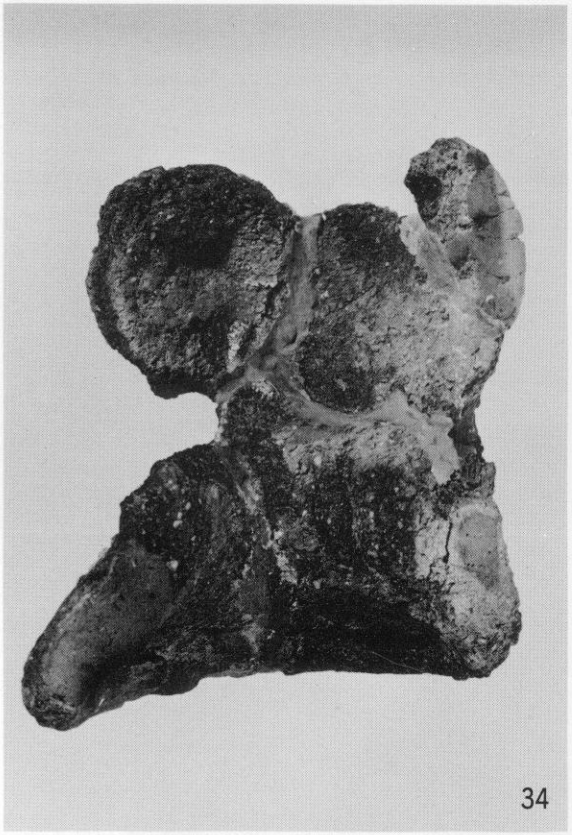


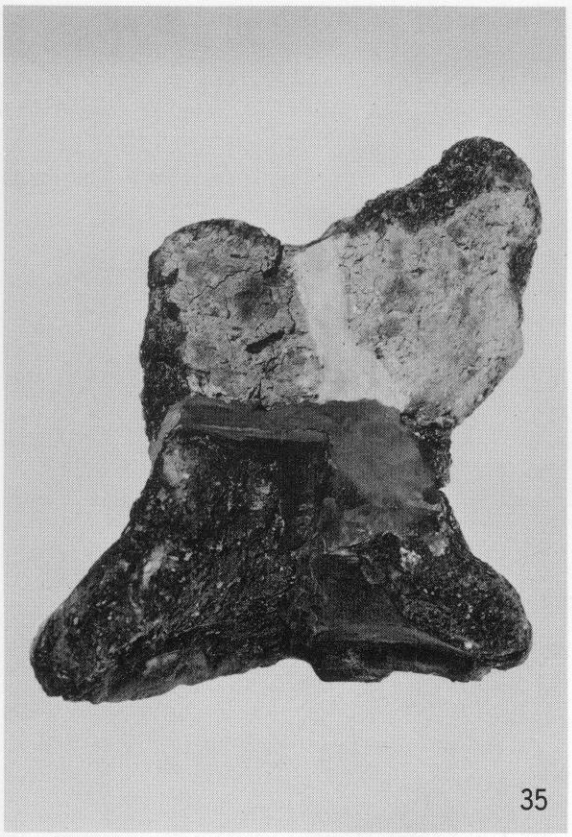

32

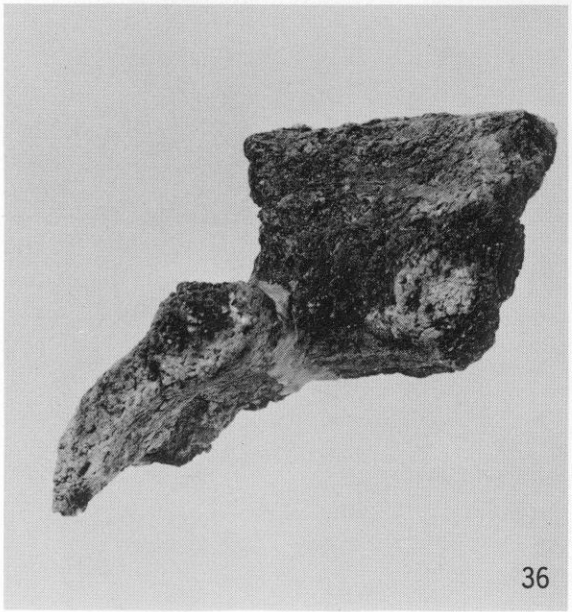

31・32

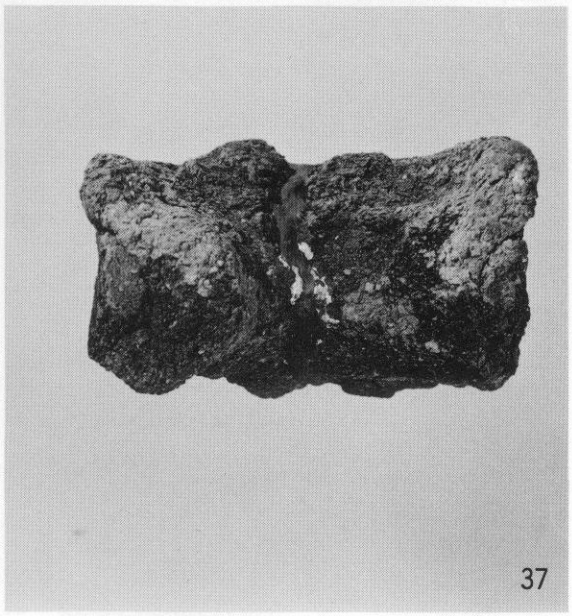

33

第109・111次調査　出土鋳造関係遺物


34


35

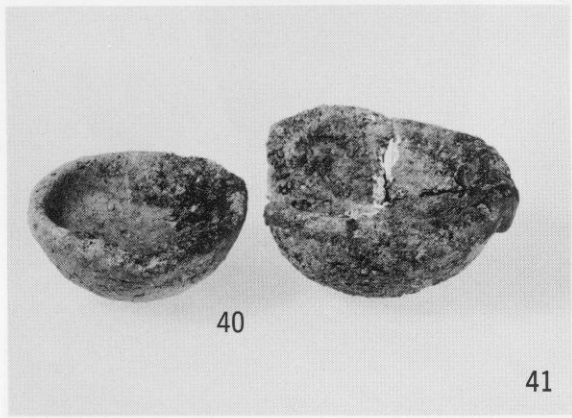

36


37

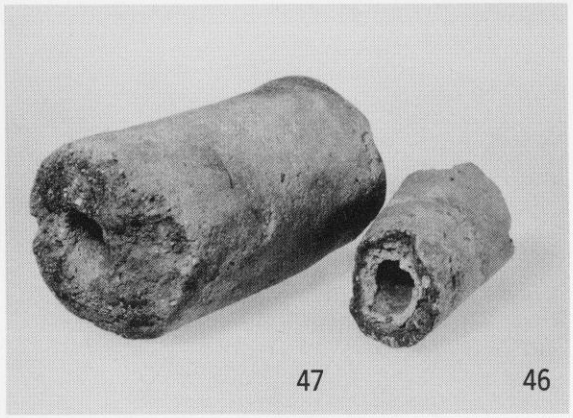
第109・111次調査　出土鋳造関係遺物


38


39

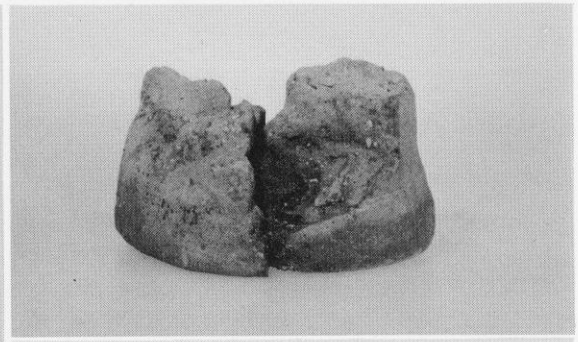

40

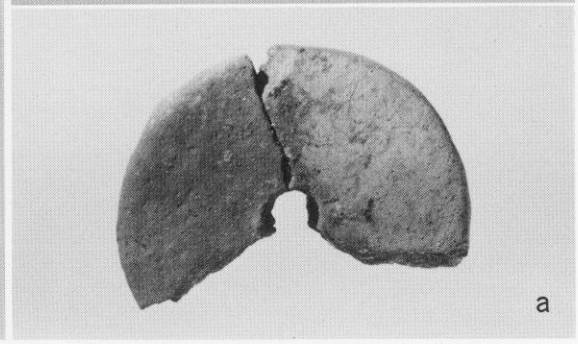
41


47

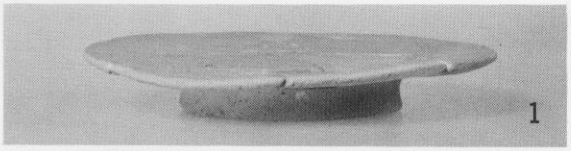
46


45



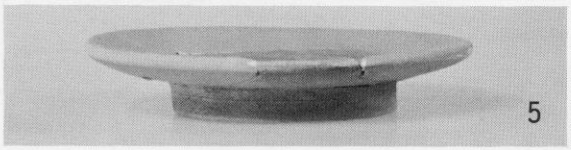

a

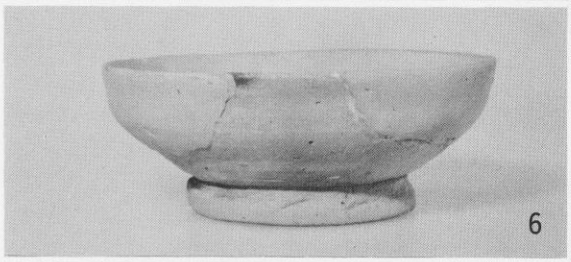
第109・111次調査　出土鋳造関係遺物

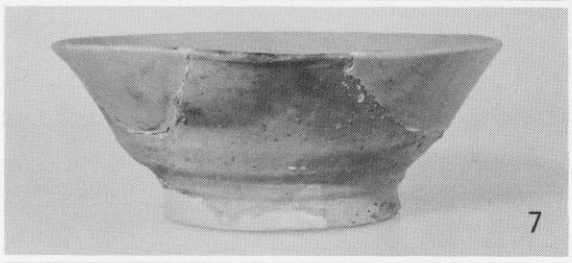

1

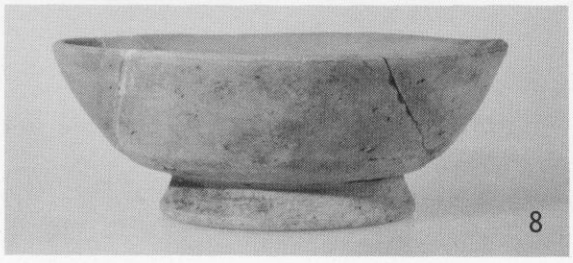

2

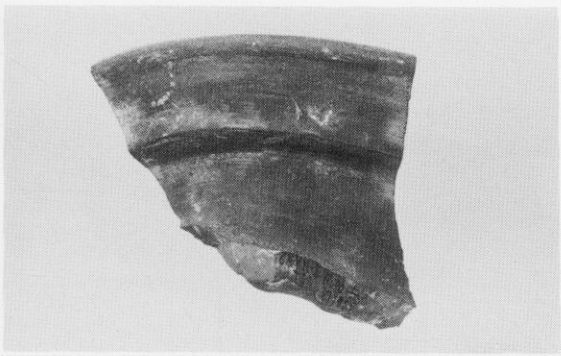

3

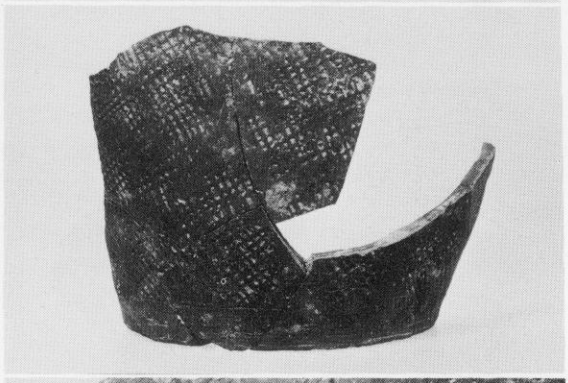

5

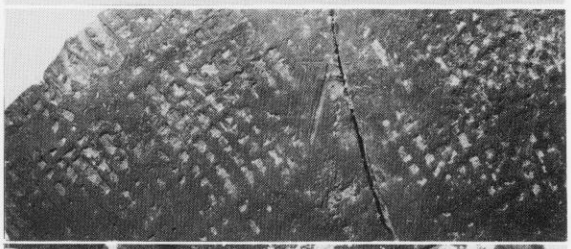

6


7

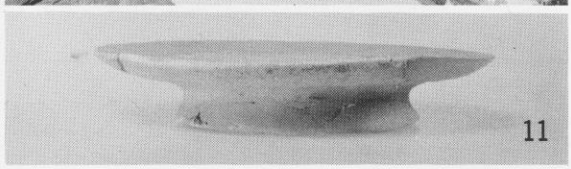

8

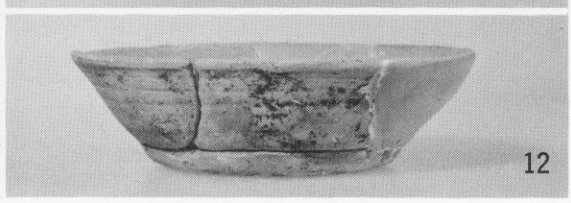




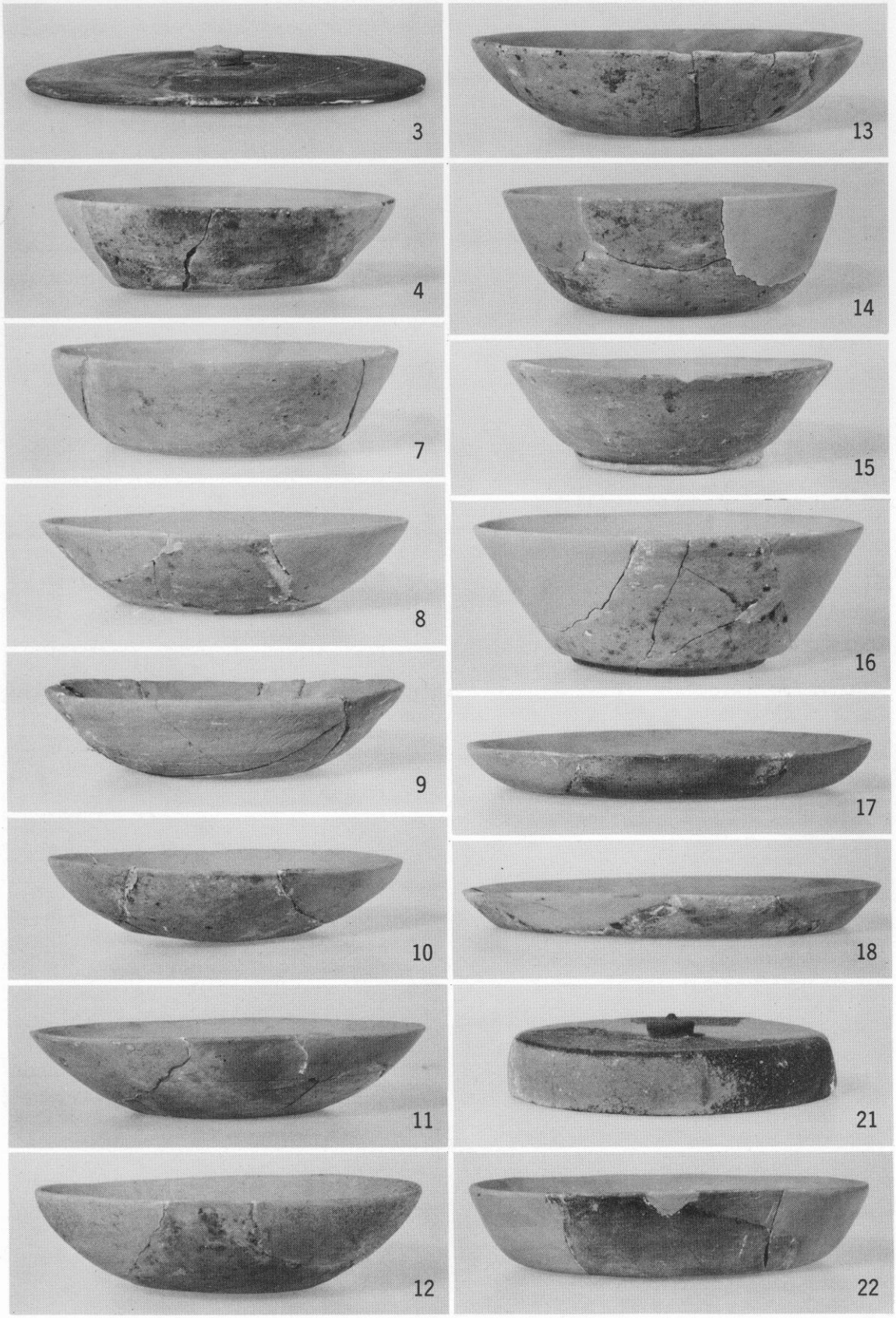



10


11


12

第110次調査　SD2350A・SX3224・3226・暗灰色粘質土層・灰褐色土層出土土器



第112次調査　SD3322・赤褐色土層出土土器

大　宰　府　史　跡
昭和63年度発掘調査概報
平成元年３月
発　行　九州歴史資料館資料普及会
太宰府市石坂４丁目７番１号
印　刷　正光印刷株式会社
福岡市西区周船寺３丁目28－１